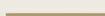




うつせみのあなたに
2022年11-12月

星野廉



目次

11/04 本物のない複製の複製、起源のない引用の引用 *	3
11/08 つながる、かさなる、むすぼれる *	39
11/09 イメージの文法 *	51
11/11 つながる、かさなる、ふるえる *	59
11/10 イメージの韻 *	71
11/13 現象、現像 *	83
11/14 【小説】バット・スキン・ディープ *	95
11/14 美しいって、何が？ *	105
11/15 仮象、化象 *	115
11/16 イメージのイメージ、イメージをイメージする *	131
11/18 異なる、事なる、言なる* *	159
11/19 世界は「ある」というよりも「似ている」 *	163
11/20 ならう、なれる、ならず、素地	

*	167
11/20 起源のない反復、手本のない模倣	
*	173
11/21 外見、素地、意味	
*	179
11/21 何かに似ている世界、「何か」のない「似ている」だけの世界	
*	187
11/22 固まる言葉、踊る言葉、空回りする言葉	
*	193
11/23 近くて遠い、まぼろし	
*	199
11/23 異なる、事なる、言なる**	
*	205
11/24 名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる	
*	209
11/25 「自分が写す」から「何かに移る」へ	
*	217
11/26 異、違、移	
*	223
11/27 たぶん転がるから動かしたくなる、動きたくなる	
*	233
11/27 夜の洗濯	
*	241
11/28 自分の顔が見えないと感じたのはいつなのか	
*	245
11/29 夢のような映画、映画のような夢	
*	251
11/30 「ねえまだなの？」の永遠化という感じなのです	
*	257
12/01 VR で自分に会いにいったその帰りに	
*	265

12/02 「何か」に「何か」を見なければならぬ世界 *	273
12/03 見るために人がつくった「影」 *	281
12/04 やっぱり見えます。 *	291
12/04 なぜか懐かしい世界 *	295
12/05 世界は顔で満ち満ちている *	305
12/06 遠くても近くても、あなたはあなた *	311
12/07 夜の思考、昼の思考 *	317
12/09 もう、そうなのかもしれない *	325
12/10 【掌編】捨てられた名前たち *	331
12/11 私たちは同じではなく似ている *	337
12/12 【短文集】似ている（その1） *	349
12/13 【レトリック詞集】偽物っぽさ *	357
12/13 【レトリック詞集】「っぽさ」というよりも「っぽい」 *	365
12/14 イメージ *	375
12/14 れとりっく *	385
12/15 印象とイメージの世界に生きる	

*	401
12/16 シンクロする身振り、行為、表情	
*	409
12/17 シンクロする、しかめっ面 (ロングバージョン)	
*	417
12/17 シンクロする、しかめっ面 (ショートバージョン)	
*	427
12/18 知らない人	
*	437
12/19 The Rain, the Park & Other Things 1967 theCowsills	
*	443
12/19 バニシング【三人称エッセイ】	
*	449
12/20 世界を相手にするとき、いつもいてくれる友達	
*	455

11/04 本物のない複製の複製、起源のない引用の
引用

＊

本物のない複製の複製、起源のない引用の引用（更新：2022/11/08）

星野廉

2022年11月4日 12:53

目次

要約

料理は複製

複製度

複製の複数性、無数性

名前の力は強大

にせもの、別物

ずれ、ずれる

似ている、同じ、同一

人間もどき、知能もどき、体感もどき、自然もどき

料理は引用の産物

複製、再現、再演

パフォーマンス

複製の複製、引用の引用、最強で最小最短最軽の引用および複製

何の複製なのか、何かからの引用なのかが不明

巨象は虚像であり、象は像でしかない

写しを写す

複製と引用のながれ

知識・情報、権威・権力、普遍・真理

真偽や善悪や正誤の彼岸へ

二項対立、建前、武力

普遍、真理、ローカル

問答無用に「バン！」とか「ドカーン！」

知、痴、稚、血、恥

大量生産、製品

リアル、代わり、写し

いまここにあるふるえ

究極の複製は文字
翻訳、アイドル、崇拜
大風呂敷を広げる
お知らせ
追記

要約

現在は、真偽、本物と偽物、正誤、善悪の境が曖昧になっている気がしてなりません。複製には複製の本物があり、引用には引用の起源があるというモデルが曖昧になっているからでしょう。そもそも真対偽、本物対偽物、実物対複製、起源対引用、正対誤、善対悪なんて図式はウソという感じです。本物や起源の権威が失われてきているだけでなく、本物や起源という概念を成立させている西歐的な知の枠組み自体が危うくなってきているとも言えるでしょう。

本物や起源の権威が失われていくのと、真偽、本物と偽物、正誤、善悪の境が曖昧になっていくのが、シンクロし軌を一にしているのではないか、という意味です。新たな真理も、さらなる本当の本物も、次の正解も、絶対的な善も、もはや現れないという意味です。

料理は複製

リアルであることに必ずしも実体は要らないのです。

実物や本物も起源（原型・元祖・出典）も要りません。複製や複製の複製や引用が身のまわりにうようよしているじゃないですか。大量生産された製品、楽曲、料理、絵画、写真、映画、放送、小説、文書、画像、動画.....。

どれも、あなたにとってはリアルな「物」ではありませんか？ 複製と引用とはそれ自体で完結した「リアル」なのです。人が「似ている」と「そっくり」の世界、つまり印象の世界に住んでいるからです。

(拙文「空っぽ」より)

料理は複製である。そう感じていたのですが、必ずしもそうではない気がしてきました。自分の書いた記事にツッコミを入れてみます。

(なお、ここで言う「料理が複製である」とは、現在食材の多くが、複製である化学肥料をつかって大量栽培されたものであるとか、工場で大量に製造されている飼料や薬剤を与えられて大量飼育された家畜を使用しているとか、複製である化学調味料をつかって

いるとか、材料の多くが工場で大量生産されているという話では必ずしもありません。)

複製には再製という言葉とイメージが付きまとい、再製といえば再生を連想します。再現や再演も頭に浮かんで来て、さらには引用、模倣、反復、変奏というふう言葉とイメージがつぎつぎと出てきます。

私は連想が好きです。AといえばB、BといえばC、CといえばD……。こんなふうに進んでいくのが連想でしょう。A、B、C、D……と少しずつずれたり、ときには大胆に飛躍するのが連想だとするなら、連想も一種の複製なのかもしれません。連想が起きるたびに、ずれが生じるのです。

ずれを考えると、料理は複製とは言えないのではないかという思いに傾きます。レシピやお手本があっても、それを再現するたびにずれが生じるからです。素材や、その時の気温や湿度や天気、火の加減、手順やタイミング、さらには気分によってもずれが起きるにちがいません。

ずれは度合いであり程度です。家庭料理とプロによるお店の料理では、再現度に差があるとも考えられます。食べ物屋でも、チェーン店とそうではない食堂では、再現の度合いが異なるでしょう。

複製度

そもそも忠実に再現された複製はありえないのではないのでしょうか。そんなものはない、つまり抽象だという意味です。ずれを程度の問題として受け入れれば、ずれが大きい複製とずれが小さい複製があると考えればいいことになります。

複製には程度というか度合いがある——これですっきりしました。

A⇒B⇒C⇒D

A⇒B

C

D

A、B、C、Dの間にずれが起こります。

$A \Rightarrow B \Rightarrow B \Rightarrow B$

$A \Rightarrow B$

B

B

AとBの間にずれが起こりません。

複製間のずれには、似ている、よく似ている、酷似や激似、そっくり、ほぼ同じ、同じ、同一という具合に度合いがあって、最後には同一に行き着くという感じです。うまい、へた、正確、不正確、精度が高い、精度が低いという尺度ではかることもできるでしょう。

料理を複製としてとらえてみると、本物とか元祖があって、それ以外はぜんぶ複製ということになりそうですが、あなたが毎日食べているものが複製だなんて言われたら、むかつきますよね。「それは違うでしょ」と反論したくなります。

後に触れますが、ここまで述べてきた文章の「複製」を「引用」と置き換えてみても話に大差はないと思います。

複製の複数性、無数性

複製度、つまり複製の度合いを体感するには、複製の複数性をイメージするといいかもかもしれません。現在では、美術や音楽や文学の鑑賞のが複製の鑑賞である場合が多いことは注目してもいい事実だと思われま

す。美術においては、作品が有名なものであるほど、実物よりも複製を鑑賞していることは分かりやすいですが、音楽であれば生の演奏よりも放送やDVDやCDというかたちでの複製を鑑賞していることを意識することはあまりない気がします。文学の場合には生原稿を読む人は稀でしょうから、印刷物あるいは電子書籍やネット上でという意味での複製を読んでいるのがほとんどだと言えます。とくにパソコンのワープロソフトでの執筆が主流になっている現在ではどれが生原稿なのかがきわめて曖昧になります。

絵を例に取ってみます。世界で最も有名な絵画はモナ・リザだと言われますが、あなたはモナ・リザという絵を見たことがありますか？

モナ・リザの現物を見たことがある人よりも、その複製を見たことのある人のほうが圧倒的に多いでしょう。「実物対複製」と単純に考えがちですが、実物はたったひとつであるのに対し、複製は複数あるいは無数にあります。作者および作品が有名であればあるほどです。有名は無数、無名は有数か、たったひとつなのです。しかも、複製は一様ではなく、さまざまなずれをともなって存在しています。あなたの見たモナ・リザと私の見たモナ・リザはきっと別物でしょう。別の複製ということです。不思議な気がします。

絵画は有名であるほどたくさん複製され、その複製を見る人が多くなるから当然でしょう。一方で、有名ではないほど展示会などで実物を見る人がいて、その数は少ないでしょうから、あなたの見た〇〇という絵と、私の見た〇〇という絵が同じであり実物であるということになりそうです。複製のありようと、実物や本物のありようは、理屈では分かるのですが、現象としてよく分かりません。不思議でならないのです。

(楽曲の複製であるレコードやDVDやCDやその放送やネット上での配信でも、複製は多様をきわめています。それぞれが人によって微妙にあるいは大きく異なって感じられるという意味です。文学作品でも、多種多様なかたち（雑誌での掲載、単行本、文庫本、電子書籍、翻訳）での複製での読書がおこなわれています。私の場合には、小説の読書で活字やフォントやレイアウトが変わると別の作品に感じられることがあります。翻訳書とその原著も私にとっては「似ている」別物です。鑑賞イコール複数の複製の鑑賞だと実感します。)

モナ・リザの複製はたくさんの画集や美術書に収録されていますが、それを虫眼鏡で見くらべるとずいぶん差があるのに気づきます。図書館で試してみるといいでしょう。撮影や印刷によってかなりずれがあるのです。私が見た美術書にはモナ・リザを写したモノクロの写真がありました。

インターネット上でもモナ・リザを鑑賞できますが、印刷物として見るのとはやはり違って感じられます。「これはモナ・リザなんだ」と言葉で自分に言い聞かせて決めつけて、頭というか観念で見ると「同じ」でしょうが、「似ている」あるいは「そっくり」なだけです。でも、ふつうは「似ている」とか「そっくり」というふうに見ません。興ざめ

するからです。

自力では「同じ」「同一」なのか「そっくり」なのかを確認も検証もできない自分を人はふつう認めたくありません。人間（ホモ・サピエンス）としてのプライドが許さないからです。

ところで、「同じ」というか「同一」と言ってもいい、モナ・リザの鑑賞法があります。名前で鑑賞するのです。名前という言葉を見るのです。「モナ・リザ」という作品名のことです。固有名詞、なかでも書かれた文字としての名前は最強の複製であり、「似ている」どころかまったく「同じ」なのです。

名前と名詞の力は強いです。人は名前と名詞にころりと参ります。「モナ・リザね、レオナルド・ダ・ビンチ作ですよ、名画ですよ、美しいとか素晴らしいとか感動したって言わないと笑われますよね」という感じです。

楽々複製ができます。いとも簡単に引用もできます。モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ.....。

冗談はさておき、「固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用である」ことは注目していい事実だと思います。ただし、モナ・リザ、Mona Lisa、La Gioconda、La Joconde、蒙娜丽莎、蒙娜丽莎、.....というバリエーションもあることを忘れてはならないでしょう。

(※この章を書くにあたっては、ウィキペディアさんのお世話になりました。作品名の複製と引用、つまりコピーペーストをさせていただきました。)

名前の力は強大

なお、名前と名詞の力が強大なのは絵画に限りません。音楽、スポーツ、料理、製品、映画、放送、お芝居、小説、文書、画像、動画.....。小説で考えてみましょう。小説は名前とキャッチフレーズで読むもので、作品で読むものではありません。

「〇〇作のXXですね、文豪（△△賞作家）ですね、〇X△%&（本の帯や解説や評判で読んだフレーズが入ります）ですね、とりあえず感動したって言うておきましょか、いや難解でしたがいいかも、読んでいない（さっぱり分からなかった・つまらなかった）ことがばれないように気をつけよう」という感じです。名前と文言を引用するだけで事足りません。

「固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用なのです。」

おふざけと憎まれ口はここまでにして、まとめます。

有名とは名前が無数に複製され引用されることであり、有名無実という言い回しがありますが、名をあげることが必ずしも実とは関係がないままに権威や権力につながることはよく見受けられます。いずれにせよ、有名とは無数、無名とは有数またはたった一つの実物であるということですね。

たった一つの実物って潔くて格好よくないですか？

ひっそりと たったひとつの ほんまもん

にせもの、別物

複製には偽物というイメージがともないます。これはネガティブなイメージでしょう。

本物とか実物とか現物とか元祖があって、それに似たものや似せたものがある。似ているものは、似せものであり、要するに偽物（贋物）だ。そんな一連の連想が働きそうです。

偽物も似ている物も別物であることは確かです。偽物とは、似ている物の別称であり、蔑称であると言えそうです。引用やオマージュや翻訳や翻案の別称および蔑称が、盗作とか剽窃（ひょうせつ）であるのに似ています。

このように人は印象に左右されます。印象の世界に住んでいるからにちがいません。

したがって、偽物や剽窃と呼ばれているものが複製だということが、おおいにありそうです。

ずれ、ずれる

さきほど上で述べたように、同じレシピや作り方にしたがっても、料理は毎回微妙に異なっているのが普通でしょう。そんなわけで、ずれが生じるのを避けることができない料理もまた複製だと言えるのではないのでしょうか。

味、匂い、見た目、舌触り、手触りだけでなく、食器や食べている場所や時間帯、さらにはその時の気分や体調によっても、料理は微妙に、あるいは大きく異なったものとして人に感じられそうです。だいいち、受けとる側（料理であれば食べる側）の心身の状態によっても、ずれが生じることを無視するわけにはまいりません。

複製という言葉で説明されることの多い、絵や映像を思いうかべると、忠実な複製というものが抽象、つまりありえないものを感じられます。単純に考えて、現実の事物を模した絵は、その事物そのものではないし、現実にある事物や風景を写した写真や動画は、写された対象そのものではないからです。

複製どころか別物なのですが、絵や写真や動画が複製という言葉で説明されることがよくあります。それは、事物あるいは現実を写した複製であるというよりも、事物や現実を写した複製が、複製されてたくさんある、つまりそっくりなものがたくさんあるという意味で言われているのかもしれない。

$A \Rightarrow B \Rightarrow B \Rightarrow B$

$A \Rightarrow B$

B

B

Aの複製（人は似ているとかそっくりとか同じと感じますが、じつは別物です）がBというよりも（このことはあまり意識されませんが）、たがいにそっくりな複製であるBた

ち（よく「似ている」にもかかわらず、後に触れるように「同じ」だとは限りません）がたくさん存在するというイメージです。

似ている、同じ、同一

絵や写真や動画において、ある事物とそれを模したものを混同しないかぎり、「同じ」という言葉やイメージは出てこない気がします。言葉は物ではない、写真は現実ではないと言え、当たり前聞こえますが、人はしばしばその当り前を忘れます。つい同じだと思ってしまうのです。

これが混同であり錯覚です。別物を同じだと見なしているのですから、事実誤認とも言えますが、人間なら誰もがやっていることであってぜんぜん気にならない、気にするほうがおかしいと言う人が多い気がします。私もふだんはそう思っています。

複製という言葉とイメージの根っこには「似ている」があります。「似ている」は印象ですから、検証できません。頭の中を覗きこむことができないからです。ある物同士を似ていると感じる人もいれば、似ていないと感じる人もいるでしょう。人それぞれ、人生いろいろ、「似ている」もいろいろです。

一方、「同じ」は数値化するというかたちで検証できそうです。ただし、人は「似ている」を基本とする印象の世界に生きているので、「同じ」を検証するためには器具や器機や機械をつかう必要があります。人はこういう補助具や装置を発明し洗練させてきました。

その甲斐があって、仲間を月面に降り立たせたり、地球の気温を上昇させることができたのです。この星で他の生き物たちと無理心中する準備も整えました。

私には子も孫もいませんが、この先のことがとても不安でなりません。

人間もどき、知能もどき、体感もどき、自然もどき

器具も器機も機械も人がつくったものですが、それらは「似ている」なんていう曖昧

なものではなく、「同じ」や「同一」という「杓子定規」を基本にしています。杓子定規というのは、プログラミングをイメージすると分かりやすいでしょう。融通がきかないのです。

機械は、人が指示を間違えると正しく作動しませんし、人の思いや感情を察したり付度もしてくれません。人のほうが機械に合わせる必要があります。機械が人に合わせるようにプログラムすることも可能なようですが、あくまでもある程度しかできないのが現状みたいです。

なお、人は自分のつくった器具や器械や機械を用いて、「同じ」と「同一」と「杓子定規」を原理に、人間もどき、知能もどき、体感もどき、自然もどきをつくろうと、あるいは再現しようとしています。結果としてつくっているのは——機械の中身としてのハード面ではなく人間と広義の機械との接点という意味でのインターフェースをイメージしてください——あくまでも「もどき」つまり「似ている」であって「同じ」でも「同一」でも「杓子定規」でもないことは注目していいと思います。

たとえば、スマホをつかうさいに、指先（人にとって最も繊細な部分のひとつです）で画面に軽く触れたり叩いたり撫でたりして文字を入力したり指示を与えたりやり取りをするさまを思い出してみてください。ほとんど感覚というか勘に頼っていませんか？

頭で考えているのではないのです。指で入力していたパスワードや暗証番号を頭が覚えていなくて慌てるという話をよく聞きますが、まさにそれです。あの指の感覚——正確には指でいじっているという意識のない指の感覚と言うべきでしょう——こそが、本物なき複製の複製、起源なき引用の引用の世界におけるリアルでしょう。仮想現実はいま述べた指と意識が直結した一体感というべき、リアリティをこれでもかこれでもかと押しすすめて極めた全身的なものだという気がします。

あるいは、パソコンやテレビの画面や映画館で映像を見る、スピーカーで再生された音楽や音声を聞く行為もそうです。そのものではなく（「同じ」や「同一」ではなく）、「似ている」や「そっくり」を楽しんでいるのです。ささやかながら、小規模ながら、これも仮想現実だと思います。仮想現実はそれほど新しいものではないのです。規模と程度の問題でしょう。

まとめます。

「もどき」による「似ている」と「そっくり」の再現の総決算が人工知能や仮想現実やメタバースなのです。

人が生きているのはあくまでも「似ている」を基本とする印象の世界——アバウトで感覚的でちゃらんぼらんできまぐれ——であって、「同じ」や「同一」や「杓子定規」の世界——厳格で厳密でデジタルで感覚や感情といった曖昧さを許容しない——ではないのです。「楽ちん」と「気持ちいい」と「あれよあれよ」を原則とします。

料理は引用の産物

話を料理にもどします。

料理を複製と見なすのに無理があるのは、上で述べたように「複製」には「偽物」に似たネガティブなニュアンスがあるほかに、料理が引用の産物だからではないでしょうか。

料理はさまざまなものや方法を組み合わせた結果という意味で、引用という行為の産物だと言えそうです。「引用」に似たものとして「剽窃（ひょうせつ）」や「盗用」がありますが、「複製」と「偽物」ほどの強い連想は私には感じられません。

料理は、調味料を含む複数の素材を複数の方法を組み合わせてつくるものであり、レシピは素材と方法からなっています。方法とは手順や動作です。たとえば、切る、ちぎる、混ぜる、たたく、熱するといった動作を、あるタイミングや時間の長さや程度でおこないます。素材の種類や状態や分量といった要素も大切です。

料理が引用の産物（口に入れるものですから「引用の織物」だとぴんと来ません）だというのは、料理が組み合わせであると考えれば分かりやすいかもしれません。組み合わせられる要素が異なると全体が異なったものとして出来上がりますが、その差異は程度の問題だと考えられます。

程度を厳格に考えれば、どれとして同じ料理はないと言えそうです。とはいえ、料理は味覚という、さまざまな要因（時や場所、雰囲気、天候、体調、食べ合わせ、つくった人への配慮や付度など）に左右される曖昧なものです。味だけで味わうのではないのです。

現実にある個々の料理は何かの複製であるというより、あり合わせの材料の組みあわせという意味での引用ではないでしょうか。冷蔵庫の中身を組みあわせて料理をつくることがあります、そのイメージです。

複製、再現、再演

引用の産物としての料理は、複製や再製や再生や再現というよりも、再演なのです。楽曲やお芝居を思いうかべてみてください。演奏や演技には、毎回ずれがともないます。

A⇒B⇒C⇒D.....

AがあってBが生じ、AとBがあってCが生じ、AとBとCがあってDが起きるので、これが各回の演奏と演技であり、その繰り返しの連鎖が再演なのです。再演は複製というより更新に近い気がします。再演は、それ以前の積み上げのプロセスなのであり、絶え間ない動きの中で起きている（うつりずれる）のです。

うつりずれる⇒うつりずれる⇒うつりずれる.....。

毎回毎回の演奏と演技は引用であり、さまざまな要素の組み合わせだからです。ふつう複製という言葉で連想される再製された製品も、引用と組み合わせの産物ですが、演奏と演技は人が演じるパフォーマンス（行為・芸）であるという点が異なります。これは大きな違いでしょう。

なお、演奏や演技には、引用の産物よりも引用の織物という言い方のほうがふさわしいかもしれません。綺麗なイメージですね。

パフォーマンス

最近、スポーツの世界でもパフォーマンスという言葉がよくつかわれます。たとえば、フィギュアスケートや体操競技ではパフォーマンスと言われても違和感を覚えませんが、いつだったか、陸上競技の実況中継をテレビで見ていて、やたらパフォーマンスという

言葉が出てくるのに気づいた時には、はっとしました。

パフォーマンス（行為・技・芸）はどのように評価されるのでしょうか。

採点が多いです。数値とはいえ点数ですから、審判の主観と印象に左右されそうです。陸上競技となると、長さ（距離・高さ）、時間、速度、重さというふうに数値で評価されます。好きな言葉ではないのですが、「客観的な」評価と言えるでしょう。

サッカーやバスケットボールのように得点を競うスポーツでも、パフォーマンスという言葉が使われますが、そのさいには個々の技（業）をいわば芸のように見なしている感じがします。「これは見事なパフォーマンスですねえ。神業としか思えません」という具合にです。

パフォーマンスとは、体をつかったある特定の動きを指しているわけですが、それは何度も繰り返されて存在している型（形）だと言えます。その意味では複製なのです。

型は引用・模倣・反復されるうちに必ずずれが生じますから、変奏というのが正確な言い方かもしれません。つぎつぎとずれが起きるうちに、引用元である、元祖・原型・本物・起源が曖昧になります。ある技が模倣され反復されていく過程で、そのモデルが変容するのです。

たとえば、Aさんが創始したXという技を、Bさんが真似て（引用して）Yという形が生まれ、それがCさんによって反復されてZという形に変容した——というぐあいにです。

複製の複製、引用の引用、最強で最小最短最軽の引用および複製

上の例においては、X、Y、Zという技がXという名称の技としてそのまま存続する場合もあれば、YとZという新たな名称で呼ばれることもあるでしょう。そのさいには、ZがXの引用であるとは認識されないかもしれません。

上で述べたように名前の力は強大ですから（人は名前にきわめて弱いので）、名前（名称）を変える（奪う、売買する、なりすます、すり替わる、なりかわる）行為は、出典や起源を消すための有効な手段と言えそうです。じっさい、そんなことが起きていませんか？ 争いが起こっていませんか？

襲名、のれん分け、跡目争い、盗作、元祖、本家・分家、先発・後発、プロ・アマ、流派、派閥、本流・支流、上流・下流、主流派・掃き溜め、名称、呼称、ジャンル、「これが本当（本来）の〇〇よ」対「これが本当（本来）の〇〇だい」、新〇〇、正統・異端、保守・革新、主従、師対弟子、弟子対弟子、化石対新人、重鎮対軽鎮、肅正・下克上.....。

こうしたものの多くが、名前（名称）の争奪戦というかたちを取ります。人は、最強で最小最短最軽の引用および複製である固有名詞の威力をよく知っているのです。

真名・真字、仮名・仮字。な（名、字）は、み（身、実、神、霊）なのです。

いずれにせよ、複製、再製、再生、再現、再演、引用——何と呼ぼうと、そこにずれがあるかぎり、繰り返えされるたびに変容があり、変容の程度やさまざまな事情や状況によって、起源と本物が曖昧になっていくのは当然だと思われます。

起源と本物のほとんどは、タイムマシンが発明され（そうなれば起源がたどれます）、人間の機械化が実現して（本物かどうかを見きわめるために「同じ」と「同一」が計器や機械なしに感知できます）はじめて検証できるという意味で、人にとっては抽象なのです。

誇張と半分冗談と屁理屈（屁理屈は理屈の別称であり蔑称でもあり、要するに名称の問題なのです←これこそ屁理屈と言われそうですけど）はさておき、いま述べていることを簡単に言うと、複製の複製であり、引用の引用です。正確に言うなら、本物のない複製の複製であり、起源のない引用の引用です。

リアルであることに必ずしも実体は要らないのです。

実物や本物も起源（原型・元祖・出典）も要りません。複製や複製の複製や引用が身のまわりにうようよしているじゃないですか。大量生産された製品、楽曲、料理、絵画、写真、映画、放送、小説、文書、画像、動画.....。

どれも、あなたにとってはリアルな「物」ではありませんか？ 複製と引用とはそれ

自体で完結した「リアル」なのです。人が「似ている」と「そっくり」の世界、つまり印象の世界に住んでいるからです。

(拙文「空っぽ」より)

何の複製なのか、何からの引用なのかが不明

不明であるにせよ、そもそもないにせよ、単に決めたものであるにせよ、本物や現物や実物や起源（原型・元祖・出典）が人によって意識されない（感知されない）複製の複製と引用の引用で、世界は満ちている気がしてなりません。

ここで大切なのは「意識されない（感知されない）」です。本物や現物や実物や起源（原型・元祖・出典）は、「同じ」や「同一」という尺度ではからなければなりません。学んだ知識（抽象）としてではなく、常に自力で（自然に）、です。そうであれば、人は「似ている」を基本とする印象の世界に住んでいるために、その検証はきわめて困難であるにちがひありません。困難どころか、不可能に近いでしょう。

複製の複製とは、何の複製なのかが人に「意識されない（感知されない）」であり、引用の引用とは、何からの引用なのかが人に「意識されない（感知されない）」である、つまり不明であって分からないし、分かる必要性も人は感じていない、そんな「ものありよう」であると言えそうです。「意識されない（感知されない）」とは、何かの有無が保留されている状態だとも考えられます。判断ができないので棚上げされているわけです。

その意味で、本物や現物や実物や起源（原型・元祖・出典）あつての複製とは抽象なのかもしれません。抽象とは見えないし触れることができないものですから、体感も体験もできないのです。

簡単な例を挙げます。写真を複製の複製だと考えてみます。写真の被写体というか実物とされている事物や風景は、ヒトという生き物の知覚機能と認知機能によって写し取られた一面、つまり「写し」であって「そのもの」ではありません。

部分であって全体はないとも言えるでしょうが、それ以前にヒトの知覚および認知機能に限界があるのです。全体とはヒトがとらえられないという意味で抽象であり観念なのです。

巨象は虚像であり、象は像でしかない

人は全体をとらえることができなくて、全体は抽象であって観念でしかない。さらに言うなら、人にとっては部分だけがかろうじて体感できるリアルなのであり、全体とは抽象つまり学習した知識である。こんなふうに言えそうです

(その根っこにはローカルをトータルのひな型にしたい(見なす)というオブセッションと化した願望があるようですが、雛型とは大きなものを小さくした複製である模型(大きな物の属性をすべて備えている)と言えそうです。雛人形やひよこのイメージです。俯瞰や展望やその逆の拡大とも重なります。大きなものや長いものや重いものの代わりに小さなものや短いものや軽いもので済まし澄ましているわけです。地図、地球儀、天体図、天体模型、年表、百科事典、顕微鏡を思いうかべてみてください。遠くの代わりに近くで済みます、望遠鏡、電信・電報、電話、テレビもそうです。広義の錯覚や錯視を逆手に取っているわけですが、それで事足りるからでしょう。抽象の恐ろしさと素晴らしさを感じないではられません。話が大きくなりすぎたので小さくもどします。)

目隠しした複数の人たちが、それぞれ象のあちこちを触って「○○みたいなもの」と言う例の話をおいします。目隠しをした人たちに、それは「巨大な象」だと教えてあげても、それは学んだ知識でしかないわけです。巨象は虚像、つまり虚構でしかなく、たとえ目隠しを外して象を見せたとしても、象は像でしかないのです。

さらに言うなら、実像は虚像、実は実は虚、色即是空、実即是虚。

※以上は、Twitterでのデレラさんとのやり取りから生まれた文章です。ここでデレラさんにお礼を申し上げます。ありがとうございます。

写しを写す

ある事物の全体ではなく、そのある一面を目という「カメラ」が写しているもの(ヒトが知覚し認知できる側面のうちの一面であり、これ自体が写しなのです)をとらえて、それをさらにカメラで写したものが写真であり、その写真は複製できますし、じっさいに複製されていますね。

写しを写してさらに写すわけです。大ざっぱに図式化すると以下のようなものとしてイメージしています。

$$A \Rightarrow B \Rightarrow B \Rightarrow B$$

$$A \Rightarrow B$$

$$B$$

$$B$$

AはBの起源であり、Bの本物や実物と考えられていますが、そのAはヒトの知覚および認識の形式という枠の中で写し取られた写しなのです。きわめてローカル（局所的）なものとも言えるでしょう。

Aを意識する（感知する）ことは可能ですが、その「意識する（感知する）」は努力目標でしかありえません。「意識する（感知する）」という言葉つまり言い回しがあるということと、「意識する（感知する）」とは別物だと言えます。私はこの状態を「意識されない（感知されない）」と言っています。言っているだけです。

Aの写しであるBがつぎつぎと写された結果としての写しが、ふつう複製と呼ばれています。手描きの写しや、手書きの筆写や写本の時代が長く続き、つぎに印刷や撮影（写真）やコピーというかたちでの複製が発明され普及し現在にいたります。

ネット上では、投稿と複製と拡散と保存がほぼ同時におこなわれていますが、デジタルの複製ですから、ノイズやエラーによって起こるずれは飛躍的に小さくなっているようです。

あっさりと言いましたが、あくまでもBを複数あるいは大量に写す、つまり複製するというレベルの話であり、AからBへの写し、つまり実物から別物への置き換えという途方もないずれと、その前の段階で実物をヒトが知覚し認知するというさらに途方もない根本的なずれは解消されていません。

ヒトは写しの世界に生きているのではないか、言い換えると、ヒトは世界ではなく「別」世界に生きているのではないかという問題は解消されていないのです。というか、意識されないのです。意識していいことはひとつもないからかもしれません。

それよりも、世界もどき（人間もどき、知能もどき、体感もどき、自然もどき）をつくることに、人は血道を上げているようです。そのほうが手っ取り早いし楽しいからかもしれません。

人は自分が「似ている」を基本とする印象の世界に生きていることをよく知っているとしか思えません。ふだんはあまり感知されないし意識しないにもかかわらず、よく知っているにちがひありません。もどきで不満はないようです。諦めているのかもしれませんが。

複製と引用のながれ

余談です。

人は印象の世界にいる。似ているの世界に生きている。まだらでまばらな世界の住人。かわりとうつしの世界に生きている。同一も本物も現物も源泉も、人の思いのなかにしかない。

(拙文「虫眼鏡で写真を見る」より)

- 1) 料理、パフォーマンス（演奏・演技）：ずれを肯定し、楽しめます。

A⇒B⇒C⇒D

- 2) 製品、写真、印刷物、デジタルコピー：ずれをないものとして済ませます。

A⇒B

B

B

B

- 3) 2) の一種です。

A⇒B⇒C

C

C

B⇒D

D

D

大切なのはA自体が複製（写し）だということです。人の知覚と認知はうつつ、うつらうつらであり、うつつ（現）、夢うつつ、夢、いめの境はさだかではないのです。

人という、うすい膜にうつった（知覚）うつし（認知）をうつす（伝達）——という感じでしょうか。すべての段階と過程が「うつし」（複製、複製の複製）であり「うつす・写す・映す・移す」（転写・反映・変移）というイメージ。

本物や起源は、観念であり抽象であって、人にはたどりつけない「何か」なのでしょう。たどろうとしても、あるのは「うつし」であり「かわり」なのですが、それが何の写しか、何の代わりかは人の知覚、認知、認識をこえたもののようです。

うつる・かわる、うつる・かわる……。何？ 何か、何？ 何か……。

知識・情報、権威・権力、普遍・真理

引用と模倣の産物であり、ずれをともなう反復による変奏と再演の結果でもある、料理や絵や楽曲やパフォーマンス（技・芸）においては、「複製の複製」や「引用の引用」が起きていると私には考えられます。

物語（広義の引用である口承や写本によって伝承されたもの）や小説（個人が広い意味での引用と曖昧な意味での独創によって書きつづったもの）においても、複製の複製が起きているのではないのでしょうか。この点については、拙作「私たちはドン・キホーテとボヴァリー夫人を笑えるでしょうか？」でも触れてあります。

ただし、学術的な研究や調査によって検証可能なという意味での、明らかに引用や模倣や剽窃や盗作されたものを除いての話です。そうです、話です。ここで述べていることは、お話であり、研究者でも探求者でもない私が勝手にでっちあげたフィクションにほかなりません（居直りですね）。

ここで短絡し飛躍します。

そもそも言葉によって記述され、拡散され、複製され、保存され、継承される知識や情報は、複製の複製ではないでしょうか。学問であれ、芸術であれ、公文書であれ、話し言葉と書き言葉であるかぎりにおいては、複製の複製として存在している気がします。

そもそも言葉が複製の複製なのです。なお、私は言葉を広く取っていて、話し言葉（音声）と書き言葉（文字や記号）だけでなく、視覚言語と呼ばれる表情や身振りも言葉だと受けとめて生活しています。中途の重度難聴者だからかもしれませんが、私にとっては表情と身振りは大切な言葉です。

現在は、真偽、本物と偽物、正誤、善悪の境が曖昧になっている気がしてなりません。こうしたものは、「ある」のではなく「決める」もの、つまり「決まり」ですから、境が薄れたり消えるのは当然だと思われまます。決めた結果としての「決まり」の権威がどんどん薄れてきているわけですが、それは権威や権力が本物や起源と親和性があり、権威や権力が本物や起源を支えとしているからかもしれません。

author という言葉に、著者、作者、作家、創始者、創造者、造物主という意味があり、authority に、権威、権力、権限、先例、権威者、大家、当局という意味があることに注目していいと思います。

私の中では、権威や権力と、知識や情報が深く結びついています。

実物はたったひとつであるのに対し、複製は複数あるいは無数にあります。作者および作品が有名であればあるほどです。有名は無数、無名は有数か、たったひとつなのです。（この記事の見出し「複製の複数性、無数性」より）

「固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用なのです。」

権威や権力とは名前、とりわけ固有名詞のうちの人名の力を度台にしています。有名こそが権威や権力の支えであり、有名かどうかは権威と権力の大きさを示す尺度なのです。有名であれば無数の名前を複製として持っています（悪名高きや悪評もそうですけど）。名が広く知られていることで複製がさらに増える、つまりさらにその名が引用されます。複製が複製を生み、引用が引用を生む、複製が複製され、引用が引用されるという意味です。名前は知識と情報として無限に拡散するのです。それが有名（著名）であり悪名高き（悪評）のありようと言えます。

そんなわけで、知識や情報においても、本物のない複製の複製と起源のない引用の引用が起こっているように感じられます。もっとも、広く知識や情報とされるものが人名ばかりではありません。集団名、国名、民族名、地名、作品名、組織名、商標、商品名というぐあいに、さまざまな固有名詞が、複製や引用の対象になり拡散されます。〇〇主義、〇〇法、〇〇制、〇〇方式、〇〇法則といった専門用語やビッグワードもそうです。

真偽や善悪や正誤の彼岸へ

上で述べたような状況はいま始まった話ではなく、人が言葉を持ってしまった時から始まっていたのではないかという思いが私には強くあります。話を簡単にするために、人名で考えてみましょう。神話や説話や昔話に出てくる人物や歴史上の人物や偉人を思いうかべてください、多くがその名前を知っているだけではありませんか？　それが権威であり権力（power より authority、場合によっては power）です。こうした現象が現在では助長され加速化してきている気がするのです。

話をもどします。

現在は、真偽、本物と偽物、正誤、善悪の境が曖昧になっている気がしてなりません。

どんどん複製され引用されている固有名詞（これ自体が複製であり引用です）の力が失われていくという現象が起きているのです。

平たく言うと、複製には複製の本物があり、引用には引用の起源があるというモデルが曖昧になっている、つまり疑問視され、「そんなものはでたらめだ」とか「そんなものはない」とか「そんなものは嘘っぱちだ」という風潮が広まっているからではないでしょうか。

そもそも真偽、本物と偽物、正誤、善悪なんて図式はウソという感じです。もともと土台無理だった度台が壊れてきたのです。

もったいぶって言うと、本物や起源の権威が失われてきているだけでなく、本物や起源という概念を成立させている枠組み自体が危うくなってきているようなのです。

本物や起源の権威が失われていくのと、真偽、本物と偽物、正誤、善悪の境が曖昧になっていくのが、シンクロしているのではないか、軌を一にしているのではないか、という意味です。

二項対立、建前、武力

現在の世界情勢を見聞きしていると、かつては普遍とか真理と見なされていたものの権威がどんどん失墜してきています。これからもますますその傾向が進む気がしてなりません。

たとえば、権威の象徴であった、たった一つの実物が標的にされる事件が頻繁に起きていますね。芸術作品のことです。複雑な背景があるにしても、これまでなかったことであり（いや、こういう偶像破壊的行為はけっこうあったようです、しかも大規模にやってきたのはむしろ西側であり北側だったのです）、その衝撃度は強いです。権威を認めているからこそ、標的にするのかもしれない。

こうした直接的な破壊行為よりも、著作権を無視した複製や海賊版や違法サイトのほうが、権威の無力化にはるかに貢献している気がします。複製と引用は本物と起源の権威を強めると同時に弱めもしながら、本物の複製と起源の引用という制度そのものをしてだいに無効にし無力化していくのではないのでしょうか。

大げさに言うと、これまで支配的だった思考の根本にある二項対立——真偽、本物と偽物、正誤、善悪——を成立させていた枠組みそのものが無力化（nullify）されつつあるのです。とはいうものの、二項対立はあくまでも建前であり方便であって、歴史的に見て実際におこなわれてきたのは腕力と武力の行使だった点は注目していい事実だと思われれます。実力行使によって奪われ破壊され失われた物や事（言語、制度、宗教、文化、人命、住居、建造物、自然……）、がいかに多かったことか。

普遍、真理、ローカル

現在、西欧的な価値観、倫理観、世界観、歴史観——たとえば民主主義や代議制や著

作権や科学や哲学（philosophy）や論理や進化や進歩というモデルです——に公然と異議を唱える、あるいはそうした観念を蔑ろにし、なし崩しにしようとする勢力が台頭しています。

「私たちはあなたたちとは違うのです」、「私たち独自の〇〇主義（〇〇制）」（※〇〇には普遍で不変だと言われたものが入ります）、「あなたたちに教えてもらわなくてもいい」、「私たちがやっているのは、これまであなたたちがしてきたことですけど、何か？」

普遍とか真理と見なされていたものの権威が失墜するといよりも、普遍とか真理と見なす（想定する）度台、つまり知の枠組みそのものが疑われているのです。そうしたものはあくまでも西と北のものです。普遍や真理と呼ばれているものがローカルなものだという意味です。

人にはローカルをトータルにしたいとか見なしたい欲望があるようです。

問答無用に「バン！」とか「ドカーン！」

真対偽、善対悪、正対誤という図式を成立させている思考が揺れてきているのですから、トゥルース対フェイクどころか、問答無用に「バン！」（銃声）とか「ドカーン！」（爆発音）となるわけです。いまこそ、「フェイク！」なんて言っていますが、本音はもはや言葉ではなく腕力と武力な行使なのです。

ポスト・トゥルース（post-truth）どころではない時代と世界が現れつつあります。もうその兆しは見えますよね。

この状況が進むと、新たな普遍とか真理が出てくるのではなく、武力と腕力だけが支配する世界になります。authority ではなく power だけが幅をきかせる時代の到来です。権力や権力という、ある意味紳士的な観念的で抽象的な美辞麗句ではなく、即物的でむき出しの力が支配する世界と時代という感じです。

大切なことは権力だけが武力を正当に行使できる権利を持っている（担っている、任されている）という事実です。権力は法にのっとって人を拘束したり殺める権利が与えられているのです。誰が与えたのでしょうか？ 国民です。形式上、つまり言葉の上では

そうになっています。辻褄は合っているのです。

権力が、知識の学習と情報の拡散に異常なほど警戒することに敏感でありたいと思います。できることなら、国民一般あるいは下流国民は無知であってほしいかのようです。たとえば宗教の教義を理由に女性の教育に過剰なほど干渉し抑制しようとする体制がありますね。一部の人間だけが知識と情報を独占したいとしか考えられません。

知、痴、稚、血、恥

きな臭くなってきたので、話を変えて転調します。

知識や情報の学習と習得が、模倣と反復と変奏という行為としておこなわれるのは興味深いです。くりかえしくりかえし、なぞる、まねる、まなぶ、かわる、かえる、というふうにはです。たくさんの時間と労力を費やして習得しなければならぬほど、（逆に言うと）知識や情報は人為的で恣意的で脆いものなのかもしれません。自然でも必然でも当然でもないという意味です。

考えの整理がつかないため短絡した言い方になり恐縮ですが、本物や起源、そして普遍や真理という概念——これらが知識と情報の学習と拡散に深くかかわっている気がしてなりません——がフィクションであることが露呈してきているのではないのでしょうか。これが露わになるのがパンデミックや大災害や戦争の起きた時であるのは悲しく残酷な皮肉と言うべきでしょう。

こうした悲劇的状况は、知識と情報の学習と伝達と伝承に支えられてきた広義の知（後に触れますが、究極の複製である文字の果たす役割は大きいです）を、人類が根拠のない（自覚もなければ意識もしていません、「何となく」という意味です）欲望を満たすための方便として利用してきたからではないのでしょうか。

知がずれていったのです。知、痴、稚、血、恥という感じ。さらに言うなら、地（領土、テリトリー、縄張り、領域、分野、範囲）——場所という意味での土地以外に、場というかヒトがつくって決めた抽象的な領域も含んでの話です——をもちょう広げようという欲望を人類がかかえていることでしょう。この欲望は他の生き物にも見られますが、ヒトの場合には生を逸脱しエスカレートし大規模になりすぎている点——地、道（路）、馳、笞、置、治——が特徴的だと思われれます。しかも、自覚も意識もしないのです（して

もすぐに忘れます)。「何となく」とんてもないことをしでかしていると言えるでしょう。

以上、大風呂敷を広げながら、未整理な考えを垂れ流すだけにとどめて、申し訳ありません。この辺のことについては、今後さらに考えてみます。

話を変えます。

大量生産、製品

大量生産された製品、楽曲、料理、絵画、写真、映画、放送、小説、文書、画像、動画……。
(拙文「空っぽ」より)

複製といえば、絵などの芸術作品の複製や印刷物のほかに、大量生産された製品を思いうかべる人が多いと思われます。写真や映画を連想する人も多いでしょう。さらにはインターネット上で投稿と複製と拡散と保存がほぼ同時にかつ並行して起こっている文書や静止画や動画こそが、現在では最も重要な意味を持つ複製であると考えている人も多いかもしれません。

いま挙げたもののうち、製品に注目してみましょう。

現在では情報やデータも製品になりうるし、じっさい製品として売買され流通していますが、そうした抽象的なものではなく、たとえば衣食住にかかわる服や食品や家具や電気製品といった、目で見ることができて手で触れることができる具体的な物である製品の例として、靴を思いうかべてみてください。

みなさんのお持ちになっている愛用の靴は、おそらく大量生産されたものでしょう。つまり複製ということになりますが、その複製である靴を複製として考えることができるでしょうか。そっくりなものがたくさんあるうちのひとつだと考えることがありますか。

あなたの愛用の靴の話です。

リアル、代わり、写し

愛用している製品であれば、どんなものであれ、それは世界に「たったひとつの」「大切な物」なのです。これが、自分にとって親しくない人の持ち物であれば、同じメーカーの同じ製品番号の製品でも、それは「複製」になります。

この場合の「複製」とは、「それとそっくりなものがほかにもたくさんある」、「そのうちのひとつ」だという意味です。

あなたは大切な人の写真が踏めますか。大切な人の名前が書いてある紙切れを踏めますか。

踏めなかったり、踏むのにためらいがあれば、それがリアルなのです。リアルとは、いまここにある、たったひとつ（たったひとり）のものです。複製（その他たくさんの中のひとつ）であっても複製として意識されない（感知されない）ものがリアルなのです。

写真も名前を書いた文字も複製（写し）ですが、それによって引きおこされる「大切」や「愛おしい」という感覚や感情にとらえられ、行動を左右されてしまうのが人なのです。

駄目押しに言いますが、「そっくりなものがたくさんある」はずの複製を前にして、あるいは手にして起きる、この「たったひとつ（たったひとり）のもの」（愛着）という感覚や感情は想像の産物であるとも言えます。

そうした心境にあって、複製を前にしたり手にした時の人は、ほかにもたくさんあるはずのそっくりなものたちに思いを寄せることはありません。当然のことながら、その複製の起源や本物（実物）を意識することはありません。

リアルであることに必ずしも実体は要らないのです。
(拙文「空っぽ」より)

リアルである、つまり、いまここにあるたったひとつのものであることには、実体も、その他のそっくりなものも要らないのです。リアルという感覚が起これば、それでいいのです。

実体のないリアルとは、「動き」であって、動いている「もの」が意識されない「状態」とも言えます。

リアルとは、言葉（声・文字・表情・身振り）であったり、映像であったり、音であったりすると考えてください。そうしたものは、代わりであり、写しなのですが、何の代わりであるか、何の写しであるかは感知されないし意識されないのです。そもそも「何」はたどることができないものだからです。

いまここにあるふるえ

人の中で「いまここにある」という感覚を引きおこす、いわば「ふるえ」や「動き」が作動している状態なのです。その状態（ふるえている）は複製（代わりと写し）によって引きおこされます。というか、きょくたんな言い方をすれば、人にとって世界は複製（引用）であり、複製（引用）しかないのです。

人にとって、世界や森羅万象は「うつうつ」「うつらうつら」しながらとらえている「うつし」でしかありえないからです。たどりつけない「何か」の「代わり」でしかないからです。

人は自分が考えているほど、正気でもなく覚めてもいないもようです。さもなければ、自分のつくった「写し」に振りまわされたり、たったひとり、あるいはごく一握りの「代わり」にすべてお任せするような世の中の仕組みをつくって自分の首を絞めたりしてないはずです。

たとえば、写しであり代わりである言葉をたったひとりのリーダーが発し、それが音声や文字として一瞬のうちに投稿・複製・拡散・複製・保存される。リーダーはいったん放った言葉の辻褃合わせのために、さらに言葉を放ち、既成事実を積みあげていく。ブレは許されません。体裁が悪いからです。面子にかかわるからです。リーダーが体裁と面子にこだわることは、みなさんがご存じのとおりです。

そのせいで、多くの人命と財産が失われているのもまた、みなさんがご存じのとおりです。人びとは、自分たちの代わり（代理人）の発した言葉（代わりであり写し）にひ

れ伏していると言えます。代理人（自分は「国民から権力を委託されている」と言います、言っているだけです）の辻褃合わせに付き合わされているのです。この点については、拙文「黒いカラスは白いサギ」で触れています。

いつのまにか、うつろうつろ、うかつ、うっかりがまかり通っているのです。なんとなく、とんでもないことを、みんなですでかしているという意味です。この星に住む人以外の生き物たちもそれに付き合わされています。

うつろうつろ、うかつ、うっかり——。らりっているのかもしれませんが。これは、私のことです。さまざまなお薬（ほとんどが工場で製造された複製です）を服用してぼーとした状態でこの記事を書いています。ところで病気も複製であったり引用なのでしょう。このところ、心身ともに自分が複製であり引用の産物だという気がしてなりません。

究極の複製は文字

上でも述べましたが、私は言葉を広く取っていて、話し言葉（音声）と書き言葉（文字や記号）だけでなく、視覚言語と呼ばれる表情や身振りも言葉だと受けとめて日々の生活をいとなんでいます。言葉もまた複製であり引用であることは忘れられがちです。さきほど、モナ・リザを例に取って、おふざけをしたとおりです。

話し言葉はおもに聴覚に、書き言葉と表情と身振りはおもに視覚に依存します。どの言葉も発せられると、それを聞いたり見ている相手に記憶されるというかたちで残りますが（もちろん無視もされますけど）、音声と表情と身振りは発せられたとたんに消えていきます。

受けとった相手はそれを片っ端から、自分の中でなぞり（うつるのです）、記憶（保存）し、真似るというかたちで繰り返すこともあるし、そうしないこともあります。文字だけが消さないかぎり、残ります。

このようにしつこく残る複製は文字だけではないでしょうか。しかも、文字は写すことができます。写せば増えるのです。「発する・発せられる」（post = 投稿）、「残る・残す」（保存）と「写る・写す」（複製）と「増える・増やす」（拡散）が同時に起きるなんて文字しかなさそうです。

それだけではなく、「写る・写す」に付きもののずれが起きにくいのです。印刷やコピーという手段を用いれば、ずれはほぼなしになり、デジタルなデータとして複製すれば、ずれは理論的には皆無になります。

話し言葉は真似て反復されるたびに個人差が発生します。これが集団によって繰り返されていく過程で、訛りや方言になるようです。表情や身振りも、個人や集団や文化によってそのかたちや意味は変わりやすいと考えられます。

文字だけが、ずれのない複製として存在できるし、ずれのない複製として読まれるのが可能です。なお、書体やフォントや書き文字としての差異や、インクや紙質や画素の濃度による差や、レイアウトによる違いは、ここでは扱いません。というか、これまでに記事にしたことがあります。話がややこしくなりすぎて私には扱えないのです。

文字は究極の複製ではないでしょうか。そんな究極の複製を用いるさいにずれが起きるとすれば、それは人の中で（人の側で）起きるのです。文字は不変で不動、人がうつろう。

いずれにせよ、文字からなる文章（文書）が、本物のない複製の複製であり、起源のない引用の引用である点は、ほかの複製や引用と変わらない気がします。

（ひとつ気になるのは、書き言葉である文字が、話し言葉（音声）や表情や身振りという言葉とは異なり、その習得に多大な時間と労力を要するという点です。さきほど「知識・情報、権威・権力、普遍・真理」という見出しの文章で述べた、知識や情報の習得と似ているというより、両者がぴったり重なっている点も、気になります。文字は人にとって自然でも必然でも当然でもないのではないのでしょうか。この星に他の生き物といっしょに棲んでいる人類というかホモ・サピエンスの歩んでいる道は、これでいいのでしょうか。人類のつくり残しているもの（なかなか元に戻らない、しつこく残っているのがきわだった特徴です、短時間で消し去る準備が整っているのにです、後に放射性物質がしつこく残りますけど）は、この星にとって「正しい」ものなのではないでしょうか。）

翻訳、アイドル、崇拜

文字の複製というと、写本や写経と翻訳が頭に浮かびます。そうです。宗教と関係してきます。単に知識とか情報の拡散と伝承の問題ではないのです。

世界のベストセラーは、バイブル＝聖書だと聞いたことがあります。実際、あれほど多数の言語に翻訳された書物はないのではないのでしょうか。しかも、何語で書かれて(訳されて)いても聖典だということらしいのです。一方で聖典としての翻訳を絶対に認めないクルアーン(コーラン)があり、翻訳は解説だと考えられているという話を見聞きした覚えがあります。

私はお勉強や調べ物が苦手なので、深入りはしません。したくもありません。空想のほうが身の程に合っているようです。そんなわけで、翻訳については見聞きして知っていることだけを書きますが、忘れてることが多いので、拙文「引用の織物」と「定型について」と「言葉の夢、夢の言葉」を見ながら思いだして書きます。

聖書といえば、ルター聖書が成立する苦労話を思い出します。英語訳の聖書もたくさんありますね。日本語訳も複数あります。うちの書棚にもありますが、英語でも日本語でもそれぞれ微妙に異なるというか違った印象をいただきます。頭の中で浮かぶイメージ(心象・印象)や絵が違ってくるのです。恥ずかしい話ですが、仏教の經典であるお経についても無知です。お経を口にした記憶もありません。

經典や聖典とされる文書の特徴には隠喩や寓意があるようです。つまり多義的多層的なのです。ただ一義的なメッセージや意味を伝えるだけの目的で書かれていないということでしょう。しかも隠喩や寓意だけでなく、さまざまなレトリックが駆使されているようですから、これを翻訳するのは至難の業と言えそうです。

多様な解釈が可能で、喧喧諤諤、百家争鳴の議論が起こって現在に至ると聞きます。こうなると原文を横目で見ながら解説と注解を読んだほうがいいのかもかもしれません。文学作品を連想します。とくに詩です。たとえば、韻のある場合には、まず韻を他言語にうつすことを断念しなければならないでしょう。韻だけではありません。

簡単には「うつせないもの」や「うつしてはならないもの」もあるのです(おそらく「うつせるもの」よりずっと大切なものだという気がします)。(拙文「伝わるもの、伝わらないもの」より)

私的な感想ですが、小説でもたとえば英語で読んでいるのと日本語で読んでいるのでは別物に感じます。日本語の原文から英語へ、英語の原文から日本語へのどちらの場合にでも。翻訳は私にとっては別物なのですが、絵画の複製を見て感じる「似ている別物」とか「そっくりの別物」とはこれまた異なる印象を覚えるのです。

同じではないことは確かで、異なる、違う、別物なのだけど、似ているとは異なる気がする。こうとしか言いようがないのです。よく分かりません。

話は飛びますが、イコノクラスム (iconoclasm、聖像破壊運動) とか、それとは別の話らしい偶像破壊とか、その逆みたいな感じの偶像崇拜 (idolatry、idolism) という言葉を連想しました。「らしい」とか「みたいな感じ」だなんて不勉強丸だしの言い方で申し訳ありません。

idolatry と idolism には idol (アイドル) という言葉が見えます。アイドルは写真や動画や音声で複製されるほど、アイドル度が高まるようです。アイドルは、崇拜の対象になるくらいの熱い存在ですから、宗教に近いと言えるかもしれません。アイドルは崇拜され、複製にされてなんぼという感じでしょうか。模倣されるという意味で、引用されてなんぼとも言えそうです。

そもそもアイドルは偶像であって、実物ではなく像なのです。複製なのです。現代のアイドルもそう簡単に人前に入るべきではないと思います。握手をするなんて、とんでもない邪道だとは言いませんけど。

それにしても、よく分かりません。不思議です。何がって、翻訳とアイドルのことで。そしておそらく文学と経典や聖典のことで。

いずれにせよ、翻訳とアイドルについて考えるさいには、本物のない複製の複製と、起源のない引用の引用という言葉とイメージが参考になる気がします。本物とか複製とか起源とか引用を超越した現象であり話なのかもしれません。

大風呂敷を広げる

本物のない複製の複製と、起源のない引用の引用の世界に、本物と起源がないのは、人が「似ている」を基本とする印象の世界に住んでいるからでしょう。人にとって「同じ」と「同一」は扱えないし、扱えないから意識されないのです。人にとっての「ない」とは「意識されない（感知されない）」とも言えそうです。

人はいまや、「似ている」ではなく「そっくり」をつくるようになり、それをきわめようとしているかのように私には思えます。そっくりはどんなにその度合いを高めても「そっくり」であって「同じ」ではありません。

ロボットや機械のしなやかな動きは、生き物のしなやかな動きとはそっくりであっても同じではないのですが、人はそれを感知できないのです（知識や情報として学ぶことはできても）。人は自分が感知できない「同じ」を知識や情報として学ぶ必要があり、「同じ」は「知識」や「情報」と同様に人にとっては抽象だという意味です。

ヒトの棲息する「似ている」の世界、つまり印象の世界は、人類が出現してからずっと本物なき複製の複製と起源なき引用の引用の世界であるような気がします。いま始まった話ではないのです。ひょっとすると、他の生き物たちもそうなのかもしれませんが、これ以上大風呂敷を広げるのはやめておきます。

私にとって、こういう空想（大風呂敷を広げること）だけが楽しいのです。ああでもないこうでもない、ああだこうだ、と。

お知らせ

現在、noteでの投稿をお休みしております。

本日、最近書きためたことを記事にしましたが、心身ともに調子が悪いので、引きつづきお休みします。どうか、みなさんもお自愛ください。

ぜんぜん論理的ではなく、思いつきを連ねただけの、冗漫で重複と脱線と矛盾に満ちた駄文にお付き合いいただき、ありがとうございました。

寒い日です。今夜はあり合わせの食材をつかっておでんにしようと思っています。亡くなった母から習ったレシピと味付けでの料理です。

追記

当初の記事に、大幅な加筆をおこないました。2022/11/08 更新

#小説 #複製 #引用 #本物 #偽物 #製品 #料理# パフォーマンス #写真 #印刷
#文字 #言葉 #名前 #固有名詞

11/08 つながる、かさなる、むすぼれる

＊

つながる、かさなる、むすぼれる

星野廉

2022年11月8日 15:54

十一月四日に一か月ぶりに記事を投稿したのですが、いったん投稿した文章をいじりまわす癖が出てきて、その後毎日ずるずると加筆するかたちで更新していました。「本物のない複製の複製、起源のない引用の引用」のことで。

私の場合には加筆は推敲ではありません。削って文章のピントを合わせていって短くなるのが推敲なら、私は書き足してどんどんピントがぼやけていき長くなるのです。新エディタになって見出しが使いやすくなったので、調子に乗ってつぎつぎと見出しを付けて文章を追加していきました。

「AだからB、BだからC、CだからD」というぐあいに、論理的に文と文章を組み立てていく書き方は私よりも苦手とするところです。「AといえばB、BといえばC、CといえばD」みたいに、連想で文章をつづっているつもりなのですが、じっさいには思いつきで文章を並べていて、結果として飛躍と脱線と重複の多い冗漫な文章ができあがります。

＊

私的な感想ですが、小説でもたとえば英語で読んでいるのと日本語で読んでいるのでは別物に感じます。日本語の原文から英語へ、英語の原文から日本語へのどちらの場合にでも。翻訳は私にとっては別物なのですが、絵画の複製を見て感じる「似ている別物」とか「そっくりの別物」とはこれまた異なる印象を覚えるのです。

同じではないことは確かで、異なる、違う、別物なのだけど、似ているとは異なる気がする。こうとしか言いようがないのです。よく分かりません。

(拙文「本物のない複製の複製、起源のない引用の引用（更新：2022/11/08）」より)

上に引用したのは「本物のない複製の複製、起源のない引用の引用」にある「翻訳、アイドル、崇拜」という見出しの章からの引用で、十一月八日に更新、つまり書き足したものです。

そこで書いたことがずっと気になり、更新後も、ああでもないこうでもない、ああだこうだと考えていました。体調が良くないのにです。こういう空想が楽しいのです。それくらいしか楽しみがないとも言えます。

困ったものです。

で、さらに付けくわえたくなったのですが、同じ記事を更新しつづけていると、その前後の文章が目について気が散ってきたので、新しく記事を書くことにしました。いまみなさんが、いまお読みになっているのがその記事というわけです。

では、書き足します。

*

(A)

さあ、来たぞ。男は見まわし見まわして、彼を見ると、すぐに目をそらせた。むぎわら帽を脱ぐと、カウンターの隅をまわったところに腰をおろした。

(パトリシア・ハイスミス作『太陽がいっぱい』青田勝訳・角川文庫 1971 年、のち「リプリー」と改題・p.4)

(B)

さあ、やってきた。男は店内を見まわし、彼の姿を認めると、すぐに視線をそらした。カンカン帽をぬぎ、カウンターがカーブしているむこう側に席をとった。

(パトリシア・ハイスミス作『太陽がいっぱい』佐宗鈴夫訳・河出文庫 1993 年、のち「リプリー」と改題・p.6)

(C)

Here he came. The man looked around, saw him and immediately looked away. He removed his straw hat, and took a place around the curve of the bar.

(“The Talented Mr. Ripley” by Patricia Highsmith (Vintage) p.5)

(A) と (B) は似ていると私は思います。似ているという私個人の印象であり感想です。

(A) と (C)、(B) と (C) が似ているとは私は感じません。別物なのです。でも、これを「同じ」だと言う人がいれば、私は「そうですね」と答えるでしょう。でも、内心では「違う」とか「異なる」とか「別物」だと思います。

翻訳は別物。

翻訳についてはその受け止め方は人それぞれですから、私は意見の異なる人に向かってとやかく言いません。正解なんてないと思っているからです。

なお、以上の引用文は、拙文「対訳読書の勧め」からコピーペーストしたものです。興味のある方は、お読みになってください。

*

ところで、上の引用に出てきた「男」と「man」は似ていますか？ 同じですか、そっくりですか、違いますか？

「むぎわら帽」と「カンカン帽」と「straw hat」はどうでしょう？ 似ていますか、同じですか、そっくりですか、違いますか？

ややこしいですね。考えると目まいがしそうです。

*

別の例で考えてみましょう。

「猫」と「cat」は似ていますか、同じですか、違いますか？ 「cat」と「chat」と「katze」

と「**ㄱ**」と「**ㄴ**」はどうでしょう？ 日本語、フランス語、ドイツ語、韓国語、アラビア語だそうです。

英語とフランス語とドイツ語は、つづりも発音も似ていると言えれば似ていると私は感じます。いわば「親戚関係」にあるからでしょうか。同じではないことは確かです。意味ではなく、字面と発音のことです。

韓国語とアラビア語についてはどう読むのかは知りません。字面に関して言えば、ぜんぜん似ていない、違うと感じます（見えます）。

＊

話は変わりますが、猫を思いうかべてみてください。視覚的にです。あなたの頭の中の猫と、猫という文字は似ていますか？ ねこ、ネコ、neko はどうですか？ ねこと発音して、その音とあなたのイメージする猫は似ていますか？

私にはどれもぜんぜん似ていると思われませんが、ふだんはそんなことをぜんぜん気にしないし、考えることもありません。

でも、猫という動物の代わりに「猫、ねこ、ネコ、neko」をつかっています。猫という生き物の代わりに「猫、ねこ、ネコ、neko」で済ませて澄ましているのです。しらっとです。

これが私には不思議でなりません。自分のことなのに、です。

＊

話をもどします。

翻訳は、私には別物に感じられます。「似ている」とも「同じ」とも「違う（異なる）」とも言いきれません。よく分からないのです。これは単語のレベルでも、フレーズでも、センテンスでも、文章でも、そうです。

＊

……三つの文はカズオ・イシグロ作で土屋政雄訳の『日の名残り』（ハヤカワ epi 文庫）からの引用で、数字はページ数を示しています。

それぞれの文にある「山」は英語の原文では hill (hillside) です。mountain ではありません。

でも、この翻訳された小説を読みながら「山」という言葉が出るたびに、私の頭に浮かぶのは日本の山々、それも故郷の山々なのです。たとえ、「低い」とか「なだらかな起伏」という言葉が添えられていても、なのです。英語力が乏しいうえに、うかつな私だけの思いなのかもしれませんが、お分かりいただけるでしょうか。（※ただし、原書で読むと hill とあるからなのか、テレビや映画で見た英国の低い「山」が浮かんできます。とくに小説の場合には、原著とその翻訳は別物だと感じないではられません。）

（拙文「言葉とうつつのあいだを行き来する」より）

＊

英語と日本語に話をしぼりますが、単語、フレーズ、センテンス、文章、あるいは作品のレベルで、対訳でくらべた場合に、両者は別物（同一ではないという感じ）であり、「似ている」でも「同じ」でも「違う（異なる）」でもなく、強いて言えば「つながっている」と感じます。

翻訳は「つながっている」とか「かさなっている」というのが私の印象です。強いて言えばです。印象ですから個人的なものです。ひとさまのことは知りません。違う印象の人がいても驚きませんし、反論する気もありません。人それぞれ、人生いろいろ、語感もいろいろ、翻訳観もいろいろでしょう。

＊

上で「強いて言えば」と書いたように、悩んだ末の感想です。翻訳って不思議だなあ、よく分からない、というぼんやりとした気持ちはこれまでずっとあったのですが、突きつめて考えたことはありませんでした。無意識に避けてきたのかもしれませんが、ややこしそうだからです。

そんなわけで、今回翻訳は「つながっている」とか「かさなっている」ではないかと考えて、いくぶんはすっかりしましたが、「強いて言えば」ですから、なんだか煮えきらない気分です。まだ出し切らないとかまだ中に残っているという、例の生理的な感じに似ています。

失礼いたしました。

*

煮えきらないのは、たぶん言葉について考えているからでしょう。

私は言葉が好きです。私にとって言葉とは、話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、視覚言語と呼ばれることもある表情や身振りも含みます。

私の興味があるのは、言葉のありようであり、人と言葉のありようなのです。そのありようを観察するのが趣味だと言えます。

言葉のありようは、分かっているようで分かりません。見えているようで見えません。気づいていないことがたくさんある気がしてならないのです。

たとえば、話し言葉と表情と身振りは、発せられたとたんに消えます。どんどん消えていくのとどんどん発せられるのが同時に並行に起きています。それを相手が受けとるわけです。これがありようなのですが、理屈として分かった気分になってもよく分からないのです。

とらえられないというか、不思議でなりません。「なんで？」と「どういうこと？」がいつこうに解消しないのです。

一方、書き言葉である文字だけが発せられる、つまり書かれても残ります。消さないかぎり、しつこく残りつづけます。このありようがまた、さっぱりつかめないのです。なんで？ どういうこと？

*

言葉は不思議でなりません。生まれたときから、自分のまわりにすでにあって、それを見たりなぞったり真似ながら学んできたようです。外にあった言葉を真似て学んで、自分の中に入れて自分の中から出したりできるようになりますが、不思議です。

書き言葉だけは習得にとほうもない時間と労力を要しますが、このありようが、また不思議でなりません。

なんで？ どういうこと？ いつからこうなっているの？ どこでもそうなの？

また、世界には言葉を話せても読み書きだけができない人がたくさんいるそうですが、これも言葉で知っているだけで体感できません。どういうこと？

私は書き言葉の読み書きだけが著しく苦手で、物知りだし、会話は巧みだし、とても頭のいい人に会ったことがあります、これも不思議でなりません。

話し言葉も表情も身振りも不思議だらけですが、書き言葉は謎だらけなのです。

＊

言葉には、方言があります。たとえば、日本語にも方言があり、平安時代といまではかなり違うみたいです。

言葉には、他の言語もあります。英語と日本語だとかなり違っています。単語も文法も発音も文字も。

でも、つながっているようです。つながっているから翻訳できるのではないのでしょうか？

この「つながっている」は「かさなっている」にも近いと感じます。とくに英文とその訳文を並べてながめていると、かさなっている、かぶっている、ダブっている気がしてきます。似ているでも、同じでも、違うや異なるでもないのです。

＊

つながっているとすれば、なんで？ どういうこと？ いつからそうなっているの？

どこでもそうなの？

そもそも、言葉があるって、なんで？ どういうこと？ いつからそうなっているの？ どこでもそうなの？ どんな生き物でもそうなの？

以前には、言葉には経路があるとか、筋があると考えて記事にしていたことがあります。イメージとしては、線路です。道でもいいのですが、獣道みたいに自然にできていく感じの道よりも、誰かがつくったようなイメージがある線路です。

なにしろ整然としているし見事なのです。よくできているというか、できすぎというくらいの完成度を感じます。もともとあるとしか思われぬ見事な線路（比喩です）のことです。

*

線路やレールや鉄道は敷くと言いますが、「敷かれている」ですから、「しく・敷く・布く・敷設（布設）する」という感じでしょうか。

「敷かれている」のほかに「刻まれている」とか「しるされている」もいいですね。「しるす・印す・標す・徴す・記す・誌す」なんて並べるとぞくぞくしてきます。

何か筋みたいなものが敷かれている、模様みたいなものが刻まれている、しるされている。人の中にです。たぶん、もともと。

それがつながる、かさなる。他の人とです。

しかもですよ、言葉が違ってても、つながる、かさなる。腰を抜かしても罰は当たらないと思います。

なにしろ、もともとつながり、かさなるようになっているとしか思えないほど、見事につながり、かさなるのです。

＊

もともと敷かれている線路がつながる、もともと刻まれている模様がかさなる。

この「もともと」がとても気になります。自分で勝手に言って気になっていけば世話ないですけど。

もともとが、つながり、かさなって動く、うごめく。ふるえる。ぶれる。ゆれる。からまる。むすばれる。むすばれる。

やっぱり、いちばん気になるのは「もともと」です。そんなことがあっていいのでしょうか。想像すると気が遠くなりそうです。自分で勝手に言っておいて気が遠くなれば世話ないですけど、もしそうなら、おそろしい話です。

しばらく、このイメージに浸ってみようと思います。

おやすみなさい。

#小説 # 連想 # 翻訳# 言葉 # 文字 # 英語 # 日本語 # パトリシア・ハイスミス# カズオ・イシグロ # 文章 # バベルの塔

11/09 イメージの文法

＊

イメージの文法

星野廉

2022年11月9日 15:25

体調が悪くてベッドで寝ていたり、居間で横になっていたり、ただ椅子に座ってテーブルに向かっていたりしますが、夢うつつとかぼーっとしてしまいがちです。寝た状態でぐっすり眠るとか、起きて目覚めてスッキリするということがないのです。

寝ても覚めても頭がスッキリしないという感じ。葉のせいなのかもしれません。

そんなときに、とくに痛みや苦しみや不安を感じるときには、言葉とたわむれます。目をつむるととりとめのない像が——形だったり物だったり模様だったり景色だったりします——頭に浮かびますが、それには意味があるようでないようで、だからこそ心地よかったりします。

それはそれでいいのですが、ちゃんと意味のある言葉に遊んでもらうのも、これまた楽しいものです。意味が頭をしゃきっとしてくれるからです。

このところ書いている記事は、そんな言葉とのたわむれを思いだしながら文字にしています。メモを頼りにすることもあります。

＊

言葉には辞書に載っている語義のように意味がありますが、イメージつまり視覚的な像や体感を喚起する力もあります。それだけでなく、言葉には意味のない、または意味の不明な形や模様だけを喚起する力もあり、こうした無意味や意味不明なものとのたわむれていると、なぜか気が紛れます。

意味のない分だけ疲れないのかもしれませんが。意味はときには頭を疲弊させます。

言葉とたわむれるさいに頭に浮かぶのは日本語が圧倒的に多いのですが、たまに英語やフランス語が出てくる場合があります。先日、昔英語の単語を覚えるときにつかった連想ゲームみたいな遊びをしている自分に気づきました。

知らない間に無意識のうちに歌を口ずさんでいるとか、耳か頭の中か知りませんが、歌や旋律が鳴っていることがありますよね。そんな感じで、一連の言葉、英語の単語が出てきたのです。いま思えば、危ういなあ、なんて苦笑しますが、そのときには憑かれたようにその連想ゲームに夢中になっていました。

*

stand, stay, station, stop, stable, stage, state, withstand, constant, stance, statue.

立っている、とどまる、ある状態を続ける——こういう意味とイメージが共通していますね。たぶん、語源が同じなのです。こういう単語の覚え方があって、それを学生時代に習ったために、連なって出てくるのです。単語の連想というか連鎖が頭の中に残っているように感じられます。

*

先日どんなふうに連想していたかを思い出してみます。

言葉の音、つづり、見た目のかたち（字面）、そうしたものが喚起する意味やイメージとたわむれるのです。意味がともないますから、ある程度覚醒しています。学習したことを思い出して知的な興奮を覚えているとも言えそうです。その一方で、または同時に並行して、とりとめのない視覚的なイメージや体感や体感の記憶が起きます。

たとえば、こんな感じです。

stand、スタンド、立つ、立ちあがる、起立する、立っているときの体感、静止し両手

を揃えて腿の横にくっつけているとき体感、よっこらしょと立ちあがるイメージ、立ちあがるときに足の筋肉が緊張し下から上へとその緊張が伝わっていきお腹にも力が入る感じ、英語の stand にある踏ん張って持ちこたえるという体感的イメージ、顔の分からない誰かが突っ立っている姿、昔子どものころに学校の廊下で立たされていたさいに窓の外に見えた風が強くて土煙が舞っていたまばゆい運動場の景色――。

以上の一連のものが一瞬のうちに、あるいは短時間にあれよあれよと浮かびます。走馬灯のように（まだ見たことはないのですが）。いま気づいたのですが、言葉にすると長いですね。長ったらしいのです。なんだかややこしいし、作文するのも大変でした。

さらに言うなら、書いた部分を読みかえしてみると嘘くさいのです。夢を見た翌日に必死で夢の内容を文章にしたときみたいに。

＊

嘘くさい。たしかにウソっぽく感じられます。頭の中にあるイメージや意味の断片や言葉のかけらと、こうやって文字にしたものは別物だと感じます。でも、つながっているし、かさなってもいるし、からみあい、もつれてもいます。

＊

ふいに既視感を覚えたので、調べてみました。こういうことを記事した記憶があるので、さっそくネット検索してみたのです。確かにありました。

stand、statutue、static、stop、stay、start、stay、station、step、stray、stroll……

st は移動と静止をあらわすと、昔習った記憶があります。そんなふうに単語を覚えたのです。

（拙文「影を見る」より）

「星野廉 note stand stay」と「星野廉 はてなブログ stand stay」をキーワードにグーグルで検索してみたのです。前者では該当なしで、後者でヒットしました。私は過去の記事を文供養するさいには、いわば分骨しているのです。この note にも、過去の記事が収めて（納めて）あります。

そもそも私が note に来たのは、お墓をつくり直すためでした。十二年ほど前に一年間くらいかけてブログ記事をほぼ毎日書いていて、そのバックアップを電子書籍化し置いておいたサイトがありました。いわば私の書いた文章のお墓です。もう書かないつもりだったのです（じつのところ、十年間ほどは何も書いていませんでした）。

（拙文「どこかに残るって、どこに？」より）

＊

さきほど検索してヒットした「影を見る」という記事にざっと目を通してみましたが、おもしろそうなことをやっています。2022年7月15日の記事ですが、これはそれより以前に note で投稿した文章を再投稿したもので、この記事を書いた note のアカウントは退会・削除して、いまはありません。内容は忘れてしまっているので、他人の文章のように感じます。

だからおもしろく読めたのですが、こんなことをまたやってみたいと思いました。言葉のイメージとのたわむれが好きなのです。わくわくぞくぞくするからです。

イメージの文法という感じ。

そういえば「立つ」にこだわって記事を書いていたことを思い出したので、ちょっと調べてみます。

＊

「星野廉 はてなブログ立つ」で検索してみたら、おもしろそうな記事が見つかりました。

立つという体勢は人にとって不自然なものだと言いたくなります。一時的な姿勢であって、いつまでも立っているなんてありえないのです。弁慶さんじゃあるまいし。いつかは倒れます。横たわります。

行き倒れ、野垂れ死に、仰臥、往生、大往生。

瞑目合掌。

（拙文「赤ちゃんが立つとき」より）

なんだか、身につまされる話です。思わず読みふけてしまいました。

＊

こんな記事もありました。

「立つ」行為は、人に見せるためにある気がします。人に見せるために人は立つのです。
「ほら、立ったよ」、「見て、立派でしょ」、「ね、こんなぐあい」、「どうだ」、「頑張っています」、「いいでしょ」、「きりっ」

人が立っている姿を見ていると、そんな言葉が聞こえてくるようです。

立っているのを見ているほうも、「見せている」の人の応えている節が見られます。
「おお、すごい」、「やったね」、「リスペクト」、「あら、まあ……」、「素敵すぎます」、「頑張っていますね」、「元気をもらいましたよ」

(拙文「意思表示としての動作」より)

相変わらず、いい加減なことを書いています。それにしても威勢がいい。元気だったころの文章です。

*

起立する、横たわる、静止する、移動する。

わくわくする動詞です。「移動する」は「うつる」じゃないですか。「うつる、写る、映る、移る」——大好きな動詞です。思えば、こういう動詞とそのイメージで何度も記事を書いてきました。たしか「静止しながら動く」とか「動きながら静止する」なんて書いた記憶がよみがえります。

イメージが湧いてきました。楽しくて熱中できそうです。

繰り返しになってもかまわないから、不安や苦痛から逃れたり、もやもやを紛らわすためにまた書いてみたい気分です。

イメージの文法——。わくわくします。

#小説# イメージ # 言葉 # 夢うつつ # 連想 # 動作 # 動詞 # 英語 # 日本語# ブログ

11/11 つながる、かさなる、ふるえる

＊

つながる、かさなる、ふるえる

星野廉

2022年11月11日 08:45

もともとが、つながり、かさなって動く、うごめく。ふるえる。ぶれる。ゆれる。からまる。むすばれる。むすぼれる。

(拙文「つながり、かさなる、むすぼれる」より)

「むすぼれる」とは異なり「むすぼれる」にはネガティブな意味も含まれていますが、人のかかえている「むすぼれ」は容易には晴れないし解けない気がしてなりません。

「つながり、かさなる、むすぼれる」は言葉をテーマにして書いた記事です。人（個々の人類）の内には、まるで線路のような見事な筋がもともと敷かれていて、それがあって「つながる」と「かさなる」が生まれるというイメージです。言葉のことです。

「つながり、かさなる、むすぼれる」を書くにあたっては、バベルの塔の話が頭にありました。線路は一度絶たれ壊されたのです。それが再建されて網を広げつつあるのが現在だという気がしてなりません。むすぼれはさらにむすぼれつつあります。

本記事「つながり、かさなり、ふるえる」では、「つながる」と「かさなる」をヒト以外の存在と言葉以外の現象にまで話を広げます。相変わらず大風呂敷を広げますが、いまの私にはこういう空想しか楽しみがありません。

「これとこれは似ている」「これとこれはそっくりだ」「これとこれは同じ」

私は似ているものが好きなのです。似ているものに取り憑かれているようです。これに尽きます。

(拙文「イメージの韻」より)

「つながる」と「かさなる」に加えて「似ている」というイメージで空想をふくらませてみます。

目次

小動物のピクピク

相場のピクピク

世界中でピクピク

姿と形を変えるピクピク

出る、出す、流れる、流す、入る、入れる

似ている

小動物のピクピク

株については何も知りませんが、ニュースで株式市場の大きな動きが報道されるたびに頭に浮かぶのがハムスターです。

昔飼っていたことがあり、そのときにピクピク体を動かすのを不思議な気持ちで眺めていたのを思い出します。

小動物は短命なので悲しい思い出もあるのですが、ときどきこうやって記憶の中にやってくるあの小さな動物を愛でています。

自然と手と指が動いて、あの子を撫でていたときの感触がよみがえります。

テレビで生き物の生態を撮った番組を見るのが好きなのですが、小動物を見るとそのピクピクやビクビクやキョロキョロやタタターという仕草に魅了される自分がいます。

やっぱり株に似ています。正確には株の値動きというのでしょうか。

相場のピクピク

株式や商品の相場では、値動きをリアルタイムで表示するみたいですが、表示は数値

であったりグラフであったりします。

新聞での表示は静的なものですが、ネットでの表示はまさにピクピク、ビクビク、キョロキョロ、タタターなのです。

デジタル化された数字がまばたくように細かく点滅することがあります。グラフの線もよく見ると微かに点滅していたりします。

生き物を見ているような錯覚におちいりますが、これは錯覚ではなくひょっとしてまさに生き物を目にしているのかもしれない。

＊

数値もグラフも何かを指しています。

ピクピクというと、針が数字を指すアナログ式の量りや、ガスのメーターのような測定器を連想しますが、ああいう針は指しながら振れます。大きく振れる場合もあれば、小刻みにビクビクすることもあります。

振れる、触れる、狂れる、震れる、ぶれる。

やっぱり株式の値動きはピクピクでありビクビクです。つまり震えということですね。ビビっているとしか思えません。感情がこもっているのです。

あの動きは誰かのおびえであったり、驚きであったり、喜びであったり、思考停止とか判断停止であったり——あの動きの前にどんな思考や判断が可能だということでしょう、任せるしかないのではないのでしょうか（何に任せるのかも分からないままに）、全面降伏です、まかせ、まけるのです——、錯乱であったりするのではないのでしょうか。

世界中でピクピク

やっぱり生き物です。生きてるとしか思えません。世界でみんながビクビクしてい

る。機械がピクピク指すのを見て、またみんなで振れるのです。そして震えるのです。ふれるがつつぎつつぎとうつるのです。

振れる、触れる、狂れる、震れる、ぶれる。

擬人化する生き物であるヒトにとって、その目に映って動くものすべてが生き物であり、森羅万象という名の自分自身の身体のふるえなのです。擬人化とは鏡です。

鏡の中を覗きこむと、そこには姿というよりも動きが見えます。動き移ろわないものは見えないのです。自分の姿のことですが、像というよりも表情と顔つきと、ときの経過が見えます。私の場合には、いつもおびえた表情が、そこにはあります。爆弾を抱えたみたいとか、途方に暮れたかのような顔なのですが、そういう気分のときにしか、鏡を覗きこまないからかもしれません。自分で自分の顔色をうかがっているのかもしれませんが。

ピクピクという身振りだけがひとり歩きをしているかのよう。ピクピク、ピクピク、どきどき、きょろきょろ、おろおろ。

*

ピクピクが世界を動かす。世界がピクピクにシンクロする。どきどき動悸に同期する。

ドキドキ、キドキド。喜怒哀楽。世界同時同期。

音楽の世界で使われている、指揮棒、メトロノーム、録音スタジオなんかにあるピクピクと針の動く機器、波形で表示されるピクピク。

ピクピクは波でもあるそうです。

小刻みな振動、音声の波、うねり。

上下運動として表示される波は、ジグザグでもあるように思えます。

右往左往、千鳥足、蛇行、蛇の動き。

風に揺れる植物、日光や雨風に左右されながら成長する植物なんかも、見る位置を変えたり、見ている時間を速めたり、逆に遅くすると、それぞれ似ているように見えます。

姿と形を変えるピクピク

ピストン運動、上下運動、行ったり来たり、往復運動、ぴくぴく、ゆらゆら、びくびく、ジグザグ、ぴくんぴくん、ひくひく。

いやらしく聞こえたら、ごめんなさい。

なぜか知らないけど粘膜や襞がひくひくしてしまう、という話をしているのです。心の襞が。

知れるは痴れる。痴れると焦れる。じりじり。

*

音と振動と波と光。これって、同じなんでしたっけ？ 物理では。

詳しいことは知りません。ただイメージと言葉に身を任せるだけ。

幼いころに見たレコードとプレーヤーを思い出します。保育園のプレーヤーを隠れていじっていたのです。

電源を落としたプレーヤーの皿にレコードを載せて、こっそり回してみる。かすかに音がする。旋律は聞き取れませんが、音がするのです。ぞくぞくしました。

*

いま思うと、あれは針がレコードの溝を走る音なのですね。ぎざぎざで凹凸のある溝を、針が動き、針ががったんごっとんと揺れて振れる。

がったんごっとなんという上下運動が、なぜかきいきいとかしゃーしゃーという乾いた音になる。電気とつなぐと、かすれた摩擦音が艶を帯びた音色にうつり変わる。

どういうわけか、溝を走る針の上下運動が、空気の振動となり、それがさらに耳の鼓膜を震わせて、人の心と魂を震わせる。

＊

ぴくぴくと、ごっとなんごっとなん、きーきーと、しゃーしゃーがシンクロする。

シンクロが姿と形を変えて、シンクロする。

なぞるがなぞるをなぞる。何をなぞっているのかが不明ななぞるをなぞる。

出る、出す、流れる、流す、入る、入れる

ぶるぶる震える生き物たち。ぴくぴく動く生き物たち。ひくひく小刻みに蠢く皮と粘膜。ぶるぶる震える内臓。ぴくぴく動く器官。どくどく流れる血液、しゃーしゃー流れる、リンパ液、〇〇液。

たらたら流れおちる汗。ぼたぼた落ちる体液。ぼとぼと、じゃーじゃー、ぼっとなん、ぼつり。ぷーっ。ぶーっ。ぶすーっ。出る、出す。漏れる、漏らす。排泄。生理現象。

はあはあ、ひゅーひゅー、あはん。おお、ああ、うーん。あゝー。呼吸。声。うめき。

＊

ごっくん、ごくり。むしゃむしゃ、もぐもぐ。くちゃくちゃ。やむやむ。食事。摂食。入れる、入る。

箸やフォークやスプーンやナイフを使えば、もっとにぎやかでしょうね。しゃべりながらの会食もあるでしょう。黙食もあるでしょう。個食や孤食もあります。

わいわい、がやがや、しーん。

*

何をするにも、上下運動（見方を変えればジグザグ運動）、往復運動、ピストン運動があるようです。音もします。お供します。伴走。伴奏。

移る、通じる、流れる、走る、移動する。震える、振れる。曲がる、曲げる。こうした動きや姿は、生き物の内部での動きとしても、生き物の体の動きとしても、おこっています。

こじつけです。そう思うと何でもそう思えてきます。そう見えてきます。被害妄想みたいにしつこくつきまといます。

固定観念、強迫観念、オブセッション。疑心暗鬼。壁の染みの模様や顔。天井の模様、雲の形。

そうになっているのか。そう見えるだけなのか。

そう見える。そう感じられる。そう思われる。そう考えられる。

知れるは痴れる。訳が分からない。分けても分からないでしょう。

それが「意味」というものなのでしょうね。人は森羅万象に、模様と形と顔と自分を見るのでしょうね。見えてしまうのでしょうね。見ずにはいられないのかもしれませんが。何をもって、意味をです。

意味は疲れます。「異なる」を基本としているからかもしれません。

憑かれて突かれて付かれて疲れる——言葉を意味としてとらえると疲れます。意味を取ることで異なって見えるからでしょう。ただ音として聞いたり字面をながめているだけなら、言葉は疲れません。それでいて、言葉は体にずっと入ってきます。波だからかもしれません。

びくびくひくひくびくびく。

ところで、オノマトペはずっと入ってきます。音や文字が「何かに」「似ている」ではなく、単に「似ている」として入ってくるからではないでしょうか。「何か」との異なりや事なりや言なりとして無理に押し入ってこないのです。

本物のない複製の複製と起源のない引用の引用を感じます。

似ている

シンクロや同期の基本は「似ている」だと思います。「同じ」とか「同一」でなく、あくまでも「似ている」です。

似ているは印象ですから、検証できません。特定も確定もできません。

「似ている」を基本とする私の考えるシンクロとは、普遍や客観や真理といった壮大な大風呂敷とは遠いものです。大風呂敷を広げてはいますが、すけすけ、すかすか、ぺらぺらなので、無いものねだりはなさらないでくださいね。ここで言う「似ている」は本物のない複製の複製であり、起源のない引用の引用なのです。

厳密な意味での「同じ」はヒトの知覚では無理でしょう。精密な機器を使えばできるかもしれませんが、誤差やエラーがつきものらしいです。しかも最終的に「見る」のはヒトの知覚ですから、危うさは消えません。

「同一」はその語義からして、世界に、あるいは宇宙にたった一つしかなさそうですけど、私にはその意味が分かりません。感知できるヒトがいるとも思えません。

一個人として、つまり一匹のヒトの端くれとして大切なことは「似ている」です。これしかないのです。高望みはしません。贅沢は申しません。

*

病院にはたくさんの機器があります。入院すると分かりますが、ぴくぴくの親戚に満ちているのです。病院は信号に満ち満ちています。

点滅は危険信号です。ぴかぴかが急かせます。「見て見て」と言っています。

信号は断続的な0と1、○とX、白と黒でないと、生き物には通じません。断続でないと、そもそも注目しないのです。

断続はノックなのです。こつこつ。シロクロシロクロ。このノックが通じると生き物もシンクロします。シロクロにシンクロするのです。うつるのです。

シロクロ、シンクロ、目が白黒。

どきどきします。心臓バクバク。どきどき動悸に同期。同期に動悸する。同期に同期する。

同期が同期してはいけませんか、社長？ 一同団結して、似たり寄ったりではいけないのでしょうか？

同期に動悸してはいけませんか、部長？ いつから社内恋愛が禁止になったんですか？

世界同時同期。同期会絶賛常時会員募集中。

ときに、シンクロはパニック暴走します。エラーやノイズや邪念も発生します。

大きなランプが、ばかばかし出したら、大事です。避難しなければなりません。

入院してベッドで寝ていると、遠くでピーポーピーポーが聞こえることがあります。

院内に緊張が走ります。

スタッフの動きも活発になります。ばたばたと歩く音、何かを引きずっている音もし

ます。

びくびく、びくびく。自分の中にある動きに耳を澄まします。心が静まるのを待ちます。やがてしーんのなかでの点滅だけになります。

妄想と邪念も静まります。

＊

病室の窓からは、空が見えました。

晴れもいいですが、雲が見えるとほっとする自分がいました。

雲は動くからです。表情があります。あれはあれだ。あれに見える。あれに似ている。

似ているは人をなぐさめてもくれます。

雲が見えないときには、目をつむりました。そこにも「似ている」がありました。

自分がびくびくそのものであること、自分がびくびくの一部であることを感じる一瞬でした。

びくびくはやさしい言葉。

似ているとは、何かとつながり、かさなる気持ちのことです。自分が何かに、うつる気持ちでもあります。

それ以上、何も要らない。そんな気持ちになります。

#小説# 言葉# 日本語# 株# 相場# 動詞# 小動物# 値動き# ピクピク# オノマトペ
シンクロ# 同期# 似ている

11/10 イメージの韻

＊

イメージの韻

星野廉

2022年11月10日 13:18

イメージの文法——。わくわくします。

(拙文「イメージの文法」より)

「イメージの文法」は、なんだか堅苦しいですね。今回は、もう少しイメージをふくらませてみます。

目次

st-, str-, tr-

要約

イメージの韻

こじつけ、印象、個人的

『雪国』

身振りや動作という韻

韻、印、隠

対象は具体的な文字

似ている

st-, str-, tr-

stop から行きましょう。

stop、stand、stay、station、statutue、static、stable、stage、state、withstand、constant、insist、stance、statue

とまる、とどまる、踏んばる、持ちこたえる、かたくな、そのままをたもつ。

start、step、trip、tread

停止・静止から移動へ。ほぼ移動。足を踏みだす、こける、体がおよぎだす、ふらっとする。よっし、さあ、さて、おっと、あれーっ、危ない。

stray、stroll、travel、trip、tread

移動。うごく、あるく、あゆむ、さまう、ぶらつく。とことこ、ぶらぶら、のっしのっし、ふらふら、おろおろ。やれやれ、まだまだ。

street、stream、trail、rail、tail、trace、track、stolk

すじ、みち、みちすじ、たどる、なぞる、ながれる、きざむ、あと、あとをつける、あとをおう。

苦しくなってきたので、この辺で stop。

*

ここでやっているのは、眠れない夜に、寢床で何も調べたり参照せず、記憶を頼りにした言葉のイメージとたわむれの再現です。再現に当たってはこじつけによる整理をしていますが、語源とは必ずしも関係ない遊びとして受けとめてください。

私にとって、イメージとはあくまでも個人的で私的なものです。いわば起源のない引用の引用であり、厳密な意味での再現や再生や再製ではなく、いわば本物のない複製の複製なのです。

*

そう言えば、「イメージの韻」という言葉で遊んだことがあります。ややこしい話になりそうなので、先に要約を書きます。

要約

文章や文学作品は具体的な文字で成りたっています。文字の形が現れ露わになっているのです。ところが、その具体的な文字のありようが呼び起す印象とイメージは、「似ている」に基づく個人的なものであると考えられます。とはいえ、こことここが似ている、こことここが同じだ（文字は複製ですから「同じ」がありえます）と具体的に指摘することはできるでしょう。その「こことここ」のつながりを「イメージの韻」と私は呼んでいます。

イメージの韻

過去の記事から引用してみます。

『批評 あるいは仮死の祭典』

『仮往生伝試文』

邪魔なので二重かぎ括弧をはずしましょう。

批評 あるいは仮死の祭典

仮往生伝試文

こうやって並べてみると、批評のあとの一字空けが巧まれた切れ目のようにも見えてきます（この種のことには、蓮實重彦は敏感なはずです）。仮往生伝のあとは意味的に切れそうです。一方が和歌か俳句の句、もう一方が漢詩の句のようにも見えたら、笑われるでしょうね。それでもいいです。今は「個人の感想」どころか、もっと荒唐無稽でテキトーな「意味」や「ニュアンス」や「イメージ」の話をしているのですから。さらにほうけましょう。

両者が韻を踏んでいるようにも見えます。音（おん）ではなく、イメージあるいは意味の韻というか……。あくまでも比喻ですけど、符合（ふごう）と付合（つけあい）の気配を感じます。お叱りの声が聞こえるようですが、さらにボケます。これも比喻ですが、連句や連歌の趣すら覚えます。

音（おん）にも注目しましょうか。かなとラテン文字をつかいます。結局は音といよりも文字の字面に目を配ることになりますが。

ひひょう あるいわかしのさいてん

かりおうじょうでんしぶん

ヒヒョウ アルイワカシノサイテン

カリオウジョウデンシブン

hihyo aruiwa kashi no saiten

kari ojo den shibun

io auiaaioaie

aiooeiu

うーむ。こうやって眺めてみると、やはり音の韻よりも字面や意味の連想から生じるイメージの韻を強く感じます（進行している難聴も関係あるのかしら）。特に「かし・kashi・ai」と「かり・kari・ai」の放つオーラは強烈です。

長いあの文芸批評と小説がそれぞれのタイトルに集約あるいは凝縮されているなどという抽象は言いません。今ここにある言葉と文字という具象・かたちとたわむれているだけです。

(拙文「1/3『仮往生伝試文』そして / あるいは『批評 あるいは仮死の祭典』その1」より)

こういうことが好きなのです。「特に「かし・kashi・ai」と「かり・kari・ai」の放つオーラは強烈です。」という箇所がイメージの韻の核心です。

「かし」「かり」から出発して、具体的には以下のような感じになります。私がイメージの韻を感じる言葉やフレーズを集めたものです。言葉の音と字面だけでなく意味（語義）とイメージをすくい取っていきます。さまざまな形に「うつる」と「かわる」をくり返していきます。

かり、借りる、借る。

貸し借り、rent、賃貸、賃借、貸し、貸す、化す。

かりる・かえす・かす。

あたえる、もらう、てにいれる、うばう、ぬすむ、もつ、いだく、ためる。

かわり、かわる、つかう、つかえる、もちいる、やくだてる、やく、つとめ、しもべ、しも、かみ。

借りる、借問（しゃもん）、仮借（かしゃく・かしゃ）、借家、借屋、借宅。

仮、仮借（かしゃく・かしゃ）。

貸、代、代理、代表、代行、代議員、代議制、代理人、代理店、代行者、agent、representative、representation、représentation。

仮、か、け、化。

仮、け、仮有（けう）、俗有、実有、仮諦（けたい）。

かる、借る、狩る、獵る、駆る、刈る、苴る、枯る、涸る、嘎る、上る、離る。

枯れる、涸れる、から、殻、空。

仮、仮面、仮性、仮名、仮字。

解字、白川静。

坂部恵、『仮面の解釈学』。

かり、仮、假、假、假、おおう、ざらざら、仮面、暇、霞、葭、蝦、瑕、瑕疵、かし。

真、偽、本、顔、素顔、真性、本性、真名、真字、本名、偽名。

かりそめ・仮初、假定、仮想、仮装、仮葬。

仮死、(詐死)、(作死)、死にまね、空死に(そらしに)・虚死(そらじに)、空足を踏む、擬死、冬眠、臨死、瀕死、危篤、虫の息、死に際、臨終、いまわ、最期、末期、断末魔、今際の際、往生際、冬眠、半死半生、死に体、なしくずしの死。

心肺停止、心停止、呼吸停止、脳死、遷延性意識障害・植物状態・ベジ。

昏睡、昏倒、気絶、失神、「間断なき失神」、「壮大な仮死の祭典」、心神喪失、人事不省、無意識、夢うつつ、譫妄。

『早すぎた埋葬』(エドガー・アラン・ポー作)、『第四解剖室』(スティーヴン・キング作)、『コーマ』(ロビン・クック原作)、「諸行有穢の響きあり」における「虚死(そらじに)」。

仮病、つくりやまい、詐病、作病、虚病、半仮病、虚偽性障害、仮眠、仮寝、かりぶし、旅寝、草枕、野垂れ死に、行き倒れ、斃死、作話、作文、偽の記憶、記憶障害、メタ記憶、虚言、妄想、幻覚、幻想。

仮往生、(近往生)、(臨界往生)、(臨往生)、(前往生)、(生前往生)。

往生、往く・化生する、往生伝、往生の物語、O嬢の物語、立ち往生、無理往生、圧状。

假定、仮想、仮想現実、架空、(仮空)、空想、夢、夢想、疑似世界、シミュレーション、シミュラークル。

ニーチェ、クロソウスキー、ドゥルーズ。

仮象、表象、現象、事象、物象。

日、月、白、明、見、目、耳、自。

「」、『』、「」、「。」、「、(ルビとして縦書きの文字の右に打たれる読点)」

渡部直己、芳川泰久(十、十)、ジャン・リカルドゥー、ジェラルド・ジュネット、アラン・ロブ＝グリエ(8、∞)。

仮屋、本屋、仮谷、刈谷、狩屋、狩谷、狩矢、借家、荻谷、雁屋、仮屋崎、假屋崎、上仮屋、内雁屋。

仮令、たとい、たとえ、かりに、よしんば、もし、およそ、たまたま。

仮の姿、かりに、とりあえず、さしあたって、もしも、たとえば、たとえ、たとえる、比喩、隠喩、暗喩、明喩、直喩、換喩。

メタファ、メタモルフォーゼ、メタフィクション、メタ哲学、メタメタ。

『フーコーそして / あるいはドゥルーズ』、『仮往生伝試文』そして/あるいは『批評 あるいは仮死の祭典』。

(拙文「1/3『仮往生伝試文』そして / あるいは『批評 あるいは仮死の祭典』その1」より)

こじつけ、印象、個人的

イメージの根っこには「似ている」があります。かならずしも「同じ」や「同一」ではなく(対象は文字ですから「同じ」と「同一」がありえます)、むしろ「似ている」です。印象なのです。

陰を使った言いまわしを見てみます。

お陰さま、陰の実力者、陰で支える、陰ながらご成功を祈ります、彼女の人生には陰がある、陰に回る、陰で悪口を言う、事件の陰に女あり、陰で取り引きをする、陰で糸を引く、草葉の陰から見守る

ポジティブにもネガティブにもなりえますが、基本は「隠れて」とか「人目につかない形で」のようです。陰と隠のイメージの韻を感じます。やや無理はありますが、こじつければ、淫に傾いた例や場合も想像できますね。

「陰の実力者」で連想するのは、「影の内閣 (shadow cabinet) ですが、これは英語からの訳語だそうです。野党が陰で「組閣」して牽制するのでしょうか。

影武者も思い出します。陰にいて敵をあざむく場合と、黒幕として陰で首謀する場合の二つの意味があるようです。

(拙文「陰に光を当てる」より)

こじつけです。こじつけ以外の何ものでもありません。言葉の喚起するイメージですから、人によって異なります。印象や感想とも言えます。イメージは個人的で私的なものなのです。

こうしたイメージは、きっとあなたもいただいているでしょう。ただし、ふだんはあまり意識しないと思われます。他人に話せば、「馬鹿みたい」と言われるのが落ちです。通じない場合が多いのです。それだけに通じるととてもうれしいものです。

*

それでも陰には隠然たる存在感があります。

何か、こう、じめっとしてるし、じととした湿度が感じられるのです。おそらく、陰、隠、淫とイメージの韻を踏んでいるからではないかと踏んでおります。

それが露わになるのは漢字を使った熟語です。

陰獣、陰湿、陰険、陰鬱、陰気、陰膳 (かげぜん)、陰謀、陰蔽 (隠蔽)、夜陰、陰囊、陰萎、陰惨、陰間 (かげま)、陰舞 (かげまい)、陰子 (かげこ)、陰 (いわかげ)、木陰 (こかげ)、緑陰、山陰、陰雲、涼陰、藪陰 (やぶかげ)、陰生植物、陰陰、陰陰滅滅

こうやって見ていると陰の姿形という意味での陰影には、湿度、不気味さ、曖昧さ、得体の知れなさ、涼所感、低温感、いかがわしさ、卑猥さ、背徳感が漂っています。

いい味を出しているではありませんか。素晴らしいと思います。私は好きです。

(拙文「陰に光を当てる」より)

『雪国』

文学作品でのイメージの韻を見てみましょう。

写、射、斜、車、シャ、射る、入る

川端康成の『雪国』における描写ですが、文字と音声とイメージの韻を感じます。

写、射、斜、車、シャッター、カシャッ、射る、入る——こういう感じがするのです。
(.....)

この車窓の場面を読むたびに、私は映画のカメラの舐めるような連続した眼差しではなく——これはむしろ谷崎潤一郎の眼差しではないでしょうか——、写真機のシャッターをカシャッカシャッとつぎつぎと押しながら写した、差しこむような視線を感じます。

指す、差す、刺す、射す、挿すのです。何度も何度も。そして射る、入るのです。つまり、サディスティックなのです。

川端の作品における「指」の役割と象徴性はきわめて大切です。指はなぞり、さすものなのです。何かの代用であることは明らかでしょう。

(拙文「「うつる」でも「映る」でもなく「写る」より）

雲をつかむような話で分かりにくいと思います。具体的には上記の拙文をご覧ください。

身振りや動作という韻

言葉やフレーズだけでなく、身振りや動作や仕草が韻を踏んでいる場合もあります。吉田修一作『パレード』を例に取ってみます。

「小窪サトル（18歳）自称「夜のお仕事」に勤務」が語る話には、すべてとは言いませんが、吉田修一の諸作品に頻出するテーマや身振りや物や風景や状況が詰まっているという気がしてなりません。そう感じさせるこの話の細部を列挙してみます。

- ・実家を出ている。
- ・他人家に入る。不法侵入であったり、主の酔った勢いでそこへ連れて行かれたり、公園で拾われて「お仕事」をするために部屋に連れて行かれたり、ほぼ居候として居着いたりする。
- ・公園へ行く。ぶらぶらしたり、客（男）を取るためだったりする。
- ・他人の家の窓から外を眺める。窓から渋滞した道路を見下ろす。
- ・他人の部屋の中にある物を無断でいじる。部屋の中で飲み食いする。部屋の主に食べ物や飲み物をもらう場合もあれば、留守宅で勝手にそこにある物を口にしたり、外で買っ

てきた物を食べることもある。

こう並べてみると、殺伐としていますね。でも、それが吉田修一ワールドの一部なのです。こうした仕草や身振りが頻出するのが、吉田の作品群で時折見られる風景なのです。危ういし物悲しい風景ですが、その風景に引きこまれる私があります。

吉田修一の小説で繰り返される「他人の家に入る」は、呼ばれて遊びに行くだけでなく、いきなり訪ねるとか、間借り、居候、留守番、不法侵入という形を取ります（こう書いていて、やっぱりカーヴァーを連想します）。そうした行為が頻出する『パレード』を書いた吉田が後にミステリーや犯罪小説を書くようになったのは理解しやすい展開だといえるでしょう。初期の作品を読むと、その素地は十分にあるということです。

吉田修一の犯罪小説で私がいちばん好きな『怒り』の冒頭では「他人の家に入る」行為が犯罪、しかも凶悪犯罪として描かれます。また全編を通して上に列挙した身振りが頻出し、汗も随所で吹き出します。ああ、あれだ、ああ、これだという具合に既視感の氾濫に見舞われると言えば、言い過ぎかもしれませんが、私にはそう感じられます。（拙文「似ている」の魅惑より）

私は似たものが好きなのです。似たものに取り憑かれているようです。

韻、印、隠

「イメージの韻」とは、私が勝手に呼んで、勝手に遊んでいるものなのですが、寝入り際の夢うつつの心境（ぼーっとしている感じ）でやるのがコツです。あまり本気でやるものではない気がします。

イメージの韻とは、言葉やフレーズや文章に具体的に刻まれた印でもあります。ただし、見える人にしか見えないので隠れているのです。たとえば、いまのセンテンスに隠れていた「韻、印、隠」というわけですが、お気づきになりましたか？　ぼーっとしていても、ある部分だけは覚めていないと引っ掛かりません。

駄洒落や掛け詞に似ています。受ける受けない（共感してもらえる、もらえない）があります。一種の芸ですから、精進あるのみとも言えそうです。

ちなみに、駄洒落とは、掛け詞の別称であり、蔑称でもあります。

対象は具体的な文字

イメージの韻は「似ている」を基本とした印象ですから、とりとめがなく曖昧なものに思われますが、ある印象を引きおこす要因がはっきりしています。

「何て言うか、こう、すごく感動的なよね」で終わらないのです。「こことここが、こういう具合にイメージの韻を踏んでいるから、私は〇〇とを感じるわけ」みたいに具体的に原因を示します。「どこが？ どういうふうに？」と突っこまれても答えるという意味です。

上で挙げた数々の例でも、具体的に韻の刻印（印象の要因）を明記しています。こじつけてはいますが、話としては具体的で具象的なのです。文字を対象としていますから、話が具体的にならざるをえないのです。

イメージの韻は隠れてはいるけど、その印象を喚起する要因（因子）——言葉、フレーズ、文、ぜんぶ文字である点が大切です——を具体的に示す点が、単なる印象や感想とは異なると言えます。

イメージの対象は具体的な文字なのです。音と形という文字のありようなのです。

似ている

「これとこれは似ている」「これとこれはそっくりだ」「これとこれは同じ」

私は似ているものが好きなのです。似ているものに取り憑かれているようです。これに尽きます。

ただし、調べたり、たどったりはあまりしないので、その「似ている」は本物のない複製の複製であったり、起源のない引用の引用だったりします。

#小説# 読書# イメージ# 言葉# 文字# 英語# 日本語# 蓮實重彦# 古井由吉# 川端康成# 吉田修一

11/13 現象、現像

＊

現象、現像

星野廉

2022年11月13日 08:07

私は似たものが好きなのです。似たものに取り憑かれているようです。これに尽きます。

(拙文「イメージの韻」より)

目次

文字をながめる

現象

あらわれる、立ちあらわれる

現像

つらなる、それる、ずれる

形があらわれる、であう、であってしまう

象、像、実、虚

巨象は虚像であり、象は像でしかない

像をつくる

文字をながめる

現象。

辞書は参考程度にして、原則として引きません。ただ漢字をひたすら見て、思いをめぐらします。漢字からなる熟語のイメージを思いうかべます。

文字の音と形をながめ、それが呼びさますイメージをすくい取ろうと努めるのです。深く探りはしません。表面にとどまります。

蘊蓄や含蓄や権威には興味がありません。わくわくしないのです。だから、起源なき引用とか実物なき複製なんて言っているのでしょう。

アメンボのように水面をすいすい滑り、ゲンゴロウのように深くもぐらないという意味です。

私の書く記事は、ぜんぶものごとの表面をなぞったものです。深く立ち入ることはありません。ひたすら、表面を見てなぞるだけなのです。知ったり分かるよりも気づくの待ちます。

寝入り際の夢うつつの心境で書くことを心がけています。調べたり、誰かの本を引用するのはできるだけ控えます。寝際や死に際に本や辞書は使えませんから。

だから絵空事やぼんやりしたとりとめのないことしか書けません。いい加減な人間なのです。この記事のタイトルを見れば一目瞭然ですよね。半分眠っているとしか考えられません。

現象

現象。

形が現れている、ということですね。

あらわれる、現れる、表れる、顕れる。露わになる、顕わになる。

漢字をまじえると意味が見えてきます。意味が分れて分かってくる気持ちになります。分かっているのかどうかは不明です。

見える気がするというのが正確な言い方だと思います。見えるや見るや眺めるは大切です。分かるや知るや悟るよりも大切だと私は考えています。見るほど難しいことを私は他には知りません。

ちょっと遊んでみます。

あらわれる、現れる、表れる、顕れる。露わになる、顕わになる。

現象、表象、顕象。露象。

おお、顕象ってかっこよくないですか？ 気になったので検索してみたら、ありました。

「けんしょう」とも「げんしょう」とも読むようです。私は初めて見ました。

きょうの収穫です。

顕象って、お坊さんの名前にありそう。あと、お寺の息子さんとか。「けんしょう」と読みます。響きもかっこいい。

露象もありましたよ。中国語なのでしょうか。画像もありましたけど、とくに興味は惹かれませんでした。

あらわれる、立ちあらわれる

形があらわれる。形が見える。形が姿をあらわす。形や姿があらわになる。

こうやって言葉を置き換えて転がすとわくわくします。現象という言葉があらわれているとは思いません。移り変わっているのです。

見ることは、見えないものと置き換えることです。そのもの自体を見ることは、たぶん人にはできません。知っているものや、見たいものに置き換えてしまうからです。

＊

現象。形が立ちあらわれる。

立ちあらわれるはかっこいい言葉です。背筋が伸びる思いがします。形がすっと立つ。

いいですねえ。

「立つ」や「立てる」は見せるための動作ですから、言葉の立ち振る舞いとかたたずまいがかっこいいのでしょうか。

意味が立ちあらわれる。

この言い回しが好きで、これまでに何度も記事で使ったことがあります。

現像

現象という、私はどうしても現像を連想します。

現像、現象。

字面はそっくりとは言いませんが、似ています。象も像も、姿や形のことです。人偏が付いただけで、気難しげに私には見えます。

象は、動物の象に似ています。博物館で見たマンモスの骨みたい。そう思うと、ますますそう見えてきます。生きたゾウではなく、骨なのです。骨組みというか。

まさに象形文字。

*

現像は「写真を現像する」ときだけに使う言葉のようです。

正確には「フィルムを現像する」みたいですが、写真にはぜんぜん詳しくないので、現像の意味もよく分かりませんというか知りません。

現像も、やはり像があらわれてくると理解しておきます。深入りはしません。

深入りしないというのは、本物のない複製の複製と起源のない引用の引用を相手に積極的に戯れようとする姿勢とも言えます。

居直って格好を付けてごめんなさい。でも、本心なのです。

＊

写真を撮るプロセスについても、現像や焼き付けや引き伸ばしについてもまったく知りません。

勝手に想像する、つまり空想するしかないのですが、そのほうが好きだったりします。

本を読まずにタイトルを見て、その内容をでっち上げるのが好きなのと似ている気がします。映画はぜんぜん観ないのに、映画の話が大好きなのとも似ている気がします。

大学でフランス文学科に在籍しているながら、文学作品はそっちのけで批評ばかり読んでいたのとも似ている気がします。⇒「【小説】知らないものについて読む」

つらなる、それる、ずれる

「現像」で思いだした言葉があります。

「解像度」です。

カメラや写真については無知なのですが、スパイ衛星とか衛星カメラとかの話に出てきたのを覚えているのです。衛星のまわっている遙か上空から、高性能のカメラで地上を写すのだそうですが、たしか三十センチくらいのものを識別できたとかという話でした。

本当ならすごくないですか。衛星写真と言えば、テレビ番組の「ポツンと一軒家」ですが、あれだけでもすごいと思うのに、三十センチの物が見えるんですよ。すごすぎます。どうしましょ……。

解像。

11/15 読家、読家

解説、解析、分解、解剖の解ですよ。微に入り細に入り鮮明に、像を解きほぐし写し映し出すというイメージ。あくまでも、「うつす」の結果である「うつし」つまり影なのです。

カメラの性能かレンズの性能か知りませんが、こんなカメラをつかって人を撮影したら、小さなほくろ、かすかなシミ、毛穴、微細な皺しわや襞ひだまで——いやらしく響いたらごめんなさい——徹底的に写しとるという感じ。どうしましょ……。

わくわくどころか、どきどきしてきました。

解像、改造、海象。

海象とはセイウチのことだそうです。これは知っていました。海の象さんですか。なるほど。

海馬とか海豚とか海牛とか海鼠とか海狸とか海虎とか海豹とか海獺とか海猫(!)とか海猿(?)とか海狐(ちゃうか)を思い出しましたが——時期こういうことに凝ったのです、もう懲りましたけど、凝り性で懲り性なのです、ただしその意味はほとんど忘れちゃった——切りがなさそうなので、ストップします。こういう連想は楽しいです。いわば、イメージの韻を感じませんか？

ここでは「正しい」「正しくない」はやっていません、念のため。

連想は文字どおり、連ねて想うことですが、つらねる、ならべる、それる、ずれる、よれる、もつれる、という具合に、どんどんずれていくのが連想やイメージの韻の醍醐味だと思います。

形があらわれる、であう、であってしまう

話をもどします。

写真を撮り、自分で現像や焼き付けや引き伸ばしをする人は、わくわくするの連続なのでしょうね。

勝手に空想してみます。

ファインダーを覗いた瞬間に「形があらわれる」が始まる。レンズとかピントとかを調節したり、アングルっていうんですか、撮る位置なんかを変えたりするたびに、新たな「形があらわれる」と出会うにちがいません。

そして、暗室に入り、自分で紙の写真にする。現像するときなんて、どきどきなんでしょね。紙の写真ができあがるまでには、さらに「形があらわれる」を何度も経験するのですから、想像しているだけで息が苦しくなりそうです。

であいは苦しいものではないでしょうか。巧み、仕組むものではないからだと思えます。アポなしなのです。マッチングアプリもつかわずに。不意に唐突に、であってしまうのです。現像という言葉にはそのイメージがよく出ていると思えます。

イメージは個人的で私的なものです。それが私のイメージのイメージ。人それぞれ、人生いろいろ、イメージもいろいろ。

象、像、実、虚

現象、現像と来たので、先日投稿した記事から関連する箇所を引用してみます。象と像の話です。

＊

巨象は虚像であり、象は像でしかない

人は全体をとらえることができなくて、全体は抽象であって観念でしかない。さらに言うなら、人にとっては部分だけがかろうじて体感できるリアルなのであり、全体とは抽象つまり学習した知識である。こんなふうには言えそうです

(中略)

目隠しした複数の人たちが、それぞれ象のあちこちを触って「○○みたいなもの」と言う例の話を思い出します。目隠しをした人たちに、それは「巨大な象」だと教えてあげ

でも、それは学んだ知識でしかないわけです。巨象は虚像、つまり虚構でしかなく、たとえ目隠しを外して象を見せたとしても、象は像でしかないのです。

さらに言うなら、実像は虚像、実は実は虚、色即是空、実即是虚。

※以上は、Twitterでのデレラさんとのやり取りから生まれた文章です。ここでデレラさんにお礼を申し上げます。ありがとうございます。

以上は、拙文「本物のない複製の複製、起源のない引用の引用（更新：2022/11/08）」から引用しました。ツイートにある「巨象マヤ」、懐かしいです。

像をつくる

像は作るのですね。

像は人の作った影（「写る、映る、移る」の結果という意味です）なのであり、写真もフィルムの映画もデジタルの映像も、人が手を加えて作った影に他なりません。加工とか修正とか編集のことですが、言葉で知っているだけで具体的にはどんな作業なのか知りません。

というか、見ること自体が像を作るわけです。ヒトがヒトに備わっている知覚機能と脳の機能を使って見ているわけですから。

「見る」は絶対的なものではなく、他の生き物たちとくらべれば、相対的なものであるはずで、「見る・見える」なんて言葉があるから、言葉の世界に入ってしまった、「見る・見える」が当たり前だと思えているのではないのでしょうか。

（言葉はものを見えなくしているように思えてなりません。逆に言葉によって見えることもありますけど。）

しかも、人は「見る」ときに、何かと置き換えてしまいます。「何か」に「何か」を見る、いや見てしまうのです。前者の「何か」と「後者」の何か異なるのは言うまでもありません。

自分の知っているものや自分の見たいもの——ものというか意味や感情やイメージ、場合によってはメッセージや物語でしょう——に置き換えないと「見えない」という意味です。

知っているからそれを見る、見たいからそれを見る。「見る」はヤラセなのです。

*

こんなふうに言葉でまとめていること自体が、ものを見えなくしているのですね。見ることは難しいです。

#文字 # 漢字 # 言葉 # 日本語 # 形 # イメージ # 似ている # 見る # 象# 像 # 複製
引用

11/14 【小説】 バット・スキン・ディープ

＊

【小説】 バット・スキン・ディープ

星野廉

2022年11月14日 07:38

【注意：この作品には残虐な描写があります。】

—Beauty is but skin deep. (美は皮膜にあるのみ)

目白通りから鬼子母神の参道へと曲がったところで、子どもたちの声が出た。声の高さや、ところどころ聞こえてくる回らない口での喋り方からすると、保育園か幼稚園くらいの子どものたちらしい。そのまま進めば、その子どもたちと正面から向かい合うことになる。

馬鹿……。橋田玲子はとっさに道を引き返し、目白駅の方へと早足で進んだ。右に折れ、暗く細い路地に入る。そのまま行けば、参道の途中へと出られる。たまたま玲子は、この抜け道を利用することがあった。

午後三時を過ぎたばかりの時間帯なら問題はない。七時以降は、この道は絶対に使わない。昼間でも気味が悪い。玲子はうつむいた姿勢を正し、耳を澄まして、あたりに警戒の視線を向けた。最近、この近辺でひったくりや変質者が増えた。よく利用する果物店の主人が言っていた。

大ぶりの眼鏡フレームの眉間にかかる部分を、右手の人差し指で押さえる。左腕全体でショルダーバッグを押さえ体に引き寄せる。路地を通り抜ける風が、甘たると沈丁花の匂いを運んでくる。

玲子は参道へと出た。子どもたちの声は、もう聞こえなかった。

アパートに戻るとすぐに、パソコンを起動させた。二時間前に訪ねた出版社からメールが届いていた。ワープロ文書が添付されている。こんなふうに済むのなら、別に呼び出さなくてもいいのに。原書も宅配便で送れば事足りるのに——。そんな愚痴が頭に浮かぶ。

玲子は、ワープロ文書をモニターでスクロールし始めた。自分が訳した文章の最終チェックから片付けるか、出版社で渡されたばかりの原書の要約作りを先にするかで迷った。最終チェックは、一時間以内で終わりそうだった。その訳稿のある個所について、編集者がクレームをつけてきた。

「ここにも説明をつけてよ。訳注じゃなくて、訳文に織り込む形でさあ。先生が、そうしろって言ってんの。先生のやり方ぐらい、もう覚えてくれなきゃ——。ねえ、聞いてる？ 返事くらいしたらあ」

先生というのは売れっ子の翻訳家で、玲子はその人の名前で上梓されるビジネス書の下訳をしている。指摘された部分は、玲子にとってはどうでもいい、ささいな問題に思えた。読者は、それほど馬鹿じゃありません——。言い返したい言葉を飲み込んだ。編集者の居丈高な態度を思い出し、鼓動が激しくなるを感じる。玲子は、原書から手をつけることにした。

出版社の名と住所が印刷された封筒から原書を取り出し、封筒にヘンケルス社製のはさみを入れる。庖丁もナイフも料理バサミも爪切りも、ヘンケルスのものを愛用している。そのはさみで、玲子は細かく封筒を刻んでいく。

馬鹿、馬鹿……。何度もつぶやく。文字が印刷された部分を切り刻むさいには、いったん神経がとがり、それが引いていくを感じる。馬鹿、馬鹿、馬鹿……。乾いた音と指先に伝わる細かな震えが快い。高ぶった神経が収まっていく。

原書の三分の一ほどを読み終えたところで、夕食の準備に取り掛かることにした。バッグから携帯電話を取り出すと、留守電機能が設定されたままになっていた。実家からのメッセージが二つ入っている。普段から玲子は、携帯電話を留守電状態にして外出する。

人前で通話をしたり、メールを入力するのには抵抗がある。人目に立ちたくない。で

11/11 【小説】「うつろい」の「うつろい」
きれば、外では透明人間でいたい。そう思っている。他人の視線にさらされるのが、身を切られるようで怖かった。

「坂下奈美さんって知っているわね。あの人から、ケータイの番号を教えてくれって、午前から三十分置きくらいに電話があって——」

実家に電話をすると、母親が言った。誰にも携帯電話の番号を教えるてはいけない。これは母親にきつく言っている。自分が母親から恐れられていることを、玲子は知っている。自分に対して卑屈と言っているほど母親が下手に出るのを、玲子は当然のこととして受け入れている。

*

翌日、坂下奈美が、玲子のアパートにハンドバッグとスーツケースだけを持ってあらわれた。アパートの住所は、別の知り合いを通じて調べてあったようだ。携帯電話の番号について玲子の母親に何度も問い合わせの通話をしていた時には、既に東京にいたらしいことが話の断片からうかがわれた。

玲子と奈美は愛知県出身で、中学高校と同じ学校に通っていた。高校卒業後、玲子は上京して大学に進み、奈美は地元の企業に就職した。卒業式の日最後に顔を合わせて以来、九年が経っている。奈美は消費者金融だけでなく闇金融を利用して多額の負債を抱え込み、借金の取立てを逃れて玲子を頼ってきたのだった。玲子は、約半日かけて奈美の語る話に耳を傾けた。

母一人子一人の家庭で育った奈美の母親は、三年前に病死したとのことだった。母親が残した保険金と預金を使っているうちに、過剰なまでの浪費癖がついたらしい。玲子には、奈美についての悪い思い出はなかった。良くしてもらった記憶のほうが多かった。玲子は、いつも心の奥にしまいこんでいる故郷での出来事を振り返った。

中学二年生の時に、玲子の実家で火事が起きた。母親の不注意が原因だった。逃げ遅れた玲子は、顔面から右乳房にかけて火傷を負った。それはかなり目立つ跡となって残った。皮膚の移植手術の話をお父さんが持ってきたが、玲子は拒んだ。

傷跡をカバーする化粧法を覚えた。傷跡は首から下が最も目立つが、顔の皮膚に負った傷は、そのメイクで何とか隠せる。現在は、髪を肩にかかるくらいまで伸ばし、やや大ぶりの眼鏡をかけている。外出の際には、うつむいて歩く癖が身についている。

火事に遭って以降、学校を休みがちになり、引きこもり状態でいたころの生活が思い出された。自室で本を読んで過ごし、その時の「今」を忘れようと懸命に努めた。死にたいとは思わなかった。不慮の災難のために死を選ぶのは理不尽だという思いがあった。好きな本を読みながらひっそりと生きたい。そうした願いのほうが強かった。

坂下奈美については、家がひどく貧しく、表情の乏しい少女だったという記憶がある。特に親しかったわけではない。奈美の家庭にまつわるいろいろな噂を耳にしたが、玲子には興味がなかった。クラスや学校の中で孤立していた点で、二人は似ていた。中学三年生の時に行われた修学旅行に参加しなかったのも、二人だった。

「——ねえ、覚えていない？ 一緒にバレーボールして遊んだよね」奈美が言う。

それほど親しい間柄ではなかったのに、いやになれなれしい——。玲子は思う。これから世話になろうとする魂胆が見え見えだ。

「バレーボール？」

「修学旅行で三年生はいないし、一、二年生は遠足だった日が一日あったじゃん。誰もいない校庭で、二人バレーやったり、鬼ごっこみたいな感じで駆けっこしたり、楽しかったなあ。あの日は、先生も三人くらいしかいなかったんじゃない？ 人生で一番楽しかった日だった気がする」

そういえば、そんなことがあった。玲子は思い出した。昔のことなど忘れてしまいたい。あのころなんかに、絶対に戻りたくない——。

＊

玲子と奈美との共同生活はうまくいかなかった。性格が全然合わない。玲子は奈美に生活費だけを渡すが、すぐに使ってしまい、頻繁に催促をする。奈美は、借金の取立て業者から追われているために派手な動きはできなかったが、そのうち水商売の世界に入っ

た。学校時代はおとなしかった奈美が、奔放で軽はずみともいえる性格の人間になっていることに、玲子は驚いた。酒癖も悪い。

玲子の生活のリズムは狂った。奈美に合わせて夜間に翻訳の仕事をし、昼間に眠るようになった。筆が荒くなった、誤訳が増えた——。仕事をもらっている複数の編集者から、そう言われた。

奈美に振り回される日常がストレスとなり、奈美がそばにいて、過去の記憶が次々とよみがえる。いつもクラスで取り残されるのは、自分と奈美だった。遠足や野外での学習のとき、仲間同士が集まる中で、相手のいない二人が仕方なく行動を共にしていた。

「またかい？ どこか具合が悪いんじゃないの？ ここんどこ、顔色も良くないし——」

次第に翻訳の納期が守れなくなった。体調が良くないのでしばらく仕事を休ませてほしいと、玲子は自ら翻訳会社に伝えた。食品包装用のラップが脳に張り付いたような、もどかしい気分を覚えるようになった。本も読む気になれない。読もうとしても内容が頭に入らない——。玲子の苛立ちは募った。

不眠が続き、ちょっとしたことで腹を立てるようになった。玲子は自分の怒りを奈美に知られたくなかった。努めて平静を装った。奈美の眠っている姿を眺めるたびに、玲子は奈美が犬に似ていると感じた。無心な洋犬のように見える。犬は猫と違って、こちらがいちいち気を使ってやらなければならない。うっとうしい。

そうだ、犬にそっくり——。玲子は思い出す。中学二年生の時に起きた、実家での火事。

火事が起きて数か月後のことだった。父親が玲子に犬を与えた。

「悪いな。子犬じゃなくて」

「別に……。犬は犬よ」

父親の会社の同僚が飼っていた犬だった。その同僚が海外勤務となり、一家で引っ越す

ことになったために、父親が犬を引き取ると申し出たらしい。レトリバーの血が混じった、性格の穏やかな成犬で、深夜に散歩に連れていくことが、玲子にとって自室外での唯一の楽しみと癒やしになった。

ある夜、公園で、自分の顔をべろべろ舐めはじめた犬の相手をしていたとき、ぼろぼろと涙がこぼれてきたことがあった。犬には傷跡が分からない。犬の目には、美しさや醜さが分からない。ただ、新しい飼い主だというだけで、自分の傷跡を舐めてくれている。そうした理屈は承知しているつもりだったが、自分が同情されているという、道理に合わない思いは去らなかつた。

暑い夜だった。顔に厚めのメイクを施すようになってから、とりわけ暑さが身にこたえる。玲子は犬と共に国道に向かった。輸送トラックの往来が激しい道路だった。歩道橋の上まで来た玲子は、犬を抱きかかえた。喜んだ犬は再び玲子の顔を舐める。玲子は犬を道路に落とした。けたたましい鳴き声があった。トラックが急ブレーキをかける音も聞こえた。

いったん走りかけた玲子は歩を緩めた。暑さで体中が火照る。首から胸に流れる汗が不快だった。ただただ汗で濡れた下着を替えたい。玲子は近道を思い出し、そのまま家に帰った――。

＊

久しぶりに見る夢だった。仕事中に寝入っていたらしい。奈美が部屋に戻って来た。奈美は、美人とは言えないまでも、化粧栄えのする顔立ちで、特に肌のきめが細かい。ふざけて奈美の頬に指で触った。

「嫌だ、何よ急に」

「おいしそう」

「ばっかみたい。あんたさあ、何だか目つきが変だけど、熱でもあるんじゃない？」

和菓子のようにふわりとした感触の肌だった。ふいに、かつて飼っていた犬の腹の柔らかさを思い出した。さっきまで見ていた夢が、頭から離れない。

眠い——。

それなのに神経だけが目を覚ましている。

なぜだろう。

かたわらで奈美が寝入っている。玲子は奈美の布団に近づいた。カーテンを閉めたほどの暗い部屋の光の中で、化粧を落とした奈美の肌の美しさに見とれた。再び、柔らかい頬に触れてみたい衝動を覚えた。室内の気温が徐々に上がっていくのが感じられる。

暑い、暑い。眠い、眠い——。

首から胸にかけて流れる汗がいまましい。

馬鹿、馬鹿……。玲子は風呂場で、奈美の死体を解体していた。それにしても、暑い。気だるく、自分の体が妙に重い。動作が次第に鈍くなるを感じる。

肉と血の臭いが、吐き気をさそう。それでいて無性に眠い。玲子は手を休め、奈美の肌の美しさに見とれた。つるつるした犬の腹の感触を思い出す。

風呂場には、ペンチや金槌をはじめ、ありたけの刃物が置かれている。その中から果物ナイフを選び、玲子は奈美の頬の皮を剥いていく。濡れた指と手のひらの間でナイフの柄が滑る。馬鹿……。

暑い。眠い。気だるい。

ただただ汗に濡れた下着を替えたい——。さきほどの夢の続きとしか思えなかった。

#小説 # 掌編 # 翻訳 # 友達 # 夢

11/14 美しいって、何が？

＊

美しいって、何が？

星野廉

2022年11月14日 12:54

びくびくひくひくびくびく。

ところで、オノマトペはずっと入ってきます。音や文字が「何かに」「似ている」ではなく、単に「似ている」として入ってくるからではないでしょうか。「何か」との異なりや事なりや言なりとして無理に押し入ってこないのです。

本物のない複製の複製と起源のない引用の引用を感じます。
(拙文「つながる、かさなる、ふるえる」より)

この記事は、以下の「まとめ」だけを読んでいただいてもかまいません。

目次

**まとめ

「美しい」「え、何が？」

「動くって何が？」

「びくびくって、何が？」

「何と！」、「感動的だ」、「すごい」、「すごすぎます」、「おーまいがっ」、「あら」、「おげーっ」、「マジ？」

「何かに似ている」というよりも「単に似ている」

なんだか分かんないけど**

まとめ

今回の記事の底に流れるイメージです。

- ・生まれたときに、すでにあった。
- ・なぞって、つまり真似て、さらに何度も何度もそれをくり返す。

- ・引用の引用、複製の複製。
- ・起源なき引用、本物（実物）なき複製。
- ・空疎、空っぽ。
- ・まわりに同調して仕方なくつかう。
- ・擦り切れる、中身が薄くなる、そのうち存在感がなくなる。そもそも「なかった」もの。
- ・思わず発してしまう。
- ・自然発生的に出てくる、漏れ出る、生理現象に似ている。
- ・ずっと入ってくる。
- ・「何かに似ている」というよりも「単に似ている」。

何かって、言葉のことです。

- ・意味を考えたり意識したりはしていない、その時点では意味なんてない。
- ・「似ている」だけがある感じ、オノマトペに限りなく近くなっている。
- ・オノマトペとか、感動詞とか、決まり文句とか、流行語に近い感じ。
- ・思考停止とか判断停止とは言わないまでも、無意識のうちに、条件反射的に、または生理現象のように、ずっと入ってきて、ずっと出てくる。
- ・人はまず「○△X」という言葉を作って、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物である。
- ・そもそも「まず「○△X」という言葉を作った」現場に立ちあってなどいない。
- ・なんとなくその時々で弾みで出てくる。知らんけど。

「美しい」「え、何が？」

誰かが「美しい」とつぶやくなり叫ぶなりしたとします。近くにいる人がそう口にしたのですが、何を見てそう言ったのか分からないとき、聞いていた相手が「何が？」と聞き返すという状況をよく見かけます。

日常生活でもテレビドラマでも映画でも、小説でもあったようなシーンです。

「美しい」ほどよく口にされたり文字にされる言葉はないという気がします。言葉と言いましたが、形容詞とも言えます。「美しい」という言葉が複製とか引用にも思えてきます。

言葉は誰にとっても生まれたときに、すでにあったものです。それを聞いてなぞって、つまり真似て、さらに何度も何度もそれがくり返されて習得していきます。文字であれば、その習得に時間と労力を要します。

＊

「美しい」は、「わんわん」とか「わんこ」とか「わんちゃん」とか「いぬ」とは違って何かの事物を指すもの（名詞とも言いますが、品詞はいったん忘れましょう）ではありません。小さな子どもが「美しい」と言うのを聞いた覚えがありません。「きれい」ならあります。

こんなことを考えていると不思議でなりません。でも、これに類したことをよく考えます。言葉のありようについて、ああでもないこうでもない、ああだこうだと思いをめぐらすのです。

「美しい」とか「わんわん」とか「きれい」と口にするなり文字にする行為は、引用であり、「美しい」という声や文字は複製だという気がしてきました。

真似て、それをくり返しているわけですから、引用の引用、複製の複製でしょうか。しかもその引用の起源と複製の本物が不明なのです。不明どころか「ない」というのが実感です。誰にとってもそうではないでしょうか。

＊

まれに、ある言葉や言い回しを初めて聞いた時や目にした時を覚えていることがあります。

同年齢という意味の「ため」とか、本当という意味の「マジ」を初めて聞いた時を覚えています。新鮮な響きがあったので、たまたま記憶されているのでしょう。ほかには思いつきませんが、そういう言葉が他にもあるかもしれません。

「ため」と「マジ」を初めてつけた時のことは覚えていません。いまでも、めったに口にしない言葉です。

＊

「美しいって、何が？」

「美しい」ほどよく口にされる言葉はありませんが、ということはいろいろな事物やありさまや風景が「美しい」なのでしょう。世界は「美しい」に満ちていると言えそうです。

「美しい」という言葉が空疎であるという見方もできるでしょう。空っぽだという意味です。最近、「美しい」をつかうのにためらいを覚えるようになってきました。つかうのは、まわりに同調して仕方なくつかう時くらいです。

言葉はどんどん口にし文字にしていると擦り切れてきます、中身が薄くなってそのうち存在感がなくなります。そもそも「なかったもの」ですから当然かもしれません。

それが起源なき引用であり、実物なき複製なのかもしれません。

今回はそういう話をしています。

*

「美しいって、何が？」

「動くって何が？」

いわゆる動詞でもありそうですね。

「動く」

「え、何の話？」

「ぴくぴくって、何が？」

いわゆるオノマトペなんかでも、おおいにありそうです。

「ぴくぴく」

「いやだ、ニヤニヤして、何こと？」

「何と!」、「感動的だ」、「すごい」、「すごすぎます」、「おーまいがっ」、「あら」、「おげーっ」、「マジ？」

代名詞らしきものも、名詞と呼ばれているものも、いわゆる形容詞もセンテンスもあります。何でもありですね。

こういうのは例の感動詞というのでしょうか。英語の文法では間投詞と言っていた覚えがあります。喜怒哀楽をはじめ、どんな感情でも感覚でもいいのですが、広い意味でも感動があって思わず発してしまう点が共通しているようです。

「思わず発してしまう」がポイントのような気がします。自然発生的に出てくるとか、漏れ出る感じ。生理現象に似ています。

「何かに似ている」というよりも「単に似ている」

びくびくひくひくびくびく。

ところで、オノマトペはすっと入ってきます。音や文字が「何かに」「似ている」ではなく、単に「似ている」として入ってくるからではないでしょうか。「何か」との異なりや事なりや言なりとして無理に押し入ってこないのです。

本物のない複製の複製と起源のない引用の引用を感じます。
(拙文「つながる、かさなる、ふるえる」より)

「つながる、かさなる、ふるえる」という記事を書いて、上の箇所がずっと気になっていました。私は自分の書いた記事にツッコミを入れながら新しい記事を書く癖があるのですが、今回もそうになりました。

オノマトペに限らず、言葉がすっと入ってきたり、すっと出ていくとき、その言葉は「何かに似ている」というよりも「単に似ている」として入ってくるのではないか。そんな気がしています。私の好きな言い方をすると、本物のない複製の複製であり、起源のない引用の引用です。

「ずっと入ってくる」「ずっと出ていく」がポイントです。意味を考えたり意識したりはしていない状態です。その時点では意味なんてないのです。「似ている」だけがある感じ。オノマトペに限りなく近くなっている状態をイメージしてください。

くり返しますが、どんな言葉でも、フレーズでも、センテンスでもいいのです。オノマトペとか、感動詞とか、決まり文句とか、流行語に近い感じ。思考停止とか判断停止とまでは言いませんが、無意識のうちというか、条件反射的に、または生理現象のように、ずっと入ってきて、ずっと出ていくのです。

エポケーまではいかず、ぼけーとかぼけーという、ほうけた感じ。自分のことだろう、と言われれば、たしかにそうなんですけど。否定はできません。イメージの韻とかいう、妙ちきりんな連想を放ちながら文章をつづっていますので。放連想、呆廉想。

なんだか分かんないけど

言葉がずっと入ってくるし、ずっと出ていく。とくに、話し言葉。空気みたいと言えば、空気みたい。

他の人がその言葉や言い回しをつかうのを初めて見聞きした時のことも、ふだんは頭にはないのです。学校で習った記憶もあるけど、その時の記憶も曖昧か不明で、なんだか分かんないけど、知らんけど、ずっと入ってくるし、自分でも口にしたり、場合によっては書いたりするのです。

たぶん、つかっているその時点では意味はないのです。状況だけがその言葉を呼び起こす感じ。

人はまず「○△X」という言葉を作って、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物——これまでにいろいろな記事で何度も書いたフレーズです——だからじゃないでしょうか。

そうだとすれば、そもそも「まず「○△X」という言葉を作った」現場に立ちあってな

どいないのです。誰って、誰もがです。生まれたときに、すでにまわりにあったのです。それをなぞってまねて、知らない間に自分の中であって、それがなんとなくその時々の弾みで出てくるのです。知らんけど。

知らんけどって、何が？

*

また、この記事のどこかにツッコミを入れて記事を書きそうな気配を感じます。

#イメージ # オノマトペ # 形容詞 # 動詞# 感動詞 # 間投詞 # 決まり文句 # 複製 # 引用 # 流行語 # 美しい # 影# 言葉

11/15 仮象、化象

＊

仮象、化象

星野廉

2022年11月15日 07:57

抽象、具象、事象、現象、表象、仮象、印象。

こんなふうには、言葉を並べてわくわくする人がいます。ここにもいます。辞書や事典で調べたり、ネット検索をする気配はありません。ただながめて、にやにやしたり、うーむとうなってみたり、鼻の穴をほじったり、たまに天井の模様に見入っていたりしています。

(拙文「意味は宙づりのまま、なぞり、えがく」より引用)

調べずに、ながめているだけというのは、本物のない複製の複製と起源のない引用の引用を相手に積極的に戯れようというスタンスだと言えるでしょう。

目次

仮象

かり、かりる

仮の姿、本当の姿

化象

but skin deep

ネタバレあり、「バット・スキン・ディープ」創作ノート

ぺらぺら、厚みがない

本物と偽物が区別できないどころか、意味をなくしている

お化けごっこことしての世界

仮象

仮象。

前から気になっている言葉です。ものすごくカッコいいです。ぞくっときます。「かしょう」であって「けしょう」ではないようですが、「けしょう」もいいなあと思います。

辞書を引いた記憶があります。哲学か美学かの用語らしいのですが、専門用語は苦手なので、勝手にイメージしてみます。私は研究者でも探求者でもありません。

＊

仮象。かしょう、けしょう。

姿や形が仮のものなのでしょうね。想像するとぞくぞくします。怪しいというよりも妖しいです。仮の姿ですよ。妖しすぎます。

仮ということは、本当の姿があるのでしょうか。化けているということになりそうです。あるいは借りている。「仮」と「借りる」はつながっていたはずです。

かり、かりる

『『仮往生伝試文』そして / あるいは『批評 あるいは仮死の祭典』』という記事を書いた書いたときに、「かり」と「かりる」について調べたり、考えたことがあるのですが、ほとんど忘れてしています。

年を取ったせいか、物忘れが加速度的にひどくなり、集中力がめっきり萎えてきました。

＊

その記事にざっと目を通しましたが、長いですね。無駄に長いというやつです。もうあんな長いものは書けません。

仮象も何度か使っています。やっぱり深入りはしていないみたいです。浅い人間なの

で、深入りできないのです。表面をなぞるだけ。

本物のない複製の複製と起源のない引用の引用を相手に積極的に戯れるだけ。居直って、ごめんなさい。でも、そのほうが楽しいですよ。

仮の姿、本当の姿

仮の姿。借りた姿。本当の姿があるはず（ほんまかいな）。どこかにあるのか、隠しているだけなのか？

姿が変わったのか、移り変わったという感じなのか？ 答えなんかありませんから、いろいろ想像してぞくぞくして楽しめます。

本物の姿があって仮の姿という発想は好きではありません。本物と偽物とか、真偽とか、正誤が苦手なのです。ぶっちゃけた話が、嫌悪感を覚えるのです。

嘘っぽいのです。本物も偽物も、正統も邪道も、等しいと思っているからでしょう。

要するに、本物のない複製の複製と起源のない引用の引用です。

化象

仮象。かしょう、けしょう。

「けしょう」は私が勝手に付けくわえた読みですが、「けしょう」といえば、化粧ですよ、ふつうは。

仮象、仮生、化生、化粧。

私はお化粧をする習慣はありませんが、興味はあります。自分のすっぴんに粉や色をつけるようですね。大変でしょうね。

自分の顔の表面をいじるわけです。表面をいじって変えるのです。根本は変わりません。表面だけ。表面だけでも、あれだけ変わるのです。

すごすぎます。

but skin deep

—Beauty is but skin deep. (美は皮膜にあるのみ)
(拙文「【小説】バット・スキン・ディープ」より引用)

美は皮膜にあるのみ——英語のことわざの訳文です。掌編小説のエピグラフとして使ったことがあります。

美しさは、皮膚の厚さくらいしかないという意味です。どんな美人さんでも、皮をむけば……という感じでしょうか。残酷なフレーズですね。文字どおりに取って、そのさまを想像するとぞっとします。

でも言えていると思います。お化粧だって、表面だけを変えるのですから、分かりやすいです文句です。

よく考えると、深さがなくてぺらぺらものに「美しい」と感じさせるものが多い気がします。

「美しい」とか「わんわん」とか「きれい」と口にするなり文字にする行為は、引用であり、「美しい」という声や文字は複製だという気がしてきました。

真似て、それをくり返しているわけですから、引用の引用、複製の複製でしょうか。しかもその引用の起源と複製の本物が不明なのです。不明どころか「ない」というのが実感です。誰にとってもそうではないでしょうか。

(拙文「美しいって、何が？」より)

前回の記事からの引用です。言葉はどんどん口にし文字にしていると擦り切れてきますが、中身が薄くなってそのうち存在感がなくなります。「美しい」は空疎な決まり文句

と化しているのです。詳しくは「美しいって、何が？」をお読みください。

表面だけでべらべら、深さというものがない。まさに、これこそ本物のない複製の複製であり、起源のない引用の引用ではありませんか。言葉と激似。いまのは、お化粧のことです。お化粧の下にあるものの話ではありません、念のため。

ここで脱線します。

ネタバレあり、「バット・スキン・ディープ」創作ノート

(ここからは脱線ですので、飛ばしていただいてもかまいません。太文字の部分だけでもお読みください。)

以下は過去の記事に加筆したものです。

勢いを生かすために加筆は最小限にとどめています。レイアウトが変ですが、かつてはこんな書き方をしていました。読みやすいように心がけていたのです。やたら「=」もつかっていますが、意味の固定を避けて、こう言えるし、ああも言えるというふうに書きたかったのです。



さてテーマは、

* 「視線」と、「美醜」or「虚実」

についてです。

「見る」とは、どういう「いとなみ＝行為＝行動」なのでしょう？ あるいは、どういう「身ぶり＝運動＝しぐさ＝身のこなし」なのでしょう？ 個人的には、「いとなみ＝行為＝行動」とは抽象的レベルにあり、「身ぶり＝運動＝しぐさ＝身のこなし」は具体的な動きをイメージしています。順序が、逆になりますが、「信号」に関して、という限定つきで定義するなら、

11/10 観察、観察

*1) 「みる・見る」という「身ぶり＝運動＝しぐさ＝身のこなし」は、「視線を投げる・視線を送る・合図をする・めくばせをする・色目をつかう」ことであり、相手（＝対象）に働きかけることを目的とした動作である。

と考えています。もちろん、個人的な感想です。一方、

*2) 「みる・見る」という「いとなみ＝行為＝行動」は、世界＝宇宙＝森羅万象を、「色分けする・区別する・分かる・分ける・知覚する」ことであり、対象への働きかけを放棄＝保留することである。

と考えています。これもまた、あくまでも、私見＝愚見ですが。

上で述べた2つの定義＝フレーズの大きな違いは、

* 「見る者」と「見る対象＝見られる対象」とのかかわりの違い

にあります。上記の2つを、さらに別の言葉で言い換えてみましょう。

*1) ヒトは、何かを「みる・見る」とき、何かを期待する。わくわく、どきどきする。

*2) ヒトは、何かを「みる・見る」とき、何かを悟る＝発見する＝知る。驚き、啞然とする。

たった今書いた2つのフレーズを、今回のテーマである、

* 「視線」と「美醜」or「虚実」

にからめて、さらに書き換えてみます。

*1) すげー美人だ！ or カッコいい！ or 美形だわー！ or なんてぶさいくな！

*2) そうだったのか！＝なるほど！＝へえーっ！＝あれっ！？＝ほおー！＝わかった！＝Eureka（エウレカ）！

となりますが、少々くだけ過ぎてしまったので、もう少し、かみ砕いて説明を加えます。

1) の場合には、「美醜」が意識にあります。「美醜」は広い意味にとりましょう。「プラス=快」か、「マイナス=不快」くらい広くとってもいいと思います。何しろ、「ナンパする」「ナンパされる」という「魂胆=期待」というメッセージを帯びて=担って、「視線」という「信号」を相手に送るのです。これから、「快=気持ちいいこと」があるだろうという前提に立っている、とも言えます。

一方、2) の場合には、「虚実」が意識にあります。バタ臭く言えば、「存在と無」に匹敵する、「理屈=論理=分別」の世界を「覗き見る」行動です。ここでは「ナンパする」「ナンパされる」や「魂胆=期待」といった心理的な余裕はありません。俗な言い方をすれば、「不意打ちをくらう」という「事件=出来事」と遭遇することなのです。

＊

そろそろ、まとめに入ります。大雑把に言って、「みる・見る」とは、「視線」の働きという点から見た場合には、上述の1)と2)の2つの状況が想定できるのではないかと考えています。

拙作「バット・スキン・ディープ」は、上述の1)と2)という2種類の「視線」の在り方の「交錯」を主題にしているとも読めます。

主人公の女性は、1)と2)を混同してしまった。その結果として、悲劇が起こった。このような「解釈」もできるのではないのでしょうか。本来は、「美醜」、つまり、「プラス=快」vs.「マイナス=不快」に向けられるべき「視線」が、「虚実」、つまり、「理屈=論理=分別」に向けられてしまった。そんな倒錯した事態に陥ってしまったために、主人公は犬と人を殺めてしまったのではないかと考えられます。

深夜の公園で、火傷の跡のある自分の顔を愛犬に舐められるシーンがあります。そのさいに、自分が同情されているように感じる個所がありますが、これが伏線であり、後の2つの悲劇、つまり、犬の殺害と友人の殺害につながります。

つまり、

*美醜は皮膜に在るのみ

であるように

*虚実も皮膜に在るのみ

と言えます。これは、

*「美醜」も「虚実」も、実体はなく、「みる・見る」者のまぼろし=幻想として立ち現れる。

ということです。ただし、

*「美醜」は、わくわく・ドキドキしながら、「めでる・愛でる=ながめる・眺める」ものである。一方、「虚実」は、「不意にめぐり合う=遭遇する=悟る=知覚する」「事件=出来事」である

ために、「美醜」という感動の対象に、「虚実」という「不意の出来事」を「見てしまった=出合ってしまった」場合には、取り違えた代償として、「錯乱=狂気」または「罰=悲劇」とも言い換えることが可能な「こころの痛み=こころが壊れる」が生じる。そんな事態が起きてしまったように、思えるのです。

もっとも、犬にとっての「美醜」とは「プラス=快」vs.「マイナス=不快」の感覚であり、飼い主=ボスと犬自身との快い関係と言うべきでしょう。そこに、「虚実」、つまり極めて人間的かつ「知的」な行為である「同情」という「信号」を「事件=出来事」として見てしまった。いわば遭遇してしまった。

友人を殺めたさいには、美醜というまぼろしに、虚実というまぼろしを重ねてしまった。これも「信号」にそなわっているまぼろしの仕組みに、惑わされ裏切られてしまったのです。ある印（しるし）を「読み間違える」ことによる悲劇。「読み間違える」とはきわめて視覚的な行為、つまり「視線」のなせる業（わざ）です。

実は「まぼろし」でしかない「美」の存在を「否定=打ち消す」ために、腐り朽ちていくだけの「皮膚=仮面」をナイフで剥ぐ。空しく愚かな行為とも言えます。同時に、象徴的な行為でもあります。

11/10 読家、作家

*

今、こうやって、自作を分析してみると、大学の卒論で書いたロラン・バルト論でのテーマを、あの小説を書いた頃にも引きずっていたことを感じ、啞然とします。

ちなみに、卒論で取り上げたのは、『S/Z』というバルトの批評。その批評が扱っていたのが、男女を「取り違える＝読み間違える」彫刻家が登場する、バルザックの中編小説『サラジューヌ』なのです。意識していたわけではないのですが、結果的に、バルザックの小説と、バルトの評論と、それを論じた自分の卒論と、後年に書いた自作の小説と、この記事とが、めくばせし合っている。テキスト間のめくばせ、とでも言いましょうか。おこがましいですが、そんなふうにも感じられます。

*

込み入っていて、ややこしいですね。考えていることを、正確に書こうとすると、こんなふうになってしまうのです。自分を裏切ると言うか、考えていることを偽ると言うか、不正確になることを覚悟して、思いきって、単純化してみます。

*マジで＝真剣に見てはならない「もの＝信号」を、マジで＝真剣に見ると、取りかえしのつかない間違いを起してしまう。なぜなら、目に見える「もの＝信号」は、すべて「まぼろし＝幻想」だからである。

では、どうでしょうか？ 具体的に言うなら、

*主人公が、自分が同情されているように感じる

ことにより、主人公は「とてつもなく大きな勘違い」をしてしまったのです。「信号」を「読み間違えた」とも言えます。それが2つの悲劇の引き金となったのです。1つは犬の殺害。2つ目は友人の殺害。簡単に言えば、そういうことです。

◆

引用を終わります。脱線はここまでです。

話をもどします。

ぺらぺら、厚みがない

絵、写真、映画（スクリーンに映します）、液晶画面に映る映像。
文字、本、雑誌・新聞、液晶画面に映る文書。

こうしたぺらぺらであったり、厚みを欠いた表面に、いろいろな情報がのっかっているわけです。印刷されていたり、映しだされています。

すごいですよね。不思議です。不思議すぎて腰を抜かすのを忘れるくらいです。

＊

薄いのに厚い。表層なのに深層。浅いのに深い。平面なのに遠近が感じられる。小さいのに大きい気がする。狭いのに広い感じがする。

反対だと言われたり思われていることが、同時に起きているのです。でも、それは言葉の世界と現実世界を混同しているから不思議なのであり、よく観察すればよくあることなのです。

この辺のことは、「短い」と「長い」が同時に起こっている」という記事に書きましたので、興味のある方はお読みください。

不思議の国じゃないですか。ルイス・キャロルは、やっぱりすごいわという話になります。そのすごさを指摘したジル・ドゥルーズはやっぱりすごいという話にもなりそうです。

この辺のことは「夢は第二の現実」と「言葉の綾を編んでいく」という記事に書きましたので、興味のある方はお読みください。

本物と偽物が区別できないどころか、意味をなくしている

現在の世界は、薄いのに厚いものに満ち満ちています。

絵、写真、映画（スクリーンに映します）、液晶画面に映る映像。

文字、本、雑誌・新聞、液晶画面に映る文書。

なんでこうなっているのでしょうか。想像力のたくましさで学習の成果だと思います。

なにしろ、写真に映った「あれ」（「なに」でもいいです）を見て、人は欲情するので、これがいちばん分かりやすい説明になるでしょう。誰もが経験していると想像できるからです。

レストランの入口近くに陳列された料理のサンプルを見て、お腹が鳴ったり、口に唾が出てくるのと同じでしょう。条件反射とも言えそうです。

「あれ」（「なに」でもいいです）というのは人、それぞれです。自分にとっての「あれ」（「なに」でもいいです）が何かは普通はひとさまには言いません。プライベートなことだからです。

＊

写真に映った映像で興奮するのは、想像力のたくましさです。人は本物を相手にしなくても欲情できるという意味です。まさか、インクや紙や画素や液晶に欲情しているのではないのは確かだと思います。いくらいろんなフェチがあるだろうとは言え、です。

とは言うものの、偽物や似たものや似せたもののほうが好きだという人がいても、不思議はありません。

現在は、本物と偽物、「複製」と「複製の複製」、本当か嘘か、こういった区別が困難になり、さらにいうなら、その区別が意味をなくしつつある時代なのです。

このことが露呈するのは、戦争が起きるときだというのは、悲しい皮肉であり悲劇だ

11/10 複製、化象

と思います。いまみなさんが実感なさっているのではないのでしょうか。

この辺のことは、「本物のない複製の複製、起源のない引用の引用」という記事に書きましたので、興味のある方はお読みください。

*

「あれ」の映像から、「あれ」が書いてある文章に話を移します。

人はぺらぺらの紙に印刷された文字でも興奮するのです（紙やインクや文字に欲情しているという意味ではありません、念のため）。これは学習の成果です。文字を何度も何度も見てなぞり、写すことによって、真似て学ばないと、そういう楽しみは味わえないのです。

したがって、ワンコやおさるさんは、紙の上の文字と現実を混同しません。文字と現実を混同するおさるさんがいたら、世界的な大ニュース、歴史的な大事件になるでしょう。AI並みにヒトの嫉妬と恐怖の対象となり迫害されるにちがいありません。

欲情だけにとどまりません。喜怒哀楽すべてが、文字で引きおこされることはみなさんが日常的に経験なさっていることです。

これは小説で偽物だから感動しないよ。これは言葉であって事物でも現象でもないから、何とも思わないもん――。

そんなの嘘です。万が一そんなことを言う存在がいれば、人ではないでしょう。それは人の姿をした機械かもしれません。いまは、そんな機械がいてもおかしくない時代です。

冗談はさておき、化象とかお化けかもしれません。いるんですよ、そういうのが。以下のまとめで、その話をします

お化けごっことしての世界

まとめます。

仮象、化象、化粧。

うわべだけ、ぺらぺら。薄いけど厚い。浅いけど深い。小さいけど大きい。短いけど長い。平面だけど立体。静止しているけど動いている。

仮の物からなる世界。ぜんぶ仮のもの、ぜんぶ借りもの。

誰もが生まれときに既にあったもの——言葉のことで——を借りるのです。仮初めに。

偽物、似たもの、似せたものに満ち満ちた世界。

情報とは、知識とは、事実とは、「似せたもの」であり「似たもの」——似ているだけですから、実物や本物やソースつまり起源ではなく別物であるのは確かです——である。ひょっとすると偽物かもしれない。

というか、本物や実物のない複製の、また複製であったり、起源のない引用の、また引用ではないでしょうか。

あなたがいまご覧になっている端末の画面に映っているものがそうです。ええ、そうです、私です。そして、あなたもです。

世界は、化け物だらけ、化象だらけ。

化けた者が化けた物を相手にしてお化けごっこをしている。

似せた者が似せた物を相手にそっくりショーをしている。

似せ者が似せ物を相手に偽物ごっこをしている。

*

ぺらぺらしたとりとめのない話にお付き合いいただき、ありがとうございました。

#小説# 漢字# 言葉# 日本語# 化粧# 本物# 偽物# ロラン・バルト# ルイス・キャロル# ジル・ドゥルーズ# 引用# 化粧# ぺらぺら

11/16 イメージのイメージ、イメージをイメージ
する

＊

イメージのイメージ、イメージをイメージする

星野廉

2022年11月16日 09:57

世界は、化け物だらけ、化象だらけ。

化けた者が化けた物を相手にしてお化けごっこをしている。

似せた者が似せた物を相手にそっくりショーをしている。

似せ者が似せ物を相手に偽物ごっこをしている。

(拙文「仮象、化象」より)

今回も前回と同じく、おふざけ半分で記事を書きます。テーマがテーマですし、こういうことは本気で論じるたぐいの話ではないと思うからです。本気に取らないでくださいね。

イメージの韻を踏みながら、連想を放ちます。放連想、呆廉想、惚廉草、毫廉w。こんな感じです。

ただし、半分は本気で書いていますので、お読みくださればうれしいです。私は本気で言葉とイメージを愛しています。

目次

イメージのイメージ

イメージをイメージする、イメージをたどる

image、imago

ぺらぺらしたもの

薄っぺらいもの

ぺらぺらしたもの

人の作った四角いもの
 文字もべらべら
 舌べろ
 言の葉
 べらべらがべらべらを生む
 言の葉を聞く
 言の葉を書く、写す、映す
 言の葉を見る・読む
 言の葉を写す、言の葉を移す
 べらべらというイメージの韻
 孤独な賭け
 とどかない
 たどれない
 言葉が生まれた。
 言葉と影に先に立たれる

イメージのイメージ

イメージとは、私にとってあくまでも個人的なものです。辞書に載っている語義や、曖昧なかたちで人びとに共有されている意味とは異なり、私的なものとイメージしています。

ふつう人は他人に自分のイメージについて話しません。荒唐無稽でとりとめがなく、場合によっては口にするのも恥ずかしいものだからです。他人の頭の中を覗くわけにはいかないので、他人のいづくイメージもふつうは知りません。

イメージが、家族や小さな集団や大きな集団、ひいては共同体で共有される場合があります。そこには同調、忖度、強制がともないますからきな臭くなりがちです。二人のあいだでも、そうです。力関係に左右されるのです。複数、または多数のあいだで共有されるためには、イメージは固定化する必要があります。固定化するためには、文字がつかわれます。明文化というやつです。

こうやってイメージが固まり、決まりやルールや法になるわけです。同調と忖度と強制がはじまります。辞書の語義もいわゆる意味も、もとは個人のイメージから出発し、しだいに共有され固定されていく過程で、取捨され淘汰されていったと私はイメージしています（とはいえ、誰もが密かに個人的なイメージをいだきつつけているのです）。

きな臭い話になってきたので、呆けましょう。呆け、惚け、耄けるのです。

イメージをイメージする、イメージをたどる

「イメージ」に当て字をしてみます。

文字に文字をあてる、音に音をあてる。言の葉に言の葉を当てて重ねる。薄い葉に薄い葉を重ねてその模様を透かして見るのです。言葉は薄いものである気がします。

まっさきに頭に浮かぶのは夢路（ゆめじ）です。夢を広辞苑で引くと、「「寝（い）の目」の意」なんてうれしい文字列が見えます。寝目路（いめじ）と勝手にくっつけてみましたが、そんなのがあればチャミングですね。

夢路、夢路をたどる、イメージをたどる。いいイメージです。道が目浮かんで、その光景に染まっていく自分がいます。

＊

夢路といえば、夢路いとし喜味こいし（ゆめじいとしきみこいし）さんです。往年の漫才コンビです。月丘夢路（つきおかゆめじ）さんも思い出します。幼いころに、月丘夢路さんと朝丘雪路（あさおかゆめじ）さんを混同した覚えがあります。どちらも、字面と響きと浮かぶイメージがとても綺麗な名前です。

竹久夢二（たけひさゆめじ）も連想しました。

夢路、イメージ、image。

image、imago

過去の記事から引用します。

＊イメージの原語である英語の「image」は、「真似たもの、似せたもの」という意味ら

しい。つまり、「にせもの=偽もの=偽物=偽者=贗物=贗者」ということ。

以上は、前回の記事からの引用に、ちょっと手を加えたものです。やっぱり、いかにも柄が悪そうですね。image は、imagine (※イマジン)、imagination (※イマジネーション)、imitate (※イミテイト)、imitation (※イミテーション) なんかの親戚だということです。

フランス語だと、スペリングは image のままで、「イマージュ」みたいに発音するそうです。精神分析でつかう imago (※イマーゴ or イマゴ) といって、「子供時代の理想の愛の対象や理想像」を意味する用語がありますが、これも親戚だということです。

ちょっと、もよおしてきましたので、ダジャレをさせていただきます。お題は、イメージ、イメジ、イマジン、イマージュ、イマゴ、です。

*「夢路 (ゆめじ)」いとし、喜味こいし (※ちょっと古すぎるし、そうとう苦しいオヤジギャグですね)。

*「いじめ」はだめだよ「迷児 (めいじ)」くん (※だからー、あの、どつき漫才のコンビはー、正司敏江・「玲児 (れいじ)」だっちゅーの。むぎゅ)。

*『『今語 (いまご)』って流行語?』「さあ? ちなみに『imago』って雑誌は、休刊中みたいですけど、なかなかいい特集がありましたね。まだ、ときどき、バックナンバーの在庫フェア、やっているみたいですよ」

*まご、「ひまご」、やしゃご。

*「今、じゅ」わーって、こなかった?

*「今人 (いまじん) =めっちゃチョーナウいヒト」、「暇人」、ワシのこと。

*元暴れん坊のレノンちゃんの「イマジン」も、いったん、お金を儲けてしまえば、平和がいいから、ピース、アンド、ラブ、フォエバーで、あとは奥さん、財テクくるいで、2人の息子 (※異母兄弟) に暖簾 (ノレン) 分けして、今はイン・ザ・ヘブン。合掌。

*「imagine ス、売ってます? =今、ギネス (ブック) 売ってます?」(※現 Guinness World Records = 旧 The Guinness Book of (World) Records)

*「imagine ス、売ってます? =今、ギネス売ってます?」「いいえ、でも、クアーズとバドならあります」

*「I'm Age. =ワシの名は英二ちゅうねん」

*「I'm age. =ぼく、おあげだよ (※「あぶらあげくん」が主人公の童話より引用)」

*「I'm Ago. =おれ、あご勇 (※「あご・いさむ」さん、Where are you now?)」

*「アィム・アゴ (=顎 = jaw = ジョー)。「おじょうず、お上手」

*「アィム・アゴ (=顎 = chin = チン)。「『おら、ハードボイルドだど』の内藤陳 (ないとう・ちん) さんじゃありませんかー、お懐かしーい」

*「アィム・アゴ (=顎 = chin = チン)。「ミスターちんさん、プロレスラーのミスター珍さんとは、ご親戚だったのですか」

*「アィム・アゴ (=顎 = chin = チン)。「ちんちんかかも。仲がおよろしいですねえ」(※放送禁止用語では、ないみたいです。広辞苑に載っていますので、お調べ願います。あと、ちんあなごも、ついでにどーぞ。)

*『『今ご』ろになって、『イメ』チェン (=イメージ・チェンジ) して、猫をかぶったり、いい人ぶって、い『い孫』の振りをしても、おばあちゃん、許しません。しょせん、

あなたは『イミテーション』、『にせもの』、『まがいもの』なの。いつも、『マネ』一、『マネ』一じゃない？ わたしゃ、もう騙されませんからね」

* imagine のアナグラムは enigma (英語で、謎、謎の人) + i (虚数単位)。image のアナグラムは、magie (仏語で、魔法、魔術)。「マジ」で、あやしい。上述の imago のアナグラムは amigo となり、スペイン語で「(男の) 友達」となるが、いやになれなれしくて要注意。

以上、寸劇を演じました言葉たちの身ぶり・表情・仕草・めくばせから、お分かりいただけただけように、イメージという言葉＝現象＝記号は、その身勝手さ、うさんくささ、テキトーさにもかかわらず、

* 思考＝想像＝妄想を、刺激＝攪乱 (かくらん) し、錯乱＝活性化させる
という意味では、貴重な働き＝役割＝機能を果たしていると考えられます。
(拙文「あらわれる・あらわす (8)」より)

*

* イメージとは、とても、テキトー＝気まぐれ＝大雑把＝でまかせ的＝頼りにならない＝不安定なものである、と想定している

と考えてください。ですから、

* 「矛盾している」あるいは「論理的ではない」と感じて、いっこうに差支えがないのです。イメージのテキトーさについては、「あらわれる・あらわす (8)」(安心してください。過去の記事を読まなくても分かるように書きますので) で、かなり詳細に論じましたので、ご興味のある方は、ご一読願います。どれくらいテキトーかを知っていただくために、その記事からちょっとだけコピペしてみます。

* imagine のアナグラムは enigma (英語で、謎、謎の人) + i (虚数単位)。image のアナグラムは、magie (仏語で、魔法、魔術)。「マジ」で、あやしい。imago ⇒ amigo (西語で、男性の友人) とはいえ、気を許してはならぬ。

以上のフレーズが、引用ですけど、英語の image の動詞形である imagine が曲者として、

* 言霊の幸ふ国 (=ことだまのさきはうくに) (※意味は広辞苑でお調べください) の言葉で、「分光する＝分ける」と、imagine のアナグラムは「imigane = 意味がねえ = 意味がない = 「意味がね、イマイチなのよ、の『意味がね』」、あるいは、「iminage = 意味なげ = 「意味なげに思ゆ or 覚ゆ、の『意味なげ』」とも読める

というテキトーぶりなのです。えっつ？ 「テキトーなのは、imagine ではなくて、おまえだろう」ですか？ そう言われると、返す言葉がありません。その通りでございます。拙文「意味の論理楽・その2【引用の織物】」より

元気なころに書いた記事です。威勢がいいですね。うらやましくなります。

イメージは個人的なものであり、はかなく、淡く、薄い。ひらひら、ぴらぴら、べらべら。

ぺらぺらしたもの

*薄っぺらいもの

絵、写真、映画（スクリーンに映します）、液晶画面に映る映像。

文字、本、雑誌・新聞、液晶画面に映る文書。

こうしたぺらぺらであったり、厚みを欠いた表面に、いろいろな情報がのっかっているわけです。印刷されていたり、映しだされています。

(拙文「仮象、化象」より)

現在の世界は、薄っぺらいものに満ちています。薄っぺらいのにぶ厚いのです。

大昔から薄っぺらいものは自然界にあったようです。思いつくのは葉っぱ（ルースリーフのリーフ、ミルフィーユのフィーユ）です。おびただしい数のぺらぺらの葉っぱがいまも至るところにあります。ただし葉っぱはぶ厚い感じがしません。

現在目につく薄っぺらいものは何といっても紙です。写真やはがきを、枚のほかに、一葉、二葉と数えますね。ただの紙はぺらぺらですが、そこに文字がのっかっていると、とたんにぶ厚くなります。文字ののっかっている紙をぶ厚いと感じるのはヒトだけだと考えられます。

なにしろ、文字ののっかっている紙を人が飽きもせずにながめ、大切に保存し、写しを取り、広く配っているのですから、薄っぺらいだけのものでないことは確かでしょう。

たぶん、いや、きっとぶ厚いのです。ただ薄っぺらいものをながめたり、大事にするほど、人は暇ではないと思われるからです。

*

ぺらぺらの紙にのっかっているものは文字だけではありません。ざっくりと言えば、絵ものもなっかっています。絵には手描きのものをはじめ、光学器械で映した写真、印刷されたもの、機械で描いたものがあります。

人は薄っぺらい紙にのっかっている文字と絵をながめているようです。「ようです」と人ごとのように書いたのは、なぜか不思議でならないからです。見慣れた光景と言え、不思議でなりません。その状況のありようがうまくとらえられないのです。

なんでこうなっているのだろう、これはいったいどういうことなのだろう、と。

人と仲良し——と、ヒトが一方的に思っているようですが——の人以外の生き物たち、たとえば犬や猫や金魚や馬や牛や豚や鶏も不思議に思っているかもしれません。尋ねたことがないので想像するだけですけど。

猫なんか、何かを読んでいると攻撃してくることがありますね。スマホも標的にされます。私なんかは、素直に反省します。猫の態度のほうが正しいと思うのです。

ワンコやおさるさんは、紙の上の文字と現実を混同しません。文字と現実を混同するおさるさんがいたら、世界的な大ニュース、歴史的な大事件になるでしょう。AI並みにヒトの嫉妬と恐怖の対象となり迫害されるかもしれません。

(拙文「仮象、化象」より)

*ぺらぺらしたもの

ぺらぺらしたものを思いつくままに、列挙してみます。

*

まず、人にあるもの（内臓は除きます）。

まぶた、舌、皮膚、てのひら、爪、耳、見ようによっては胸。

*

身のまわりにあるもの。

新聞、雑誌、ノート、本、メモ帳、ルースリーフ、ノートパソコン（キーボードおよび本体、モニター）、携帯電話（キーボードおよび本体、モニター）、クリアファイル、紙

幣、硬貨

テレビ（画面と本体）、カーペット、座布団、畳、戸・ドア、ガラス窓、障子、時計、カレンダー、写真、写真を入れるフレーム、引き出し、カーテン、鏡

フックに掛けてあるエプロン、そんなこと言ったら衣類ぜんぶ

菓の包み紙（プラスチック製）、皿、まな板、ふきん、見ようによっては食器ぜんぶ、フライパン、見ようにとっては鍋、鍋の蓋

ティッシュペーパー、トイレットペーパー

*

けっこう疲れますね。

身のまわりにあるべらべらしたものを探しているうちに、既視感を覚えました。あるものを探していたときと同じものを探しているのに気づいたのです。

四角いものです。人の作った、つまり人工の四角いものと言うべきでしょう。

人の作った四角いもの

過去の記事から引用します。どれもがイメージの韻というか、イメージを連想形式でつづったものです。

*

この部屋は和室なのですが、引き戸も長方形、サッシの窓も長方形、あと壁のカレンダーも、テレビとそのリモコンも、テーブルも、パソコンの画面も、ティッシュの箱も、本も新聞も棚も枠に収めた写真も、ぜんぶ長方形です。あ、畳を忘れていました。目につく正方形は座布団とカーペットくらいです。

寝るためにつかっている部屋もそうです。ベッド、シーツ、布団、枕、エアコン、エアコンのコントローラー、たんす。そして天井の羽目板が長四角です。夜は小さな電球の明かりのもとで寝ているのですが、目を開けると眼鏡を外した目にぼんやりとその羽目板の模様が見えて安心します。見慣れているからでしょう。

（拙文「【小説】正方形と長方形で悩む夜」より）

＊

人は長方形に囲まれて生きている気がします。生まれたばかりの赤ちゃんは、囲いというか長方形の枠の中にいます。そのあともたいていほぼ長方形の枠の中にいつづけます。家、建物、道路、乗り物、PC、スマホ.....。

人が亡くなると長方形の棺という枠に入ったまま長方形の炉という枠の中でくべられ、骨壺（これを入れる箱は縦に長細くないですか？）とか墓という枠に収められます。めちゃくちゃ言ってごめんなさい。

（拙文「【小説】夜になると「何か」を手なづけようとする」より）

＊

そういえば、空を見ても長方形は見当たりません。楕円形っぽい長方形にも見える視界の枠が感じられるだけ。お日さまも雲たちにも、お月さまも星たちにも、角というものが無い。直線もない。空に見える直線は電線と飛行機の跡の白い線くらいです。

そもそも四角や長方形や五角形や六角形は、自然界ではあまり目にしません。直線自体がまれなのです。そうしたものを自然から採取して見るとすれば、顕微鏡や電子顕微鏡という道具をもちいるしかない気がします。結晶には多面体が多いですね。つまり肉眼をふくめた五感では出会えない形ではないでしょうか。

要するに不自然なのです。人の五感で感知できる限りでの自然に反しているともいえそうです。反自然、不自然。ありえない、抽象、観念。そういうものには整然とした美しさがあるのでしょうか。端正なのです。

（拙文「【小説】分けるとか切るは、きっと人の中にあるのでしょうか」より）

＊文字もぺらぺら

よく考えると人の作った四角いものにはぺらぺらなものが、けっこうあると気づきます。

しかも四角いほうが大切にされている気がします。

きわめつけはお札でしょう。紙幣です。それに、クレジットカードも、ポイントカードも。将来は、紙幣が消えるのでしょうか。その前にぺらぺらした人類が消えるのでしょうか。

あと名札でしょうか。各人にとっていちばん大切なものである名前が文字としてしる

されている四角いぺらぺらです。

お札（おさつ）とな札（ふだ）とお札（れい）って似ていませんか？ そっくりに見える私は「似ている」に憑かれて疲れてるみたいです。とうとうか、「似ている」と思いはじめると何でも「似ている」ように見えます。このしつこさは被害妄想に似ています。

究極のお札はお札ではないでしょうか？ お札（ふだ）もお札（れい）でもなお札（さつ）です、念のため。個人的な印象を押しつける気持ちはありませんけど。

*

いずれにせよ、文字を書いたり、映したり（印刷やフォトコピーや端末のスクリーンに映す）、写したり（写本・筆写や印刷や複写）、それをまた移したりする（配布や翻訳や拡散）、ぺらぺら（紙や液晶画面のことです）が、ぜんぶ薄っぺらくて四角いことは注目に値します。

みなさんと私をつないでいる端末の画面というぺらぺらも四角いです。

そのぺらぺら上においての話ですが、私は文字、みなさんも文字です。お互いに顔も知らないし声を聞いたこともない仲です。文字どおり、文字同士としての付き合いです。

いま私は薄い液晶のスクリーン上に表示されている自分の入力した文字を見つめています。視覚的に厚みも深みも感じられない、つまり立体感に欠ける文字です。

ということは、ひょっとすると文字ってぺらぺらなのではないでしょうか。これまで考えたことがありませんでした（あたりして）。

ぺらぺら（紙や画面）にのっかかったり、うつったり、染みついたり、こびりついたり、貼りついたりしているのですから、文字はぺらぺらなはずです。いま文字のありようを体感した気分になり、どきどきしています。

*

「ぺらぺらしたもの」——。自分のことじゃないですか。へらへらしているとは以前から感じていましたが、ぺらぺらでもあるとは……。ぺらぺらがぺらぺらについて書くとは。

きのうの記事「仮象、化象」のしりとりで書いているようです。相変わらず適当な人間ですね。最近、連想というか、しりとりばかりで書いています。似ているを基本にしてイメージでつなげて言葉を連ねるのです。記事の章立てもしりとりなのです。呆廉想。

＊

人は「小さい」や「薄い」や「短い」をうまく利用しているようです。というか、小さくて薄くて短いものを作るのに長けているようです。身のまわりを見ると、そんなものに満ちています。人自身がそうだからでしょう。

人は自分に似たものを作り、自分の作ったものにさらに似ていく。

この辺については、以下の記事に書いています。

人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく - 星野廉のブログ

＊なぞる ＊人のつくるものは人に似ている ＊粋がぼやける ＊冷蔵庫はお母さんに似ている ＊粋、タブロー、スクリーン ＊粋、

horensou.hatenadiary.com

ぺらぺらについて、もう少し考えてみたい、連想してみたいと思います。引用します。たびたびごめんなさい。投稿できるうちに投稿したいという焦りはありますが、改めて記事を書く体力がないのです。

舌べろ

舌べろは方言なのでしょうか。

「べろ」という発音は舌に擬態しているように私には思えます。「べろ」をいう音を舌で転がしてみます。舌で舌を転がすのです。いやらしく聞こえたら、ごめんなさい。

ごいっしょに発音してみませんか？

ぺろぺろ、べらべら、べろべろ、あっかんべえ。べらべら、英語がべらべら、へらへら、へろへろ、れろれろ。

なんだか軽薄でいいですね。軽くて薄い感じ。親近感を覚えます。他者とは思えないのです。

*

ヨーロッパの諸言語で、言語を意味する言葉の語源が「舌」であるのは興味深いです。英語だと language であり、tongue ですね。

l と t では、舌の先が上の歯の後ろの歯茎に来ます。l ではぴったりと舌が貼りつき、t では軽く舌打ちする感じ。

ウラジーミル・ナボコフの L への、尋常ではないこだわりについて書いた記事がありましたので、以下に引用します。アート・ガーファンクルの動画を使って、英語の L と T の発音をねちっこく、しかも少々エロく語った記事です。

アート・ガーファンクルの大きめの口が大きく開いたときに見える舌の動きに注目してください。

私なんか、見入ってしまいます。同じ口、同じ舌の動きを真似ている自分がいます。自分が舌になっていくような不思議な気持ちになります。

これだけ口と唇と口蓋と舌の動きや形や構えがよく分かる動画は珍しいです。声もいいですね。会場であるセントラルパークの雰囲気も最高です。

では、以下に引用します。

*

* Like a :

L の舌先が口蓋に触れます。学校で習ったとおりです。i (アイ) ははっきり発音されます。little を正確に発音すると分かりますが、単語の冒頭に来る l と最後に来る l は微妙に異なり、冒頭の l は舌先を上歯の後ろにくっつけるように、最後や途中に来る l では舌先が口蓋の真ん中あたりに来ます。後者の場合には、口蓋にガムが張りついていて、それを剥がそうとする感じで息を吐くと「おー」みたいな深くこもった音になります。

したがって、little は「リロ」みたいに発音されます。apple が「アポ」に聞こえるのと同じです。「リトル」でも「アップル」でもありません。また、アルファベットの L は「エル」ではぜんぜんなくて「エオ」みたいに響きますね。要は舌先が口蓋の歯の近くではなく真ん中についていけばいいのです。

単語の最初に来る l を意識的にゆっくり発音すると、ウラジーミル・ナボコフの小説『ロリータ』の冒頭を思い出さずにはられません。

Lolita, light of my life, fire in my loins. My sin, my soul. Lo-lee-ta: the tip of the tongue taking a trip of three steps down the palate to tap, at three, on the teeth. Lo . Lee. Ta.
(太文字は引用者による)

ロリータ、我が命の光、我が腰の炎。我が罪、我が魂。ロ・リー・タ。舌の先が口蓋を三歩下がって、三歩めにそっと歯を叩く。ロ。リー。タ。
(『ロリータ』ウラジーミル・ナボコフ著・若島正訳・新潮文庫)

上で引用した原文に施した太文字の L と T をご覧ください(原文に太文字はありません)。やたら目につきますね。作者のナボコフが作品の冒頭で書いた部分ですから、選び抜いた語が並べられているにちがひありません。

これは、もはや L という音を賛美した詩ではないでしょうか。

身も蓋もない言い方になって恐縮ですが、こういう緻密かつ繊細な「音の芸術」は翻訳不可能だと思います。小説は散文なのですが、ここなんかはもう詩だと言いたいところです。詩、特に韻律のある詩を別の言語に翻訳すると別の詩になると言われますが、分かる気がします。

小説の言葉は目で見る文字としてだけではなく、朗読して味わうことができます。この部分は、特にそうです。ぜひ音読してみてください。上の引用では、(私が原文に施した)太文字の T と L に注意しましょう。

L と T は基本的に舌先が同じ位置にあり、T では上の歯のすぐ後ろにある口蓋を舌先が叩くというか弾くようにして発音されます。舌打ちにも近いです。ナボコフはそれを十分に意識しています。

ナボコフの L という子音に対する入れこみようは尋常ではありません。L フェチと言ってもお墓の下のナボコフさんは腹を立てないのではないのでしょうか。

(拙文「Lに魅せられた作家」より)

*

このさい、動画も貼り付けましょう。大好きで何度見たか分かりません。

(動画省略)

言の葉

「言の葉」という言い方の「葉」ですが、これも私にはべらべらに感じられます。葉には端や刃や羽とのイメージの韻——「は」という音だけでなく——も感じます。端っこ、鋼を薄くのぼした刃、薄く軽い羽という感じです。

学問的な関連については知りません。あくまでも個人的なイメージの連想を問題にしています。

さらに「言の葉」は、ヨーロッパの「言語」における「舌」のべらべらとイメージの韻を踏んでいる感じがします。英語でいえば、language と tongue です。

(※「韻を踏む」というのは、通常は言葉の音(おん)の一致や類似に注目して言葉を掛

けるレトリックを指します。「イメージの韻を踏む」とは、言葉の語義や、言葉の喚起するイメージの類似に注目して言葉を掛けるレトリックのことであり、私が勝手にそう呼んでいるだけです。）

＊

言葉（言の葉、言語）はぺらぺら。そんな気がしてきました。たしかにそのようです。とはいえ、これはあくまでも個人的なイメージの話であり、普遍を意識したり指向しているわけありません。

イメージの連想というか、直感とか直観というか、体感的な感覚が私は好きです。イメージとは個人的なものですから人それぞれであり、確認も検証もできませんが、だからこそ愛おしいのです。

おそらく死ぬ間際までついてきて、私を楽しませてくれるようなイメージなのです。大切にしたいと思っています。

ぺらぺらがぺらぺらを生む

いま私は薄い液晶のスクリーン上に表示されている自分の入力した文字を見つめています。視覚的に厚みも深みも感じられない、つまり立体感に欠ける文字です。

ということは、ひょっとすると文字ってぺらぺらなのではないでしょうか。これまで考えたことがありませんでした。

ぺらぺら（紙や画面）にのっかかったり、うつったり、染みついたり、こびりついたり、貼りついたりしているのですから、文字はぺらぺらなはずです。いま文字のありようを体感した気分になり、どきどきしています。

私は言葉を広く取っています。話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、視覚言語と呼ばれることもある表情と身振りも言葉と考えて生活しています。

で、思ったのですが、ぺらぺらだらけではないでしょうか。

舌もぺらぺら。発したとたんに消える声の存在感も薄くてぺらぺら。空気の振動であ

る声をとらえる鼓膜もぺらぺら。

手のひらもぺらぺら。手を使って書いたり入力する文字もぺらぺら。紙もぺらぺら。液晶画面もぺらぺら。

顔の皮膚を舞台とした表情もぺらぺら。

ぺらぺらとした網膜に映ってたちまち消える身振りもぺらぺら。

めちゃくちゃこじつけて、ごめんなさい。こんなことを書いている私もぺらぺら。さらに言うなら、へらへらでへろへろ。べろんべろんでないだけ、まし。

言葉は「うつる、写る、映る、移る」と親和性があるようですが、これは、ぺらぺらは「うつる」と親和性があるとほぼ同義ではないでしょうか。

＊

ぺらぺらな言葉から意味とイメージが立ちあらわれる。というか、人はぺらぺらに意味やイメージを取る。

意味とイメージは実体を欠いている。実体を欠いているのだから、その存在感はきわめて薄い。つまり、意味とイメージもぺらぺら。

ぺらぺらがぺらぺらを生む。

＊

それにしても、人はぺらぺらに取り憑かれているようです。ぺらぺらをせっせとつくり、ぺらぺらを写して増やし拡散し保存し、ぺらぺらに見入り、さらにぺらぺらをつくり.....。

ぺらぺらにはぺらぺらな文字や絵がうつっていて、人はそこにぶ厚かったり、とほうもなく深かったりする「何か」を見ているようです。さもないと、飽きもせずこれだけぺらぺらに執着するわけがありません。

言の葉を聞く

震える、届く、震える、聞く。

ぺらぺらした舌が放した（話した）、ぺらぺらした声が、ひらひらと空気を震わせながら、ぺらぺらした耳たぶに届き、その奥にあるぺらぺらした鼓膜を震わせる。

言の葉を書く、写す、映す

話す、放す、映す、写す、書く。

ぺらぺらした舌が放した（話した）、ぺらぺらした声が、今度はぺらぺらした文字という影に落とされ、その影がぺらぺらした紙に映る、写る。つまり書かれる。

言の葉を見る・読む

映る、見る、眺める、読む。

ぺらぺらした紙に映った（書かれた）文字が、ぺらぺらしたまぶたの奥にある、ぺらぺらした網膜に映る。つまり、見る、眺める、読む。

ひょっとすると、見られた、あるいは読まれたときには、ぺらぺらした網膜に映る影が、ぺらぺらした心のスクリーンに映るのかもしれない。

心のスクリーンに映るのかもしれない意味やイメージや物語は、残念ながら目には見えない。

言の葉を写す、言の葉を移す

写す、移す、掻く、書く、染みる、刻まれる、印刷する。

ぺらぺらした紙に写った、移った、掻かれた、書かれた文字（インクの染み）が、別のぺらぺらした紙に写される。筆写や印刷。

＊

移す、広げる、配布する。

ぺらぺらした紙に写った（書かれた）文字（インクの染み）が、紙にのったまま、あちこちに移される。配布。

＊

写す、書く、染みる、移る、つながる、かさなる、翻訳する。

ぺらぺらした紙に写った（書かれた）文字（インクの染み）が、別のぺらぺらした言葉の葉の文字に移されることもある。翻訳。

英語と日本語に話をしぼりますが、単語、フレーズ、センテンス、文章、あるいは作品のレベルで、対訳でくらべた場合に、両者は別物（同一ではないという感じ）であり、「似ている」でも「同じ」でも「違う（異なる）」でもなく、強いて言えば「つながっている」と感じます。

翻訳は「つながっている」とか「かさなっている」というのが私の印象です。
（拙文「つながる、かさなる、むすぼれる」より）

ほんやく（translation）は翻訳とも反訳（速記なんかでは「ほんやく」という作業もあるようです）とも書くみたいですが、「ひるがえす・翻す」が見えてそのイメージにわくわくします。ひらりとひっくり返すとか裏返すという感じです。

ぺらぺらをひらりとひっくり返しても、やっぱりぺらぺら。

＊

投稿する＝複製する＝拡散する＝保存する、映す、写す、移す。

デジタル化された情報（信号）が、ぺらぺらしたスクリーンに視覚化されて映る文字（画素の集まり）は、同時に、別のおびただしい数の端末のぺらぺらしたスクリーンに視覚化されて映る。ネット上では投稿、複製、拡散、保存がほぼ同時に起きます。

ぺらぺらというイメージの韻

以上、ぺらぺらという個人的なイメージを感じる、言の葉、舌、まぶた、耳たぶ、目の網膜、耳の鼓膜、紙、スクリーン、声、文字といったものたちを、ぺらぺらという言葉に掛ける形で、遊んでみました。

いや、むしろ遊んでもらったという気がします。あくまでも戯れです。

ぶっちゃけた話がこじつけです。

ぺらぺらという動き（これが動きであればですが）やイメージのシンクロという言い方もできるかもしれません。

＊

ところで、言の葉、舌、まぶた、耳たぶ、目の網膜、耳の鼓膜、紙、スクリーン、声、文字は似ていますか？ 見えないものがありますが、見たときに似ていると感じますか？

人それぞれですよ。またはケースバイケースだと思います。そのときの気分でも変わる気がします。

要するに、こじつけなのです。

孤独な賭け

どちらにせよ、アルミ缶とミカンの数々の特性の中で、音の類似、つまり言葉として似ているという点が、一瞬両者をつないだのです。簡単に言うと、言葉が事物同士を一瞬つないだのです。

（拙文「駄洒落と比喩と掛け詞」より）

言の葉、舌、まぶた、耳たぶ、目の網膜、耳の鼓膜、紙、スクリーン、声、文字のそれぞれが持つ数々の特性の中で、イメージの類似、この場合には「ぺらぺら」という薄っぺらいものとしてのイメージが、私の中で一瞬ぜんぶをつないだのです。

掛け詞や駄洒落で掛ける要素である、発音や文字の形は、人の外にあるものですから、聞いて、あるいは見て一致や類似が確認できますが、イメージは人の中にあるものですから、確認も検証もできません。

*

私が勝手に作った言い回しである「イメージの韻を踏む」というのは、やはり言葉の喚起するイメージの類似に掛ける比喩に近いのかもしれませんが。

いずれにせよ、個人的なイメージに頼る孤独ないとなみなのです。ギャグといっしょで、誰かに受けるか受けないかは、賭けだとしか言いようがありません。

掛け詞も駄洒落も比喩も、そしてイメージの韻も、誰かが乗ってくれるかどうかにかかっているという意味では、賭けだと言えそうです。しかも孤独な賭けなのです。

とどかない

ヒトはヒトという生き物の知覚と認知機能という枠の中で生きています。世界とか森羅万象とか宇宙という言葉をつくっていますが、それが指すものにはとどかないのです。

それが指すものがとうてい届かない、努力目標としか思えない言葉が多いようですが、そうした言葉に憑かれ疲れる人も多い気がします。

世界と呼ばれるものや宇宙と名づけられたものと無媒介的に触れあうことなどなく、隔靴搔痒の遠隔操作をしながら生きているという意味です。

何かに追いかけて必死で走る夢を見たことはありませんか。

走っても走っても、走っていないようなのです。一生懸命に（命を懸けて）足を動かし手を振っているつもりなのにぜんぜん進んでいないのです。つまり、あがき、もがいているだけ。

これは駆けても駆けてもじつは駆けていないとも言えます。賭けても賭けてもは賭けていないと激似ではありませんか。もどかしい限りです。

気に掛けても掛けても、じつは掛けたことにはならない。絵を描いても描いても、じつは描けてはいない。文章を書いても書いても、じつは書いてはいない。

隔靴搔痒の遠隔操作。まるで夢の中。知覚機能を用いる限り対象には触れることができない。言葉を使う限り直接的に森羅万象を相手にすることはできない。

駆けても駆けても駆けてはいない。掛けても掛けても掛けてはいない。搔いても搔いても搔けてはいない。書けても書けても書けてはいない。要するに、そういうことです。

どう足搔いても藻搔いても現実にたどりつけない私たちは、覚めた夢の中にいるのかもしれない。

(拙文「書いても書いても書いてはいない。」より)

たどれない

オノマトペに限らず、言葉がずっと入ってきたり、ずっと出ていくとき、その言葉は「何かに似ている」というよりも「単に似ている」として入ってくるのではないか。そんな気がしています。私の好きな言い方をすると、本物のない複製の複製であり、起源のない引用の引用です。

「ずっと入ってくる」「ずっと出ていく」がポイントです。意味を考えたり意識したりはしていない状態です。その時点では意味なんてないのです。「似ている」だけがある感じ。オノマトペに限りなく近くなっている状態をイメージしてください。

くり返しますが、どんな言葉でも、フレーズでも、センテンスでもいいのです。オノマトペとか、感動詞とか、決まり文句とか、流行語に近い感じ。条件反射的に、または生理現象のように、ずっと入ってきて、ずっと出ていくのです。

(拙文「美しいって、何が？」より)

言葉が生まれた。

流行語も新語も、ある言い方や言葉を少し変えたり、組み合わせたという意味で引用であり複製です。引用にも複製にも、ずれが生じます。まったく新しい言葉とか言い回しは可能なのでしょうか。

言葉が生まれた。

このセンテンスというか言い回しは、常に過去形ではないのでしょうか。

人類にとっての言語というレベルでも、ある特定の言語というレベルでも、方言（方言

と言語の定義は曖昧ですが、「言語（国語）とは軍隊を持った方言である」というフレーズが至言だと思います）というレベルでも、ある話し言葉の単語や言い回し、またはある書き言葉つまり文字の書き方や綴りというレベルでも、言葉の始まりというのはたどることが不可能な夢のようです。

それだからこそ、さまざま人がこれまでに夢見て語ってきたのでしょう。タイムマシンの発明が実現するまでは諸説ありの神話でありつづけるのかもしれませんが。

言葉と影に先に立たれる

人は時をさかのぼることができません。過去は忘れるか、覚えているか、思い出すか、記録（暗唱、文字での記述、絵や撮影をふくむ映像化、デジタルデータ化）するか、たどって想像するか、他の人と共同であるいは一人で決めるか、でっち上げるしかできないのです。

人にとって、「はじまる」「はじめる」「はじまり」は、「いま」か、「これから」でしかなく、その「はじまる」「はじめる」「はじまり」は、もはや「くりかえす」「くりかえし」でしかない気がします。

「はじまる」「はじめる」「はじまり」は永遠に失われているという意味で、人にとっては抽象でしかないのかもしれませんが。知識と情報としてでさえ、その存在はあやしく危ういのです。この場合の抽象というのは「失われている」、つまり「ない」、言い換えれば「過去」だという意味です。いましているのは、言葉の話です。

*

もはや、おそいのです。おくれたし、おくられているし、おくれつづけるのしょう。まるで影のようではありませんか。

影に気づいたとき、人はすでに影に先に立たれているのです。人が先に立って、できたはずなのにです。

影とは言葉のこともあります。比喩とも言えるでしょうが、どっちがどっちの比喩なのかが不明なのです。いまはそういう話をしているのです。

言葉に気づいたときには、人はすでに言葉に先に立たれているのです。人が先に立って、できたとか生まれたはずなのなのです。

かつて先立ったはずの私たちが、いつのまにか影や言葉に先立たれ、その私たちがいつか影や言葉に先立つことになる。「先立つ」には「前に立つ」や「先に起こる」と「先に亡くなる」の両義があります。

ことのはに さきだつひとを おくるかけ
(拙文「影に先立つ【引用の織物】」より)

人が先か、影が先か、言葉が先か。

似た話がありますね。こけこっこー。ぼとり。

人が先だというのは抽象ではないでしょうか。影に気づいたときや、言葉に気づいたときには、人はもう後れて遅れているのですから。

言葉は影、影は言葉。

影と言葉がはじまった、つまり生まれたとき、人は人になったのであり、人は人として生まれたのではないのでしょうか。

短絡を覚悟で言えば、影というものを人が認識したとき、言葉というものを人がつかいはじめたとき、影と言葉が生まれた、つまりはじまったのです。

こうも言えるでしょう。はじまりを意識したときには既に、はじまりに後れていて遅い、はじまりを口にしたときにはさらに遅い、はじまりを文字にしたときにはもっと遅い、と。はじまりを言葉や影に置き換えても同じです。何でも、そうなのです。追いつけないのです。

とどかない、たどれない、追いつけない、はひょっとすると同じなのです。または、つながっているのかもしれない。

でまかせで言いましたが、もうそうであれば、「はじまる」「はじめる」「はじまり」をたどれるでしょうか。

＊

人は「はじまる」「はじめる」「はじまり」をイメージして、「はじまる」「はじめる」「はじまり」という言葉をつくったのかもしれませんが。

「はじまる」「はじめる」「はじまり」が「過去をさかのぼる」あるいは「たどる」ことではなく、人にとって「はじまる」「はじめる」「はじまり」とは「これから」つまり未来での動作と出来事でしかないことは興味深い事実です。「これから」「つくる」のです。

過去も「はじまり」も未来であるというのが、人にとっての現実なのです。「はじまり」も「過去」も「起源」も、「これから」「先に」仮設し仮説し架設するかないという意味です。虚構をつくるとか、こしらえるとも言えます。

「はじまり」も「過去」も「起源」も言葉ですから、当然のことながら、言葉で、こしらえるのです。

これを逆説だか詭弁だととらえるのは自由ですが、逆説なんて言葉でまとめたところで、気安めになっても事態は変わりません。

言葉をつかう限り、記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもあるのです。⇒拙文「記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。」

＊

現実には現実の文法があり、思いには思いの文法があり、言葉には言葉の文法があり、イメージにはイメージの文法があると私はとらえています。この場合の文法とはもちろん比喻です。

現実と意思とイメージと言葉が別物だからです。

逆説とかトートロジーとかいう言葉でまとめて思考停止するのは、言葉の文法にこだわっているからだと思えます。一対一に対応しない別物のあいだに食い違いがあるのは当然なのです。

人は言葉での辻褃合わせや帳尻合わせにこだわりすぎている気がしてなりません。このことに敏感だったのはニーチェであり、ジル・ドゥルーズだったように私はイメージしています。

*

言葉で現実の帳尻合わせをするより、言葉が喚起するイメージと積極的に戯れるのが、私は好きです。わくわくするからです。

長い記事を投稿して疲れしました。しばらく夢路をたどりたいと思います。

#言葉 # 言の葉 # 引用 # 複製 # イメージ# 連想 # 文字 # 漢字 # 日本語 # 影 # 夢
掛け詞 # レトリック

11/18 異なる、事なる、言なる*

＊

異なる、事なる、言なる

星野廉

2022年11月18日 11:43

人は「似ている」の世界に生きている気がしてなりません。あくまでも私的なイメージの話なのですが、「似ている」が地、「異なる」が図で、地に図が浮かんで見えるという感じです。ぼーっとしていれば地で、目を凝らしたりしゃきっとすれば図になるという感じ。ところが、目を凝らして見ているはずの「異なる」は見えていないのです。「見る」という「事」と「見る」という「言」が見えなくしてしまうからです。

○

似た音、似た形、似た動き。こうしたものは人を安心させます。

人は「似ている」が好きなのです。似たものをしきりに目で追う赤ちゃんを思いうかべてください。

人にとって「似ている」がまっ先にある感じで、「似ていない」はぜんぶ「異なる」とか「違う」になります。

とはいえ、人には「異なる」がとらえられないようです。たぶん、すれ違ってしまうのです。「異なる」は、逸れる、すれる、外れる、誤る、ずれる、すれ違う、たがう。

ひょっとすると怖くてまともに向きあえないのかもしれませんが。見えていない振りをしている可能性も濃厚です。

「似ている」を見ているほうがずっと楽でしょうから。

○

異なる、事なる、言なる。

異になる、事になる、言になる。

異にする、事にする、言にする。

物にする、手にする、口にする、耳にする、文字にする、絵にする。

物になる、手になる、口になる、文字になる、絵になる。

物した、手にしたと言っても、物にも手にもしていない。事をいだし、それを言葉にしたところで、何も物にしていないし手にしてもいない。

「する」は「しない」、「なる」は「ならない」。

異、事、言。

#レトリック詞 # 漢字 # 大和言葉 # 和語# 掛け詞 # レトリック

11/19 世界は「ある」というよりも「似ている」

＊

世界は「ある」というよりも「似ている」

星野廉

2022年11月19日 07:49

「似ている」とは、何かとつながり、かさなる「気持ち」のことです。自分が何かに、うつる「気持ち」でもあります。人にとって世界は「ある」のではなく、ただ「似ている」のです。人は世界が「ある」と考えることがありますが、見えるのは「似ている」だけ。「何が」も「何かに」もない「似ている」です。「似ている」を何度もなんども、なぞるのです。「何が」と「何かに」はその時々によって移り変わります。雲と同じです。

○

なぞる。形をなぞる。何か分からないままになぞる。形が動きに換わる。静が動になる。形が時に移り変わって模様になる。ああ、あれだ、あれに似ていると思う。そのうち、変わる。目が追う、指がなでる。そのうち、また変わる。なぞりながら口が開き、舌がうごいて声が出てくる。全身で形と模様を追いかける。駆けても駆けても追いつけない。夢の中の景色に似ている。もう、夢の中。なぞるはなぞ。だから、なぞるをなぞる。

○

目の前の形が変わっても、目をつむることで、なぞるを続けることができます。何度もなぞる。なぞるをくり返すのです。そのうち、なぞるが心にうつってきます。

写ってくる、映ってくる、移ってくる。

閉じていた目を開けると、なぞっていた形はもうありません。形は自分の中で残っているのです。

外にあったものが、いまは中にある。

なぞる。似ているをつくる。似ているに変える。似ているになる。

変える、帰る、還る。

#短文# 散文# 似ている # なぞる # 雲 # 形 # 夢

11/20 ならう、なれる、ならず、素地

＊

ならう、なれる、ならす、素地

星野廉

2022年11月20日 08:03

目次

習うより慣れよ

素地、下地

似ているから憎いし怖いし嫉妬する

A) どっちが怖い？

B) どっちが怖い？

習うより慣れよ

「ならう」と「なれる」は似ています。narau、nareru。字面も音も似ています。「習う」と「慣れる」を思いえがいてみましょう。

何度もくり返して漢字の練習をしていたころの自分を思い出します。ずいぶん苦労したものです。

初めは他人に習っても、後は自分一人でもくり返しながら慣れていくしかありません。習うときに頼るのは他人、慣れるときに頼るのは自分しかいない。やっぱり、習うより慣れよ。

素地、下地

「ならう」と「なれる」から「ならす」を連想します。地面を「均す」さまと、動物を「馴らす」様子が頭に浮かびます。

根気よくくり返す。これが「ならう、なれる、ならず」です。でも、どんなにくり返しても、素地や下地がなければ、かなわない気がします。

おさるさんはヒトの真似をすることも、真似をさせることもできますが、文字を覚えたという話は聞いたことがありません。素地がないからではないでしょうか。

似ているから憎いし怖いし嫉妬する

おさるさんとヒトは似ています。面白いほど似ているし、腹が立つほど似ているし、悲しくなるほど似ているし、笑いたくなるほど似ているのです。要するに、人は複雑な思いをいだいて見てしまうようです。

何かに似ていませんか？ 私はロボットとAIを連想します。ヒトは自分ときわめてよく似たものに対して、なぜか複雑な感情を持ってしまうみたいです。嫉妬、憎しみ、嫌悪、軽視、怒り、恐怖。

A) どっちが怖い？

怖かったり憎かったり嫉妬してしまうのは、どっち？

言葉を真似るサルと言葉を真似るオウム。

言葉を話すサルと言葉を話すオウム。

歌を歌うサルと歌を歌うオウム。

絵を描くサルと絵を描くオウム。

絵を描くサルと絵を描くAI。

文字を写すサルと文字を写すオウム。

詩を書くサルと詩を書くAI。

小説を書くサルと小説を書くAI。

気になるのは、どっちですか？

で、それは、なぜですか？

B) どっちが怖い？

怖かったり憎かったり嫉妬してしまうのは、どっち？

ヒトと会話するサルとヒトと会話するオウム。
作曲するサルと作曲するオウム。

抽象絵画を描くサルと抽象絵画を描くオウム。
具象絵画を描くサルと具象絵画を描くオウム。

抽象絵画を描くサルと抽象絵画を描くA I。
具象絵画を描くサルと具象絵画を描くA I。

A I の解説を書くサルとA I の解説を書くA I。
難解な詩を書くサルと難解な詩を書くA I。

娯楽小説を書くサルと娯楽小説を書くA I。
純文学小説を書くサルと純文学小説を書くA I。

危機感を覚えるのは、どっちですか？

で、それは、なぜでしょうか？ いっしょに考えてみませんか。

#短文 # 小説 # 詩 # 言葉 # 絵画 # サル # オウム # 模倣 # 嫉妬 # 恐怖

11/20 起源のない反復、手本のない模倣

＊

起源のない反復、手本のない模倣

星野廉

2022年11月20日 12:32

何度もなんども「なぞる」を繰り返すとどうなるでしょう。何をなぞっているのかが分からなくなりそうです。とにかくなぞっている、なんとなくなぞっている。対象がなくなる、起源がなくなる、手本がなくなる。ないない尽くしです。起源のない引用の引用、本物や実物のない複製の複製。起源のない反復。手本のない模倣。ないない尽くし。学習、知識、情報のことではないでしょうか。何よりも、その根っこにある言葉のことではないでしょうか。

○

鏡の向こうに入っていく。笑っていた猫の笑いだけが残っている。不思議な話があります。話ですから、言葉から成りたっているのですが、それが読む人や聞く人の中にイメージを生みます。現実ではありえない事が、言葉の世界ではありえる言としてあるのです。異なる世界、言なる世界、事なる世界。現界、言界、幻界。現実、言葉、イメージと読みかえてもいいでしょう。イメージするしかないようです。イメージをイメージするのです。

○

なにしろ、人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物なのです。考えれば考えるほど、自分に当てはまります。いまでもやっていますね。

○

オノマトペに限らず、言葉がすっと入ってきたり、すっと出ていくとき、その言葉は「何かに似ている」というよりも「単に似ている」として入ってくるのではないか。そんな気がしています。

「すっと入ってくる」「すっと出ていく」がポイントです。意味を考えたり意識したりはしていない状態です。その時点では意味なんてないのです。「似ている」だけがある感じ。「何が」も「何に」もない、ただ「似ている」です。

くり返しますが、どんな言葉でも、フレーズでも、センテンスでもいいのです。オノマトペとか、感動詞とか、決まり文句とか、流行語に近い感じ。思考停止とか判断停止とまでは言いませんが、無意識のうちにとりつか、条件反射的に、または生理現象のように、すっと入ってきて、すっと出ていくのです。

あらゆる言葉が決まり文句であり紋切り型ではないか。最近、よくそう思います。さもなければ、あんなにすっと入ったり出たりしないでしょう。

○

気になる名前、固有名詞を挙げてみます。ギュスターヴ・フローベール作『ボヴァリー夫人』『紋切型辞典』『ブヴァールとペキュシェ』、ホルヘ・ルイス・ボルヘス作『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール』、ミゲル・デ・セルバンテス作『ドン・キホーテ』、ローレンス・スターン作『トリストラム・シャンディ』、ルイス・キャロル作『鏡の国のアリス』『不思議の国のアリス』、オスカー・ワイルド作『ドリアン・グレイの肖像』。

○

固有名詞は引用であり複製であり反復であり模倣でもあります。起原のない引用の引用、本物や実物のない複製の複製。起原のない反復。手本のない模倣。学習、知識、情報。名前は最小最短最軽の引用、なかでも固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用。名前を唱える行為は、「それが指ししめす者や物や事に、なる・なりきる」儀式。威を借りるわけですが、既に何度もなぞられたものを借りるのですから楽です。嗜癖します。現にそうなっているようです。

#なぞる # 複製 # 引用 # 起源 # 反復 # 模倣 # ルイス・キャロル# フロベール # フ
ローベール # イメージ

11/21 外見、素地、意味

＊

外見、素地、意味

星野廉

2022年11月21日 07:42

「ならう、なれる、ならず、素地」という記事で、二組の質問集を設けました。「A) どっちが怖い？」と、「B) どっちが怖い？」です。A) ではよくある質問を、B) ではややトリッキーな質問を入れてあります。B) の質問は以下の通りです。

ヒトと会話するサルとヒトと会話するオウム。

作曲するサルと作曲するオウム。

抽象絵画を描くサルと抽象絵画を描くオウム。

具象絵画を描くサルと具象絵画を描くオウム。

抽象絵画を描くサルと抽象絵画を描くA I。

具象絵画を描くサルと具象絵画を描くA I。

A I の解説を書くサルとA I の解説を書くA I。

難解な詩を書くサルと難解な詩を書くA I。

娯楽小説を書くサルと娯楽小説を書くA I。

純文学小説を書くサルと純文学小説を書くA I。

今回は、上のB) の質問について記事を書いてみます。なお、サルとオウムが出てくるのは、猿真似とか鸚鵡返しという言い回しがあるからです。

目次

猿真似、オウム返し

ヒトにとっては見た目が大切

素地があるかどうか

意味が分かっているのか

どういう意味なのだろう？

書いても書いても歯痒い

猿真似、オウム返し

ヒトとよく似た生き物が、ヒトそっくりなことをすると、ヒトは複雑な思いをいだきがちです。ただし、それがただの真似の場合には笑って済ませられます。真似ではなく学習した結果だったら、これは笑って済ますわけにはいきません。おそらく世界的なニュースになり、年表に載るくらいの歴史的な大事件になりそうです。もしかすると、国や地域によっては国家秘密として隠蔽されるかもしれません。それくらい人類にとっては恐ろしい話なのです。

ヒトにとっては見た目が大切

ある生き物がヒトの言葉を話したり書いたり、ヒトとそっくりな身振りをしたりする。これはある意味不気味です。ぎょっとしたり、鳥肌が立つ人もいるでしょう。

その生き物の外見がヒトと似ているほど不気味だろうと考えられます。キツネザルとオランウータンだったら、どっちが不気味でしょう？

キツネザルはその名の通りキツネに似ていて、それがサル的一种だったという知識がないとサルには見えません。キツネザルの素性は解明されましたが、改名はまだなようです。

知識や情報より見た目。人は「似ている」を重視するのです。

素地があるかどうか

ヒトと会話するオランウータンがアメリカの大学の研究所にいるらしい――。

こんなニュースか話を聞いたとします。なんだかありそうに思えませんか？ ヒトの言葉を話すためには、それなりの声帯や口や鼻の構造を備えていなければなりません、オランウータンなら、なきにしもあらずという気がします。

あと素地です。オランウータンなら、脳内での突然変異か何かの理由で、ヒトの言語を習得できる個体が生まれてもおかしくない。そんな思いが私にはあります。

意味が分かっているのか

ヒト以外の生き物が、ヒトと同じ、またはそっくりな行動をした場合には、その意味が分かっているのかどうか、厳密に言えば、ヒトと共通した意味を認識しているかどうか、大きな意味を持つと考えられます。

おさるさんとオウムさんには失礼ですが、猿真似やオウム返しではヒトにとって大きな意味を持ちませんから。

何と言ってもヒトにとって、意味がいちばん意味があるのです。意味、意味って、意味には複数の意味があり、ややこしいですね。私は辞書で「意味」の語義をながめながら、しょっちゅう首を傾げています。どういう意味なのだろう、と。

どういう意味なのだろう？

どちらに危機感を覚えますか？

具象絵画を描くサルと具象絵画を描くオウム。
抽象絵画を描くサルと抽象絵画を描くオウム。

具象絵画を描くサルと具象絵画を描くA I。
抽象絵画を描くサルと抽象絵画を描くA I。

詩を書くサルと詩を書くA I。
難解な詩を書くサルと難解な詩を書くA I。

小説を書くサルと小説を書くA I。

純文学小説を書くサルと純文学小説を書くA I。

意味深っぽいですね。どっちに危機感を覚えるか？ こんな質問をするなんて、なんだか魂胆がありそうな気がします。とくに「抽象絵画」と「難解な詩」と「純文学」という部分に。

「訳が分からない」という意味なのでしょうか。

いや、意味深っぽいだけで、浅い意味はあっても深い意味なんてないのかもしれませんが。私の書いた質問だとは言え、意味は私を離れているのです。言葉に対しては、それを書いた私もその意味を探る側にいるという意味です。

書いても書いても歯痒い

なにしろ、人は「○△X」という言葉やフレーズを話したり書いて、その次に「○△Xの意味は何か？」と問い、思い悩む生物なのです。考えれば考えるほど、自分に当てはまります。いまもやっていますね。

話す、放す、離す。もう届かない。

搔いても搔いても痒い。書いても書いても歯痒い。

*

「何これ？ 何を描いているの？」「抽象絵画だよ」

「怖い顔して何を書いているの？」「難解な詩（純文学）です」

そもそも難解なものや抽象的なものや意味深長なものや意味不明なものに意味があるとは限らない気もしてきました。とはいえ、「無意味」を辞書で引くとその意味がいくつも並べてあって悩みます。辞書は当てにならないのかもしれませんが。歯痒いです。冗談はさておき、辞書を離れて、もっと考えてみます。

#意味 # 模倣 # 学習 # サル # オウム # 生き物 # 絵画 # 詩 # 小説 # 言葉 # 身振り

文字

11/21 何かに似ている世界、「何か」のない「似て
いる」だけの世界

＊

何かに似ている世界、「何か」のない「似ている」だけの世界

星野廉

2022年11月21日 11:49

目次

「似ている」の世界の住人

「何かが」と「何かに」がない「似ている」

「似ている」のない世界

「似ている」の世界の住人

人は「似ている」の世界に住んでいるようです。昔からある動植物の名前を思いうかべると、その根っこに「似ている」がある気がします。

まるであだ名のようなのです。つい笑ってしまうとか、ずいぶんひどい名前だなあ、失礼だなあと思うこともあります。悪意すら感じられるネーミングもあります。

生き物だけではなさそうです。山、川、池、岩、月の模様や雲の様子や星座までに、あだ名みたいな名前がついていることがあります。

生きていない物を、生きている物の名前にちなんで名づける。逆に、生き物に生きていない物の名前をかぶせて名づける場合もあります。

森羅万象に「似ている」を基本とした名前を付けることがある。やっぱり、人は「似ている」の世界に住んでいるようです。

「何かが」と「何かに」がない「似ている」

何かが何かに似ている。これは、何かに何かを見ることですが、「何かが」と「何かに」がない「似ている」もある気がします。言葉を離れるとか、言葉が意識されない状態です。もっと詳しく言うと、心が言葉と事物を離れてしまうのです。

ぼーっとしている状態です。それでいて意識はあります。ただ言葉が浮かんでいるわけではない。あれはあれだ、これはこれだと物や事をはっきりと意識しているわけではない。見えるけど凝視や注視しているわけではない。

こう言うと、なんだか危うい精神状態ではないかと思えますが、これが自然体というか普通なのではないでしょうか。日常生活でよくある心もちなのです。

しょっちゅう言葉を意識していたり、言葉を意識しなくても、つねに「あれ」は「あれ」だ、うんうん、OK、「これ」は「これ」だ、そうそう、大丈夫大丈夫なんて確認していたら、疲れませんか？ 人は無駄に疲れずにできている気がします。

うまく「スリープ」「待機中」の部分で脳につくっているのではないのでしょうか。部分的に、です。どこかは、しゃきっとしているのです。たぶん意識はまだら状で、まばらな濃淡があるのだろうとイメージしています。その濃淡は時によって移り変わる気がします。

「似ている」のない世界

「似ている」は人の気持ちを静めます。何だか分かんないけど何となく「似ている」。この「似ている」は安心感を与えてくれるのです。

「似ている」は懐かしい気持ちでもあります。まだ言葉も知らず、事物という観念も知らなかった赤ちゃんだったころに、似ているものを目で追い、目でなぞっていたのがずっと記憶に残っているのかもしれない。

とはいえ、赤ちゃんを卒業した人なんていないのです。誰もが赤ちゃんの状態を死ぬまで大切に持っている気がします。

*

「似ている」のない世界を想像してみましょう。何一つ、見たこともない気がするのです。言葉も浮かびません。形も姿も模様も景色も、統一感のないばらばらのものとして目に映るのかもしれない。

これまでのどの記憶にもない、見慣れないものだらけの世界にいきなり放りこまれた感じです。「何だ、あれば、何だ、これは」だらけで、それがずっと続くのです。

「ここは、どこなんだ」でしょうね。いや、そう思う余裕もないかもしれません。きっと緊張の連続で疲れるでしょう。そんな世界にいたら、心が壊れるにちがいありません。体も持たないはずです。想像しただけで全身に汗が出てきました。

私は「似ている」に囲まれているほうが安心します。いろんな名前に囲まれている、いまここが楽しいです。

#似ている # 名前 # 名づける # 森羅万象 # 意識 # 言葉 # 赤ちゃん

11/22 固まる言葉、踊る言葉、空回りする言葉

＊

固まる言葉、踊る言葉、空回りする言葉

星野廉

2022年11月22日 08:01

○

「ずっと入ってくる」「ずっと出ていく」がポイントです。意味を考えたり意識したりはしていない状態です。その時点では意味なんてないのです。「似ている」だけがある感じ。「何が」も「何に」もない、ただ「似ている」です。

くり返しますが、どんな言葉でも、フレーズでも、センテンスでもいいのです。オノマトペとか、感動詞とか、決まり文句とか、流行語に近い感じ。思考停止とか判断停止とまでは言いませんが、無意識のうちにとというか、条件反射的に、または生理現象のように、ずっと入ってきて、ずっと出ていくのです。

あらゆる言葉が決まり文句であり紋切り型ではないか。最近、よくそう思います。さもなければ、あんなにずっと入ったり出たりしないでしょう。

○

あらゆる言葉が決まり文句だという気がしてなりません。言葉は人が決めたものですから、決まった文句で決まり文句だとしても不思議はないわけです。

決まり文句にはネガティブな語義や意味やイメージもありますから、あらゆる言葉が決まり文句だなんて言うと文句を言われそうです。

決まり文句で連想する言葉を挙げてみます。

常套句、クリシェ (cliché)、月並み、紋切り型 (形)、定型、ステレオタイプ (stereotype)、典型、成句、熟語、慣用句、慣用、おきまり、十八番、マンネリズム、ワンパターン、パターン、文体、スタイル、様式、様式美、流儀、芸風、刻印、ギュスターヴ・フローベール (Gustave Flaubert) 作の『紋切り型辞典』(Le Dictionnaire des idées reçues)、set phrase、fixed expression、美辞麗句、疑似麗句

いずれにせよ、凝り固まっている、固定されている、動かない、変わらない、変えない、融通がきかない、柔軟性に欠ける、しつこい、居すわる、よどむ、という感じですが、この私のイメージには私の感情がこもっていますね。私の嫌悪感とか苦手意識とか自意識が出ている気がします。

イメージは個人的で私的なものだとつねづね感じているのですが、まさにそんな感じの連想になっています。

○

民主主義、謙虚に、真摯に、誠実に、スピード感を持って、良心に恥じない.....

公明正大、平等、倫理的、中立.....

絶賛された、評価の高い、今世紀最大の、誰もが泣いた、感動的、世界で最も.....

論理的、普遍的、客観的、真理.....

○○らしい、○○らしく、○○であるなら、本来あるべき○○の姿.....

美しい、本当の、本物の、真の、本来の、理想的な、正しい.....

○

大切なことは、言葉は物 (空気の振動、インクの染み、画素の集まり、デジタル化されたデータ) であることです。文字であれば不変で不動なまま残りつづけます。言葉自体には感情も心もありません。魂はある気がしますけど。

言葉に感情と心を、そして意味やメッセージやイメージを込めたり、見たり読んだり聞いたり感じるのは、人なのです。

踊る言葉、いや正確には踊る人心でしょう。それも乱舞です。

「言葉がひとり歩きをしてしまい……」、冗談じゃないです。言葉を空回りさせているのはニンゲンでしょう。

だからこそ、言葉は愛しいのです。愛しいと感じ、いたわり、大切にするのは人です。ニンゲンしかいません。

#言葉 # 決まり文句 # 定型 # 紋切り型 # 文字 # 意味 # イメージ# メッセージ

11/23 近くて遠い、まぼろし

＊

近くて遠い、まぼろし

星野廉

2022年11月23日 12:49

○

あなた、貴方、彼方、あなたは近くて遠い、まぼろし。

○

「向こう」とか「遠く離れて」の「あなた・かなた・彼方」から転じて（要するに間違えたり、ずれたりして）、「(向こうという意味の) あっち」とか「(向こうにいる) あのかた」となり、いろいろすったもんだありまして、とにかく「you」の意味の「あなた・貴方（貴男・貴女）」が生まれたらしい。

○

「あなた」＝「I love you. (愛しいあなた)」説。これでは「かなた」の意味がすくえませんが。

じゃあ、「あなた、貴方＝you、彼方＝over there」なのですから、音感的には「あなた・貴方」＝「I love you.」で、意味的には「あなた・彼方」＝「I miss you. (目の前にいないあなた)」では、どうでしょう。

つまり、「あなた」＝「I love you. (only you)」＋「I miss you. (without you)」説。

○

あなた、貴方、彼方、あなたは近くて遠い、まぼろし。あなたが見えるときには、もうひとりのあなたが見えない。

文字に似ています。文字を見ていると、とたんに読めなくなります。文字や活字は、目の前の「あなた」。読めなくなるのは、かなたにいる「あなた」、意味だったりイメージだったり光景だったりストーリーだったりします。同時には見えないのです。そのどちらもが「あなた」なのに。

文字であるあなた、文字のあなたにいてあなた。あなたはふたりいる。どちらもが「あなた」なのに、同時には見えない。あなたは近くて遠い、まぼろし。



好きで好きでたまらない人が遠くにいたら、寂しいですよ、切ないですよ。好きで好きでたまらない人が近くにいても、愛おしさで胸が苦しいのではないのでしょうか。恋愛にしろ、友情にしろ、家族間の愛情にしろ、そういう気持ちになるのではないかと思います。

会ったことのないアイドルやスターやアーティストでも、または小説やテレビドラマやアニメや映画の登場人物、つまりフィクションに出てくる誰かやキャラクターでも、あるいは空想や妄想の相手であっても、そうした感情をいただくのではないのでしょうか。

遠くにいて「あなた」、遠くにいて感じられる「あなた」――。

「あなた」は、愛おしくてたまらない相手との空間的な距離感だけでなく、心理的・精神的な距離感をも含む呼びかけの言葉なのです。

あなた、貴方 = you、彼方 = over there。

「あなた」は、そういう相手に向かって叫んだり、ささやいたり、歌ったりするのに最適の言葉だと言えるでしょう。これは、日本語の「あなた」だけに言えることではないのでしょうか。

○

「あなた」の二重の意味を離れて、「あ・な・た」という音に注目してみましょう。「あなた」は単独でも歌になります。つまり旋律になります。

みなさん、「あなた」と声に出して言うてみてください。発音してみてください。

a・na・ta

母音の中でも明るく強く響く「a」が三つありますね。ゆっくり、やや大きめの声で、「あー、なー、たー」と伸ばし気味に発音してみてください。綺麗な音じゃありませんか。しかも優しい。ささやいてもいいでしょう。甘えた感じで口にするのもいいでしょう。

「あなた」は、単独で歌うのに適した言葉ではないでしょうか。「単独で」が味噌です。「あなた」は三音節でしかも「a」が三つあるので、歌い上げるのにも適していそうです。

○

「あなた」には、名前のような響きさえある。「anata」のように、トリプルエー、つまりaaaと母音が三つ続く名前が——少ないですが——あります。たとえば、あらた、さやか、わかな、まさや。

誰かがあなたに「あなた」と声をかけたとします。名前を呼ばれたような気がしませんか。そんな存在感のある言葉だと思います。

a・na・ta

「a」という母音を発音するためには口を大きく開かなければなりません。心を開く母音とも言われるゆえんです。これが三つあるのですから、素晴らしい作りの言葉です。

歌詞に「あなた」が出てくる曲は実に多いです。十曲のうち、八曲くらいはある気がしませんか。しかも、「あなた」という言葉を歌い上げるような曲も少なくない感じがします。

あなたは美しく哀しい言葉。

○

人と人との間には距離があります。好きあっている同士でも一心同体は夢でしかありません。というか、同床異夢という言い回しの本来の意味とは違いますが、いっしょに寝ていても二人が同じ夢を見ることなどまずないでしょう。

同じ床にいる二人は寝入った瞬間に一人になります。夢は徹底して一人だけの世界なのです。同床同夢も異床同夢もかなわない夢でしかありません。たとえ、恋人同士や夫婦間や家族間であっても、距離は避けられません。誰もが基本的には「別人」という意味での「他人」同士です。

とはいえ、いや、だからこそ、愛していればいるほど、その距離を埋めたくなるのが人間でしょうね。「あなた」という日本語の言葉には、「遠く離れた愛しく近いあなた」という意味が込められています。あなたは近くて遠い、まぼろし。美しく哀しい言葉——。

ひらがなの「あなた」を「彼方、貴方」と表記すると、その美しく哀しい意味が立ち現れる。まるで魔法のようではありませんか。次にその文字を口にすると、今度は二つの意味がいっしょになる。生きているとしか考えられない言葉の身ぶりど表情。そんな文字と音のある日本語が私は好きです。

二人称 # 日本語 # 大和言葉 # 和語 # 文字 # 漢字 # 表記 # 名前

11/23 異なる、事なる、言なる**

＊

異なる、事なる、言なる

星野廉

2022年11月23日 08:03

「似ている」とは、何かとつながり、かさなる「気持ち」のことです。自分が何かに、うつる「気持ち」でもあります。人にとって世界は「ある」のではなく、ただ「似ている」のです。人は世界が「ある」と考えることがありますが、見えるのは「似ている」だけ。「何が」も「何かに」もない「似ている」です。「似ている」を何度もなんども、なぞるのです。「何が」と「何かに」はその時々によって移り変わります。雲と同じです。

○

人は「似ている」の世界に生きている気がしてなりません。あくまでも私的なイメージの話なのですが、「似ている」が地、「異なる」が図で、地に図が浮かんで見えるという感じです。ぼーっとしていれば地で、目を凝らしたりしゃきっとすれば図になるという感じ。ところが、目を凝らして見ているはずの「異なる」は見えていないのです。「見る」という「事」と「見る」という「言」が見えなくしてしまうからです。

○

「何かが」と「何かに」のない、ただの「似ている」。「何が」と「何かに」はその時々によって移り変わる。待機中。準備中。仮眠中。うたた寝。

あっ。何かが見えた。見留めた。認めた。地に図が浮かぶ。「何か」が目浮かぶ。異なる。

あれは何だろう？ ○かな？ △だ。いや、Xにも見える。「何かが」「何かに」「似ている」。

言葉にする。事物が見えなくなる。「何か」が言になる。

事物に目を凝らしている。言葉が浮かんでこなくなる。「何か」が事になる。

言と事が「何か」を見えなくする。「何か」とすれ違う。「何か」をまともに見るのは怖い。

事を見つめていると不安で落ち着かない。言にするとしゃきっとして落ち着くが疲れる。事も言もおぼろになり、ぼーっとしているのがいちばん気持ちがいい。

「何かが」と「何かに」のない、ただの「似ている」。「何が」と「何かに」はその時々によって移り変わる。待機中。準備中。仮眠中。うたた寝。



似た音、似た形、似た動き。こうしたものは人を安心させます。

人は「似ている」が好きなのです。似たものをしきりに目で追う赤ちゃんを思いうかべてください。

人にとって「似ている」がまっ先にある感じで、「似ていない」はぜんぶ「異なる」とか「違う」になります。

とはいえ、人には「異なる」がとらえられないようです。たぶん、すれ違ってしまうのです。「異なる」は、逸れる、すれる、外れる、誤る、ずれる、すれ違う、たがう。

ひょっとすると怖くてまともに向きあえないのかもしれないかもしれません。見ていない振りをしている線も濃厚です。「似ている」を見ているほうがずっと楽でしょうから。

ただの「似ている」は「何かが」と「何かに」との出会いを待っている状態なのです。待機中。うたた寝。

心ときめかせ夢うつつで待っているのです。

#レトリック詞 # 漢字 # 大和言葉 # 和語 # 掛け詞 # レトリック

11/24 名詞的なものはうつり、動詞的なものはつ
たわる

＊

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる

星野廉

2022年11月24日 08:32

移ると言えば、どこからどこかに移るのであろうが、そのどこかを特定することは大切ではない。大切なのはあくまでも「移る」という動きなのだ。ある事態や状況を名詞的にとらえて、「何か」や「どこか」を特定するのではなく、動きに注目するという思考があってもいいと私は思う。

というか、思考においては、むしろ動きのほうが名詞的な固定化よりも主導的な役割を演じている気がしてならない。

(拙文「うつすためには、うつらなければならない」より)

熱、波、声、音、思い、心、気持ち、魂は、伝わり、移り、届き、通じます。

でも、おそらく、伝わらないし、移らないし、届かないし、通じないものがあります。

表情、身振り、文字です。これらは、むしろ、写したり、映すものです。

(拙文「伝わるもの、伝わらないもの」より)

目次

うつる、つたわる

「何か」「何が？」

うつるは、かわる

つたわる

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる

本物感と本物っぽさこそがリアリティ

「似ている」「そっくり」の世界から、「同じ」「同一」を見る

うつる、つたわる

影がうつる、像がうつる、姿がうつる、形がうつる。

声が伝わる、音が伝わる、波が伝わる、熱が伝わる。

「うつる」の例として挙げた言い方に出てくる、影、像、姿、形は、動きを止めて見るものです。連続すれば動きになります。写真と動画が、そうです。

一方の「伝わる」で挙げた、声、音、波、熱は動きとして感知されるものだという気がします。見えないのです。熱が動きであるのというのは苦しい言い方になりますが、熱が伝わってくるからには、感知する側も熱くならなければなりません。これを動きとして見るかどうかですが、無理に辻褄を合わせないで話を進めます。

ここでは研究や探求をしているわけではなく、わくわくを楽しむために言葉をいじっているのです、大ざっぱにいきます。

「何か」「何が？」

姿形がうつる、姿形が伝わる。映像、録画、映写、電線、電波、電信、通信、撮影、複写、複製、保存、移動、拡散、信号化、情報化。

音声 that うつる、音声 that 伝わる。録音、拡大、増幅、電線、電波、電信、通信、複製、保存、移動、拡散、信号化、情報化。

熱がうつる、熱 that つたわる。伝導、摩擦、発熱、冷却、温度差、保存。

「何か」を「何？」と追及するのではなく、「何か」として保留したまま、動きに注目してみます。

うつるは、かわる

「うつる」では、「かわる」が起こり、位置関係が維持される気がします。「何か」から、別の「何か」に「うつる」ことにより、「かわる」が起きていますが、対応関係が維持されるのです。

地面に映る木の影。水面に映る空の雲。鏡に映る顔。
写真に写る、写す。写生する（絵）。描写する（絵・言葉）。

「映っている」「写っている」と感じるためには、位置の対応が粗くても細かくてもい
ちおう保たれていなければならないのです。きょくたんな話がゆがんでいても、下手で
あっても、大ざっぱであっても、あるいは不正確であっても、映っているし写っている
のです。

ゆがみや誤差は、加工や加筆によって、ある程度まで修正できるかもしれません。あ
くまでも「近似値」なのです。誤差やノイズやエラーがあるのは「うつる」では当然な
のかもしれませんが。

レントゲンやMRIといった、人工的な「影」の中でも最も進化し洗練されたものにな
ると、位置関係という意味での対応は精緻をきわめますが、影であることに変わりは
ありません。影は現物ではないわけです。言葉が事物ではないのと似ています。

ハイビジョンがフィルムに追いつけないとかいう話を聞いた覚えがありますが、写真
や画像についても、たとえどんなに画質が優れてリアルであっても、やはり影は現物で
はないわけです。

つたわる

「伝わる」では、動きや振動や波が上下運動、あるいは線からなる何らかの模様に戻
元される気がします。還元という言葉を使ったのは、抽象を意識しています。伝わるも
のは抽象なのではないでしょうか。

具体的な動きでありながら抽象であるというのは、言葉の上で矛盾して辻褄が合いま
せんが、言葉と現象がべつべつの論理と文法（比喩です）を持っていると考えれば、不
思議ではありません。

別個のもの同士の間で辻褄が合うほうが、むしろうさんくさいのです。

たとえば、人は言葉で現実の辻褃合わせや帳尻合わせをすることに血道を上げています。両者が別物なのにです。それを人は知っているはずなのに、つねには意識しません。言葉で思いの辻褃合わせをすることにも熱心です。冗談っぽく言えば、捏造疑惑です。捏造常習者が言うのですから確かでしょう。

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる。そんな気がします。

名詞的なものがうつるときには、うつる前のものとうつった後もの間の対応が重視されます。理想は一对一の対応であり、そのありえない理想を指向するのです。絵をイメージしてください。絵はつたわると言うよりもうつる、とりわけ写る、映るのです。図柄や模倣が壊れてはいけないわけです。

一方の動詞的なものがつたわるときには、重視されるのは動きであり、つたわる前後の位置的な対応関係は無視されます。そもそも、つたわる前のものとつたわった後のものの区別さえ大きな意味を持ちません。両者が別物であっても重視されないのです。振動や熱をイメージしてください。

外の音や声（振動）が、室内のここまで伝わってくる。糸電話で声が伝わる。テーブルの向こうに置いた鍋の熱がここまで伝わってきている。

糸電話は「伝える」（振動が）ですが、伝言ゲームは、「伝える」と言うよりも「うつる」（メッセージが）ではないでしょうか。メッセージはつたわるのではなく、むしろうつると、ここではイメージしています。それぞれの動詞の慣用とは異なるイメージですね。自分語的な用法と言えるかもしれません。

本物感と本物っぽさこそがリアリティ

「伝わる」も「うつる」も、置き換えが前提になっています。置き換わらないと伝わらないし、置き換わらないとうつらないわけです。

要するに、本物や起源でなくていいのです。というか、本物や起源が伝わったり、うつるのは不可能ですから、何か別のものに置き換わっていく、つまり代替りのものが本物や起源を演じる、あるいは振りをすると言えます。

(※世界や森羅万象と無媒介的に触れあっているのではないため、本物には届きません。時間をさかのぼることはできないので、起源を知ることできません。自分を納得させるためには、本物も起源も、言葉で「こしらえる」しかないわけです。)

本物感、本物っぽさ、本物のようなもの、起源感、起源っぽさ、起源のようなもので我慢するのは、それしか方法がないからです。このことを人は意識しないで知っています(たぶん学習した知識ではないでしょう)。意識するとがっかりきてやる気をなくすでしょう。生きる気力を失うかもしれません。

「似ている」「そっくり」の世界から、「同じ」「同一」を見る

基本には「似ている」や「そっくり」がある気がします。確認するためには器具や器械や機械に頼るしかない「同じ」や「同一」ではなく。人は印象の世界に住んでいるようです。

そのため、たとえ「同じ」や「同一」というデータやそれによるイメージを得たとしても、それを「似ている」や「そっくり」でとらえる(置き換える)にちがいはありません。この置き換えという操作をおこなうことが、人である証左なのかもしれません。

「〇〇感」「〇〇ぽさ」「〇〇らしさ」「〇〇性」「〇〇的」「〇〇ようなもの」、これこそが人にとってのリアリティなのです。「そのもの」にたどり着けない人類の歴史は、「感」「ぽさ」「らしさ」「性」「的」「ようなもの」の洗練の追求だと言えそうです。

本物や起源にたどり着けないことを人は意識していないで知っているわけですが、ときには、あるいは人によっては、それを忘れて「〇〇とは何か?」とか「〇〇の意味はあるのか?」とかという問いを発する場面があるのは、みなさんご承知のとおりです。答えが出ないことも、ご承知のとおりです。

#言葉 # 日本語 # 音声 # 文字 # 大和言葉 # 和語 # 漢字 # 動詞 # 名詞# 本物 # リア
リティ

11/25 「自分が写す」から「何かに移る」へ

＊

「自分が写す」から「何かが移る」へ

星野廉

2022年11月25日 08:20

目次

写す

移る

移ってくる

言葉にしようとしてはいけないもの

写す

十代後半のころに英語と日本語間の通訳者を志していたことがありました。当時通訳者として活躍していた國弘正雄先生に懇意にいただいた時期もありましたが、大学生になってから難聴が始まり断念しました。

通訳者志望者を対象にしたいろいろな訓練があります。初歩は「写す」です。相手の話した言葉を聞き漏らさず正確に書き取ると言えば分かりやすいでしょう。ある意味、速記やテレビなんかの字幕の制作に似ています。ただし、頭の中での話です。

移る

相手の話した言葉を自分の中で正確に「写す」。これができるようになれば、次は「移る」だと私はイメージしています。ただし、自分が「移す」のではなく、「何か」が「移る」とか「移ってくる」のです。

「自分が写す」から「何か移る」へというイメージ。

通訳者がメモを取っているのをご覧になったことがあるかと思いますが、「何か移る」の「移る」とは、そのメモに記されている、後で訳す時に思いだすための言葉の断片や記号、場合によっては図とか絵だと言えば分かりやすいでしょう。

プロの通訳者さんのメモを見せてもらったことがあります。あれは速記ではありません。あえて言えば、その人だけに分かる「イメージ」なのです。

移ってくる

話された内容やそのメッセージを他の言語へと、意識的に「移す」のはつらい作業ですし、そもそも移しては効率が悪いのです。相手が、あるいは相手の人格が移ってくる。大げさに言えば、乗り移ってくるくらいの心境になっていないと、通訳者は勤まらない気がします。

偉そうなことを書いていますが、私は「写す」もおぼつかない初歩の段階で通訳者になるのを断念した人間です。ただ、通訳術の勉強や訓練をしていた時期に、「移る」や「移ってくる」を感じる瞬間があったのを覚えています。後に翻訳の勉強をしていたころにも、それと似た瞬間を何度も経験しました。

ある言語の言葉を一字一句、別の言語の言葉に置き換えているのではなく、「何か」が移ってきてすらすら訳語と文章が出てくる。そんな瞬間なのです。

言葉にしようとしてはいけないもの

現在の私は、通訳にも翻訳にも無縁の状態です。通訳者や翻訳者や翻訳家を志したのは遠い昔の話になりました。

そんな私ですけど、「移る」や「移ってくる」を感じる瞬間がたまにあります。それは英語の文章を読んでいる最中だけでなく、日本語の文章を読んでいる、そして書いている際にも不意に訪れるのです。

11/26 異、違、移

＊

異、違、移

星野廉

2022年11月26日 08:09

”それは強烈な個性ではなかった。なるほど強烈な個性はまわりの人間たちを、異和感と屈辱感によってだけでも、かなり遠くまで引きずって行くことができる。実際にそんなこともあった。”

(古井由吉『先導獣の話』(『木犀の日』所収) 講談社文芸文庫 p.22)

目次

違和感、異和感

『杳子』における異和感と違和感

杳子、《ヨウコさん》

名前

谷崎潤一郎作『癡癡老人日記』

異、違、移

移和感

関連記事

違和感、異和感

「いわかん」といえば違和感と書くのが一般的ですが、異和感という表記もあります。

古井由吉の作品では「異和感」という表記で統一されている気がします。たとえば、『権』(講談社文芸文庫)だと p.10、冒頭で引用した『先導獣の話』(『木犀の日』所収)では、講談社文庫版の p.22 に見えます。

村上春樹の作品でも見かけたことがあります。私がたまたま目にしたのは『1973年のピンボール』(講談社文庫)の p.12 で、そこには三つ続けて出てきます。

吉田修一もそうみたいです。一例を挙げると『東京湾景』（新潮社文庫）の p.13 をご覧ください。他にもあると思っていましたが、先日『怒り 下』（中央公論新社）を読みかえていたところ、p.143 に「違和感」がありました。もともと新聞に連載されたものだからでしょうか。

『杳子』における異和感と違和感

古井由吉の『杳子』には異和感という言葉が、たぶん一箇所しかつかわれていません（他にもつかわれていたら、ごめんなさい）。

（※後で書きますが、私にとって異和感は異物感に近く、違和感はちぐはぐなズレの感覚です。どちらも捨てがたいイメージを与えてくれる大切な言葉なので、両方ともあってほしいと思っています。）

それにもかかわらず、あれだけ異和感と違和感に満ちた作品が書けるのですから、古井先生はすごいと思います。私は、各ページというか全ページに異和感と違和感を感じます。

私は文庫本の『杳子』で一度に読めるのが、せいぜい五ページまでです。読んでいると息が苦しくなり目まいがしてくるので、休み休み読みすすめるしかない作品なのです。

杳子、《ヨウコさん》

”一週間目の夜に電話をかけると、杳子に似た声を受話器の中から細く響き出てきた。杳子の声とはすこし違うなと聞き分けて、「Sという者ですが。ヨウコさんはご在宅でしょうか」と初めて口にする《ヨウコさん》という言葉にぞっとするような異和感を覚えながら言うと、「少々お待ちください」という無表情な声とともに受話器がコトリと台の上に置かれて、足音がたしかに階段を登っていった。”

（古井由吉『杳子』（『杳子・妻隠』所収）新潮文庫 pp.133-134）

ここで異和感がかかわっていますが、作品のテーマとかかわっているという意味で興

味深い箇所です。一貫して「杏子」と記述されてきた名前が、ここで初めて「ヨウコさん」、しかももう一度「《ヨウコさん》」と二重山括弧でくくられて出てくるのです。

杏子の姉という杏子と彼にとっての「異物」が受話器から聞こえる声として介入する瞬間だからに他なりません。同時に言葉が異物として立ちあらわれます。この展開は、言葉からなる文学作品である『杏子』における内的必然とも言えます。

杏子がヨウコとカタカナにされた異物感、そして二重山括弧《》でくくられたさいのさらなる異物感に私は震えを覚えないではられません。それだけではありません。

以下は過去の記事からの引用です。

＊

名前

考えすぎでしょうか。語り手や登場人物の人称代名詞や「名」について、古井はかなり考える書き手だったことを考慮すると、考えないほうが失礼だと思えてきます。

”もう二十年になりますが、「杏子」という小説を書いたことがあります。これはヒロインです。それに男性の、副主人公に当たる人物がいる。これは語り手、つまり著者の側に付いているので、ある意味では主人公といってよい地位にある。それをずっと書きすすんでいって、副主人公だから当然名前がいりそうなもんなんだけど、どうしてもつけられない。何か苗字でもつけたら、とたんに自分の筆がおかしくなるんじゃないか、そこで避けるだけ避けて、とうとう後半になって、人に名前を呼ばれる会話の部分でどうしても名前をださないわけにはいかなくなった。名なしのゴンベじゃ人は呼べないわけだから。「S」って頭文字を使いました。頭文字とは言いながら、じつは名前は浮かんでないのです。(後略)”

(古井由吉「私」という虚構」 p.317 『招魂としての表現』(福武文庫) 所収)

確かに『杏子』の後半で、「杏子」を「ヨウコ」と呼ぶ杏子の姉の口から——会話での姉の言葉の中で「ヨウコ」と表記されるという意味です——、「S」が複数出てきます。どれもが電話口での会話です。以下はその一例です。

”「ちょっと、おたずねしたいことがあるのですが、Sさん」

と固い顎め面をありありと感じさせる声が返ってきた。”

(古井由吉『杳子』p.139 (新潮文庫))

「S」は、この直後にも出てきます。

「S」だけにとどまらず、「杳子」と「ヨウコ」という表記の使い分けも気になります。これだけで記事が一本書けそうです。ここでは、「女・杳子・彼女・ヨウコ」と「姉・お姉さん・あの人」については割愛させていただきます。

【※別件ですが、蓮實重彦氏は『夏目漱石論』で、夏目漱石の『三四郎』において、登場人物のある女性が「女」と表記されるか、「美禰子 (美禰子)」という固有名詞で表記されるかに注目して刺激的な考察をおこなっています。書き手が、ある登場人物をどう「呼ぶか/呼ばないか」つまりどう「書くか/書かないか」は看過できない要素として書き手に働きかけているように思われます。】

「S」に話を戻しますが、いずれにせよ、古井はこうしたこだわりがある書き手だったということです。看過するわけにはいきません。

(拙文「私」を省く」より)

*

このように、一貫して「彼」と記述されていた登場人物が、初めて「S」と書かれている箇所でもあるのです。「ヨウコ」と「S」——この唐突な名前の表記の「立ちあらわれ」を異和感と言わずに何とさえいいたいのでしょうか。

この電話の場面から、テーマが言葉になるという、p.133以降の流れは注目していいと思います。電話での声による名前の呼び掛けが切っ掛けになって、言葉がその異物感を増していくのです。「声」と「言葉」という言葉がくり返されます。

「文字」ではなく「字面」という言葉が選ばれてくり返される点もスリリングです。言葉への異和が杳子の身体の失調を誘いだすさまが描写されます。興味深いのは、隔たった場所を音や声を頼りに登場人物や語り手が思い描くという古井の書き方が——初期から後期の諸作品で何度もくり返される手法です——ここでも反復されていることです。

電話でのやり取りが数日続くのですが、この部分について、いつか書いてみたいです。

気になるのは、面、表、日、明——古井における日と明については、この記事の「関連記事」に挙げてある記事をご参照願います——という文字、そして白です。この白は、小説の最後に何度も出てくる赤と無縁ではないでしょう。

*

よろしいでしょうか。この作品のタイトルは『杳子』なのです。しかも作品冒頭の一語が「杳子」であることを失念するわけにはいきません。この作品における名前とその表記をあっさりとは無視して、この作品を語ることができるでしょうか。

ちなみに、杳子の杳には暗いという意味がありますが、暗さ、闇、白、明、明るさ、赤（あか）は、この作品では重要なテーマをなしていると思います。杳を性格の暗さという心理に還元する紋切り型で読むではありません。テーマをなすのは、むしろ光と明度、つまり色の具体的な明るさとの対照なのです。

杳に「日」という字が見えることを看過するわけにはいきません。上でも書きましたが、古井における日と明については、この記事の「関連記事」に挙げてある記事をご参照願います

杳子と彼の心理だとか思いだとか人間関係、あるいは古井由吉の意図とか思想などという抽象に置き換えて読んだとして、それがこの作品を読んだことになるとは私は思いません。言葉（文字）からなる具体的な作品の向こうに視線を向けて、作品に書かれた言葉以外のもの、つまり抽象や書いてないことに置き換えただけではないでしょうか。

こうした読み方は、大学生時代に受けた蓮實重彦先生——当時非常勤講師として私の在籍していた大学で教えていらっやったのです——の授業と、その著作から学んだものなのです。抽象をできるかぎり避けながら具体的に書かれた言葉を読むという姿勢は、私がものを書くさいにいまも心がけていることでもあります。

とはいえ、小説の読み方は人それぞれです。しかも、私は上で述べた姿勢を裏切りつつづけています。私は私だからです。

話を異和感にもどします。

谷崎潤一郎作『瘋癲老人日記』

” サッキカラ少シ薄気味悪ソウニ黙ッテジツト予ノ表情ヲ見ツメテイタ颯子ハ、偶然眼ト眼ガ打ツカリアッタラ、咄嗟ニ予ノ心ノ変化ヲ看テ取ツタラシイ。

「氣狂イノ真似ナンカシテルト今ニホントノ氣狂イニナルワヨ」

予ノ耳元ヘ口ヲ寄セテ、ヘンニ落ちツイタ、冷笑ヲ含ンダ低イ声デ云ツタ。

「ソナナ馬鹿々々シイ真似ガ出来ルト云ウノガ、モウ氣狂イニナリカケテル證拠ヨ」

声ノ調子ニ、頭カラ水ヲ浴ビセルヨウナ皮肉ナモノガアッタ。

「フ、アタシニ何ヲサセヨウツテ仰ッシャルノヨ。ソナナ泣キ声ヲ出スウチハ何モシタゲナイワヨ」

「ジャア泣クノヲ止メル」

予ハイツモノ予ニナツテ、ケロリトシテ云ツタ。”

(谷崎潤一郎『瘋癲老人日記』)

中条省平著『文章読本』(中公文庫)より

”(中略) ふだんひらがな書きに慣れている読者に、カタカナ書きは異和感を生じさせ、ひらがな書きの場合ならば、読み進むにつれて文字が透明になり、イメージだけが残るような錯覚を読者にあたえるのにたいし、カタカナは完全に透明にはなりません。つねに文字の存在を読者に意識させ、したがって、作中で繰り広げられる情景も、所詮文字で書かれたものにすぎないという事実には、読者をたえず立ち戻らせるのです。”

(太文字は引用者による)

(中条省平著『文章読本』(中公文庫) pp.93-94)

中条省平先生の鋭い指摘にはうならざるをえません。上に引用した谷崎の文体に私が覚えるのは、まさに「異和感」であり「違和感」ではないのです。谷崎のカタカナ書きは、私のイメージする「異」に近いという意味です。異物感と言ってもいいくらいの不気味さなのです。

異、違、移

異、違、移。い、い、い。イ、イ、イ。

音読みした場合の音の韻だけでなく、上の三つの漢字に私はイメージの韻を感じます。

イメージは個人的なものですから、辞書に載っている語義とは、ずれているはずです。

「異」はいきなり目の前に現れる。「ぎゃあー」とか「ぎょっとする」というイメージで、とにかく異物なのです。

「違」は、すれちがう、ずれる。似ていると思っていたものが、重ねて見たらずれているとか、「あれっ」という感じがします。意外なのです。

「移」は、移り変わる。「あれよあれよ」とか「あららー」と時間的な推移を感じます。たぶん気質的なもので、これからも移り変わる可能性を匂わせている気がします。

移和感

移和感という言葉が頭に浮かびました。あなたは「移和感」という表記に違和感や異和感を覚えますか？

ふだんから、わりとマイペースに書いていて、自分語と言ってもいい言い回しや表記を平気でしている私ですが、いまのところは「移和感」という表記をつかったり提唱する気持はありません。

とはいえ、自分がかなりいい加減な人間だという自覚があり、これからも移り変わる可能性が否定できませんので、未定としておくのがいいかもしれません。なんだか移和感に親しみを覚えてきました。

関連記事

◆キーワード：古井由吉、蓮實重彦

* 「私」を省く

* 文字の顔

* 文字を見る

* 「日、月、白、明」、そして「見、目、耳、自」が

- * 1/3 『仮往生伝試文』そして / あるいは『批評 あるいは仮死の祭典』その1
- * 2/3 『仮往生伝試文』そして / あるいは『批評 あるいは仮死の祭典』その2
- * 3/3 『仮往生伝試文』そして / あるいは『批評 あるいは仮死の祭典』その3
- * 【小説】知らないものについて読む
- * 【小話】Mの世界で生きる

◆私なりの読みの実践

- * 現象、現像
- * イメージの韻
- * 「うつる」でも「映る」でもなく「写る」
- * 「似ている」の魅惑
- * 影に先立つ【引用の織物】
- * プライベートな場所、プライベートな部分
- * 【小説】一人でいるべき場所
- * 他人の家に入る

イメージ # 違和感 # 異和感 # 漢字 # 古井由吉 # 蓮實重彦 # 夏目漱石 # 村上春樹
吉田修一 # 谷崎潤一郎 # 中条省平 # 表記 # 自分語 # 文学 # 日本語

11/27 たぶん転がるから動かしたくなる、動きた
くなる

＊

たぶん転がるから動かしたくなる、動きたくなる

星野廉

2022年11月27日 08:09

言葉による連想でイメージと戯れてみます。

目次

追いかける

蹴球、football、soccer

たま、まり、だんご

自然、不自然、反自然

play

代、借、仮、化

身代わり、代わり

なぜ

転がる、転げる、転がす

気になるもの

追いかける

見つめる。追いかける。転がす。投げる。捕る。受ける。握る。唾をつける。叩く。打つ。替える。球のことです。

突く。球のことです。

磨く。買う。ぶつかり合う。打つ。滑り落ちる。驚つかみにする。集める。床に転がる。物に換える。球のことです。

打つ。木に引っ掛かる。水に入る。穴に入れる。穴を外れる。人にやる。球の事です。

つくる。包む。袋に入れる。人にやる。舐める。溶ける。形がなくなる。球の事です。

穴を開ける。指を突っ込む。機械から出てくる。転がす。棒を倒す。床の下を移動する。球の事です。

口づけする。蹴る。追いかける。奪う。投げる。ぶつける。枠に入れる。枠から出る。球の事です。

磨く。眺める。見入る。魅入られる。読む。占う。球の事です。

乗る。両手でバランスを取る。落ちる。足でまわす。飛び降りる。球の事です。

つくる。買う。もらう。集める。弾く。転がす。ぶつける。奪う。奪われる。球の事です。

たぶん、隠してある、隠れている。おがむ。話しかける。球の事です。

光が入る。ゼリーが溜まっている。光を通る。奥の膜に映る。球の事です。

息を吹き込む。空気を送りこむ。息を弾ませながら見つめる。球の事です。

へこむ。割れる。はじける。破裂する。しばむ。球の事です。

蹴球、football、soccer

動：蹴、打、排、闘、送、避、撞、投

場：庭、野、水、氷、卓

物：籠、柱、毛、鎧、羽、杖、罌

foot、hand

volley、dodge

basket、base、net
soft

たま、まり、だんご

ball、globe、sphere、bulb

eyeball-to-eyeball、highball、ball-and-claw

球、霊、魂、珠、玉、環、弾、丸、鞠、毬

まり、たま、だんご

自然、不自然、反自然

自然界で球体を見かけることはそれほど多くはない気がします。マリモくらいでしょうか。円形のほうがありそうです。

球体と円形は四角や直線と同様に人の目につく形では自然界にはそれほど多くはない気がします。

太陽や月や惑星や恒星は、それが球体だと学んだ知識として知っているのであり、体感的には円形だったり、光の点滅だったりします。

綺麗な球体で連想するのは、両生類や魚類の卵でしょうが、これは粒という感じです。小さいものになると、器具や器械をつかわないと肉眼では見にくかったり見えません。

大きな球体はたいてい人がつくったものです。四角や三角やその他の多角形も、器具や器械で拡大して見る世界ではあるようですが（結晶なんかが多そうです）、人の肉眼で見える自然界にはあまりないように思います。

play

play に遊ぶと演じると演奏すると賭けをするという意味があるのはとても興味深い
です。

play にはストーリーとドラマがあります。そこには、広い意味でのプレイ (play)、つ
まり演技、演劇、ドラマ、遊戯、演奏、競技、パフォーマンスがつまっているとも言える
でしょう。

演じる・振りをする、競う、賭ける、遊ぶ・戯れる、奏でる。

ゴールがある/ない、リミットがある、ルールがある、ルールを破る、ネットがある/
ない、相手に触れる/触れない、点を競う、見る、見せる、観る、観られる、見入る、魅
入られる。

代、借、仮、化

人の目に入られないほどのきわめて小さい球体は数えきれないほどあるにちがいあり
ません。物理や化学の図で球体のイメージ図が多いのには驚かされます。逆に宇宙のイ
メージ図もまた球体がほとんどで驚きます。

そう考えると、球体は人にとって抽象的なものだという気がしてきます。ただ抽象的
なだけでなく、抽象だからこそ、人を惹きつける力を備えているようです。だから、人
はわざわざ球状のものをつくって、つまり具象化して、憑かれたようにそれらとかかわ
り合いを持つのかもしれません。

代わりなのです。身代わり。借りたものであり、仮のものだというイメージ。つかの
間の触れあいと付き合い。いつかは球とのお別れがあります。お返しするのです。

お別れの後には、きっと自分が球体になるのでしょう。

身代わり、代わり

見つめる、目で追う、なぞる、なでる、追い掛ける、駆ける、賭ける、占う、託す、任せる、預ける――。

球は代理、つまり身代わりのようです。人と人が戦うさいに、代わりに叩かれたり打たれたりします。

コミュニケーションの道具のようです。渡す、投げてそれを受けとる。

視線を浴びます。競技者、監督、スタッフ、スポンサー、観客たちの視線を一身に浴びるのです。電波やネットを介して視線を集め、浴びます。

お金になります。途方もない金額になるようです。

なぜ

なぜ人は球にこれほど熱中するのでしょうか。

なぜ球体なのでしょう。

動きを誘発するという点で球体は群を抜いています。

不安定だからではないでしょうか。自然界にある球体は何かやわらかいものに包まれていたり支えられていたり、集まって支え合っています。

それが単独にあると、どこか危なっかしくて、転がりそうだから放っておけないという気持ちにさせるのかもしれませんが。球技では試合中の球はたいてい一つだけです。

つまり、単純に考えると、たぶん、転がりそうで、じっさい転がるから動かしたくなる、転がるから自分でも動きたくなる、そんな気がします。うつるのです。うごくという思いがうごきを誘いだすのです。

しかも、自然界にめったにあるものではないので、自分でつくりたくなる。丸めたり撫でたり磨いているうちに愛着も起きそうです。おむすびやお団子や泥団子のイメージ。

完璧な球体を一個でいいから、持っていたいと思いませんか？ もし、持ちたいとすれば、たぶんそれは自分の中にあるからでしょう。

きっと、それを目で見えて触れて握って撫でたいのです。そして、何よりも、転がしてみたい、追いかけてみたい、できればいっしょに動いてみたいのです。

転がる、転げる、転がす

転石苔を生ぜず。A rolling stone gathers no moss. フンコロガシ。土地転がし。

寝っ転がる。その辺に転がっている。どう転がっても損ではない。うまい話が転がっている。転げ落ちる。笑い転げる。

どんぐりころころどんぶりこ。ころころ、ごろごろ、ごろり、ころり。ぽーん。ぽん。ぷしゅーっ。

気になるもの

ボールベアリング、マリモ、眼球、地球、火の玉、火球、ラムネの瓶のガラス玉、泥団子、真珠、勾玉、竜（龍）が握っている球、ボールペンの先のボール、シャボン玉、魚卵、球根。

何と言っても、肉球。

#イメージ# 連想# 球# ボール# 球技# 球体# 肉球

11/27 夜の洗濯

＊

夜の洗濯

星野廉

2022年11月27日 12:42

人は夜になると洗濯をします。洗濯機を回すのではなく、自分の手でごしごし洗うのです。

何を洗うのかというと、心、意識、魂、記憶です。魂の洗濯、意識の洗濯なんていうと何だか難しく聞こえますが、誰でもやっていることなのです。

言い直します。

何を洗うのかというと、汚れではありません。断じて汚れではないのです。染みなのです。正確にいうと、たぶん、模様です。顔かもしれませぬ。その何かに似た染みというか模様をごしごし洗うのです。

命の洗濯という言い方がありますね。日常のしがらみから逃れてのんびりすることですが、命をごしごし洗うなんて、いいたとえだと思います。夜になると、あちこちにいる各人がいっせいに命を洗うなんて絵になりませんか？

でも、私がいま思っているのは、それとはちょっと違います。

夜の洗濯で私の頭に浮かぶのは、マネーロンダリングです。漠然としか知らない言葉なので意味を調べてみると「お金を洗ってその出所を消す」とかいう比喻なの現実なのか分からない説明が書いてありました。

これだと思いました。人は夜に「昼間の記憶を洗ってその出所を消す」のです。

*

人は眠っている間に夢を見て、その夢の中で何か日常生活で起きたことの整理をしているとか、記憶のおさらいをしている。あんなことがあったなあ、こんなこともあったなあ、と。

そのうちに、あれはめちゃくちゃ怖かったなあ、あの時には恐ろしくておしっこを漏らしそうだったよ、と恐怖の記憶も出てくる。

ここなんです。この恐怖をおさらいし整理することで、実はごしごし洗濯をしているんです。振り返ることで恐怖を飼い慣らすといえば、お分かりいただけるでしょうか。

記憶にまといついた意味づけを放棄するとか、あったことを虚構化する、つまり距離を設けることで、ベールに包んだり、場合によっては改変したり、さらにはなかったことにすらして、すっとぼけるとか、しれっとやりすごすとも言えそうですが、ややこしいですね。

でも、記憶の痕跡は消せません。何かの形で残っているのです。染みは消せないということですね。

いずれによせ、こういうのは洗濯をしているように思えてなりません。やはり一種のマネーローンダリングだという気がします。出所を消してきれいに見せて、要するに誤魔化しているんですよ。なぜって、めちゃくちゃ怖いから。さもないと、人間なんてしんどくてやってられません。

そんなわけですから、大丈夫です。何がって、夜の洗濯ですよ。今夜もよい夢を。

#夢 # 夜 # 洗濯 # 記憶 # 痕跡 # 恐怖

11/28 自分の顔が見えないと感じたのはいつな
のか

＊

自分の顔が見えないと感じたのはいつなのか

星野廉

2022年11月28日 08:04

○

自分の顔が見えないと感じたのはいつなのか——正確に言うと、鏡に映る自分の顔のことなのですが——、よく覚えていません。以前にそうした意味のことを文章に書いたことがあり、その日付を見ればわかるのでしょうか、あえてしていません。

こういうことが自分だけに起きるのか、それともそう感じる人がいるのか、不明なままです。

＊

人の顔を見分けるのにどちらかという苦労する私ですが、鏡で見る自分の顔ほど分からないものはありません。見ているのに見えないという気がします。刻々と更新しつつある「いま」であるとか、刻々と更新しつつあるズレであるとかいう、苦しまぎれのレトリックをつかったことがあるほどです。

つまり目の前にある鏡を覗きこんだときに見ているのは形（自分の姿）ではなく「とき」（自分のイメージ＝心象）であるという意味なのですが、もしそうであるなら、自分はかなり動揺し困惑しているにちがひありません。他のものを見るのとは異なる次元にいたいというくらいのお話なのです。

＊

もしかすると、この困惑は鏡の中を覗きこんだときにそこに映っているものの名前はもちろん、言葉が浮かばないことと関係があるような気がします。自分の名前という意味ではなく、鼻とか口とか眉とかほくろとかそういう各パーツを指す言葉がっさいない世界に放りこまれているという意味です。

夢の中と同じく鏡の中には名前がないのです。そこには意味もない気がします。というか、そういう心境におちいつているのかもしれませんが。「見覚えがある」とか「見慣れたものがある」感じなのですが、無名の世界なのです。

名前のないことが不安にさせるのかもしれませんが。それが夢とのちがいです。名前はなくても、夢の中ではこの底知れない不安を覚えた記憶はありません。



人にとって基本は「似ている」であり、「異なる」は「同じ」や「同一」のように学習した知識であり情報、つまり教わったものではないでしょうか。そもそも「同じ」や「同一」は、そこそこ精密な器具や器械や機械をつかわないと人には確認できません。

詳しく言うと、人にとっては「似ている」と「その他もろもろ」という印象だけがあり、「その他もろもろ」は、「似ていない」でも「異なる」でもなく、むしろ「見えても気に掛けない」とか「見ていない」とか「見えない」とか「気づかない」という感じ、です。

(人は基本的に印象の世界に生きているのです。生まれてそんなに経っていない赤ちゃんを想像してください。)

で、「その他もろもろ」というのは、いわば「見ようとすれば、怖くて不気味で見たくない」ものなのですが、この場合には人は「手なずける」ためにとりあえず「名付ける」という手段に出ます。

「見てもわからない」場合もありますが、気掛かりになるとちゃんと見て、つまり観察して「分けて」、やはり手なずけるためにとりあえず名付けます。ただし、「分けた」段階で「分かった」と「決める」という早合点がほとんどなようです。

なにしろ、人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物ですから。現に、いまもお悩みは続いていますね。

「分けた」段階でそそくさと名前を付けて、とりあえず「異なる」が決まるとも言えそうです。こう考えると事物を分けて事として認識し、即座にそれに言葉を与えているという意味で、「異なる」は「事（に）なる」であり、同時に「言（に）なる」なんて気がしてきましたが気のせいでしょう。

＊

強引な例を挙げて恐縮ですが、見た目にはよく「似ている」柴犬とキツネが動物という点では「同じ」でも「同じ」種類ではなくて、つまり「異なる」種類であり、一見してぜんぜん「似ていない」ドーベルマンとポメラニアンが「同じく」犬であって、キツネとは「異なる」というのは、教わって知った知識だと言えば、お分かりになるでしょうか。

その意味で知識や情報は抽象であって、体感でも印象でもありません。

純粋に「似ている」世界にいるヒトの赤ちゃんは、ヒトが決めた決まりである「同じ」と「異なる」を学習しながらヒトのおとなになっていくと言えます。生まれたての赤ちゃんには、たぶん急須と湯飲みの「違い」も、玩具と動物の「違い」もわからないでしょう。というか、「知らない」でしょう。

万が一、ヒトの赤ちゃんがオオカミやコビトカバに育てられたら、いま述べた「違い」は「見えても見えない」とか「見えても気に掛けない」のではないかと私は想像しています。ひょっとするとどちらもが「似ている」なのかもしれませんね。

「見る」は「見る」でも、「見える」は「見える」でも必ずしもなくて、見ない、見えない、見損なう、見損じる、見間違う、見誤る、見逃す、見外す、見過ごすと同時に並行して起きている気がします。「見る」は「見る」なの、すごくシンプルなわけ、なんて言い切る勇気が私にはありません。

#似ている # 顔 # 異なる # 見る # 同じ # 同一 # イメージ # 印象

11/29 夢のような映画、映画のような夢

＊

夢のような映画、映画のような夢

星野廉

2022年11月29日 07:43

俯瞰とは場所つまり空間だけの話ではありません。時間的な俯瞰もあります。スケジュール表、タイムライン、カレンダー、年表などは、時間を見える化するだけでなく、時間の流れを時系列で視覚化する仕掛けとか仕組みとか装置だといえるでしょう。

地誌・地史、家系図、伝記、国の歴史、世界史、文学史、音楽史、科学史、宗教の歴史というぐあいに、個々の事象にまつわる出来事を時系列で記述しようとする人の試みと情熱には驚かされます。

図書館、博物館、美術館、博覧会も、それぞれが俯瞰の一形態だと見なすことができるでしょう。百科事典、辞書、図鑑、博物誌のたぐいも、空間（地球・宇宙）だけでなく時間（歴史・有史以前）の俯瞰を指向していますね。人の飽くなき意志と欲求に驚かされます。

＊

俯瞰という身振りは、人が初めて水面に「かがみ」こんで自分の姿を見た身振り、そして鏡を作り毎日鏡に見入っているという身振りに重なります。自分を見ているつもり。でもその鏡像と映像は自分ではないのです。

見えているのは自分ではなく自分の影、幻影なのです。人は自分を肉眼で見ることはいけません。ここに「見る・見える・見ない・見えない」の原点がある気がします。

個人的な話ですが、自分が見えないことに気づいたり、思いだしたり、意識するのは、鏡を覗きこんだ時以外に、自分が見た夢を思い出す時と、テレビドラマや映画を見ている時です。話を簡単にするために、映画を例に取ります。

＊

映画では主人公を含む登場人物がうつりますが、ある登場人物の視点から見られた場面は以外と少なく、その光景や状況やストーリーを分かりやすくするための位置にカメラが置かれて撮影されている気がします。よく考えると誰の視点から、そのシーンが撮られているのか不明になるのです。

居間でお茶を飲んでいる二人を撮った場面を想像してみてください。カメラは、その二人の視点以外の位置で撮られている場合が多いのではないのでしょうか。高い位置から見下ろしてはいませんが、これは一種の「俯瞰」だと思います。

つまり、その状況を説明するのにふさわしい位置から、「展望」しているというか、全体の様子が分かるような絵になっているのです。現実では、まずありえない絵だとは思いませんか？ 誰が見ているのでしょうか？ どの位置から描いているのでしょうか？

＊

ひょっとして、映画の視点は夢を真似たのではないのでしょうか。夢の中では、しばしば自分の姿が出てきます。現実の自分にそっくりな自分もいれば、別人を演じている自分もいたりします。自分が動物とか物になっていたのではないかなんて、目覚めてから考えこむ不思議な夢もあります。あくまでも個人的な印象なのですけど。

映画が発明され、映画の二代目みたいなテレビが発明され、いまではネット上で動画が閲覧できる時代に住んでいる私たちは、映画やテレビや動画（ゲームも含みます）に似た夢を見ていることは十分に考えられます。昨夜、ゲームをやっている、あるいは自分がゲームの中にいる夢を見た人はいませんか？

人は夢を真似て映画の撮影術を発達させ、より精緻で洗練されたものにしてきた。それと並行する形で、映画を真似て夢を見るようにもなってきた。そんな気がします。人は意識的あるいは無意識に自分に似たものをつくり、そのうちに自分のつくったもの

に似てくるのではないかとよく思うのですが、映画もそうかもしれません。

夢を真似て映画をつくる。映画を真似て夢を見るようになる。こう書くと、何だかありそうに思えてきます。現実を真似てお芝居をつくる。お芝居を真似て、日常生活で演技をするようになる。現実を真似て歌う。歌を真似た声や叫びを日常的にするようになる。

恥ずかしい話ですが、私はテレビドラマのさまざまな演技を実生活で真似ることがあります。人と話したり、人に接する時に多い気がします。

*

映画以前に歌があり、お芝居があり、映画と並んでラジオが出てきて、テレビが普及し、テレビゲームが発明され、いまではPCゲーム、インターネット、YouTube、VRが共存する時代になっている。自分の知覚に合わせて何かをつくり、そのつくったものに知覚を合わせていく。

まるで鏡の前の人ですね。鏡を見ながら自分の振りをつくっていく人の身振りを想像しないではいられません。それが夢を見ている自分に重なり、軽い目まいを覚えてきました。

ひょっとすると、私たちは夢を真似て夢を見ているのかもしれない。

さらに言うなら、いまうつつで見ている光景もまた、夢、写真、絵画、映画やテレビやネット上の動画を真似て見ているのかもしれない。かつて見た物や事の記憶が、うつつを見るさいに重なってくるとか、見方に影響をおよぼしている。

夢のよううつつ、うつつのような夢。寝ても覚めても夢うつつ。目を閉じても開けても鏡の中。

そう考えると、ますます鏡の前にいる自分のようです。軽い目まいを覚えてきました。しばらく横になったほうがよさそうです。

#俯瞰 # 夢 # 映画 # 撮影 # 鏡 # ゲーム # 視点

11/30 「ねえまだなの？」の永遠化という感じなの
です

＊

「ねえまだなの？」の永遠化という感じなのです

星野廉

2022年11月30日 07:38

安心して身をまかせられるのが、夢の魅力です。夢は何でも肯定してくれます。夢には矛盾はありません。あると感じたら、それはむしろ覚醒ではないでしょうか。夢の後の記憶としては、いくらでも矛盾を指摘できます。

一笑に付すこともできるでしょう。覚醒は、その意味で退屈きわまりない体験です。夢では退屈はありえません。あれよあれよが夢です。

＊

あれよあれよという感覚が好きです。夢はもちろんというか、夢が最高のあれよあれよですが、歌や映画や文章や生理現象や運動でも、あれよあれよを体験することがあります。

いちばん分かりやすいのはテレビのCMでしょうか。音楽も映像も含まれていて、そして何よりも短い点が、あれよあれよ感を助長するみたいです。あっけにとられて見てしまうCMがあります。心地よいです。

文章では野坂昭如の小説と蓮實重彦の批評の文体が、私にはあれよあれよです。読みにくくてもかまいません。理解なんてする必要がないのが、あれよあれよですから。

テレビのCMはあっという間に終わりますが、野坂昭如や蓮實重彦の文章はセンテンスが長く、しかも改行が少なく、決して読みやすいものではありません。

でも、私にとってはあれよあれよなんです。考えるいとまがないのに読み進んでしま
う。あたまのどこかで音読している自分の声と活字の字面、つまり聴覚と視覚の両面で
醗酵している。そんな感じです。

視覚はともないますが、楽曲や旋律を楽しむのに似ています。どこに連れていってく
れるのだろうという、運ばれる心地よさがあります。なかなか逆らえないのです。

徹底した無抵抗状態というか万事お任せ気分なのです。お腹を天に向けて寝っ転がる
「へそ天」という格好をする犬や猫がいますが、それを思い出します。も一どーにでもし
て頂戴。

＊

古井由吉の文章も、私にはあれよあれよなのですが、野坂や蓮實の場合とはちょっ
と違います。野坂や蓮實の文章が——響盛を買うのを覚悟で申しますと——快便や下痢
であるなら、古井の文章は便秘に似ている感じなんです。

古井の『水』という短編集の解説で「停滞」という言葉が使われていますが、停滞と
は比喩的に言えば便秘ですよね。よどみ、とどこおるわけです。これを毎日体験する人
がいますが、私もそのひとりです。

ああ、まだまだ。出ないよー。うーん、うーん。宙ぶらりんの忘我状態というか、要す
るにまだまだ感です。いましているのは抽象論ではなく、すごくリアルな感覚のお話な
のです。

まだまだ先を伸ばされる快感という意味ではサスペンスに通じるものがあります。体
力がないと読めない気がする古井の文章ですが、何だか死にかけみたいな超脱力系の雰
囲気がただよるのが不思議でなりません。

「あもう駄目、まだまだ、ねえまだなの？」の永遠化という感じです。癖になりま
す。一種の多幸福感と言えれば言いすぎでしょうか。

＊

まだまだという感覚には二つあるような気がします。一つは、「まだなの？」というふうに、どこかにたどり着きたい気持ちです。これは最後にどこか、あるいは何かにたどり着いて一件落着という「まだまだ」です。

分かった、正解、やったね、ガッテン、はい、よくできました、ユリイカ、ゴール達成、スタンプ、押しましようね、お疲れさまでした、ご褒美にチューしちゃう。これじゃ、悟りみたいではないですか。私は悟りたくはありません。そんなに欲深くないというか、そんな贅沢は言いません。

もう一つの「まだまだ」は、終りがなさそうという感覚です。私の言っているのは、こっちのほうなのです。そもそも終りなんて考えないのが、私の好きな「まだまだ感」だと言えるかもしれません。

したがって、決して知的な行為ではないと断言できます。サスペンスにはちがいないのですが、ミステリーに不可欠な謎の解決という知的な喜びや満足感はありません。

ミステリーにも、必ずしも謎の解決や見事な伏線の回収や大団円といったものを求めない楽しみ方があるようです。というか、それが私の楽しみ方なのです。

＊

性格的なものなのでしょうか。私にはストーリーを味わう喜びが欠けている気がします。筋を覚えている小説が極端に少ないのです。小説に限りません。たとえば、幼いころに見たり読んだはずのテレビドラマや絵本や童話で、いま筋を話せるものが思い当たりません。

特に漫画が駄目です。漫画は見えますが、読めないのです。筋が追えないというのが正確な言い方かもしれません。理由は分かりません。ひょっとすると欠陥なのかもしれませんが、深くは追求しないようにしています。

子ども時代に読んだ漫画のストーリーを嬉々として語ったり、同じ漫画のファンとかなり細かい点までを含む筋についての話に花を咲かせる人を見ると感心もしますが、自分にはありえないことだと複雑な心境になります。

＊

話が飛んだので戻しますね。

江戸川乱歩、ルース・レンデル、宮部みゆき、パトリシア・ハイスミス、ローレンス・ブロックといった作家たちの小説を、たまに手に取って一部を読み返し、まだまだ感を楽しむことがあります。

もっとも、ローレンス・ブロックなんて、謎解きを重視せずに心境小説みたいな筆致で作品を書いていますから、私と似たような読み方をする人がいるのではないのでしょうか。田口俊樹さんの翻訳の文体が好きで、田口訳以外のブロックなんて考えられません。

いま挙げた広義のミステリー作家たちの作品を、辞書みたいにあちこちめくって楽しんでいます。文章を楽しんだり、情景を描いて思いに耽るのですが、ストーリーは意識しません。

辞書は引くこともありますが、辞書を読むのが私の趣味の一つなのです。国語辞典、漢和辞典、英和、和英、英英、仏和、仏仏、独和、西和、伊和、ことわざ、類語、新聞用字用語、ドゥーデンの図解……。

小説を読む楽しみと辞書を読む楽しみに、大きな違いがあるという気がしません。知識を得たいわけではなく、ただあるページやある箇所を読んでいたいか、読んでみてもすぐに忘れるので、また来てしまうのです。

言葉が好きだからと言えば、それで終りみたいな話なのですが……。気持ちよかったことを覚えているから、そこにまた来るのでしょうかね。

あたまがではなくて、からだ覚えていてのです。「また、来ちゃいました」という感

じです。

「あら、また来たの？ いやだ、あんたも好きね」なんて本も辞書も言わないので救われます。そういう茶化した言い方をされると、私は赤面するだけでなく、かなり落ちこんで立ち上がれなくなるたちなのです。想像しただけで、汗が出はじめました。

#読書 # 小説 # 野坂昭如 # 蓮實重彦 # 古井由吉 # ミステリー # 辞書# 辞典 # 夢 # ストーリー

12/01 VRで自分に会いに行ったその帰りに

＊

VRで自分に会いにいったその帰りに

星野廉

2022年12月1日 08:11

写真機では長いあいだ自分を撮ることはできませんでした。簡単に撮れなかったというべきかもしれません。それがいまではできます。スマホのカメラで可能ですが、簡単というわけではないでしょう。誰もがけっこう苦労して撮っています。

いろいろテクニカルな問題があって苦労なさるのでしょうが、「こんなはずじゃない」とか「私はこんなふうじゃない」という不満が根っこにあって、スマホに付いているレンズを恨みつつ、撮る位置や光の具合を調節しているのではないのでしょうか。

人は自分を自撮りで撮影し、その像をリアルタイムで見ることができるようになりましたが、それでも満足できていないもようです。がっかりしているからです。ちょっと違うんじゃない？　こんなもの？　これだけ？　という感じです。

鏡や写真や動画で自分を見る行為は、失望感と隣り合わせなのです。ぜんぜん納得できていない。だから、毎日毎日、お化粧品やエステや身だしなみに骨身を削るのです。

その裏というか根本には、自分に会ったことがない、つまり肉眼で自分を見たことがない、さらに言うなら誰もが自分には絶対に会えないという現実があります。

現実はおどかしくままならないのです。世界でいちばん気になる人を見たこともなければ、一生会えないのですから。

＊

人が満足する形での究極の「自分を見る」とは、「別人として自分を見る」ではないでしょうか。自分が別人にならないかぎり、それが不可能だと分かっているので、失望感と不満は永遠に続くと思われまます。「もっともっと」「もっと見たい」が延々と続くという意味です。

本当の自分の姿は、街ですれ違った見知らぬ人の目に映った自分だ。そんな意味のフレーズを古井由吉の文章で読んだ記憶があります。別人の目で見る自分ということでしょうね。いま考えると分かる気がします。

「光学的に見える」だけでは「本当の見る」ではないとも言えるかもしれませんが、この「本当の見る」はおそらく幻想でしょう。知覚に限界のある人間にはありえないという意味で強迫観念であり、抽象にちががありません。

人の裸眼と肉眼は、無媒介的に世界を見る能力ではありません。しかも、どんな器具や器械や機械をつかって見たとしても、最終的には人はその映像を裸眼で印象として見るしかないのです。

ゆがめて、まばらでまだらに、しかもぼやけて見ているとも言えるでしょう。「見る」「見える」は人の想定しているほどの「見る」「見える」ではなく、あくまでも努力目標でしかありません。

＊

それだけではありません。人は「何か」に「何か」を見てしまうのですが、それどころか、自分が見たいものや自分が知っていると思っていることを見てしまうのです。

簡単に言えば、人は「見えている」はずのものをしばしば「見ておらず」、むしろ「見えないもの」を「想像して見ている」（いわば鏡の中に見ている）のであり、「見えているはずのもの」よりも、その「想像して見ているもの」のほうにより興味と愛着を持っていて、その結果として、人には「ないもの」を「ある」と錯覚し、さらにはその錯覚を強化して「ある」と決めるという仕組みが備わっているということになります。

人は「見たいもの」（それが「見えない」にもかかわらず）を「見える」と決めるために、その根拠となりそうなものを求めるのです。

こうも言えるでしょう。人はないものをあると決めるために、その根拠となりそうなものを求める。捏造する。その根拠は何であってもかまわない。いわば、イワシの頭も信心からの「イワシ」は何でもあっていいのです。

求める、でっちあげる——それが人の「見る」であり「見える」です。

*

スマホで自撮りが可能になった気がしたとき、「自分が見えない」という不可能性の沼のなかにいる人間は歓喜したと思われます。「ついにやった！」と。

水面や鏡に出会って自分の姿が見えないという事実気づいた人間は、写真に出会って一時的に歓喜したものの、すぐに失望し、つぎに映画や個人フィルムにもがっかりし、現像の要らないポラロイドにも意気消沈し、デジタルカメラと三脚をつかったの撮影にも落胆し、スマホカメラの登場でリベンジを果たそうとして張りきったのはよかったです、やがてその空しさにしょげこむ事態となりました。

ついにリベンジしたかの喜びは一時的かつ一過性のもので終わりました。「やっぱり見えなかった」「こんなはずじゃない」「こんなものか?」「話が違う」

欲求や欲望は目的を失っても空回りするそうです。

というか、まわること自体が目的化するらしいのです（経済活動や金融や資本主義がいい例です）。本来はまわらなければならない根拠がないだけに（根拠は捏造したものだからです）、しつこいということでしょうか。分かる気がします。人ごとではありません。

*

きわめて近い将来に仮想現実で自分を見たり、自分に会ったり、自分と対面するゲームが流行りそうな強い予感があります。メタバースやアバターより進化した話です。自

分を見たいというのが、大金を投じて宇宙空間に漂うよりも、身近で現実的な願望だという気がするからです。この欲求は自撮りの延長線上にあります。

どうやら自分を見るためには他人になる必要がある。めったに話題にはしないものの、人はそのことに薄々気づいています。

自分を見ることができないという恒常的な不満を無意識にかかえている人間が仮想現実
に救いを求めるのは、ごく自然ななりゆきであり、必然であるとさえ思います。AIを
駆使して個人情報である多量の映像や文書を処理し、CGを利用してその人をもう一人
つくりあげる。

そのもう一人の自分に、もとの自分が会いに行く。見る。対面する。声をかける。対話
する。触る。触られる。「相手」の汗の味を舌で感じたり、腋臭を嗅ぐことさえできるか
もしれません。「相手」と「交わる」人が出てきてもおかしくはありません。というか、
それが人の究極の欲求かもしれません。

満足のいくだけの臨場感をもって自分に会うことができるのでしょうか。疑問に思われ
ますが、これはやってみないと分からないでしょう。

*

VRで自分に会いにいったら気づくこともあるでしょう。考えられるのは、そこで会っ
た自分が依然として見えないということかもしれません。正確にいうと、臨場感が足り
ない気がするのです。つまり、がっかりするのです。

VRで自分に会いにいったら帰ってきてから気づくこともあるでしょう。考えられるの
は、現実として目に映っている世界、聞こえてくる世界、匂いとしての世界、触れ触れ
られる世界こそが自分なのではないか、という思いかもしれません。

世界こそが自分である。この気づきと死後の世界や天国やあの世を見たいという願望
は紙一重だという気がします。いまや人は来るところまで来ているからです。とはいえ、
それが終りだとはとうてい思えません。

#自撮り # スマホ # カメラ # 知覚 # 五感 # 写真 # 欲望 # 欲求 # VR # 仮想現実
ゲーム # 視点 # 視覚

12/02 「何か」に「何か」を見なければならぬ
世界

＊

「何か」に「何か」を見なければならぬ世界

星野廉

2022年12月2日 07:50

目次

「何か」に「何か」を見る

「何か」に「何か」を見なければならぬ

「何か」に「何か」を見るべき世界

「何か」に「自分の見たいもの」や「自分が知っていると思いきこんでいるもの」を見る

「何か」に「何か」を見る

「何か」に「何か」を見るというか、人は「何か」に「何か」を見てしまうようです。

こんなふうを書いて普遍をめざし人類を語る気はありません。人類の端くれである私が、自分とまわりの人類を見ながらつづっている観察記だと考えてください。私は観察するのが好きなのです。

「何か」に「何か」を見てしまうという場合の、前者と後者の「何か」は異なっています。だいたいにおいて、人は自分の見たいものや自分の知っていると思う「何か」を見てしまうように私には見えます。

私が見ているわけですから、いま書いているのは私が見たいものであり、私が知っていると思うものである可能性は高いと思います。その辺をどうかご理解ください。

「何か」に「何か」を見なければならない

「何か」に「何か」を見なければならない世界があります。たとえば、交渉の世界がそうです。商談や裁判の前や労使の交渉をはじめ、交渉にはさまざまな現場がありますが、国家間の交渉を例に取りましょう。

二国間で上級の外交官レベルの交渉がおこなわれる場合には、かなり張りつめた空気が漂うと言います。ぶっちゃけた話が諜報、つまりスパイ合戦なのです。

交渉の時間に遅れた遅れない、どちらがどれだけの時間遅れたか、つまりどちらが相手を待たせたか。もうこれだけでメッセージなりシグナルになるそうです。

＊

交渉が始まると、双方に複数の人員がいるのが普通ですが、その人員の階級、立場、役割と、どの席に座ったかという位置がこれまた解読すべき意味を持ちます。各人の服装、ネクタイの色、顔色、目つき、視線、口調、メモを取るかどうか、どこでメモを取ったか.....。

トイレに立ったか、どれくらいの時間席を立ったか、飲み物を飲んだか、隣の人員に耳打ちしたか、休憩時間にはどのような行動を取ったか、携帯電話をつかったか、休憩後に席順が変わったのはなぜか、一人いなくなったのはなぜか、主席の人物がいやに汗をかいたのは体質かそれとも体調のせいか.....。

通訳が前回と違うのはどうしてか、この席での序列が二番目の人物が最近離婚したというがどういうわけであれだけ多弁なのか、今回初めて出席した隅っこにいる人物があれだけ偉そうな態度を取っているのはなぜか、その横の女性が持っているペンがいやに太いがテープレコーダーかカメラではないのか.....。

被害妄想の世界のようですが、これくらいの目と耳と鼻を持っていないと国家間の交渉は務まらないと読んだことがあります。昔、翻訳業をしていたころに、交渉関連の本を訳し、ずいぶん勉強させられました。

「何か」に「何か」を見るべき世界

世界が寓意や暗喩に満ち満ちていると感じられたら、さぞかし大変でしょうね。解読と解釈をしなければならないのですが、場合によっては、自分勝手にするわけにはいかないのです。

寓意と暗喩でお気づきになった方もいらっしゃると思います。そうです。宗教観の話なのです。「何か」に「何か」を見るべきというよりも、「何か」に「何か」を「正しく」見るべき世界に生きているからです。

私はそういう世界には疎いので、知っていることだけ書きます。

＊

そもそも経典が寓意や暗喩だからなのだそうです（どの宗教の話かは特定しません）。要するに訳が分からないわけです。経典は大昔のものですから、かなりお勉強をしなければ読めません。

いわゆる聖職者というかお坊さんたちでないと読めない経典なり聖典がある。ということは、知が長い間独占されていたと理解できます。昔々は、文字や書物は一部の知的階級にいるエリートだけのものだった。これは学校で習ったことでもあります。

文字が読めて教養もある、そうした一部の人たちが経典の解釈や解読を担い、自分たちでその意味なり教えを決めていたと言えそうです。その頂点に立つ人たちが正統であり、それ以外は偽物であったり異端であったりしたのでしょうね。よく聞く話です。

＊

いずれにせよ、ピラミッドの頂点にいる人たちが決めた解釈が、その宗教の世界観となり、具体的には法や規律や倫理的な規範となって長く存続していたというお馴染みのお話につながります。

上で決めたことが人びと、庶民、一般大衆にまで浸透していた。これまた、分かりや

すい話につながってきます。人びとの日常生活にまで大きく影響を与えていたという意味です。しかも長く続いたようです。

「何か」に「何か」を「見るべき」世界とは、「何か」に「何を見るべきか」が「決められていた」世界と言うべきかもしれません。

いまもそうした世界——宗教だけでなく政治体制の話です——はあるようですし、力と領域を増しつつあるように思えてなりません。

「何か」に「自分の見たいもの」や「自分が知っていると思いきこんでいるもの」を見る

堅い話になってきたので、身のまわりによく見られる話に変えます。

「何か」に「何か」を見る、見てしまう世界に、私たちは住んでいるようです。だいたいにおいて、人は自分の見たいものや自分の知っていると思う「何か」を見てしまうように私には見えます。

それだけはないようなのです。

「見えないもの」であったり「よく知らないもの」であるにもかかわらず——「見える」とか「知っている」と決めるために、その根拠となりそうなものをでっちあげてしまうことがあるように、私には見えます。

これは自分自身を見ていて感じることでもあります。

何をでっちあげるのかと言いますと、具体的には、意味、感情、イメージ、メッセージ、物語といったものです。

*

この人の手にしている花束は私への愛の印だ。彼が言った「はい、そうです」は「いいえ、そうじゃない」にちがいない。あの人が忘れていったこの本は私に読めというメッ

セージかもしれない。あ、そうかあ、これが例のあれのことなのね、それしかないわ。

「うちの娘が最近、〇〇テレビのニュースで出てくるキャスターさんが自分にメッセージを送っているって言うのです。この間も、「あ、△△さんが私に目くばせした」とか「一昨日わたしが送ったメールどおりに、ギンガムチェックのシャツに紺のネクタイをしている。やっぱり気持ちに通じているんだ」なんて嬉しがって……」

嫌よ嫌よはもっともっとという意味。ピンチはチャンス。俺の妹がこんなにかわいいはずがない。これこそが本物。「本当です」は「間違えました」。「本気です」は「冗談です」。「真摯にスピード感を持って」は「テキトーにだらだらと」。飴（薬）は、実は鞭（毒）。あいつは「たったこれだけ？」って言っているけど、「こんなにもある」じゃないか。フェイクだ、フェイク以外の何ものでもない。何が「新たな始まり」よ、うちらはもう「おしまい」だってば。

「そうか、デパートの特売場で買ったんじゃないなくて、夜なべして一生懸命に編んでくれたんだよな、寒かっただろうな、あの手を見ろよ、かさかさに荒れちゃってさ、俺は知っている、あいつの情の深さを、それに……」

＊

こんなことを書いている私自身が、「何か」に「何か」を見てしまう世界に生きて、「自分の見たいもの」や「自分が知っていると思いきこんでいるもの」を見てしまっているようです。

#交渉 #被害妄想 #隠喩 #寓意 #解説 #意味 #メッセージ #物語

12/03 見るために人がつくった「影」

＊

見るために人がつくった「影」

星野廉

2022年12月3日 07:43

目次

人のつくったもの

見るために人がつくった「影」

意味、メッセージ、筋書き、ストーリーのある影

学習の成果、学習の素地

意味、異見、違見、移見

「何か」に「何か」を見てしまう、置き換えてしまう

自分が知っていると思うものを見てしまう

現在に生きる人は忙しい

見たくないものは見ないし、見えないようにできている

人のつくったもの

自然界で角（かく・かど）のあるものを見かけると、人のつくったものだということがよくあります。四角や長方形は、そこに人がいる、いた、いるだろうという印なのです。

空を見ても四角は見当たりません。お日さまも雲たちにも、お月さまも星たちにも、角というものがありません。直線もありません。空に見える直線は電線と飛行機の跡の白い線くらいです。

四角や長方形や五角形や六角形は、自然界ではあまり目にしません。直線自体がまれなのです。そうしたものを自然から採取して見るとすれば、顕微鏡や電子顕微鏡という道具や器械をもちいるしかない気がします。

結晶には多面体が多いですね。つまり肉眼をふくめた五感では出会えない形なのではないでしょうか。

角があるのは分けたり切ったからでしょう。分けるとか切るは、人の中にあるのではないのでしょうか。欲求とか欲望のことです。それが直線や長方形や四角という形として、人から出てくるといえるか、人がつくる。

なにしろ、人のつくるものは整然として美しいのですが、その基本にあるのは、まっすぐな線と尖った角であり、自然界にはあまり見かけません。

見るために人がつくった「影」

写真や映画はつくられた影です。ここで言う影とは、写したものや映したものを指しますが、つくられた影は自然界にある地面や水面にうつった影とは異なります。

なんでわざわざ作ったのでしょうか。見るためにでしょうかね。何を見るためでしょうか。「そっくり」を見るためではないでしょうか。

つくられた影には特徴があります。枠があるのです。フレームとも言います。写真や映画には枠があります。みなさんがこの文を読んでいる端末にもスクリーンとか画面という枠があります。枠は限度でもあります。

映画や動画であれば時間的な枠もあります。制限時間というか作品の時間です。始まりがあって終わりがあるということになります。

つくられた影には空間的な枠も時間的な枠もあると言えそうです。空間と時間を切り取っているからでしょう。切り取ることにより、切り捨ててもいるにちがいません。

意味、メッセージ、筋書き、ストーリーのある影

つくられた影には筋書きやストーリーもありそうです。筋書きとはつくられたものです。物語であり、フィクションのことです。写真であれば目的やテーマです。

映画であれば、作品名、あらすじ、脚本、受賞歴、批評家や映画誌での評価、ジャンル、成人向けか否か、サウンドトラック。こうした目的やテーマのほかに、話とかストーリーがあります。テレビの番組やネット上の動画もそうでしょう。

要するに、地面の影、水面の影、鏡に映った影（像）とは違って、何らかの目的や意味やメッセージやストーリーがあってつくられているわけです。

学習の成果、学習の素地

写真、映画、動画、絵、文字、文章、楽曲といった「つくられた影（写されたもの・映されたもの）」である「何か」に、「自分の見たいもの」や「自分が知っているもの」を見てしまうのは、学習の成果であったり、学習できる素地の有無に大きくかかわっているとも言えそうです。

レプリカ、レプリカ、レプリカ。

三つのうち、真ん中の「力」は漢字の「ちから・リキ」なんですけど、こんなの分かりませんよね。逆に言うと、カフカをカフカと読んでしまうのは、日本語の表記を学習した成果であって、学習した人がそう読み間違えないほうが尋常ではないと思われま

また、レストランの入口近くに陳列された料理のサンプルを見て、お腹が鳴ったり、口に唾が出てくるのも、学習の成果であり、条件反射でもあるでしょう。おそらく、この場合にはパブロフのワンコちゃんの唾は出ないのではないのでしょうか。出たら、ごめんなさい。出た時にはクマに訂正します。

なにしろ、写真や動画に映った「あれ」（「なに」でもいいです）を見て、ヒトは欲情するのです。これがいちばん分かりやすい説明になるでしょう。あれは紙やインクや画素に欲情しているわけではありませんよね。「見たいものそのものではないもの」に、「見たいもの」を見ているのです。「知っているものではないもの」に、「知っているもの」を見ているのです。

同じ理由で、おさるさんはある種の文章を読んで欲情もしないし、ボヴァリー夫人やドン・キホーテのように小説と現実を混同もしないと考えられます。AIが上手に描いた絵を見て、またはAIが上手に書いた詩を読んで、嫉妬したり危機感を覚えることもないでしょう。ある架空のキャラクターに恋愛感情をいだいたり、人形に話しかけることもないはずです。

「人のつくった影（写したもの・映したもの）」は人が「見たいもの」と「知っているもの」を見るためにつくったのですから、そうできているのは当然なのでしょうが、あらためて考えるとすごい仕組みだと感心しないではいられません。

その素地としてある「何か」に「何か」を見てしまう能力もまた、すごいと思います。

意味、異見、違見、移見

「何か」に「何か」を見てしまう。異なったものを見る、違ったものを見る、移りゆくものを見る。意味の発生を感じます。

異見、違見、移見と表記したくなります。こういうのを異見（いけん）と言うのですね。

「何か」に「何か」を見てしまう、置き換えてしまう

壁の模様でも、天井の染みでも、空の雲でもかまいません。人は何かに何かを見ます。見えるというほうが適切かもしれません。見えてしまうのです。いや、むしろ「現れる」というべきでしょうか。



上の二点を見て顔を見てしまう人もいるでしょう。そうでない人もいるでしょう。「二、2、II」という数（すう・かず）を思いうかべる人もいるでしょう。人それぞれです。

● .

今度は黒い点が並んでいます。大きさの違いを見て、大小をイメージする人がいるかもしれません。大きい、小さい、ですね。

重い、軽い。親と子。私とあなた。私とお母さん。私とあの人。男と女。おとなと子ども。人と犬。人とペット。この国とあの国。遠近。左右。太陽と地球。地球と月。陰陽。「仲がいい」。「にらみ合っている」。「一方が叱られて縮み上がっている」。「ウィンクした目だ」。「トンネルの出口と入口かな？」

いろいろなイメージを呼びさましそうです。人それぞれです。

*

● .

上の ● と ・ をご覧ください。● が手前に、・ が後ろに見えるかもしれません。人それぞれですけど、そう見えるという前提で話を進めます。

平面にある大きさの異なる二点を、奥行きとか遠近に置き換えているわけです。奥行きとは、奥深さ、深さ、背後、背景というふうに連想を呼びさます気がします。

向こうから追いかけて来る、トンネル、望遠鏡、顕微鏡、研、エコー、太陽と惑星、進化、だんだん大きくなっていく、だんだん小さくなっていく、遠くなっていく、近くなってくる、「おーい！」「何だーい？」「待ってくれ」「さようなら」ー。子を見送る親、「元気でね」、いつまでも遠くで見ている。

ストーリーを感じませんか？ 声が聞こえてきませんか？

イメージが膨らむとも言えるでしょう。話がだんだんズレていくとか、話が大きくなるとか、そんな言い方も可能でしょう。要するに、連続して置き換わっていくわけです。動きやドラマが生まれてくるとも言えます。

もう一度見てみましょう。

.



私なんか、遠くで見守っている存在と見守られている存在の関係を勝手に想像して涙ぐみそうになりますが、遠くからじっと監視されているイメージを呼び覚まされて身震いする人がいても不思議ではありません。

*

いや、そんなふうにはぜんぜん見えないけど。純粹に黒い丸と黒い点にしか見えない。

いや、黒い丸と黒い点には見えないけど。画素の集まりにしか見えない。

以上のような意見や感想があっても私は驚きません。人は印象の世界に住んでいるからです。印象やイメージは、人それぞれです。

こんなふうに、私も「ある発言」（自分の書いたものですけど）に、自分が知っていると思っている「ある感情」を読む、つまり見てしまいます。これは動揺を静めるためではないかと自己分析しています。

つぎに、こうした心理について触れてみましょう。

自分が知っていると思うものを見てしまう

あ、それってゲシュタルト崩壊。科学的に説明可能なの。なんの不思議もないわけ。

そんなことで感動していちや駄目よ。プルースト効果って聞いたことがない？ 検索してみよ。プルースト効果、勉強になった？

「何か」を見て「自分が知っていると思うもの」に置き換えることを思考停止とか判断停止と言います。なんの不思議もありません。勉強になりましたでしょうか。

言葉だけで知っているレッテルや決まり文句を貼る行為にはある種の快感がともなうことは否定できないようです。誰もが嗜癖し依存します。名づけることは対象を手なづけ、飼いならそうとする行為だからでしょう。

名前や名詞に置き換えるだけですが、そうだからこそ簡単ですし、気持ちいいのではあります。なんといっても、考える必要がなくなるのがいちばんうれしいですね。私も愛用しております。

現在に生きる人は忙しい

「そのツイートは、要するに嫉妬ね。読まなくてもいいよ、次に行こう」

上の言葉の「ツイート」を「記事」や「論文」に置き換えてもいいでしょう。「嫉妬」を、「あおり目的」、「愚痴」、「自分でも何を書いているのか分からない」、「単に、かまってほしいというメッセージ」、「自分が物知りだと誇りたい気持ちのあらわれ」、「自分は詩人であるという主張」、「ばかやろうと言いたいのを気取っているだけ」、「あーあ、退屈だとぼやいているだけ」に置き換えることもできそうです。

現在、文字や文字列や文章は、だんだん読まれなくなっています。ざっと見る対象になりつつあります。ざっと見て、自分にとって都合のいいメッセージに置き換えるのです。

誰もが忙しいからです。流通している情報量が多すぎるのかもしれませんが。

見たくないものは見ないし、見えないようにできている

人は「何か」に「何か」を見てしまうのですが、それどころか、自分が見たいものや自分が知っていると思っていることを見てしまうようです。

簡単に言えば、人は「見えている」はずのものをしばしば「見ておらず」、むしろ「見えないもの」を「想像して見ている」（いわば鏡の中に見ている）のであり、「見えているはずのもの」よりも、その「想像して見ているもの」のほうにより興味と愛着を持っていて、その結果として、人には「ないもの」を「ある」と錯覚し、さらにはその錯覚を強化して「ある」と決めるという仕組みが備わっているということになります。

人は「見たいもの」（それが「見えない」にもかかわらず）を「見える」と決めるために、その根拠となりそうなものを求めるのです。

＊

こうも言えるでしょう。人はないものをあると決めるために、その根拠となりそうなものを求める。捏造する。その根拠は何であってもかまわない。いわば、イワシの頭も信心からの「イワシ」は何でもあってもいいのです。

求める、でっちあげる——それが人の「見る」であり「見える」です。これは、気持よくなりたいたらに他なりません。

見たくないものは見ないし見えないように人はできているのでしょう。だからこそ、人はわざわざ自分で影（写したもの、映したもの）をせっせとつくり、つくり続け、そこに見たいものを見る、見つづけるにちがひありません。

自分のつくった影には、人が見たくないものもうつつているはずですが、それは見ないのです。人は見ないことに長けています。見ないようにできていると言うべきかもしれませぬ。「見る」は「見ない」、「見える」は「見えない」でもあるようです。

#イメージ # 影 # 自然 # 映画 # 写真 # 意味 # メッセージ # 感情 # 印象 # 物語 # 筋書き # 四角 # 直線

12/04 やっぱり見えます。

＊

やっぱり見えます。

星野廉

2022年12月4日 07:47

やっぱり見えます。人の顔です。似た人を知っています。何を見ているのかと申しますと、天井の染みなのです。二十年以上前から、そこにあります。何度見たか知りません。やっぱり見えます。見ないつもりでも、見てしまいます。

よく考えれば、テレビも、映画も、写真も、絵も、パソコンのモニターも、「それ」そのもの」ではないにもかかわらず、「それ」を見てしまうという錯覚を利用したものです。でも、それは意図的にそうなっているのであって、不意に、出あってしまうという体験をしているわけではありません。

それなのに、出あってしまう。出あってしまった。出あってしまうだろう。出あってしまうかもしれない。そんなことがあります。人をやっている以上は、あります。何かにか何かを見る。これって、人である限り仕方がないみたいです。ネガティブに、つまりマイナス思考で、とらえることはないのです。

たとえ、不意をつかれたとしても、正々堂々と出あってしまえばいいのです。

そういう体験の恥ずかしさや後ろめたさやかっこ悪さを、薄めるためのいい言葉、つまりおまじないの言葉があります。それは「あらわれる」です。

「〇〇が見える・見えた」の代わりに「〇〇があらわれる・あらわれた」と、するだけでいいのです。「見える・見えた」が自分の責任なのかどうかは、誰にも分からないと思いますが、とにかく責任を転嫁するのです。それだけで、だいぶ、気が楽になりませんか？

このように言葉は、ときとして人を助けたり救ってくれます。あの天井の染みのなかに見える人の顔は、「あらわれている」のだ。そう思うと、気持ちがいくぶん、やわらぎます。

ところが、同時にぞくっとくるのです。こっちに落ち度はない。責任はない。そこまではいいです。じゃあ、なぜ？ でも、なぜ？ なぜ、「あらわれる」の？

責任だか何だか分からないものを転嫁した、つまり押し付けたのはいいけれど、その「押し付けられたもの」あるいは「押し付けたこと」が気になってくるのです。なぜ？ どうしてなの？ 何が起こって、そうになっているわけ？

こういうことは、深く考えることではなさそうです。考えてみても、いいことなど、これっぽっちもないみたいだからです。だから、安心してください。あなたに責任はありません。

あらわれるのです。

#顔 # 責任転嫁 # 現れる# 似ている # 大丈夫 # 錯覚

12/04 なぜか懐かしい世界

＊

なぜか懐かしい世界

星野廉

2022年12月4日 13:26

○

みかんがずらりと並んでいるより、さんまが並んでいるほうが不気味に見えるのは、さんまに目があるからかもしれない。顔があるからと言うべきか。

人の顔がずらりと並んでいても、それがそっくりな顔ばかりなのと、それぞれが違った顔つきに見えるのでは、気味の悪さに違いがある。知らない顔と親しい人の顔でも違う。

有名人は顔を売ってなんぼの世界に生きているから、同じ顔が並んでいても違和感を覚えることはないが、見知らぬ人の同じ顔だときょっとするにちがいない。

親しいどころか大切な人の同じ顔がいくつもいくつも並んでいたら、心穏やかではない。鳥肌が立つくらいで済みそうもない。有名は無数、無名は有数だからだ。

有名人は複製されてなんぼの世界にいるからかまわないが、無名の人が複製されるのはそこに何かの企みを感じないではいられない。

＊

にわとりやさんまの顔を見分けられる人は少ないだろう。にわとりをペットにした経験のある人なら、飼育されているおびたしい数のにわとりを見て、かつて飼っていたにわたりの面影を思いださずにはいられないはずだ。

愛着のある物や生き物はそうたくさんあっていいわけではない。ましてや、ずらりと列を成しているはずがない。

自分の名前が活字になってずらりと並んでいるのもいい気持ちではないだろう。いろいろな名前が集められている名簿ならまだましにしても。

知り合いの名前や大切な人の名前が活字となってずらり並んでいるとすれば、これは非常事態ではないだろうか。いったいどういう意味なのか。何が起きているのだろうか。と不安に襲われるにちがいない。

不条理すら感じる光景だ。名前に顔を見てしまうからかもしれない。

*

数字はどうだろう。

自分が数字に置き換えられて活字となり、どこかで処理されたり処分されたりする。これはおおいにありうる話だ。そうならないければ、行政も統治も成り立たない。

刑務所では名前の代わりに番号で呼ばれるらしい。刑期を終えた人が、運転中に前の車のナンバープレートにかつての自分の番号を見つけたらどう感じるだろうか。

数字で呼ばれた人にとって、その数字は生涯特別な意味を持つにちがいない。

誰もがいつか数字に置き換えられる運命にある。〇〇者〇名。

人を数字として処理し処分する人がいる。数値であれ、番号であれ、それには顔がない。名前であるときえ感じられないにちがいない。

簡単に処理し処分できるはずだ。処理、処分、駆除、抹消。

処理しているのが数字だと考えれば、ボタンも押せるはずだ。顔が浮かんでいては容

易にボタンは押せない。少なくとも躊躇するだろう。人なら。

*

名前、言葉、数字、記号、絵、写真。人にとって自分を指し示すものは、人の外にある。自分の手から離れていて、自分の思いどおりになるものではない。

自分を裸眼で見たことがある人はいない。

人にとって自分は見られるものであり見るものではない。個人のレベルでも、人類のレベルでもそうだろう。

同様に、人にとって自分は指されるものであって指すものではない。個人のレベルでも、人類のレベルでもそうだろう。

人にとって自分とは他人と、他の生きものや生きていないものをふくむ世界とのかかわり合いの中にしかない。

*

「見る」も「指す」も自分に関して言うなら、つねに人の外にある。自分は見られて指されるだけ。

世界でいちばん気になる存在は徹底した受け身にさらされている。そうであるとするなら、世界が受け身であるのとほぼ同義ではないか。

そんな無力さは、できれば直視したくない。だから誰も見ないか、見ても忘れる。人は簡単に壊れないようにできている。

壊れなくするものが懐かしさだ。懐柔と言うではないか。

冗談でもおふざけでもない。懐柔を辞書で調べると「てなずける」「だきこむ」という

言葉が見える。

○

人は世界と森羅万象を手なずけるために名づけるが、名前は人にしか通じない。

森羅万象はそう簡単には飼いならされない。なれないのだ。なづけても、なつかない。冗談でもおふざけでもない。

人は世界と森羅万象に人を見ることがある。人に擬する。一方的で一方向のギャグ。人を馬鹿にした話だ。いや、馬鹿にした話だ。

百科事典を見ると、いかに人があだ名をつけるのに長けているのかが分かる。

名前、名称、学術名、通称。笑いたくなる名前があり、悪意を感じるものすらあるが、そう感じるの人は人しかいない。陰口に似ている。楽屋落ち。

*

森羅万象を写したり映すとき、人は相手を人に擬す。世界を鏡に見立てている。

目に映るものすべてが自分に似たものになる世界。それが人の世界だろう。人の世界はあだ名と顔に満ち満ちている。

気に掛かる。気に掛ける。話し掛ける、声を掛ける、手を掛ける。相手との間に橋を架けようとする。これが言葉であり、あだ名なのだろう。

相手を見る。相手に自分を見る。勝手に見る。人は似ているという印象の世界に生きている。

似ているか、その他もろもろ。その他もろもろは見ない。まともに見れば自分が壊れてしまうのを知っているから見ない。

○

人にとって世界は顔に満ち満ちている。どこか親しい、どこか近しい。なづける前に感じるなつかしさ。

誰もが生まれて間もなく感じる懐かしさ。母の懐（ふところ）の懐かしさ。

懐かしさは顔。赤ちゃんにとって世界は「ある」のではなく「似ている」。

「似ている」は顔。「何かが」も「何かに」もない「似ている」だけの世界。それが顔に満ち満ちた世界。

「何かが」も「何かに」も、切り分けることを覚えてからの話だろう。

「似ている」だけの世界は「懐かしい」の世界。なぜか懐かしい世界。懐かしいだけの世界。

懐かしさは人が壊れないための砦なのかもしれない。子が崩壊しないための母の懐なのかもしれない。

*

懐かしさは顔にちがいない。

赤ちゃんにとって世界は「ある」のではなく「似ている」。「似ている」は顔にちがいない。

*

あだ名は相手に通じないにしても、顔は相手とのかかわりの切っ掛けである気がする。

なぜか懐かしい世界。顔に満ち満ちた世界。赤ちゃんは生きもの、生きていないもの、人の分け隔てなく、笑い掛ける。笑みは世界との架け橋。

笑う門には福来たる。

人は顔に満ち満ちた懐かしい世界になじんでいく。なれ、親しんでいく。

とはいえ、人は世界になつきはしない。世界も人にはなつきはしない。なまえが人と世界のあいだにあるかぎり、どんなになづけてもなつきはしない。

名づけることで、切り分けを学び、笑みはしだいに分け隔てあるものに移っていく。

名を持ってしまったために、人はこの星で孤独なギャグに生きるしかないのかもしれない。

「見る」も「指す」も自分に関して言うなら、つねに人の外にあるように見える。

世界は見てくれているのだろうか、指や視線や肢や触手や触角で指してくれているのだろうか。後ろ指だけはさされたくないが、そう望むのは贅沢なのだろうか。

たとえ、世界がなつかなくても懐かしさだけは共有してくれていると信じたい。

○

名づけて手なずけることが難しいもの。そもそも言葉にするのが難しいもの。

difficult to name、difficult to tame、difficult to frame

The Unnamable/L'Innommable

name、fame、shame、blame

shameful、shameless、nameless、namefool

calling names is such a lonely game to play
when it's time to pray

what a shame

what a nameless name that we've given to each of our tameless neighbors

namely we are to blame

shame on us

#イメージ # 連想 # 言葉 # 名前 # 数字 # 番号# 顔 # 似ている # レトリック

12/05 世界は顔で満ち満ちている

＊

世界は顔で満ち満ちている

星野廉

2022年12月5日 08:01

世界は顔で満ち満ちている。そんなふうによく思います。人面〇〇という言葉がありますね。たくさんありそうです。こうした現象に共通するのは、いろいろなものに、人の顔を見てしまうという点です。

人間以外の生き物の顔、毛皮の模様など人間以外の生き物の身体の一部、人間の皮膚にできた出来物のもとより、無生物、つまり、壁や天井の染みの一部、カーテンの模様、空に浮かぶ雲、石や岩といったものに、見えるはずのない人間の顔を見てしまうのです。

きわめて主観的な現象のようですが、複数の人たちに共有される感覚だということになると、主観的では済まされないという思いに、人はとらわれるみたいです。ただ事ではない、という感じでしょうか。人面〇〇だけでなく、イエスや聖母の顔・姿、あるいは観音像が何かに出現したという噂をめぐって、大騒ぎする例があるのも、理解できる気がします。

人は、人の顔や表情に大きな反応を示すと言われていています。人間が赤ん坊のときから、観察される習性のようなのです。顔と表情とは区別して、つまり「分けて」考えるべきだという気がします。「顔」が即物的な意味合いを持っているのに対し、「表情」という言葉にはトリトメがないというか、抽象的なニュアンスを感じます。

○

顔をつくる。これも、人特有の習性みたいです。

表情をつくる。お化粧をする。仮面やお面をつくる。人や人以外の生き物を描く。「にんぎょう・ひとかた・人形」をはじめ、人以外の生き物に「似せた」ものをつくる。今挙げた一連の行為には、たいてい、「顔をつくる」という行為が含まれていると思われます。

顔を構成するパーツは、目、口、鼻、頭という順序で重要度が決まっているのではないかと、個人的に感じています。どういうわけか、哺乳類・爬虫類・鳥類・両生類・魚類・昆虫には、たいてい、目、口、鼻、頭が備わっているように「見えます」。

とりわけ目が特権的な位置をもっている気がします。目を「見て」、あるいは、目に「見られて」、やすらぎを覚える場合もありますが、怖い、不気味だ、心が乱されるという思いにとらわれることも多いです。人面〇〇のたぐいだと、後者がほとんどだという気がします。

○

生き物の生態を写した映像を、テレビなどで見るとき、人間以外の生き物をつい擬人化している自分を意識し、はっとすることがあります。そうした映像に添えられるナレーションが、被写体である生物を擬人化した物語となっていることにも気が付く場合があります。

テレビや映画に限らず、身の回りを見ると、「にんぎょう・ひとかた・人形」だけでなく、擬人化された生き物を模した玩具のたぐいや絵が多いのに驚かされます。いわゆるキャラクターという映像つまり視覚的イメージや、キャラクターグッズという物体や、人面〇〇と呼べそうなものに取り囲まれているのにも驚かされます。

「何か」に似たものに囲まれているというぼんやりとした感じから、世界そして宇宙は比喩あるいは暗号であるという確信までは、ほんの数歩だという気がします。

○

人間にとって、森羅万象は「人間のようなもの」なのかもしれません。もしそうだとすれば、こんなのは人間だけがやっている気がします。そう思うと、人間はある種の「心の病」にかかっているとも言えそうです。

それはさておき、ところで、意味とはもともと顔や表情ではないでしょうか。意味の前にあるものは意識されません。それが意味となって初めてその顔と表情が意識されるという意味です。意味はちょっと踏ん張らないと意識されない気がします。踏ん張りすぎると別のものになってしまう気がします。

○

擬人化されたものが、夢にまで出てくるのには、閉口し感心もします。思いつき、つまりでまかせですが、夢というのは、擬人化という仕組みを原理としているのではないのでしょうか。夢のなかでは、何もかもが、人である自分と通底しているように思えてなりません。

夢の主語は自分であり、自分と万物のイメージをつなげる、非人称的で匿名的でニュートラルな仕組みだという感じもします。「非人称的で匿名的でニュートラルな」というのは、人間に深くかかわりながら、人間がコントロールできない自立した状態にあるという意味です。だから、人は夢のなかで自由であると同時に不自由を感じている、という気がします。

夢は思いどおりになりません。自分ひとりしかいない映画館の最前列のど真ん中の席に縄で縛られて映画を見ているようなものです。不自由どころか強制的に映画を見せられます。夢の中ではどんなに駆けても駆けても前に進みません。

しかもなかなか逃げられません。あげくの果てが現実に逃げこみます。そこにも不自由と強制があります。

夢、現実、思い、言葉の順に思いどおりにならない気がします。言葉はいじれるので思いどおりにいくような錯覚におちいますが、言葉もままならないものです。とはいえ、チョロいという錯覚をいだかせてくれるので、人は言葉で現実や思いの辻褃合わせや帳尻合わせをして鬱憤を晴らします。

辻褃合わせが高じると戦争も起きます。たった一人、または少数の人の辻褃合わせにその他おおぜいが付き合わされているわけですが、現に起きています。夢に逃げこむしかないのでしょうか。

○

人と、人が知覚する森羅万象とは、人の意識および無意識のなかで「つながっている」というか、比喩的な意味で「血縁関係にある」のではないか。もしかすると、それは、人の知覚と意識のなかにおいてだけでなく、宇宙に広がっている仕組みなのではないか。ふと、そう思いました。

ヒトという種に特有の、身の程をわきまえない不遜な考え方だと反省しつつも、こういったことについて思いをめぐらしてしまいます。致し方ない気もします。人間からこの性癖を取り除いたら、何が残るのでしょうか。尻尾のないおサルさんたちのなかでも、とりわけひ弱い種というだけでしょうか。

丸腰の真っ裸でニホンザルと取っ組み合いの喧嘩をしたら、私は絶対に負ける自信があります。なにしろ、向こうは毛皮がデフォルトです。口論でも負けるかも。昨夜の夢で現に負けましたもの。

#連想 # 夢 # 仮面 # 人形 # 顔 # 似ている # 比喩 # 擬人 # 表情

12/06 遠くても近くても、あなたはあなた

＊

遠くても近くても、あなたはあなた

星野廉

2022年12月6日 08:06

遠くても近くても、あなたはあなた

持論なのですが、you は I love you. という連なりの中でいちばん美しく、しかも情味あふれる音と旋律を醸し出すような気がします。

you だけじゃなくて、I love you. です。三音節であることに注目したいです。「あなた」と同じく、三音節なのです。だから、歌いやすい。

I love you. と口にしてみてください。

次に「あなた」と言ってみてください。

その両方に、相手へのいたわりを感じませんか？ 「愛しいあなた」みたいに。英語の歌で I love you. とあったら、そこだけ「あなた」と替え歌にするのも面白いかもしれません。あるいは、逆に日本語の歌で「あなた」と歌い上げている部分を I love you. とするとか――。

「あなた」＝「I love you. (愛しいあなた・貴方)」。これでは「かなた・彼方」の意味がすくえません。

「あなた」＝「I miss you. (目の前にいないあなた・彼方)」「without you (目の前にいないあなた・彼方)」(いずれも三音節で歌いやすい)。これでは、「かなた・彼方」だけになってしまいます。同じく三音節の「only you (あなた・貴方だけ)」もイマイチの感があります。

まとめると、「あなた」＝「I love you. (only you)」＋「I miss you. (without you)」。いずれも三音節で歌いやすいので歌詞に多用されていますが、個人的には、やっぱり「あなた」が好きです。

you

以下は、あくまでも個人的な印象です。

I love you. 三音節ですが、三単語なので各語の自己主張が強く、you だけが突出する感じはしません。むしろ love のほうが強い。はっきり、相手に「愛」を伝えるフレーズだという気がします。言わずもがなの you は、主役である love の陰に控えています。

I miss you. これも三音節、三単語ですが、miss の「i」が哀しく響きます。ss と you がどうしてもつながって発音されるでしょう。you にすすり泣くような翳りがかかる感じ。このフレーズは、歌うよりもささやくためにあるような気がします。

without you 前置詞が you を際立てます。you を歌い上げる助走のようです。じょじょに高まる感じ。弱強強と盛り上げていきます。

only you これも you が際立ちます。強弱強といいリズムです。切なく響いて捨てがたい味があります。

このように見ると、without you と only you における you の音としての存在感がくっきり立ちあらわれるようで興味深いです。その感じがよく出ている楽曲を紹介します。

では、I love you. の love が際立つ例から、どうぞ (I miss you. は曲が頭に浮かばないので割愛します)。

(動画省略)

かなたにいる、あなた

a・na・ta。母音がトリプル a の三音節ですから、単独で歌い上げることができます。単独で、が味噌です。

「あなた」の出てくる私の大好きな歌二曲を題材に、「あなた」という「美しい」呼びかけの言葉の「哀しさ」についても考えてみたいと思います。

まず、小坂明子さんの歌った「あなた」（作詞・作曲：小坂明子）ですが、この歌の「あなた」は遠くにいる感じです。

”もしも私が家を建てたなら”

”あなた あなた
あなたがいてほしい”

歌詞にはいろいろな解釈ができそうですが、ひょっとすると、この「あなた」はいまどこにもいない「あなた」かもしれません。たぶん、そうでしょう。「あなた」「に」ではなく「あなた」「が」であるところに、そんなニュアンスを感じます。

「あなた、貴方= you、彼方=over there」のうちの「彼方（かなた）」の色合いの濃い「あなた」です。

「もしも」と出だしが「仮定」であるのが象徴的です。もし（も）」は架空や空想の世界に入る時の鍵の言葉ですから。「ないもの」や「いない人」を「あるもの」と「いる人」にするのが言葉の魔法です。

そばにいる、あなた

一方、岩崎宏美さんの歌った「ロマンス」（作詞：阿久悠/作曲：筒美京平）では、「あなた」は現実にあります。

”あなたお願いよ 席を立たないで”

でも、ただいるだけでは駄目で、ずっとそばに——それも息がかかるほど——の距離にいてほしいとなります。切ないほどの願い。

たとえ、くっつくほどそばにいても、あなた（貴方）が「彼方=over there」に行ってしまうはしないかと気が気でならないのです。健気ですね。初恋なのでしょうか。

あなたは美しく哀しい言葉。

あなたがそばにいても、または、あなたがそばにいても、「あなた」と呼びかける気持ちは哀しいのです。

#音楽# 邦楽# 洋楽# 日本語# 英語# 歌詞# 人称代名詞# 二人称

12/07 夜の思考、昼の思考

＊

夜の思考、昼の思考

星野廉

2022年12月7日 08:05

どうということかと申しますと、辞書によれば、
＊かつて、「しる・知る・領る」とは、何かを目にしたときに、「これは全部、わたしのものだ。わたしにまかせとき」と主張する、という意味だった。
ようなのです。
(拙文「かく・かける (3) - (4)」より)

知る領る地知る
知る知る知知る
知る領る血知る
知る知る血知る
知る痴る血汁

恐ろしい、お呪いですね。悪マジ無い、という「感じ＝感字」です。ちょっと、ここで、上記の「当て字＝感字」の説明をさせてください。

地(ち)に「しる＝汁＝おしっこ」をかけて、その場所を「知る」
＝「領(し)る(※広辞苑に載っています、「自分の領地にすること」です)
＝「痴(し)る(※これも広辞苑に載っています、「痴(し)れる」とも言い、「頭がおかしくなること、変になること」です)」という具合に、
自分の「なわばり＝縄張り＝テリトリー」を作ろうとか拡大しようとするマーキング行動は、
ワンちゃんやネコちゃんや他の生き物たちの行動だけでなく、ヒトにもあると言うよりも、
むしろヒトが最もエスカレートした大規模なマーキング行動を行っている、
と言えそうです。

要するに、どうやらヒトは、知り＝領り＝痴りすぎたようです。
(拙作「テラ取り物語」より・電子書籍ですが無料で読めます。)

＊

世界地図や衛星写真や地球儀で、ここは、このあたりかなとボールペンの先でこつこつと突いてみる。ここは日本国にある〇県〇市〇町〇番地。ここは地球。ここは太陽系。ここは銀河。ここは宇宙。

〇県、日本国、地球、太陽系、銀河、宇宙——広くて大きな「そういうもの」は、言葉でしか知らない「何か」であるはずなのに、その存在が事実だと言われている。その「何か」をどんどん「広く」「大きく」していくと、それにつれて抽象度が高くなる気がします。

話が広く大きくなるほど、体感では容易に確認できないものになり、どんどん遠ざかっていくのです。知識や情報は体感できないという意味で抽象なのです。

＊

「しる」を「知る」だけでなく「領る」と書く、つまり領土の領という字を当てることもあるらしいのですが、興味深いことだと思います。知恵や知識の知と、領土や領地の領がどう重なるのでしょうか。

さらに「痴しる・痴しれる」もあるのですが、ぜひ辞書の語義をご覧ください。私はよく眺めています。

痴ると痴れるといえば、谷崎潤一郎が自分の作品に『痴人の愛』というタイトルで痴という文字をつかったことを思い出します。さらには、同じく谷崎作『刺青』の冒頭にある「愚おろか」も連想しないではられません。

”それはまだ人々が「愚おろか」と云う貴い徳を持って居て、世の中が今のように激しく軋きしみ合わない時分であった。殿様や若旦那わかだんなの長閑のどかな顔が曇らぬように、御殿女中や華魁おいらんの笑いの種が尽きぬようにと、饒舌じょうぜつを売るお茶坊主だの幫間ほうかんだのと云う職業が、立派に存在して行けた程、世間がのんびりして居た時分であった。女定九郎おんなさだくろう、女自雷也じらいや、女鳴神なるかみ、——当時の芝居でも草双紙くさぞうしでも、すべて美しい者は強者であり、醜い者は弱者であった。”

谷崎潤一郎作『刺青』（新潮文庫『刺青・秘密』所収）

支配する、支配される——この構図における「支配される」がいかにも「痴」であり「愚」であるかを書きつけたのが谷崎潤一郎だったと私は理解しています。それは play（演じる、遊ぶ、賭ける、競う、奏でる）としての痴であり愚なのです。

私の中では、痴と愚とは「夜の思考」なのですが、そのことについて以下に書いてみます。ただし、谷崎の痴と愚と必ずしも重なるわけではありません。私が勝手に連想しているだけです。

＊

恥ずかしい話なのですが、いまだに天動説を信じています。

子どもの頃には太陽や月や星が動いていると信じて疑いませんでした。まして地球が丸いなんて思いも考えもしませんでした。

いまはどうかといえば、揺れています。その時の気分で地動説と天動説のあいだを行ったり来たりしているのです。地球が丸くて太陽の周りをまわっているという話は学校で習って知っていますが、どうしても地動説が体感できません。そんなわけで、二つの説のあいだでいまも揺れています。

そもそも「太陽」はぴんときません。お日さまです。「地球」は地が丸いという意味ですけど、これもじっくりしません。せいぜい地面ですが、これだと平べったい感じがしませんか。

＊

お日さまが、東から上り、西に沈む。夜のうちに、地面の反対側をまわるような形で、地球の周りをまわっている。そう感じられます。これが体感というものなのでしょう。

いや、本当は地球のほうが太陽の周りをまわっているのだ。そう学校で習ったのだから、そうなのだ。うんうん。これが昼の思考です。恥とか外聞とか世間体に縛られているのが、昼間の自分です。

夜になると、まして夜中に目が覚めたときには、恥も外聞も世間体も気にしない境地にいるので、堂々と天動説を信奉しています。これが夜の思考です。

昼の思考では「知る」と「領する」、つまりぎらぎらした支配欲が活発になり、夜の思考では「痴する・痴しれる」、つまりぼーっとした放心がもどってくるとも言えるでしょう。もちろん、これは私が勝手に考えていることです。

人は子ども時代に天動説を信奉し、やがて地動説に改宗するが、その後も密かに天動説の信者でありつづけるとも言えそうです（いまは体感の話をしています、この記事は天動説を推奨するものではありません、念のため）。

さらに言うと、人は夜には子どもになります。徹底的にすべてを「まかす」状態である体感が満ちてくる——これが「痴れる」、すなわち「支配される」にもどることです——からでしょう。赤ちゃんにもなります。

赤ちゃんを卒業した人などいないのです。誰もが自分の中で赤ちゃんの状態を大切に持ちつづけています。それが痴・稚・恥であり愚・具であっても、ぜんぜん恥ずべきことではないのです。

ところで、さきほど「支配される」と書きましたが、子どもや赤ちゃんがおとなに支配されるという意味では必ずしもありません。

子どもに限らず誰もが「支配されている」わけですが、何に支配されているかは不明なようです。こうなったら、空をあおぐしかない気がします。

人は愚かで知りもしない。どんなに知（領）ったつもりでも、高が知れている。やっぱり痴れているのかも知れませんね。もちろん、この私めを最前列のど真ん中に据えての話です。

#天動説 # 地動説 # 赤ちゃん # 夜 # 抽象 # 体感 # 地球 # 知る # 領る # 痴る # 痴れる # 谷崎潤一郎

12/09 もう、そうなのかもしれない

＊

もう、そうなのかもしれない

星野廉

2022年12月9日 08:09

”一週間目の夜に電話をかけると、杏子に似た声が受話器の中から細く響き出てきた。杏子の声とはすこし違うなと聞き分けて、「Sという者ですが。ヨウコさんはご在宅でしょうか」と初めて口にする《ヨウコさん》という言葉にぞっとするような異和感を覚えながら言うと、「少々お待ちください」という無表情な声とともに受話器がコトリと台の上に置かれて、足音がたしかに階段を登っていった。”

古井由吉『杏子』（『杏子・妻隠』所収）新潮文庫 pp.133-134）

私にとって《いわかん》は二つある。違和感と異和感なのだが、前者が一般的だろう。違和感とはちぐはぐな、ずれた感じで、異和感はぎょっとする異物の現れを前にした動揺であり、どちらも捨てがたく両方ともあってほしいと思っている。

私の場合には、それぞれがさらに二つに分かれる。単純に言うと、自分が変わるか、それとも世界が変わるかである。そんなわけで、計四つの「いわかん」があることになる。

周りが変われば自分には責任がない。変わって立ちあらわれた世界に責任を転嫁すればいい。一方で、よりによって自分だけが変わってしまったとして、身に覚えはなくても責任を感じるのが人情ではないだろうか。

ある朝目覚めてみたら、自分を除いて巨大なゴキブリたちの支配する世界になっていた。または自分だけが巨大なゴキブリになっていた。

自分はいつもどおりの見慣れた自分であって、世界全体が見慣れないものによって変わっている。あるいは、自分だけが見慣れない「何か」によって変わっていて、世界はいつもどおり

の様相を呈している。いずれにせよ、自分から見れば、自分だけが違うし異なるのだから、困った事態であることに変わりはない。

＊

巨大なゴキブリだと大きすぎてリアリティに欠けて恐怖感がない。それよりもっと怖いのは、どこかが違う、何かが異なるではないだろうか。なにしろ、どこかがどこなのか、何かが何なのか、よく分からないのである。

確認しようにも、怖くて深追いしたくない。深追いして違和や異和の正体を白日の下にさらしたくないという心理が働くのである。すると疑心暗鬼を生じて異和や違和が増大し、「こんなふうになっているのは自分だけではないか」という孤立感がさらに深まる。

どこか知らないが異なっている、なんとなく違っている。まるで暖簾に腕押し。根拠の希薄な違和感や異和感ほど不気味なものはないだろう。しかも、異物と化したり、ずれてしまったのが、自分なのか世界のほうなのかが不明ときている。ダブルパンチ、ダブルピンチ、場合によってはダブルバインドである。

それだけではない。異和と違和の根拠が薄弱なだけに、どちらに問題があるのかが逆転しそうな気配さえ漂わせている。まるでネガとポジ。どっちにひっくり返るか分からない。優柔不断で頼りないものほど、面倒で頑固なのである。

ネガとポジ、白と黒の反転。一回の反転を想像しただけでも目がまわりそうになるが、根拠の乏しさがその反転をさらなる逆転へと誘う。ネガポジネガポジネガ。白黒白黒白。

図柄はまったく同じままに反転しそれがさらに逆転する世界。反転と逆転がはっきりなしに繰り返される世界。自分と世界のどちらに問題なり責任があるのかは依然として不明。

＊

白黒、ネガポジ、陰陽、明暗というふうに見て分かる反転なら、まだましなのかもしれない。

善悪、正誤、真偽、虚実だと、どうだろう。善だと思っていたものがとつぜん悪に、正しかったものが誤りに、真実が偽りに、虚構であるはずのものが現実になる。

こうした反転は、見ただけは分からない。何らかの出来事が切っ掛けで、じわりと実感されるというか、身に降りかかってくるにちがいない。

反転が生じたのは分かったとしても、自分に責任があってそうなったのか、世界のほうに問題があって異変が生じたのか、皆目見当がつかない。違和と異和、反転と逆転が交互にやって来る。自分の中の問題なのか、世界の側の問題なのか。

夢と同じで見ているしかない。もう夢なのか。まだ夢なのか。うつつと夢が反転しつづける夢、またはうつつ。

善だと思っていたものがとつぜん悪に、正しかったものが誤りに、真実が偽りに、虚構であるはずのものが現実に感じられ、しかもそれがあある出来事を切っ掛けにとつとつに反転し、さらにある時になっていきなり逆転する。

まるでいまの時代や世界とそっくりではないか。こんなものに付き合っていたら、そのうち心が壊れるに決まっている。もう、そうなのかもしれない。

#違和感 # 異和感 # 反転 # 逆転 # 善悪 # 正誤 # 真偽 # 虚実 # 妄想

12/10 【掌編】 捨てられた名前たち

＊

【掌編】捨てられた名前たち

星野廉

2022年12月10日 07:49

母の遺品の一つに小さな手帳がある。これだけは捨てられない。

手帳を残しておいたのには理由がある。私の名前がいくつも書かれているからだ。正確に言うと、私が生まれる前に考えられていた私の名前の案である。私につけられるはずだった名前が、何ページにもわたって三十くらい記されている。

旧姓、つまり父の苗字に続けて書かれている名もあれば、苗字なしのものもある。男の名がほぼ三分の二、女名は三分の一の割合だ。父の名から漢字を一字とったものもいくつもある。私の名前と一字同じものもある。

母の名から取られた名が見当たらない。気になったので丹念に探してみたが、やはり無い。古風だとかいう理由で、母が自分の名前を嫌いだと言っていたことを思い出した。

名前を書き付けていた時に母は妊娠していたのだ、と今更ながら気づく。自分の迂闊さにあきれる。結婚をしたこともなければ子を持った経験もないにしても、鈍すぎる。

表紙の裏に母の名前に加えて母の実家の住所が記されていることから、母の個人的な持ち物であったことははっきりしている。私物の手帳に複数の名前を書き添えば、持ち主の女性が妊娠していたと考えるのが普通の間人なのだ。

あらためて考える。妊娠していた母。そのお腹の中にいた自分。頭では分かるのだが、ぴんと来ない。その思いに自分がついて行けない。考えたことがないからだ。想像したこともないからだ。私にはそうしたいいい加減なところがある。抜けているのだ。

協議離婚が成立し、母と私が父の姓から母の旧姓に変わったのは、私が五歳の時だった。事業に失敗し、借金をつくった父は妻子を置き去りにし、隣県のN市に逃れていた。母と私は母子寮にいた。熱心な寮母が、父の居所をつきとめ、離婚の手續に必要な書類に書名捺印させ郵送させた。父は私の親権を放棄して母に渡すことを、最初は拒んだという。そんな経緯を母から聞いた覚えがある。

小学校に上がる年、母から自分の氏名を書く練習をさせられた。正式に字を書くのは初めての経験だったと思う。ひらがなと漢字の両方を何度も書かされた。母の真剣な表情が怖くて緊張した。緊張のあまり、うまく書けない。書いてもすぐ忘れる。すぐに忘れる自分に苛立ち、先への不安も覚えた。それは母の感情そのものだったにちがいない。ふたりだけの家庭。ふたりの関係は濃密なものだった。

入学式が近づいたある日、母が名札に毛筆で名前を書いてくれた。その時の緊張した面差しで筆を運んでいた母の様子をぼんやりと覚えている。硯で墨をするさいの涼しげな匂いが、かすかに鼻を突いて心地よかった。

新聞紙か折り込み広告の上に何度か下書きをした母が、ようやく清書し、私の左胸に安全ピンで名札をつけてくれた。私は喜んで鏡の前に立った。私は声を上げた。奇妙な虫が名札にへばりついていて、真っ黒でくねくねした虫だった。その様子を見ていた母が笑った。鏡に映った物が左右逆に見えることを、私は知らなかったのである。文字を鏡像として見て、初めて鏡の性質に気づいたらしい。

今私は母の手帳に書かれた名前の羅列をながめている。同じ姓を冠して並んでいる名前たち。男名。女名。苗字なしで列をなしている名前たち。

女性の名にはひらがなだけのものもある。「——子」というふうに、ひらがなの下に漢字が添えられている名もある。男名は漢字のものばかりだ。私の名と漢字で一字違いの名もある。結局は捨てられた名前たち。なぜかぼんやりと顔が浮かぶ。みんなどこかで生きている気がする。

#小説# 掌編# 名前# 母親# 息子# 漢字# 文字# 遺品# 離婚

12/11 私たちは同じではなく似ている

＊

私たちは同じではなく似ている

星野廉

2022年12月11日 07:49

目次

そっくりなところが似ている

愛着と興味がないものには残酷になれる

疑似物、疑似世界、疑似体験

似たものとしての世界

個性とユニークさ

似ているから愛着をいただける

私たちは「同じ」ではなく「似ている」

そっくりなところが似ている

大量生産されて、どれも似ていたり同じに見えるスマホ。お店や工場ですらりと並んでいたスマホ。どれもそっくり。

そのスマホを覗きこむ、目を細めたり、目を見開いたり、ときには笑みを浮かべる、顔をしかめることもある、やや口を開けている人もいる。

指で画面をなぞる、スライドするのがもどかしいのか眉を寄せたり、舌打ちする人もいる。

やや前屈みに歩きながらスマホの画面に見入る、ときどき歩を緩めたり、立ち止る。

みんな、似たような仕草をしている。その仕草を繰り返している。真似し合っているように。そっくり。

*

そっくりなところがそっくりなのである。そっくりな点がそっくりにそっくりと言ふべきか。

スマホという大量生産された製品のシンクロ振りに、それを使う人の身振りのシンクロが重なる。つまり、シンクロにシンクロする。

スマホに限らない。車がそうだ。自転車もそう。三輪車もそうかもしれない。

ボールペン、消しゴム、ノート、お箸、絆創膏、腕時計、下着、靴下、眼鏡、シャワー、便器、ベッド、乳母車、棺。どれも大量生産された「そっくり」だが、それを使うとき、人はそれぞれそっくりな仕草や表情をする。

ひとりひとりの顔と個性は異なるものの、やることがそっくりなのである。

製品に合わせているのだろう。人に便利なように、人の都合に合わせて、そして何よりも人の体や体の一部やその動きに合わせて、商品は作られているようだ。

人の体だけでなく、人の内にも合わせて作られているような気がする。内というのは、脳だったり、意識だったり、行動のパターンとか型だったり、ひょっとすると記憶もそうかもしれない。

人が作ったものや、人が使っているものは、人に似ている気がしてならない。

愛着と興味がないものには残酷になれる

私たちにはニワトリがそっくりに見える。これは特別な思い入れや愛着がないからだろう。思い入れや愛着がないものはそっくりに見えるようだ。

ニワトリから見れば、ヒトはみんなそっくりなのではないか。顔や姿ばかりでなく、仕草と表情、やることなすこと、そっくりではないだろうか。

興味がないからだ。愛着や興味がないものには冷淡になれる。残酷にもなれる。

逆に、愛着と興味をいだけば、どんなものもペットや家族や恋愛対象になるだろう（たとえば人形やキャラクターやフィクションの登場人物）。従順であったり、支配できたり、人に懐けばの話だが。

疑似物、疑似世界、疑似体験

私たちは世界や森羅万象と直接的に触れあい、対することができない。知覚や言葉という代理、そして似たものを通して触れているつもりになっている。

私には言葉、とくに文字と世界が似ているとは思えないが、似たものとして私たちは使っている。あらためて考えると不思議でならない。

言葉という疑似物を用いた疑似世界とか疑似体験という言い方が適切かもしれない。

現に、私はここで言葉という疑似物をやり取りして人と交流し、ここで言葉からなる文章を読んで疑似体験を楽しんでいる。これは学習の成果であり、想像力のおかげだと理解している。

生まれたときから既に自分の外にあった言葉を真似て学びながら、同時に想像力を養った結果なのだ。

あっさりとしたが、あらためて言葉にすると不思議でならない。

*

私たちひとりひとりそれぞれの疑似世界を持ち、疑似体験をしていると考えてみる。

私たちひとりひとりがそれぞれの「似た世界」と「似た体験」をしている。同じではない。同一はありえない。似ているのだ。似ているから通じ合える、おそらく。

似たものとしての世界

私たちは「似たものとしての世界」に生きている「似た者同士」ではないだろうか。

私のいなく「似たもの」とあの人のいなく「似たもの」と、人の集まりである社会や集団がいなく、つまり決めた「似たもの」は似ているが異なるはずだ。ずれているのだ。

それが個性ではないか。ユニークさであり、掛け替えのなさではないか。

*

話し言葉、書き言葉つまり文字、物語、フィクション、行動様式、表情、身振り、仕草、旋律、コード――。

こうしたものは各人、家族、集団、共同体、社会、国家、地域、文化によって異なるが似ている。だから伝達や伝承や翻訳や言い換えや解釈ができるのだろう。

伝達や伝承や翻訳や言い換えや解釈は「うつす・うつる」ことだ。移す、写す、映す、撮す、遷す。「うつす」には必ず何らかの誤差、ノイズ、エラー、変異がともなうという。

複製やコピーは同一を再生したり再現することではないらしい。似せて作られるものは、当然のことながら、似ているもの、つまり「近似」なのだ。

だから「疑似（擬似）」というのかもしれない。百パーセントとか完全という言い方を避けている。

個性とユニークさ

そっくりに見えても、似たように見えても、似たり寄ったりであっても、そこには「異なる」個性があると私は理解している。逆に「同じ」は不気味でならない。

「似ている」は印象だから検証はできない。「同じ」や「同一」はヒトの知覚では確認できず、精度の高い機器や機械を用いてなら検証できるだろう。

とはいえ、人の知覚を補う器具や器械で得た「同じ」や「同一」を、人は「似ている」が基本の印象の世界から眺めるしかない。「同じ」「同一」という名の疑似世界、疑似体験、仮想現実。

手なづけよう飼いならそうとして、どうなづけてもなつかない世界。どう分けても分からない世界。人のほうに欠陥と問題があるのだから、人がおれてなれてなじむしかない。じっさい、そうになっているようだ。人が世界になきつきなつきなれてなじむ。

日常生活では「同じ」「同一」はありえないし、出会えない。その意味では抽象であるとも言える。その嘘くささが不気味さに通じるのかもしれない。その嘘くささこそが人を惹きつけもする。

*

そっくりがそっくりしている、シンクロがシンクロしている、同期が同期している世界。百年前、いや五十年前の人なら、目まいを覚えるにちがいない。

そんな目まいを覚える世界にじょじょに入っていった私たち、そして生まれたときには既にそうであった世代の人たちは、もはや目まいを感じなくなっている。

(私たちは、こういう人類初の状況に慣れてもいないのに慣れているものとして、いわば見切り発車をしながら、生きているのではないだろうか。)

逆に、太古の人たちがこの世界を見たらなんて想像すると、こちらが目まいに誘われるが、そうした想像力を大切にしたいと思う。

当り前に見えるものは当り前ではないし、必然でも自然でもない。

とはいえ、私はこの「似たものとしての世界」つまり疑似世界に生まれ、生きていて十分に幸せであり、満足もしている。

似ているから愛着をいだける

疑似物である言葉を持ち、さらには文字を持ってしまった人類は、疑似世界に生き、疑似体験を重ねてきたのだろう。

直接的に世界に触れているわけではない。これは確かだと考えられる。

仮想現実だなんて何を今更という気もするが、「似ている」と「そっくり」の精度と有効性は急速に高まりつつあるように見える。

知覚機能と言語活動を介してとらえているこの現実こそが、既に「似たもの」つまり疑似物であり仮想物からなりたっているきわめて精巧でよくできた仮想現実なのだ。

「似ている」と「そっくり」の精度と有効性が急速に高まりつつあるとしても、私たちひとりひとりのいだけている「似たもの」が依然として「異なる」という事実は変わらない気がする。

つまり、「似ている」からこそ違いが生じ、個性がある。「似ている」が個性を生むのだ。

一方で、「同じ」は個性を消す。無視するだけでなく消すのだ。

*

似ているものに私たちは愛着を覚え、愛着をいだけることができる。擬人化というのは、

私たちが森羅万象に自分たち人間を見てしまうことだ。

世界や森羅万象は私たちにとって直接触れあうことができない「何か」であるが、名前を付け、自分たちと似た部分を見ることで親しいものに見えてくる。

自分たちと似ていると思いきみ、手なづけ飼いならしているつもりなのかもしれない。なづけてもなつかないものを相手に。世界や森羅万象なんてチョロいとも思っているにちがいない。さもないと、科学技術はこんなに発展していないだろう。

擬人化をとまなう想像によって、ただの物や景色や形が、人形や顔や絵に変わる。何かに何かを見てしまう。これは、空の雲を思いうかべると分かりやすいと思う。

そうした想像力の結果が、映画であったり映像であったり、芸術であったり、おそらく音楽であったりするのかもしれない。

私たちは「同じ」ではなく「似ている」

人に似ていると感じることで、人以外の生き物は、人の愛着や愛の対象になる。物もそう。自然にある物たちだけでなく、人が作った物たちも、人の愛着や愛の対象になる。

こう考えると、「似ている」が素晴らしい感覚に思えてくる。

一方で、「同じ」はどうだろう。人は「似ている」を基本とする印象の世界に生きていて、器具や器械や機械に頼らない限り「同じ」を扱えないにもかかわらず、「同じ」という言葉をよく使う。

「私たちは同じなんだ」、「同じ人間なんだ」、「地球に住む同じ生き物なのだ」、「同じ〇〇国民だから」、「同じ〇年〇組なのですから」、「同じ家族（会社、町内、病气、趣味、ファン、宗教、性、世代、出身地）なんだからさ」

「同じ」という言葉で勝手にくくられた者の気持ちを考えているのか疑問に思われる。

「同じ」は素晴らしく聞こえ、美しくさえ響くことがあるが、どこか嘘くさい。そう感じられるとすれば、日常生活や体感から懸け離れている抽象だからではないか。

妙にほのぼのとして美辞麗句っぽい。背後に意図や企みを想像しないではられない。

さらに、「同じだから」という上の言葉に続けて言われがちなフレーズを想像してみる。すると、何らかの思惑や魂胆のあるフレーズが頭に浮かぶ。

「私たちは同じ〇〇なんだから、△△するべきだ(△△して当然でしょう)」——という流れになる。こうしたスローガンやプロパガンダが危険なのは、歴史が教えてくれている。

「同じ」という言葉が、特定の考えや立場を説得するさいの方便や切り札として使われる場合がいかに多いことか。

私たちは同じではなく似ている。ひとりひとりが似ていながら違っている。それでいて「同じ」に惹きつけられる。

*

「同じ」と「同一」は人にはたどり着けない彼岸の世界であり叶わない夢であるからこそ、「同じ」を文字どおり手にし手なずけて扱うことが、人にとってオブセッションと化した悲願になっているのだろう。

誰もが——この私も——スマホの画面に映った「そっくりなもの」が「そっくりなもの」などではなく「そのものである」ことを望んでいるし、無意識のうちにそうだと信じているにちがいない。

問題があるとなれば、それは信じていることではなく、もっともっとと次を望んでいることかもしれない。無いものを望む限り、望みも限りも無い。

#言葉 # シンクロ # 複製 # 模倣 # スマホ # 森羅万象 # 世界 # 愛着 # 疑似世界 # 疑似
体験 # 仮想現実 # 擬人化 # 似ている # そっくり # 同じ

12/12 【短文集】似ている（その1）

＊

【短文集】似ている（その1）

星野廉

2022年12月12日 12:54

○

似たような板を持った人たちが、みんな似たような仕草をしている。その仕草を繰り返している。真似し合っているように。そっくり。

○

そっくりなところがそっくりなのである。そっくりな点がそっくりにそっくりと言うべきか。スマホという大量生産された製品のシンクロ振りに、それを使う人の身振りのシンクロが重なる。つまり、シンクロにシンクロする。

○

誰もがスマホの画面に映った「そっくりなもの」が「そっくりなもの」などではなく「そのものである」ことを望んでいるし、無意識のうちにそうだと信じているにちがいない。問題があるとすれば、それは信じていることではなく、もっともっとと次を望んでいることかもしれない。無いものを望む限り、望みも限りも無い。

○

写真に映った映像で興奮するのは、想像力のたくましさ。人は本物を相手にしなくても欲情できるという意味。まさか、インクや紙や画素や液晶に欲情しているのではないのは確かだろう。人の世にいろんなフェチがあるとはいえ。

○

人はぺらぺらの紙に印刷された文字でも興奮する。これは学習の成果である。文字を何度も何度も見てなぞり写すことによって、真似て学ばないと、そういう楽しみは味わえない。したがって、ワンコやおさるさんは、紙の上の文字と現実を混同しない。

○

仮象、化象、化粧。うわべだけ、ぺらぺら。薄いけど厚い。浅いけど深い。小さいけど大きい。短いけど長い。平面だけど立体。静止しているけど動いている。仮の物からなる世界。ぜんぶ仮のもの、ぜんぶ借りもの。

○

偽物、似たもの、似せたものに満ち満ちた世界。情報とは、知識とは、事実とは、複製として存在する以上、「似せたもの」であり「似たもの」——似ているだけだから、実物や本物やソースつまり起源そのものではなく別物であるのは確か——であるが、ひょっとすると偽物かもしれない。

○

世界は、化け物だらけ、化象だらけ。化けた者が化けた物を相手にしてお化けごっこをしている。似せた者が似せた物を相手にそっくりショーをしている。似せ者が似せ者を相手に偽物を売りつけている。

○

ぴくぴくひくひくびくびく。オノマトペはずっと入ってくる。音や文字が「何かに」「似ている」ではなく、単に「似ている」として入ってくるからではないか。「何か」との異なりや事なりや言なりとして無理に押し入ってくるのではない。本物のない複製の複製や、起源のない引用の引用はずっと入ってくる。

○

リアルであることに必ずしも実体は要らない。プラスチックでできた料理のサンプル

を見ておなかが鳴ったりよだれが出る。文字からなる文章に、あれが出てくれば興奮する。液晶画面に映った画素の集まりからなる映像に、あれが出てくれば欲情する。身も蓋もない話。ワンコやおさるさんは、紙の上の文字と現実を混同しない。

○

リアルであることに必ずしも実体は要らない。実物や本物も起源（原型・元祖・出典）も要らない。複製や、複製の複製や、引用や、引用の引用が身のまわりにうようよしている。大量生産された製品、楽曲、料理、絵画、写真、映画、放送、小説、文書、画像、動画。

○

大量生産された製品、楽曲、料理、絵画、写真、映画、放送、小説、文書、画像、動画。どれもが、人にとってはリアルな「物」であり、複製と引用はそれ自体で完結した「リアル」なのだ。こうなっているのは、人が「似ている」と「そっくり」の世界、つまり印象の世界に住んでいるからにほかならない。

○

モナ・リザの現物を見たことがある人よりも、その複製を見たことのある人のほうが圧倒的に多い。こうした事態は「実物対複製」という単純な構図に収まりそうもない。実物はたったひとつであるのに対し、複製は複数あるいは無数にあるからだ。複製の複数性、無数性。作者および作品が有名であればあるほど、そうなる。

○

有名は無数であり、無名は有数であるか、たったひとつなのである。しかも、複製は一樣ではなく、さまざまなずれをともなって存在する。あなたの見たモナ・リザと私の見たモナ・リザはきっと別物だろう。別の複製。異なる複製。

○

楽曲の複製であるレコードやDVDやCDやその放送やネット上での配信でも、複製は多様をきわめている。文学作品でも、多種多様なかたち（雑誌での掲載、単行本、文

庫本、電子書籍、翻訳)での複製での読書がおこなわれている。いまや鑑賞と読書とは、複製の鑑賞であり複製の読書なのである。

○

小説の読書で活字やフォントやレイアウトが変わると別の作品に感じられることがある。翻訳書とその原著も「似ている」別物。改訳が出たり、訳者が変われば、さらに「似ている」別物が増える。

○

鑑賞の多くが、複数の複製の鑑賞であったり、別物の鑑賞であることは忘れられがちなようだが、ひょっとすると誰もが忘れたい事実なのかもしれない。

○

インターネット上では、複数どころか無数のモナ・リザを鑑賞できる。「これはモナ・リザなんだ」と言葉で自分に言い聞かせ決めつけて、頭というか観念で見ると「同じ」なのだが、じっさいには「似ている」あるいは「そっくり」なだけ。それでも、ふつうは「似ている」とか「そっくり」というふうに見ないし言わないし聞かないのは興ざめするからだ。

○

自力では「同じ」か「同一」なのか「そっくり」なのかを確認も検証もできない自分を、人は認めたがらない。人間(ホモ・サピエンス)としてのプライドが許さないからだ。ホモ・サピエンスという言葉は重い。人には荷が重すぎるのかもしれない。この自称は自照ではなく自傷なのかもしれない。

○

「同じ」というか「同一」と言ってもいい、モナ・リザの鑑賞法がある。名前で鑑賞する、つまり名前という言葉を見るのだ。「モナ・リザ」という作品名のこと。

○

固有名詞、なかでも書かれた文字としての名前は最強の複製であり、「似ている」どころかまったく「同じ」、「同一」なのである。「私はモナ・リザを見た」と言っても嘘にはならない（「モナ・リザ」という文字を見たのだから）。さすがに、「モナ・リザの現物（実物）を見た」（たとえ「モナリザ」という文字の現物（実物）という意味であっても）とまで言うのは気がひけるかもしれない。

○

固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用である。人であれば、誰もが飛びつく。

○

名前と名詞の力は強い。誰でも名前と名詞にころりと参る。しかも、楽々複製ができる。モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ……。いとも簡単に引用もできる。名前を知っているだけで褒められることが多々ある。知ったかぶりもし放題。

○

モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ……。固有名詞が最強で最小最短最軽の引用であることは、実に有難い事実。ただし、モナ・リザ、Mona Lisa、La Gioconda、La Joconde、蒙娜丽莎、蒙娜丽莎、……というバリエーションがあることを忘れてはならない。「モナ・リザ」は、文字どおりの実物でも現物でもなかったという落ち。

#似ている # 複製 # 引用 # スマホ # 文字 # 作品 # 小説 # 絵画 # 芸術 # 固有名詞
名詞 # 名前 # 写真 # 楽曲

12/13 【レトリック詞集】偽物っぽさ

＊

【レトリック詞集】偽物っぽさ

星野廉

2022年12月13日 08:02

○

絵は芸術作品の中では「たったひとつ感」がきわめて強い。複数の「同一の作品」が存在する版画や浮世絵とは対照的に基本的にたった一枚しかない。したがって、絵画は複製で鑑賞するのが一般的である。

「モナ・リザ、知ってる?」「知ってる、知ってる、世界でいちばん有名な絵なんでしょ?」という場合には、「知っている」は複製を見て知っているという意味だろう。つまり、複製での鑑賞を偽物での鑑賞だと非難する人はごく少数だと思われる。

○

楽曲は、実際の演奏で鑑賞するのが理想だろう。楽器と肉声を拡声器など機械をとおさずに自分の耳で聞き、耳で聞くだけでなくその場の空気を吸いにおいを嗅ぎ、その場のざわめきを含む雑音（ノイズ）まで体験しなくては鑑賞したと言えないなんて人もいる。

また、演奏や歌唱は不動ではなく、つねにブレや揺らぎの中であって、そのパフォーマンスは毎回違ったものになるという考え方も広く存在するようだ。絵画や小説の鑑賞とは大きく異なる点である。

○

アナログであれ、デジタルであれ、ハイレゾであれ、ネット上で配信されたものであ

れ、CDやDVDを再生したものであれ、大型スピーカーで聞くのであれ、イヤホンで聞くのであれ、複製されたり加工された、つまり機械を用いて作られた音による演奏を聞くのが、楽曲の一般的な鑑賞だろう。

楽曲の複製での鑑賞を偽物での鑑賞だと非難する人はごく少数だと思われる。

○

「小説は初版本でなければ本物ではない」、「文庫版より単行本、単行本よりも文芸誌での初出でしょ」、「電子本なんてとんでもない。あと印刷された本をコピーしたものをネット上で小説を読むなんてねえ——」、「いやいや、そんなものは全部が複製であり偽物であって、書き込みとかが分かる生原稿で読むのが真の文学鑑賞なのだ」

○

私は言葉を広く取っている。話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、表情や身振りといった視覚言語も言葉だと考えている。このうち、いちばん不思議だし気になってならないのが、文字なのである。

○

話し言葉（音声）と表情と身振りは発せられると同時に消えていく。どんどん消えていくため、受け手はつぎつぎと現れるものを聞いたり見たりして追いかけていかないと理解できない。

追いかっこなのである。しかも現れる順に受けとっていく必要があって面倒だし、いらいらさせることもある。話し言葉と表情と身振りを受けとるのがもどかしいのは、時間に制約され、時間的に拘束されるからだ。

○

文字だけが残る。消さない限りしつこく居続ける。いつまでも残っているので、時間に拘束されない。残っている限りは、いつでも気の向いたときに読める。

しかも、はしょることができる。ざっと読んだり、好きな箇所だけ読んだり、面倒なら見るだけで済ませることができる。これがおおかたの「文字を読む」であり「文字を見る」なのである。

現在は、文字はますます読まれなくなってきている。見る対象になっているのだ。文字こそ、忙しい現代人にはぴったりの表現手段ではないだろうか。



端末の画面に映っている、この記事の文字は画素の集まりらしい。印刷物であれば文字はインクの染みである。つまり、複製できる。しかも簡単に。文字においては無数のコピー（複製）が可能なのだ。



文字は、複写、印刷、筆写され、さらには文書や映像という形でデジタルデータ化されている。文字には抽象的な側面があるために複製が可能なのである。抽象的な面とは、文字の形を指す。

文字という具象の抽象的な面は「写す」（複製する）ことで「映る」（再生される）。「移す」（物理的に移動させること）の代償行為なのである。持って行けないから、その代わりに写したり映す。



現在ではありとあらゆることが文字になっている。文字は無限に複製できる。しかも、投稿と複製と拡散と保存がほぼ同時にかつ瞬時に起きている。インターネットのことである。

腰を抜かしでも罰が当たらないほど驚くべきことであるが、現在の人たちは腰を抜かす暇がないほど忙しい。



文字は複製でしか存在できないと言っても言いすぎではない。文字のオリジナル、つまり現物とか実物とか本物というのは、よく考えると、ナンセンスなのである。文字は複製であってなんぼ。あっさりと書いたが、私にはこれが不思議でならない。

○

文字においては、人は文字の具象より抽象的な面を活用している。書道、カリグラフィ、文字や書体のデザインを除き、文字においてはオリジナリティが失われている。失念されていると言うべきかもしれない。

文字の複製や引用は、同じ、つまりほぼ同一になる。それが文字の抽象性なのである。抽象だから複製をしても偽物（似せたもの）どころか同じという理屈になる。驚くべき性質であり、私は考えるたびに腰を抜かしている。

○

小説のオリジナリティ云々というのは、それが盗作とか剽窃であるかどうかというのは、別の次元の話になる。

おそらく作者を除く（ひょっとすると作者も含んで）誰もが複製としての小説を手にし、複製である、いや複製でしかありえない（実物にも本物にも起源にもたどりつけない）文字からなる小説を読んでいる。

○

小説の偽物っぽさなんて言うこと自体がナンセンスであり戯言なのである。実物にも起源にもたどりつけない小説は複製で読むものだからだ。それ以外の読み方はまずない。現実的ではないという意味。

○

小説こそが偽物っぽくない偽物なのである。小説に限らず、文字で書かれたものであればどんなジャンルの文書でも、偽物っぽくない偽物ということになる。そもそも小説

12/16 【AIの登場】偽物は
を成り立たせている文字が複製であり、複製の複製であるからだ。これを、本物（実物）なき複製とか起源なき引用と言い換えても事態は変わらないと思う。

○

誰が（AIなどの機械もふくむ）、いつどこで何を用いて書いても、あるいは入力しても「雨が降った。」は「雨が降った。」で、同じなのである。あっさり書いたが、私にはこれが不思議でならない。考えるたびに腰を抜かしている。どう受けとめていいのかわからないのである。

○

念押しで言うが、文書における偽物とは複製という意味ではなく、その内容の真偽（そんなものがあるとして）であるとか、盗作や剽窃や改変や改ざんという別の次元の話になる。文字というよりも、文字列とか文章としてのレベルの話という意味だ。

○

「吾輩はネコである。名前はまだにゃい。」——このような文章で始まる夏目漱石作『吾輩は猫である』があるなら、それは偽物である公算が大きい。複製ではなく改ざんされた偽物だ。

こうした改ざんされた（数字や文言が書き換えられた）文書が公文書に存在する（黒塗りも改ざん）。改ざんは報道にもある。これこそが、現在もっともゆゆしい事態ではないだろうか。意図的におこなわれているからである。

○

現在は、本物と偽物と別物、本物と複製と別物、偽物と複製と別物、複製とその複製と別物、および起源と引用、引用とその引用、引用の引用とそのまた引用、の境がきわめて希薄になっている。本物（実物）には届かず触れられず、起源をたどりさかのぼる術がないのだから当然だろう。

似せもの、似せたもの、似たもの、偽物、贋物、別物という古典的な線引きが懐かしい。

○

あらゆるものが、いまここにおいては本物（実物）のない複製や起源のない引用として立ちあらわれているのではないか。人はそういうものにしか出会えていないのではないか。このところ、そんなふうに感じられてならない。

本物っぽい、偽物っぽい。要するに、っぽいのである。本物でも偽物でもなく、人は「っぽい」と出会っている。

#レトリック # レトリック詞 # 複製 # 引用 # 本物 # 実物 # 起源 # 作品# 文学 # 音楽
芸術 # 鑑賞 # 小説 # 絵画 # 偽物 # 文字

12/13 【レトリック詞集】「っぽさ」というよりも
「っぽい」

＊

【レトリック詞集】「っぽさ」というよりも「っぽい」

星野廉

2022年12月13日 13:29

○

「○○っぽさ」、「○○らしさ」、「○○のようなもの」、「○○」という言葉が指すもの、「○○」という言葉で名指されるもの——このように○○にたどり着けないために、○○を回避したかに見える一連の言い回しがある。

上の例は「っぽい」順に並べてある。逆に言うと、後ろほど往生際が悪いのである。○を避けた振りをして、○○の実体を信じているかのように見える。本音が出ているという意味では正直なのだろう。

○

何度もなんども「なぞる」を繰り返すとどうなるか。何をなぞっているのかが分からなくなりそう。とにかくなぞっている、なんとなくなぞっている。対象がなくなる、起源がなくなる、手本がなくなる。ないない尽くし。「なぞる」は鉛筆型消しゴム。

起源のない引用の引用、本物や実物のない複製の複製。起源のない反復。手本のない模倣。ないない尽くし。学習、知識、情報のことではないか。何よりも、その根っこにある言葉のことではないだろうか。

○

「モナ・リザ、知ってる?」「知ってる、知ってる、世界でいちばん有名な絵なんで

しょ？」という場合には、「知っている」は複製を見て知っているという意味だろう。つまり、複製での鑑賞を偽物での鑑賞だと非難する人はごく少数だと思われる。

この場合に、モナ・リザを言葉だけで知っているという状況は十分にありえる。モナ・リザに限らず、どんな作品であれ、ひいてはどんな事物であれ、それが名前として口にはぼっているさいには、その名前がその名前が「指し示す」（往生際の悪い言い回しの好例であり、指し示すものがあるという前提に立っている）ものとの出会いを保証していない。

○

鏡の向こうに入っていく。笑っていた猫の笑いだけが残っている。ルイス・キャロルの書いた本に、そんな不思議な話がある。話だから、言葉でなりたっているのだが、それが読む人や聞く人の中にイメージを生む。現実ではありえない事が、言葉の世界ではありうる言としてある。

異なる世界、言なる世界、事なる世界。現界、言界、幻界。現実、言葉、イメージ。イメージするしかないようだ。イメージをイメージする。

言葉とは、「あるもの」の代わりにしている「ないもの」、同時に「ないもの」の代わりにしている「あるもの」、「ある」振りをしている「ない」もの、同時に「ない」振りをしている「ある」もの。

ルイス・キャロルは言葉が、「ない」を「ある」、「ある」を「ない」ように思わせる錯覚製造装置であることだけを意識しながら創作活動をしていたと私は勝手に理解している。

○

「モナ・リザ、知ってる？」「知ってる、知ってる、世界でいちばん有名な絵なんでしょ？」「そうだよ、よく知ってるね、偉い偉い」

モナ・リザという固有名詞は実物（本物）のない複製であり、起源のない引用として機能している。機能している、つまり働いているという点が大切。人がどのようにその

言葉を用いているか、そのありようが大切なのである。言葉の意味や定義や語義にこだわることは、言葉を固定化を目指すだけであり、その動きとありようをとらえられない。

○

なにしろ、人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物なのである。考えれば考えるほど、自分に当てはまる。いまもやっている。

○

「モナ・リザ、知ってる?」「知ってる、知ってる、世界でいちばん有名な絵なんですよ?」「そうだよ、よく知ってるね、偉い偉い」

このありふれた状況に吐き気を催すほどの嫌悪感と絶望感をいただいていたのが、ギュスターヴ・フローベール、とりわけ『紋切型辞典』と『ブヴァールとペキュシェ』を書いたフローベールだったと私は勝手に理解している。

○

オノマトペに限らず、言葉がずっと入ってきたり、ずっと出ていくとき、その言葉は「何かに似ている」というよりも「単に似ている」として入ってくるのではないか。そんな気がする。

「ずっと入ってくる」「ずっと出ていく」がポイント。意味を考えたり意識したりはしていない状態。その時点では意味なんてない。「似ている」だけがある感じ。「何が」も「何に」もない、ただ「似ている」。

○

「○○っぽさ」、「○○らしさ」、「○○のようなもの」、「○○」という言葉が指すものの、「○○」という言葉で名指されるもの——どれもがいわゆる名詞である。

12/18 【「動詞的」ってなに？】
名詞は「ない」を「ある」に見せるトリック。それだけでなく、「ある」の固定を目指すトリック。ここでやっているのはレトリック。

○

動詞は、自然の状態であり常態ではないだろうか。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいが、世界と宇宙は動詞的なものに満ちている気がする。動詞も名づけられたものではあるが、動きや様態に注目している点で、動詞の向いている方向は名詞の抽象性とは異なる気がする。

○

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる。

○

名詞的なものがうつるときには、うつる前のものとうつった後もの間の対応が重視される。理想は一对一の対応であり、そのありえない理想を指向する。絵をイメージするといふ。絵はつたわると言うよりもうつる、とりわけ写る、そして映る。この過程で図柄が壊れてはいけない。

一方の動詞的なものがつたわるときには、重視されるのは動きであり、つたわる前後の位置的な対応関係は無視される。そもそも、つたわる前のものとつたわった後のものの区別さえ大きな意味を持たない。両者が別物であっても重視されないのである。振動や熱をイメージするといふだろう。

○

動きを記述するのが困難なのは、そもそも動きは固定化できるものではないからであり、「動いているもの」が「固定している」つまり「動いていない」なんて、無理がある。土台無理なのであり無理難題なのだ。

動きは自然の状態であり常態である気がする。とはいえ、人は「動き」を見たり知覚したとしても、それを言葉にする以外に他の人と「動き」について語りあうことはできない。

話が、議論が、噛み合っているようで噛み合っていない気がする。SNS上、会議、家族間、夫婦間、専門家同士、同業者同士、仲間同士、恋人同士、国家間、交渉の席、法廷。

オノマトペとか、感動詞とか、決まり文句とか、流行語に近い感じ。思考停止とか判断停止とまでは言わないまでも、無意識のうちに、条件反射的に、または生理現象のように、ずっと入ってきて、ずっと出ていく。

あらゆる言葉が決まり文句であり紋切り型ではないか。さもなければ、あんなにずっと入ったり出たりしないだろう。それでいて噛み合っていない気がする。気がするだけ。噛み合っているかどうかを確かめる術がない。

○

「〇〇っぽさ」、「〇〇らしさ」、「〇〇のようなもの」、「〇〇」という言葉が指すものの、「〇〇」という言葉で名指されるもの

というよりも、むしろ

「〇〇っぽい」、「〇〇らしい」、「〇〇のような」、「〇〇」という言葉が指すみたいなの、「〇〇」という言葉で名指されるというか。

○

映画が静止画をコマ送りして、動いているという錯覚に頼っていることを思いだす。置き換えることによって、人は「代替りのもの（別物のこと）」を「実物や本物」としてとらえるのである。動いているものの代わりに動いていないもので済まして澄ましている。

「動いているものの代わりをしている動いていないもの」（いわば錯覚装置）を人は利用しているが、動詞もそのひとつだと考えられる。

○

あらゆるものが、いまここにおいては本物（実物）のない複製や起源のない引用とし

て立ちあらわれているのではないか。人はそういうものにしか出会えていないのではないか。このところ、そんなふうに感じられてならない。

○○っぽい。要するに、っぽいのである。人は「○○」ではなく、「○○っぽさ」というよりも「っぽい」と出会っている。名詞に限らない。動詞もそうかもしれない。

「○○する」ではなく、むしろ「○○している」、いやそれよりも「○○しているっぽい」という感じで、そうなっているっぽい。

○

夢は「っぽい」に満ちている。これはイメージしやすい。

一方で、夢から覚めても、そこも「っぽい」に満ちているはずなのだが、これはイメージしにくい。ひょっとするとなぞって真似て学んだ言葉のせいかもしれない。現界は言界であり、それが限界でもあるから。

なぞるは、なぞればなぞるほど、なぞっているものを見えなくするようだが、この状況は言葉をなぞって学んだ者にはイメージしにくいなぞなのかもしれない。なぞるは鉛筆型消しゴム。

#レトリック # レトリック詞 # 動詞 # 名詞 # 本物 # 実物 # 偽物 # 起源# 複製 # 引用
フローベール # フロベール # ルイス・キャロル# 決まり文句 # 錯覚

12/14 イメージ

＊

イメージ

星野廉

2022年12月14日 08:25

○

ルイス・キャロル。鏡の向こうに入っていく。笑っていた猫の笑いだけが残っている。そんな不思議な話をキャロルは書いた。話だから言葉から成りたっているのだが、それが読む人や聞く人の中にイメージを生む。

○

現実ではありえない事が、言葉の世界では言としてある。異なる世界、言なる世界、事なる世界。現界、言界、幻界。現実、言葉、イメージ。イメージするしかない。イメージをイメージする。

○

「イメージ」に当て字をしてみる。文字に文字をあてる、音に音をあてる。言の葉に言の葉を当てて重ねる。薄い葉に薄い葉を重ねてその模様を透かして見る。言葉は薄いもの、これが言葉についての私のイメージ。

○

イメージで、まっさきに頭に浮かぶのは夢路（ゆめじ）。夢を広辞苑で引くと、「「寝（い）の目」の意」なんてうれしい文字列が見える。寝目路（いめじ）と勝手にくっつけてみた。

○

夢路、夢路をたどる、イメージをたどる。いいイメージ。道が目に浮かんで、その光景に染まっていく自分がある。

○

夢路といえば、夢路いとし喜味こいし（ゆめじいとしきみこいし）、往年の漫才コンビ。月丘夢路（つきおかゆめじ）も思いだす。幼いころに、月丘夢路と朝丘雪路（あさおかゆめじ）を混同した覚えがある。いま連想したのは竹久夢二（たけひさゆめじ）。

○

夢路、イメージ、image。image、imago。

○

イメージの原語である英語の「image」は、「真似たもの、似せたもの」という意味らしい。つまり、「にせもの＝偽もの＝偽物＝偽者＝贋物＝贋者」ということ。

○

イメージとは、辞書に載っている語義や、ばくぜんと共有されている意味と違って、とても、テキトー、気まぐれ、大雑把、でまかせ的、頼りにならない、不安定なもの。矛盾しているし、論理的でもない。

○

imagine のアナグラムは enigma（英語で、謎、謎の人）+ i（虚数単位）。image のアナグラムは、magie（仏語で魔法や魔術、マジと発音する）。「マジ」で、あやしい。

○

imagine のアナグラムは「imigane = 意味がねえ = 意味がない = 「意味がね、イマイチなのよ、の『意味がね』」、あるいは、「imimage = 意味なげ = 「意味なげに思ゆ or 覚ゆ、

の『意味なげ』とも読める。

○

イメージは私的で個人的なものであり、はかなく、淡く、薄い。ひらひら、ぴらぴら、ぺらぺら——これが私のイメージするイメージのイメージ。

○

ぺらぺらしたもの、薄っぺらいもの——絵、写真、映画（銀幕に映す）、液晶画面、そこに映る映像。文字、本、雑誌・新聞、液晶画面に映る文書。こうしたぺらぺらであったり、厚みを欠いた表面に、いろいろな情報がのっかっている。印刷されていたり、映しだされている。

○

現在の世界は、薄っぺらいものに満ちている。薄っぺらいのにぶ厚い。現在目につく薄っぺらいものは何といっても紙。ただの紙はぺらぺらなのに、そこに文字がのっかっていると、とたんにぶ厚くなる。薄いと厚いが同居している、同時に起きている。

○

文字ののっかっている紙をぶ厚いと感じるのは、たぶんヒトだけ。文字ののっかっている紙を人が飽きもせずにながめ、大切に保存し、写しを取り、広く配っている。薄っぺらいだけのものでないことは確か。きっとぶ厚いのだろう。薄っぺらいだけのものをながめたり、大事にするほど、人は暇ではない。

○

ぺらぺらの紙にのっかっているものは文字だけではない。絵ものもなっかっている。絵には手描きのものをはじめ、光学器械で映した写真、印刷されたもの、機械で描いたものがある。

○

人と仲良し——と、ヒトが一方向的に思っている——の人以外の生き物たち、たとえば犬や猫や金魚や馬や牛や豚や鶏はべらべらに見入っている姿を不思議に思っているかもしれない。猫は、私が何かを読んでいると攻撃してくることがある。スマホという板も標的にされる。もっともなリアクションだと思う。

○

ワンコやおさるさんは、紙の上の文字と現実を混同しない。文字と現実を混同するおさるさんがいたら、世界的な大ニュース、歴史的な大事件になるだろう。AI並みにヒトの嫉妬と恐怖の対象となり迫害されるかもしれない。

○

べらべらしたもの。まず、人にあるもの（内臓は除く）——まぶた、舌、皮膚、てのひら、爪、耳、見ようによっては胸。

○

身のまわりにあるべらべらしたもの——新聞、雑誌、ノート、本、メモ帳、ルースリーフ、ノートパソコン（キーボードおよび本体、モニター）、携帯電話（キーボードおよび本体、モニター）、クリアファイル、紙幣、硬貨、テレビ（画面と本体）、カーペット、座布団、畳、戸・ドア、ガラス窓、障子、時計、カレンダー、

写真、写真を入れるフレーム、引き出し、カーテン、鏡、フックに掛けてあるエプロン、そんなこと言ったら衣類ぜんぶ、薬の包み紙（プラスチック製）、皿、まな板、ふきん、見ようによっては食器ぜんぶ、フライパン、見ようによっては鍋、鍋の蓋、ティッシュペーパー、トイレトペーパー。

○

人は長方形に囲まれて生きている。生まれたばかりの赤ちゃんは、囲いというか長方形の枠の中にいる。そのあともたいていほぼ長方形の枠の中にいつづける。家、建物、道路、乗り物、写真、映画、動画、PC、スマホ……。

どれもが枠付き。人が亡くなると長方形の棺という枠に入ったまま長方形の炉という枠の中でくべられ、骨壺（これを入れる箱は縦に長細い）とか墓という枠に収められる。あとはたいてい長方形のものとして遺された者たちと対面する。

○

人の作った四角いものにはぺらぺらなものが、けっこうある。しかも四角いほうが大切にされている。きわめつけはお札つまり紙幣。それにクレジットカードも、ポイントカードも。あと名札。誰にとってもいちばん大切なものである名前が文字として記されている四角いぺらぺら。

お札（おさつ）とな札（ふだ）とお札（れい）は似ている。そっくりに見える私は「似ている」に憑かれてせつかれ疲れてるみたい。とうとうか「似ている」と思いはじめると何でも「似ている」ように見える。このしつこさは被害妄想に似ている。

○

人は「軽い」や「小さい」や「薄い」や「短い」をうまく利用している。軽薄短小。とうとうか、軽くて小さくて薄くて短いものを作るのに長けている。身のまわりを見ると、そんなものに満ちている。人自身がそうだからかもしれない。人は自分に似たものを作り、自分の作ったものにさらに似ていく。

○

文字を書いたり、映したり（印刷や photocopy や端末のスクリーンに映す）、写したり（写本・筆写や印刷や複写のこと）、それをまた移したりする（配布や翻訳や拡散のこと）、ぺらぺら（紙や液晶画面のこと）が、ぜんぶ薄っぺらくて四角いことは注目に値する。

○

いま眺めている端末の画面というぺらぺらも四角い。そのぺらぺら上においては、誰もが文字であり、お互いに顔も知らないし声を聞いたこともない仲である。文字どおり、文字同士としての付き合い。

○

いま薄い液晶のスクリーン上に表示されている自分の入力した文字を見つめる。視覚的に厚みも深みも感じられない、つまり立体感に欠ける文字。ということは、ひょっとすると文字ってぺらぺらなのではないか。ぺらぺら（紙や画面のこと）にのっかかったり、うつったり、染みついたり、こびりついたり、貼りついたりしている以上、文字はぺらぺらなはず。

○

「ぺらぺらしたもの」——とは自分のことではないか。へらへらしているとは以前から感じていたが、ぺらぺらでもあるとは……。ぺらぺらがぺらぺらについて書くとは。人は自分に似たものを作り、自分の作ったものにさらに似ていく。

○

舌べろは方言なのだろうか。「べろ」という発音は舌に擬態しているように思える。「べろ」をいう音を舌で転がしてみる。舌で舌を転がす。べろべろ、ぺらぺら、べろべろ、あっかんべえ。ぺらぺら、英語がぺらぺら、へらへら、へろへろ、れろれろ。なんだか軽薄で、すごくいい感じ。親近感を覚える。他者とは思えない。

○

ヨーロッパの諸言語で、言語を意味する言葉の語源が「舌」であるのは興味深い。英語だと language であり、tongue。l と t では、舌の先が上の歯の後ろの歯茎に来る。l ではぴったりと舌が貼りつき、t では軽く舌打ちする感じ。

○

ウラジーミル・ナボコフの小説『ロリータ』の冒頭を思い出さずにはならない。

Lolita, light of my life, fire in my loins. My sin, my soul. Lo-lee-ta: the tip of the tongue taking a trip of three steps down the palate to tap, at three, on the teeth. Lo . Lee. Ta.
(太文字は引用者による)



「言の葉」という言い方の「葉」に、私はべらべらを感じる。葉には、端や刃や羽とのイメージの韻——「は」という音だけでなく——も感じる。端っこ、鋼を薄くのぼした刃、薄く軽い羽という感じ。あくまでも個人的なイメージの連想。



イメージは語義や意味とは違って、きわめて私的で個人的なもの。だから、他人には言えないようなものもある。毎晩寝入り際にやってくる友達であり、おそらく死ぬ間際にまでついてきて私をなごませてくれるのが、イメージ。

言葉はみんなのもの。イメージはおそらく自分だけのもの。言葉は誰もが生まれた時に既にまわりにあったもの。つねに外にある、よそよそしいもの。イメージは自分が言葉と生きて生まれたもの。内にある懐かしいもの。大切にしたい。

#レトリック # レトリック詞 # 散文 # イメージ # 言葉 # 言の葉 # 漢字 # 日本語 # 掛け詞 # 文字 # 舌 # ルイス・キャロル # ナボコフ # 連想 # 夢

12/14 れとりっく

＊

れとりっく

星野廉

2022年12月14日 15:15

○

言葉とは、「あるもの」の代わりをしている「ないもの」、同時に「ないもの」の代わりをしている「あるもの」、「ある」振りをしている「ない」もの、同時に「ない」振りをしている「ある」もの。

ルイス・キャロルは言葉が、「ない」を「ある」、「ある」を「ない」ように思わせる錯覚製造装置であることだけを意識しながら創作活動をしていたと私は勝手に理解している。

○

二つ、複数、多数の側面をすくい取れないといって、救いがないわけではない。むしろ、かりに全部すくえば壊れてしまうにちがいない。処理能力に限界があるから。

世界（そんなものがあるとしての話）に意味を見てしまう。森羅万象（そんなものがあるならば）に意味（そもそも「ない」もの、人の頭の中にしか）を探ろうとしてしまう。人はすくえないことで、すくわれている。

○

言葉は決めるのではなく、決まる。これで決まり。

「決まる」は絶対なのかもしれない。絶対王政の絶対。絶対は絶大。絶倫でもある。

「決まる」は人知を超え、「決める」は人為。



文字はシンプルで、「それだけ」感が強い。「それだけ」感とは、「感」だから印象でありイメージ。検証ができない。

「それだけ」っぽい。「それだけ」がぶんぶんにおう。なんとなく「それだけ」という感じがして、「それだけ」という気分になる。

一度でも思わせ、信じさせたものが勝ち。脳は次の「読み、信じる」という処理作業に移らなければならないから。判断なんてしている暇はまずない。

このようにして、文字を読んで、そう思った、そう信じただけが、たいてい残る。文字を読むの基本は信じること。信じないと文字は読めない。



世界はひとつだ。

こう書くと、世界はひとつに思えてくる。そう思わない人も、この文字列を見た瞬間は「世界はひとつだ」と思う。思わないと読めない。信じないと読めない。

思って読んだ後に、とっさに「やっぱ、違うわ」と判断することもあるが、次の「読み信じる」という作業があるから、たいていすぐに忘れる。



多なのの一に見える仕組み、それが文字。世界をシンプルに見たい人には、文字は最適の錯覚製造装置。

○

思いは言葉という形で外に出してみても、はじめて確認できる。言葉がつねに外にあるからだ。外にある言葉は聞こえるし見える。ところが、意味を取ろうとした瞬間に、言葉は見えなくなり聞こえなくなる。人の中に入るからだだろう。人の中にあるものを言葉と呼ぶ勇氣は私にはない。

○

外にある言葉を遠隔操作するなら——正確には外にある事物を、やはり外にある言葉という代理を使って遠隔操作するなら——、軽量でさくさく動かしたほうがいいに決まっている。それが文字。

話し言葉はもたもたしている。時間に拘束されるからだ。

それに対し、書き言葉である文字は軽量でコンパクトでさくさく動かせる。なにしろ、読むなんてまどろこしいことをせずに見るだけでも済む。現在、読むは見るに限りなく近づいている。

こんな便利なものがほかにあるだろうか？

○

文字がこれだけ崇め奉られるのは、話したとたんに消えていく声とは違って、しつこく残るからだけではなく、誰もが覚えるのに多大な時間と労力を費やしたために、頭が上から下へ向かうからかもしれない。長年お世話になったはず。

しかも文字の読み書きを学ぶさいには、人はたいていうつむく。ずっと下を向いたまま学んだものに頭が上がるわけがない。学習の成果は恐ろしい。読み書きをするさいに頭を垂れて目を下に向ける姿勢は、死ぬまで続くと思われる。

○

まわりを見ると、うつむいている人がたくさんいる。道にも、バス停にも、バスの中にも、病院のロビーや待合室にも、たくさんいる。たくさんの方が手に板を持っている。

手のひらにのるくらいの小さくて軽くて薄い板だ。

文字を習う、文字を書く、文字を読む、思う、世界を見る。こういうときに人のする仕草が「うつむく」だ。うつむき、時間と労力をかけて、人はこどものうちから文字と世界を学んでいく。だから、人にとって世界は文字なのである。

うつむいて世界をながめるくらいならいい。頭を垂れる身振りが、世界を見下ろす、見下す、俯瞰する身振りと重ならないことを願わずにはいられない。

○

辞書では見出しが短い言葉（語数の少ない言葉）のほうが、語義や例文が長かったり（語数が多い）、同音の語が多かったりする。英語だと「a」、日本語だと「あ」や「ある」、「な」や「なる」がそう。「短い」と「長い」、「少ない」と「多い」が同時に起きている。

読むよりも、目を細めて見るとよく分かる。「目を細める」と「よく分かる」、そして「読まない」と「分かる」が同時に起きている。

○

話し言葉（音声）と、視覚言語である表情と身振りが、「消える」のではなく「残る」というよりも、「消える」と「残る」は同時にそして並行に起きている——。これは消えていくものが片っ端から記憶されるから残ると考えられる。

「消える」と「残る」が同時に並行して起きている。反対語なんて言葉の綾。ある事象の一面だけを取りあげた片手落ち。そんな気がする。事実誤認とまでは言わないまでも。

○

あなた、貴方、彼方——文字に似ている。活字に似ている。文字や活字を見ていると（意識していると）、読めなくなる。文字や活字は、目の前の「あなた・貴方」。読めなくなるのは、かなたにいる「あなた・彼方」、意味だったりイメージだったり光景だったりストーリーだったりする。

○

文字であるあなた、文字のあなたにいるあなた。あなたはふたりいる。同時には見えない。

読む行為、読書は、こうした不自由さの連続である。このままならさをあっさりとし念した「読んだ」とか「まだ読んでいない」とか「読めていない」といった言い回しは抽象でしかない。

○

十七文字という世界が十七文字で完結しているはずがない。言葉に言葉を重ねる、言葉に言葉を足す、言葉に言葉を積む、言葉に言葉を接ぐ（継ぐ）、言葉に言葉を投げる、言葉に言葉をこだまさせる。

そんな身振りが、十七文字の定型詩に感じられてならない。十七文字が短いだなんて冗談であり（事実誤認ではないかと言いたくなる）、単なるレトリックにすぎない（これもレトリックにはちがいないが）のではないかと思うほど。

○

「読み」と「詠み」がどこかでつながっている。それは「黄泉」や「闇」にまでつながっているのではないか。

これまで話され発せられ放れた言葉がたちがどこかに集まっていて、そこから響いてくるこだまを、各人がその時その時に受けとり耳にし、口から吐くのではないか。

○

こだま、餅、木魂、木霊。音（たぶん文字も）は息（生き、行き、往き、逝き）のような魂なのかもしれない。読みと詠みと黄泉と闇が通底し、こだましている。それが言葉と、言葉からなる作品の世界のありようだという気がする。言葉はたったひとりで口に

したり文字にしているのではない。

○

十七文字は一句で完結もしていなければ、一句で成立もしていない。とてつもなく長い。定型詩が短いはずがない。定型という縛りは単なる鎖ではない。えんえんと前にも後ろにも続く連鎖なのだ。

○

「普遍的」というのは、そうめったにあることではない。世界は「特殊」や「ローカル」にあふれているのに、「普遍的」や「普遍性」という言葉がこれだけ容易に使われるのは、「普遍」と「特殊」と「ローカル」がほぼ同義で用いられているからにちがいない。こういうことは辞書や事典を引いても分からない。

○

「普遍的」はそうめったにあることではない。つまり「特殊」なのである。

○

何でも難解に見える。難解だと思った瞬間に難解になる。「一」という文字も、「一」という罫線も、「口」というカタカナも、「口」という漢字も、難解だと思えば難解になる。抽象、具象、中傷、愚笑、意味、無意味、扇子、ナンセンス、関係なし。印象だから、基準なんてない。難解は節操がない。文字どおりに取ると馬鹿を見るの典型。

○

抽象的、深遠な。これも意味不明。辞書で引いても意味はない。いや、ある。意味が書いてある。ナンセンスにも無意味にも意味がある。辞書を引けば書いてある。

意味が不明だから、辞書に意味が書いてあるのかもしれない。決めたはずなのにわかんなくなっちゃった、という感じか。

○

自分が猫や犬と接するときを感じるのだが、擬人化は避けられない。ヒトとヒト以外の他者（生き物や物）との接し方の基本には擬人化がある気がする。ヒトは擬人という愛し方しかできないのかもしれない。愛用のカバンを思わず撫でたり、靴に話しかけている自分がある。話しかけているのはヒトに擬しているからにほかならない。とにかく愛おしい。

○

言葉は事物ではない。個人的には猫と猫という言葉はぜんぜん似ていると思わないが、猫が猫という言葉で名指されているヒトの世界に私は生きている。

言葉は似たもの、似せたもの、似せもの、偽物、贋物。別物であることは確か。疑似物とか擬似物という言い方もできる。疑、擬、偽、戯、欺。怪しいことに変わりはない。

○

言葉は事物ではなく、言葉が疑似物である以上、言葉上の矛盾と、その言葉が指し示す事物（そんなことが可能であればの話だが）における矛盾が一对一で対応して一致するはずはなく、言葉のうえで矛盾があるという理由で、そのフレーズを否定したり退ける気にはなれない。

いくら現実や思考よりも言葉のほうがいじりやすいからといって、言葉で現実や思考の辻褃合わせや帳尻合わせをしてしらっとしている勇氣は私にはない。「いじりにくいもの」の代わりに「いじりやすいもの」いじりで済ませて澄ましているわけにはいかない。

○

抽象画が具象画であることは確か。具象画にとっかかりがない場合に、抽象画と呼んでいる。こういうのが芸術性（芸術ではなく芸術性）や芸術っぽさ（芸術ではなく芸術っぽさ）の「性」であり「っぽさ」なのかもしれない。

○

抽象画や抽象芸術は、言葉でそう自分に言い聞かせないと鑑賞できない。つまり頭で観るもの。そもそも芸術とは、そういうものなのかもしれない。いま話題にしているのは個々の作品のことではない。「っぼさ」「っぼい」についての話。「っぼさ」「っぼい」は軽薄に響くが、そんなことはなく、むしろ知識や情報やある程度の蘊蓄がないと「っぼさ」「っぼい」を味わうことはできない。

○

万が一抽象画だと自ら称している作品があるとすれば、「確信犯」というよりも、やらせではないか。芸術界でしか通じないギャグでしかない。

○

「何描いているの?」「抽象画だよ」
「何書いているの?」「難解で抽象的な現代詩」
「何書いているの?」「難解で晦渋な哲学エッセイ」

「○○っぼさ」は、「っぼさ」の世界であり「○○」の世界ではない。「っぼさ」だけの空っぼの世界。

○

言葉はグラス。
言葉は半分だけ水の入ったグラス。
言葉は満たしても満たしてもいっぱいにならないグラス。

このように書くと何か深い意味がありそうなフレーズに見えるから不思議だ。ひょっとして隠喩や寓意(アレゴリー)ではないかと思ってしまう。自分で書いたにもかかわらず、そう思ってしまう。もし、これが他人の書いたものなら、よけいにそう見えるかもしれない。

○

「真理」(あるいは「でたらめ」)とか「真実」(あるいは「フェイク」)とか、真理っぼさ(または「でたらめっぼさ」)とか「真実らしさ」(または「フェイクらしさ」)という

のは、とどのつまりはレトリックの問題ではないかと、最近よく考える。

○

言い方次第、書き方次第、口調次第、プレゼン次第で、本当っぽくも嘘っぽくも、意味ありげにも、深遠そうにも見える。言葉は空っぽなのに。

言葉は空っぽ。言葉は「らしさ」。言葉は「っぽさ」。

人が求めるのは、詩ではなく詩らしさ、小説ではなく小説感、哲学ではなく哲学っぽさなのかもしれない。真実らしさ、真理っぽさ、いかにも事実に見えるもの。

○

○○らしさ、○○っぽさ、○○のようなもの、○○らしいもの、○○感の漂うもの——人はこういうものを相手にしながら生きている。

○○が感知できないし、確認できないし、検証できないし、意見の一致も得られないから、こうなるのだろう。

人は「同じ」や「同一」の世界（確認や検証やコンセンサスが可能な世界）に生きているのではなく、「似ている」の世界（印象とイメージの世界）に生きているからにちがいない。

○

人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩みつづける生きものである。

人のつくった「○△X」という言葉、とりわけ文字は、人から離れて「同じ」や「同一」の世界にある。つまり人の外にある。人の外にあるものは、言葉であれ事物であれ、人にとってはままならないもの、つまり人の思いどおりにならないものである。

人は「似ている」と「気まま」を基本とする、印象とイメージの世界に生きている。そんな人にとって、○△Xはたどり着けないものであるため、「○△Xっぽい」や「○△Xらしい」や「○△Xのような」を相手にするしかない。

「っぽい」や「らしい」や「のような」の世界とは、レトリック次第で印象の決まる世界ではないだろうか。つまり、「同じ」と「同一」を問うに等しい「○△Xとは何か？」が成立しない世界なのではないか。

○

あることないこと
「ある」と「ない」
「有る」と「無い」
あるということと、ないということ
存在と無

いちばん哲学っぽいのは、どれ？

○

レトリック次第、レトリックの問題、レトリック感、レトリックらしさ、いかにもレトリックっぽい。

○

サルトルの『存在と無』の英訳を初めて見た時には拍子抜けした。そのタイトルに。Being and Nothingness なのだ。東京、神田古本屋街にある洋書専門店で見つけて、啞然、そして呆然となった。

Being and Nothingness 。か、軽すぎです。

サルトルさまの『存在と無』さまに、そんな日本の中学生でも知っているような単語のタイトルを当てるとは何事だ。そうは思わなかったが、あまりにも意外で、その本をこごんまりとした店の床に落としそうになったのを覚えている。

せめて、がちラテン系の、Existance and Non-exisitance くらい存在感のある単語を並べてほしいなんて、いまでもめちゃくちゃを言いたくなる。

○

『存在と無』(日) がちがち
L'Être et le néant (仏) ほわーん
Being and Nothingness (英) で?
Das Sein und das Nichts (独) ごちごち
El ser y la nada (西) さらさら

ある個人の印象でありイメージ。

○

「この詩の掛け詞について論じなさい」
「先生、掛け詞と駄洒落って、どう違うのですか？」
「別称と蔑称みたいなものと言え、分かるかな？」

○

おもしろく読んだ文章が、あるいは感心した文章が、アナグラムだったり、回文だったり、言葉遊びだったり、何かの暗号であったり、メッセージであったりする。

○

ずっと聴いていて大好きな音楽が、メッセージソングだと言われて、その「正しい」意味や解釈を丁寧に解説される。

○

手のひら返し。

抽象画だと思ったのが、ゴリラの描いた絵だった。機械が描いたものだった。孫の描いたものだった。娘の描いたものだった。自分のこども時代に描いたものだと親に打ち明けられた。

12/11 4021711
がらりと変わる解釈、いや印象。印象とは「っぽさ」のこと。

○

作品自体が鑑賞されることは稀であり、作者名とセットで鑑賞されるのが一般的なようだ。

○

作品は作者から離れて存在するという考え方がどうも理解できない。まっとうな意見だと思えない。考えただけでむかむかする。

○

AIの創作と聞くと、なぜか感情的になって血圧が上がる。一言言わずにはいられない。

○

回文とアナグラムからなる詩に涙した自分が許せない。悔しくて仕方ない。(人には言えない)トラウマになっている。

○

外国人の詠んだ俳句だと聞くと身構える自分がある。その人の母語が日本語だと聞いてほっとする自分もある。

○

漢詩や西洋の詩の韻が駄洒落に思えてならない。

○

韻や掛け詞のある詩に抵抗がある。

○

創作における、でたらめと偶然と技巧と作為の違いって何だろう。そもそも違いなんてあるのか。

○

やっぱりレトリックはトリックだと思う。好きになれない。

#レトリック # レトリック詞 # 言葉 # 文字 # 掛け詞# 駄洒落 # 錯覚 # 抽象 # 具象
意味 # 無意味 # ナンセンス # 戯言

12/15 印象とイメージの世界に生きる

＊

印象とイメージの世界に生きる

星野廉

2022年12月15日 12:59

目次

文章の印象とイメージが変わる

思いどおりにならないもの

「同じ」や「同一」の世界にあるものは複製できる

私のサラダ記念日

文章の印象とイメージが変わる

”水が来た。”

三島由紀夫『文章読本』「第三章小説の文章」より

「これはね、森鷗外作『寒山拾得』から引用したもので、三島由紀夫の『文章読本』で激賞されている文なんだ」

「そうかそうか、さすがに名文だね。短いけど、すごい。なんというか、こう、気品が漂ってくるのよね」、「やっぱりね。違いますよ。短いけど、そんじょそらの文章とはぜんぜん違う。なんというか、こう、文体が違います」、「分かります。そんな気がしたんだよな。言葉に独特のたたずまいがあるでしょ？　なんというか、こう、匂い立つ教養を感じるんだ」

＊

「ねえねえ、お父さん、お隣の〇〇くんが作文でこんな文を書いたのよ」

「なにになに。『水が来た。』？ ふーん」

＊

「ねえねえ、お義父さん、うちの〇〇ちゃんが作文でこんな文を書いたのよ」

「どれどれ。『水が来た。』？ おおお！ あの子は天才だ！」

＊

「ねえねえ、〇〇さんが作文でこんな文を書いたのよ」

「どれどれ。『水が来た。』？ ——」

＊

『水が来た。』は文字からなる文字列でありセンテンスであり、日本語の表記を学んだ者であれば誰もが書き写せるし、そこそこ学んだ人がなんとか書き写すことも可能だろう。もちろん機械に書かせることもできるし、機械が書いた文であってもぜんぜんおかしくない。

文字には複製しても「同じ」どころかほぼ「同一」であるという驚くべき性質がある。ところが、同じ文字列の文章であっても、それを純粋にそのものとして読むことは難しく、人は必ずその文字列に何らかの印象とイメージをいだいてしまう。

これは複製として鑑賞されるのが一般的である、絵や写真や動画や楽曲であってもそうであろう。誰が書いたのか、誰が撮ったのか、誰がつくったのか、誰が歌った、あるいは演奏したのかで、印象が異なる。

「〇〇っぼい」や「いかにも〇〇らしい」や「〇〇のような」や「いかにも〇〇みたい」のように。

作品を鑑賞して評価を下したというよりも、たいていは知識として得た情報が作品の印象をつくる。それだけでなく、得た情報が間違いだったと言われると、手のひらを返したように印象が変わる。

「そうかあ、やっぱり〇〇だね」や「なるほど、さすがに〇〇らしい」のように。この場合、〇〇には機械やAIも、もちろん入る。人がAIの作品を評価するのはきわめて難しい。人類初の体験で慣れていないからである。冷静な判断ができないという意味。

人は何かに何かを見てしまう。そのものを見ることはできない。自分が知っているもの（知っていると思っているもの）、自分の見たいもの、自分にとって都合のいいもの、自分にとって快であるものを見てしまう。

思いどおりにならないもの

人は「〇△X」という言葉をつくって、その次に「〇△Xとは何か？」と問い、思い悩みつづける生きものである。

人のつくった「〇△X」という言葉、とりわけ文字は、人から離れて「同じ」や「同一」の世界にある。つまり人の外にある。人の外にあるものは、言葉であれ事物であれ、人にとってはままたならないもの、つまり人の思いどおりにならないものである。

人は「似ている」と「気まま」を基本とする、印象とイメージの世界に生きている。そんな人にとって、〇△Xはたどり着けないものであるため、「〇△Xっぽい」や「〇△Xらしい」や「〇△Xのような」を相手にするしかない。

「っぽい」や「らしい」や「のような」の世界とは、レトリックやプレゼンテーションや得た知識次第で印象の決まる世界ではないだろうか。つまり、「同じ」と「同一」を問うに等しい「〇△Xとは何か？」が成立しない世界なのではないか。

＊

人は印象とイメージの世界に住む以上、「〇△Xっぽい」や「〇△Xらしい」や「〇△Xのような」に囲まれていても、「〇△X」とは出会えないことになる。もし出会えているとすれば、人は「同じ」と「同一」の世界に生きていて、人の世界には解釈の不一致や誤解がないことになる。「〇△Xとは何か？」と問い、思い悩む人もいない。きっと辞書も売れないだろう。

「同じ」や「同一」の世界にあるものは複製できる

人の外にあって人の思いどおりにならないものとして代表的なものは、いったん話して放してしまったために、自分から離れてしまった言葉がある。話し言葉である音声だけではなく、書き言葉である文字や、視覚言語と呼ばれることもある表情や身振りも、そうだろう。

いったん人から離れてしまって思いどおりにならないものの特徴は、複製できることである。音声は録音、文字は筆写やさまざまな方法でのコピー、表情と身振りなら録画したうえでの複製が可能である。

一方で、人の中にあるものは複製できない。そもそも見ることも確認することもできないからだ。人の中は「同じ」や「同一」の世界ではないから当然である。不安定で気ままな印象やイメージが複製できるわけがない。

＊

かなりの精度で複製可能なものは、どれもが「同じ」や「同一」という尺度で確認したり検証できる。つまり、「同じ」や「同一」の世界にあると言える。「同じ」や「同一」こそが複製の第一条件だからだ。

身振りが複製可能であるとすれば、人のあらゆる行為が複製可能だと言えるだろう。そうであれば、人のするありとあらゆる行為が、その行為をしたとたんにその人から離れる。要するに、「同じ」や「同一」の世界にあるのだ。

人から離れた「同じ」や「同一」の動作である行為が、「似ている」と「気まま」を基本とする、印象とイメージの世界に住む人によってさまざまに解釈されるという意味である。

(そもそも、楽曲であれ、文学作品であれ、絵や写真や映画などの映像作品であれ、複製で鑑賞するのが一般的であることを思いだそう。「同じ」や「同一」の世界にあるからこ

そ複製される作品を、私たちは印象とイメージの世界から気まぐれに解釈している。）

たしかに、自分のしたある行為が他の人から勝手に理解されることが日常的に見られる。世界は誤解や曲解や無理解や無視に満ちている。きょくたんな例を挙げると、電車やバスに乗り遅れてにやにやする行為や表情が、日本に初めて来た人にとっては不気味であったり不可解であるという話をよく聞く。

失敗をしたり決まりの悪い時ににやにやする癖のある私は、こういう話を聞いたり思いだしたりするたびに気まずい気持ちになる。いまの私は例の薄笑いを浮かべているにちがいない。

私のサラダ記念日

冒頭で紹介したごく短いセンテンスについて、あれこれ書くのはフェアではない。参考のために、以下の引用をお読みいただきたい。

”この文章はまったく漢文的教養の上に成り立った、簡潔で清浄な文章でなんの修飾もありません。私になんか感心するのが、「水が来た」という一句であります。この「水が来た」という一句は、全く漢文と同じ手法で「水来ル」というような表現と同じことである。しかし鴎外の文章のほんとうの味はこういうところにあるので、これが一般の時代物作家であると、閻が小女に命じて汲みたての水を鉢に入れてこいと命ずる。その水がくるところで、決して「水が来た」とは書かない。まして文学的素人にはこういう文章は書けない。このような現実を残酷なほど冷静に裁断して、よけいなものをぜんぶ剥ぎ取り、しかもいかにも効果的に見せないで、効果を強く出すという文章は、鴎外独特のものであります。”

(三島由紀夫『文章読本』「第三章小説の文章」より)

”閻は小女を呼んで、汲みたての水を鉢（はち）に入れて来いと命じた。水が来た。僧はそれを受け取って、胸に捧げて、じっと閻を見つめた。清浄な水でもよければ、不潔な水でもいい、湯でも茶でもいいのである。不潔な水でなかったのは、閻がためには勿怪（もっけ）の幸いであった。しばらく見つめているうちに、閻は覺えず精神を僧の捧げている水に集注した。”

(森鴎外『寒山拾得』より)

森鴎外のこの文章に、事を叙することによって情を叙する技巧——いわゆるハードボ

イルドやミニマリズムでもちいられている手法と同じ——を私は感じる。手本にしたい文章であり、じつのところ『寒山拾得』の文体を意識して書いたことが何度もある。

”サラダが来た。松長は真っ先にオリーブをフォークで刺して口に運んだ。最後に食べようか、それとも結局は残そうかと、わたしが考えていたものだ。松長はオリーブをかみ終えてから言った。

「おいしいオリーブを食べさせてくれる店は少ないんだ。ここのは合格です」

(拙作『ディスタンス』「第10話 隔たり」より)

上の拙文の出だしは明らかに『寒山拾得』の「水が来た。」を意識したものである(上辺だけをなぞって借りた恥ずかしいものではあるが)。以前からいつか自作の小説で使おうと考えていてようやく使えた記念すべき日なので、その日付を覚えているくらいだ。密かに「サラダ記念日」と呼んでいる。

#レトリック # 言葉 # 文字 # 表情 # 身振り # 文章 # 複製 # 印象 # イメージ # 鑑賞
評価 # 森鷗外 # 三島由紀夫 # 名文

12/16 シンクロする身振り、行為、表情

＊

シンクロする身振り、行為、表情

星野廉

2022年12月16日 07:47

目次

(A)

(B)

うつむく身振りの多義性

シンクロする動作、表情、言葉

私たちは同じではなく似ている

(A)

文字がこれだけ崇め奉られるのは、話したとたんに消えていく声とは違って、しつこく残るからだけではなく、誰もが覚えるのに多大な時間と労力を費やしたために、頭が上らないからかもしれない。長年お世話になったはず。

しかも文字の読み書きを学ばさいには、人はたいていうつむく。ずっと下を向いたまま学んだものに頭が上がるわけがない。学習の成果は恐ろしい。読み書きをするさいに頭を垂れて目を下に向ける姿勢は、死ぬまで続くと思われる。

(B)

まわりを見ると、うつむいている人がたくさんいる。道にも、バス停にも、バスの中にも、病院のロビーや待合室にも、たくさんいる。たくさんの人が手に板を持っている。手のひらにのるくらいの小さくて軽くて薄い板だ。

文字を習う、文字を書く、文字を読む、思う、世界を見る。こういうときに人のする仕草が「うつむく」だ。うつむき、時間と労力をかけて、人はこどものうちから文字と世界を学んでいく。だから、人にとって世界は文字なのである。

うつむいて世界をながめるくらいならいい。頭を垂れる身振りが、世界を見下ろす、見下す、俯瞰する身振りと重ならないことを願わずにはいられない。

うつむく身振りの多義性

上の（A）と（B）で共通するのは「うつむく」である。「うつむく」という身振りを説明するなら、「頭を下げて目線を下向きにする」となるだろう。この動作を録画して複製をつくることももちろん可能だ。

つまり、うつむく行為はその行為をしたとたんに人から離れて、他の人がする「うつむく」と同一視されるということになる。あらゆる身振りと行為が、人を離れて「同じ」と「同一」の世界に存在するから複製が可能なのである。

上で同一視という言葉をつかったが、ミスリーディングな言い回しである。人は同一視などできないからだ。同じ動作を各人が異なった印象とイメージでとらえるのが人間だと言ってもかまわない。

いったん人から離れた動作や表情は、言葉と同じくさまざまな他人によってさまざまに解釈される。他人は多人。多人である他人に解釈されることが、「人から離れる」であり「人の外にある」なのである。

＊

自分が発したとはいえ、外にあるのだから取り返したり帳消しにするのは難しいし（せいぜい帳尻合わせに血道を上げるしかない）、思いどおりにならない。言葉も動作も表情も、外にある外なのである。

言葉や動作や表情は、生まれた時に既にまわりにあった外であり、それを人は真似て

12/10 小説の書き方講座 第6回 小説の書き方

学びながら借りていく。なぞることで人の中に入るが、中にあるものは見えないし聞こえないから確認できない。

外に出してはじめて見えて聞こえるものになるが、それはもう人を離れて、人の思いどおりにはならない。

こうした状況は、人に限らず機械や AI でも変わらない。AI にとっても、書いたり話した言葉、描いた絵、つくった楽曲、つくったもの、おこなった行為、こうしたすべてのものが、つねに外にある外なのである。思いどおりにはならないという意味。人にも機械にも AI にも（尻ぬぐいをするのは人だけど、これは致し方ない）。

ぜったいに疲れなない、多量のデータを短時間で正確に処理できる、パワフル。この点が私には恐ろしい。AI に人が感情的になるのは、このせいなのかもしれない。人類にとっては初の経験だから仕方がないようだ。経験値を積むしかない。

＊

(A) の冒頭に「崇め奉られる」とあるが、これが (A) のテーマなのである。これが主旋律で、「頭が上がらない」、「うつむく」、「ずっと下を向いたまま」、「頭が上がるわけがない」、「頭を垂れて目を下に向ける」と変奏される。

人は文字を学ぶさいにうつむくから、文字に頭が上がらず、文字を崇め奉っているとやりたいのだろう。強引な論法、つまりこじつけとも言えそうだ。

＊

(B) では、どう変奏されているだろうか。「うつむいている」「うつむく」、「うつむき」、「うつむいて」という具合に単調に書かれたあと、ラストで次のように畳みかける。「頭を垂れる身振りが、世界を見下ろす、見下す、俯瞰する」。

人は文字を学ぶ過程で、文字と文字で書かれた世界とを同一視するようになると、どうやら言いたいらしい。しかも、文字の読み書きと学ぶ姿勢である「うつむく」と、世界を俯瞰する、つまり見下ろす動作とを重ねているのである。

こじつけとも言えそうな論法でつづっている点は（A）と変わらない。

＊

こんなふうには、いったん書いたものは私から離れたものになる。もどかしい。

隔靴搔痒。どんなに搔いても、じつは搔けていない。どんなに書いても書けていない。夢の中と同じで、どんなに駆けても駆けてはいない。どんなに藻掻き足搔いても、ぜんぜんかけていない。

人生と世界という切りのない賭けを生きつづけるしかないのかもしれない。とはいえ、掛け替えのない人生だ。がんばろう。

【※なお、（A）と（B）は、拙文「れとりっく」から引用したものです。読む人に通じるかどうかは別にして、レトリックをつかった短文ばかりを集めた記事です（私の場合にはいつもそうなんですけど）。よろしければ、お読みください。】

シンクロする動作、表情、言葉

（A）と（B）の文章で分かるのは、「うつむく」という一見シンプルな身振りと行為がさまざまな印象とイメージで見られる可能性があることだろう。時と場合、誰がいつどこでどんなふうには、「うつむく」は、いろいろな意味やメッセージを持つだろう。

ある身振りや行為は、どれもが複製可能であり、模倣も反復も可能であって、いまこの時点でも、世界のあちこちで、そっくりな動作、似たような仕草が起きていて不思議はないのである。それでいて同じではない。

ある動作はさまざまな思いでおこなわれているはずであり、その動作を目にする人もまたさまざまな印象やイメージを持つはずだ。

いわゆるシンクロという現象は、動作や身振りだけでなく、表情でも起きているにち

がない。

＊

私は言葉を広く取っていて、話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、表情や身振りも言葉として受けとめて生活しているが、シンクロは話し言葉と書き言葉でも起きている。

日本語で考えてみると、いまこの時点で、似たような、同じような日本語の話し言葉やフレーズが発言として話されていてもぜんぜんおかしくはなく、これが書き言葉の場合になると、まったく同じ、つまり同一の単語やフレーズや文字列がいまどこかで書かれていても不思議ではない。

記述とは既述なのであり、言葉をもちいて記す行為は、既に何度も記されてきた言葉や言い回しを「なぞる」となみにほかならない。

AさんとBさんが同じ文を書きつづけることは考えにくいですが、あちこちで「同じ」記述が断片的かつ断続的かつ単発的におこなわれているさまは想像しやすいのではないだろうか。

これは身振りや動作でも言えるにちがいない。まったく同じ動作を別人同士が継続しておこなうことは考えにくい。

私たちは同じではなく似ている

断片的なシンクロ現象について考えているうちに、同じ動作や表情が長時間にわたって、複数の、あるいは多数の人によって同期されているさまが、ふと頭に浮かんだ。

軍隊、施設、共同生活、組織、大会、イベントのことである。

イメージとしては整列と行進とマスゲーム。子どものころから現在にいたるまで協調性に欠けると言われつづけてきて、同調が苦手な私にとっては、そうしたさまは恐怖で

しかない。

たとえシンクロしても、一人ひとりとは異なっていると声を大にして言いたい。私たちは「同じ」と「同一」の世界ではなく、気ままで不安定な印象とイメージの世界に生きている。それでいいではないか。

私たちはみんな同じではなく、一人ひとりが似ているのだ。

#シンクロ # シンクロニシティ # 身振り # 動作 # 仕草# 表情 # 言葉 # 話し言葉 # 書き言葉 # 多義性 # 両義性

12/17 シンクロする、しかめっ面（ロングバー
ジョン）

＊

シンクロする、しかめっ面 (ロングバージョン)

星野廉

2022年12月17日 12:37

目次

しかめっ面恐怖症

顔をしかめる表情が世界中でシンクロする

実物のない複製、起源のない引用、シンクロ

しかめっ面恐怖症

テレビをつけた瞬間に、ぜんぜん見たこともない人の顔が大写しになることがある。顔を思いきりしかめていて、それが号泣しているのか爆笑しているのかとっさに判断できないことがある。

字幕とか音声の解説を聞いて初めて状況がつかめる。それまでは、宙づり状態に置かれる。どっちなんだろう？ けっきょく、泣いているのか笑っているのか不明なまま、画面が変わるなんてこともざらにある。

その人の涙の意味もメッセージも、私には分からないままで終わってしまう。他のどれだけの人が分かったというのだろうか？

＊

歌を歌っている人が、いきなり顔をしかめる場合があるが、私はあの瞬間が苦手だ。怖くなるのだ。こんなことを感じるのは私くらいかもしれない。

もし、しかめっ面恐怖症というものがあるのなら、それは私のことだ。

よくテレビで見るミュージシャンで、サビのところに来ると思いきり顔をしかめる人が何人かいるのだが、ついついその映像を見てしまう自分がある。

まさに怖いもの見たさ。

*

来るぞ来るぞ.....。

来たあ！

そんな感じで見ているわけだが、なんで見てしまうのだろう？

しかめっ面に慣れようなんて殊勝な気持ちからだとは思えない。やっぱり怖いもの見たさに近い心理だという気がする。

それだけではない気もする。

*

あと、最近、スポーツ選手がパフォーマンスの直前に、大きく口を開けた後に歯を食いしばるような顔芸を一瞬だけするのをよく見掛ける。あれも気になって仕方ない。

めちゃくちゃ顔をしかめるのだ。くしゃくしゃなほど。

どのスポーツにも見られる。お相撲さんの中にも取り組みの前に必ずやる人がいる。

気合いなのだろうか。ルーティーンなのか。おまじないっぽい気もする。あれは立派な瞬間芸だと思う。どれも似ている。

初めて見たときには、びっくりしたし心配もした。どこか痛むのかとか、外れかけた入れ歯を直しているのかとか、いろいろ想像してしまった。

＊

しかめっ面は喜怒哀楽ぜんぶでありえる。ということは、どれでもないとも言える。

赤ちゃんなんてしょっちゅうしかめっ面をしていないだろうか？ しかも喜怒哀楽ぜんぶ。どっちとも言えないときもあるし。

おとなでも本人が分からないままにしかめっ面をするというのも、よくある気がする。

メッセージは見た人が決めるのかもしれない。誤解があっても、たいていはそのまま進んでいく。何が進んでいくって、世界が、そして人生が。

顔をしかめる表情が世界中でシンクロする

朝の連続テレビ小説をほぼ毎日見ているのだが、あのドラマはよくできていると思う。とても分かりやすいのである。

表情や仕草や身振りを含めた演技が、型にはまっているからかもしれない。

また連載が変わるごとに話が変わっても、どこか似ている気がするのだが、そうした定型っぽさが分かりやすさにつながっているように思える。

演技も表情もどちらかというと大げさだ。

中途難聴者の私はテレビを字幕で見ているにもかかわらず、演技が大げさなせいか、字幕なしでもストーリーや状況がつかめて助かる。

＊

このあいだ、過去の朝の連続テレビ小説の再放送をたまたま目にした。いまのものよりも、ずっと大げさな演技をしているのでびっくりした。

しかも、状況や筋がめちゃくちゃ分かりやすい。初めて見たのに。途中から見ているのに。

分かりやすすぎて、感動すらしていた。こんなに分かっていいのかしら――。

そのときに気づいたのだが、どうやら私はテレビを見ながら、注目している人の表情を真似ているようなのだ。

*

しかめっ面を目にしたときに、自分も思わずしかめっ面になっているのは薄々気づいていたものの、表情一般に言える自分の性癖だとは知らなかった。

いま思わず性癖という言葉をつかったが、性癖と言ってかまわないのだろうか。

それ以来、自分のその「性癖」が気になって仕方ない。気がつくと、ニュースで見る政治家、お笑い芸人、アイドル、アーティスト、俳優を問わず、その表情を真似ている自分がいる。

つい合わせてしまうのだ。

これをシンクロと言わずして何と云えばいいのか。

*

ニホンザルもゴリラも台湾カニクイザルもしかめっ面をする。しているのを、この目で見たことがある。

犬と猫については……。よく分からない。もっと観察を続けてみよう。

あ、してるわ。

しかめっ面ではなく、あくびのこと。

ワンコだってニャンコだってハムスターだってあくびをする。この目を見たことがある。

あ、そうだ、サルやゴリラがしかめっ面をするのに気づいた。というか、これも、あくびのことなのだ。

あくびは立派なしかめっ面ではないだろうか。

しかもうつる。うつるんです。

昔、ハムスターのあくびがうつったのを思いだした。ワンコでもあった。生きものに等しく「うつる」現象なのではないか？

あくびは時空を超える。テレビのニュースで相撲を見ていて、客席の人のあくびがうつったこともあった。

あれは中継ではなかったので、やっぱり時空を超えていると考えられる。この現象が私だけのことでなければ。

*

世界中でしかめっ面がシンクロしていることは確かだろう。

まさか同じ意図で同じメッセージを送っているなんて考えられない。しかめっ面はニュートラルなのだ。

意味やメッセージは決められないという意味。どっちかずでどっちなのかも分からない。意味やメッセージが不在ということも十分に考えられる。

しかめっ面だけではないのかもしれない。

ありとあらゆる表情、目つき、仕草、身振りが、いわば実物のない複製であり、起源

のない引用だという気がしてきた。

ややこしい言い回しだが、決まり文句やオノマトペをイメージすると分かりやすいかもしれない。

実物のない複製であり、起源のない引用だから、ずっと入ってずっと出ていくのだ。学習したという自覚が希薄、いやほとんどない。やらされている感など、まるでない。

生理現象に近い。出すというよりも出る。いや漏れ出るかな。むしろ漏れる感じ。あれよあれよ。

こんなのをみんなしてやっているのだから、世界的な規模でのシンクロになるはず。

実物のない複製、起源のない引用、シンクロ

私たちはなぜシンクロしているのか分からない。

何となくシンクロしている。

何にシンクロしているのか分からない。

何をシンクロしているのか分からない。

以上がシンクロの特徴ではないだろうか？

無自覚、無意識、無目的。三無主義。

＊

正体不明、意識不明、原因不明、出所不明、行先不明。

無自覚、無意識、無目的。

言葉に似ていないだろうか？

コピーのコピー。引用の引用。複製拡散時代。あなたの使っている言葉の出所と行先が分かるだろうか？ 特定できるだろうか？ 未配、誤配、消失、隠滅、無視なんて、当たり前。

誰もが、無自覚、無意識、無目的に言葉を使っている。言葉の流れに運ばれている。言葉に身を任せている。

学習したという自覚が希薄、いやほとんどない。生理現象に近い。出すではなく出る。出るではなく漏れ出る。漏れ出るではなく漏れる。

これは言葉が、実物のない複製であり、起源のない引用でもあり、それゆえに、シンクロしているからではないか？

ほとんど無自覚で無意識に、ほぼ無目的にシンクロしている。漏れている。あれよあれよ、と。

こうした状況は話し言葉と書き言葉だけではなく、身振りと表情もそうであるにちがいない。

*

あれよあれよと漏れる。

思わず苦笑いしている自分がある。にやにやとした意味のない笑い。何となく漏れてしまう笑い。

そうだ、笑いも世界中でシンクロしているはずだ。そう考えると、にやにやがにこにこに変わって気分が上向く。

強面の私が笑うと、すごんでいるとよく勘違いされる。こっちには、そんな気持ちはさらさらしないのに。勘違い平行棒。二線は決して交わらない。

12/17 シンクロする、しかめっ面（ショートバージョン）

＊

シンクロする、しかめっ面（ショートバージョン）

星野廉

2022年12月17日 12:37

目次

しかめっ面恐怖症

顔をしかめる表情が世界中でシンクロする

意味やメッセージが不在か保留されたまま、表情や身振りが反復される

しかめっ面恐怖症

テレビをつけた瞬間に、ぜんぜん見たこともない人の顔が大写しになることがある。顔を思いきりしかめていて、それが号泣しているのか爆笑しているのかとっさに判断できないことがある。

字幕とか音声の解説を聞いて初めて状況がつかめる。それまでは、宙づり状態に置かれる。どっちなんだろう？ けっきょく、泣いているのか笑っているのか不明なまま、画面が変わるなんてこともざらにある。

その人の涙の意味もメッセージも、私には分からないままで終わってしまう。他のどれだけの人が分かったというのだろうか？

＊

歌を歌っている人が、いきなり顔をしかめる場合があるが、私はあの瞬間が苦手だ。怖くなるのだ。こんなことを感じるのは私くらいかもしれない。

もし、しかめっ面恐怖症というものがあるのなら、それは私のことだ。

よくテレビで見るミュージシャンで、サビのところに来ると思いきり顔をしかめる人が何人かいるのだが、ついついその映像を見てしまう自分がある。

まさに怖いもの見たさ。

*

来るぞ来るぞ.....。

来たあ！

そんな感じで見ているわけだが、なんで見てしまうのだろう？

しかめっ面に慣れようなんて殊勝な気持ちからだとは思えない。やっぱり怖いもの見たさに近い心理だという気がする。

それだけではない気もする。

*

あと、最近、スポーツ選手がパフォーマンスの直前に、大きく口を開けた後に歯を食いしばるような顔芸を一瞬だけするのをよく見掛ける。あれも気になって仕方ない。

めちゃくちゃ顔をしかめるのだ。くしゃくしゃなほど。

どのスポーツにも見られる。お相撲さんの中にも取り組みの前に必ずやる人がいる。

気合いなのだろうか。ルーティーンなのか。おまじないっぽい気もする。あれは立派な瞬間芸だと思う。どれも似ている。

初めて見たときには、びっくりしたし心配もした。どこか痛むのかとか、外れかけた入れ歯を直しているのかとか、いろいろ想像してしまった。

*

しかめっ面は喜怒哀楽ぜんぶでありえる。ということは、どれでもないとも言える。

赤ちゃんなんてしょっちゅうしかめっ面をしていないだろうか？ しかも喜怒哀楽ぜんぶ。どっちとも言えないときもあるし。

おとなでも本人が分からないままにしかめっ面をするというのも、よくある気がする。

メッセージは見た人が決めるのかもしれない。誤解があっても、たいていはそのまま進んでいく。何が進んでいって、世界が、そして人生が。

未配、誤配、遅配、消失、隠滅、無視なんて、当たり前。行き先不明で、ひたすら進んでいく。

行先不明、正体不明、意図不明、意識不明、意味不明、原因不明、出所不明。それが世界、それが人生。

しかめっ面にならないほうがおかしい。

顔をしかめる表情が世界中でシンクロする

朝の連続テレビ小説をほぼ毎日見ているのだが、あのドラマはよくできていると思う。とても分かりやすいのである。

表情や仕草や身振りを含めた演技が、型にはまっているからかもしれない。いい人、悪い人、普通の人も、顔で分かる。

また連載が変わるごとに話が変わっても、どこか似ている気がするのだが、そうした定型っぽさが分かりやすさにつながっているように思える。

演技も表情もどちらかというと大げさだ。

中途難聴者の私はテレビを字幕で見ているにもかかわらず、演技が大げさなせい、字幕なしでもストーリーや状況がつかめて助かる。

*

このあいだ、過去の朝の連続テレビ小説の再放送をたまたま目にした。いまのものよりも、ずっと大げさな演技をしているのでびっくりした。

しかも、状況や筋がめちゃくちゃ分かりやすい。初めて見たのに。途中から見ているのに。

分かりやすすぎて、感動すらしていた。こんなに分かっていいのかしら――。

そのときに気づいたのだが、どうやら私はテレビを見ながら、注目している人の表情を真似ているようなのだ。

*

しかめっ面を目にしたときに、自分も思わずしかめっ面になっているのは薄々気づいていたものの、表情一般に言える自分の性癖だとは知らなかった。

いま思わず性癖という言葉をつかったが、性癖と言ってかまわないのだろうか。

それ以来、自分のその「性癖」が気になって仕方ない。気がつくと、ニュースで見るキャスターや政治家、お笑い芸人、アイドル、アーティスト、アスリート、俳優、観客、一般の方々を問わず、その表情を真似ている自分がいる。

つい合わせてしまうのだ。もちろん、気になって目にとまった人に。

これをシンクロと言わずして何とさえいえるのか。

＊

ニホンザルもゴリラも台湾カニクイザルもしかめっ面をする。しているのを、この目で見たことがある。

犬と猫については……。よく分からない。もっと観察を続けてみよう。

あ、してるわ。

しかめっ面ではなく、あくびのこと。

ワンコだってニャンコだってハムスターだってあくびをする。この目で見たことがある。

あ、そうだ、サルやゴリラがしかめっ面をするのに気づいた。というか、これも、あくびのことなのだ。

あくびは立派なしかめっ面ではないだろうか。

しかもうつる。うつるんです。

昔、ハムスターのあくびがうつったのを思いだした。ワンコでもあった。生きものに等しく「うつる」現象なのではないか？

あくびは時空を超える。テレビのニュースで相撲を見ていて、客席の人のあくびがうつったこともあった。

あれは中継ではなかったので、やっぱり時空を超えていると考えられる。この現象が私だけのことでなければ。

意味やメッセージが不在か保留されたまま、表情や身振りが反復される

世界中でしかめっ面がシンクロしていることは確かだろう。

まさか同じ意図で同じメッセージを送っているなんて考えられない。しかめっ面はニュートラルなのだ。意味やメッセージは決められないという意味。

どっちかずでどっちなのかも分からない。意味やメッセージが不在ということもおおいに考えられる。

しかめっ面だけではないのかもしれない。

ありとあらゆる表情、目つき、仕草、身振りが、いわば「実物のない複製」であり、「起源のない引用」だという気がしてきた。

ややこしい言い回しだが、決まり文句やオノマトペをイメージすると分かりやすいかもしれない。

ずっと入ってずっと出ていくのだ。学習したという自覚が希薄、いやほとんどない。やらされている感など、まるでない。

そもそも表情や身振りは、話し言葉や書き言葉よりも、見よう見まねで覚えた感があるかに強い。みんなが我流で真似て我流で実行している。辞書もない。

生理現象に近い。出すというよりも出る。気がついたら出ている。漏れる感じ。あれよあれよ、と。

こんなのをみんなしてやっているのだから、世界的な規模でのシンクロが起きるのにはちがいない。ただし、意味やメッセージは不在か保留されたまま。

*

世界中でしかめっ面がシンクロしているさまを想像しているうちに、思わず苦笑いしている自分がある。にやにやとした意味のない笑い。何となく漏れてしまう笑い。

そうだ、笑いも世界中でシンクロしているはずだ。そう考えると、にやにやがにこにこに変わって気分が上向く。

強面の私が笑うと、すごんでいるとよく勘違いされる。こっちには、そんな気持ちはさらさらしないのに。シンクロ競技の勘違い平行棒。二線は決して交わらない。

私の笑顔はしかめっ面にも見えるらしい。

#言葉 # 視覚言語 # 動作 # 身振り # 表情 # ニュートラル # 意味# メッセージ # 音楽
シンクロ # 顔 # 多義性 # 笑い

12/18 知らない人

＊

知らない人

星野廉

2022年12月18日 12:34

気持ちと顔や表情が一致しないとしたら、さぞかし生きにくいだろう。たとえば、いつもにこにこしているように見える人がいる。テレビによく出る人にも身近にもいる。

大変だろうと思う。四六時中にこにこしているなんて考えられないからだ。

体調や機嫌が悪い時にも、目だけでなく眉と目尻までが下がり、しかも目が細く見えるのだから、つらいにちがいない。

生きていれば笑ってはいけない場面がたくさんあるから、そんな時には苦勞しているはずだ。

一方で、得になることもあるだろう。ほほ笑んでいるとか笑っている顔や表情は、まわりをなごやかにする。人のためになるのだから、得ではなく徳になると言うべきであり、人徳にほかならない。

個人的な話になるが、どちらかというが強面なのが私の悩みである。むすっとしているつもりはなくても、そう見られるなんてことはざらにある。

「どうしたの？ 怖い顔をして」、「お通夜じゃないんだから、もっと笑えよ」、「そういうのを貼り付けたような笑顔っていうんだ」、「もしかして便秘？」

12/18 知らぬ人

このように言われたことが数知れないほどあった。

そんな私でも、目を思いきり細めてほほ笑むと、赤ちゃんが敏感に反応して笑みを返してくれることがあって、そんな時にはうれしくて涙ぐむ。

＊

気持ちと顔や表情が一致することなど、まれなのではないだろうか？

表情や顔つきは、見る人の印象に左右される。悲しいことに他人の印象である。互いに一方的に決めるのだから、自分の「自分」と他人の「自分」とのあいだに、ずれが生じるのは仕方ない。

自分が悲しいのに自分が笑って見えるのだとすれば、その「自分」は自分にはどうにもならない。このままならさが自分に対する異和感になるのではないか。

ところで、私はふだん違和感と書くのに、この文章では異和感と書いている。あえて異和感とするのは、自分が異物であるという感情について書いているからだ。

言葉や文章にも顔と表情があるが、ふだんとは違う表情をすると、どんなふうに受けとられるかが気になるものだ、といま感じている。

＊

自分を器や乗り物にたとえる例は多い。自分が自分の身体という殻の中にあるとか、自分が自分という乗り物に運ばれているように感じられる、そんなイメージ。小説や映画や絵画でもよく出てくる。この場合には、明らかに自分に分裂が生じているわけだが、分かる気がする。

「長身である自分に異和感を覚える」、「こんな顔じゃ嫌だ」、この性格を変えたい、直したい、「あの人に成りかわりたい」、「自分の声が嫌で仕方ない」、「あなたの指とわたしの指を取り替えてくれない？」、「誰でもいいから自分以外の人間に生まれ変わりたい」

「ぼくは「外人、外人」と言われて育った」、「ある仕草や表情を無意識にしている自分を動画で知り、それ以来気になってならない」、「美容整形を、大小含めて、十回している」、「もはや来世しか楽しみがない」、「蒸発や失踪して別の人格として生きたい願望が強くある」

他人の決める「自分」が自分への異和感となるのではなく、自分の中で見知らぬ自分がその領域をしだいに広げていく場合がある。これは、異和感というよりも異物感というべきかもしれない。この場合の異物とは自分のことである。

＊

「知らない人にやたら挨拶される」

これは深刻な問題であり、誰もがそうした心境になるリスクをかかえている。ここまできると自分に対する異和感ではなく、世界に対する異和感なのかもしれない。世界がじわりと異物になる。ふとした瞬間に世界が異物に感じられる。

＊

「ここはどこ？」

この場合の世界は、自分という殻がすでに壊れて、自分が世界そのものになっていて、「ここはどこ？」はその「世界」からの静かな悲鳴なのかもしれない。自分にとってもっとも身近な人が、この言葉を発したのを目にし耳にした経験が私にはある。悲しかったが、これもまた決して他人事ではない。ここまできると、人は言葉が失われていく過程を生きているのかもしれない。こちらからの言葉がもう通じなくなっていくので想像するしかない世界だろう。

＊

気持ちと顔や表情が一致しないとしたら、さぞかし生きにくいだろうと思う。たとえば、いつも不機嫌であったり怒って見える人がいる。テレビによく出る人にも、ごく身近にもいる。

そのごく身近な人は、さいわいなことに知らない人にやたら挨拶されると感じている

気配はない。いまのところはないと言うべきか。ただ知っている人から挨拶されないとは昔からぼやいている。

「知らない人からやたら挨拶されるよりはいいでしょ？」といつも慰めている。

#異和感 # 違和感 # 異物 # 自分 # 顔 # 表情

12/19 The Rain, the Park & Other Things 1967
theCowsills

＊

The Rain, the Park & Other Things 1967 the Cowsills

星野廉

2022年12月19日 07:40

生まれて初めて買ったレコード（CDではなく）がこれでした。もう現物は手元にありません。

（動画省略）

カウシルズというファミリーバンドの曲です。

たしか、この動画——当時は動画とは言いませんでした、たぶんフィルムのムービーでしょう、いまで言うプロモーションビデオみたいなものでしょうか——を当時テレビで一度だけ見た記憶があります。ずいぶん昔の話です。

その記憶の中では子どもたちが乗っていたのはジェットコースターだったのですが、そうじゃなかったようです。この曲が好きで、繰り返し口ずさみながら、同時にその記憶の中の映像を何度も何度も頭の中で反芻してきました。

母子家庭で育ちひとりっ子だった私は楽しそうだなあと当時は思っていたのです。そしていま、こういう「偽の記憶」（古井由吉がよく使う言葉です）を受け入れて、いつくしむ年齢と心境になりました。

＊

邦題は「雨に消えた初恋」。原題は The Rain, the Park & Other Things ですが、ぶっきらぼうというか、投げやりっぽくて何かよく分からないタイトルですね。英語の haiku みたい。

——雨と公園、その他諸々……

とりとめのない歌詞だと思っていたのですが、ウィキペディアの解説（Lyrical content という項目です）を読んで、薬かなんかでラリって見た幻覚の話じゃないかと思い始めました。

”In the song, the narrator states that he saw a flower girl sitting in the rain, said hello, and took a lovely walk in the park until, when the rain stops and the sun breaks through, she disappears. However, the narrator still feels happy about the flower girl, and asks in the final verse: “Was she reality, or just a dream to me?””
(The Rain, the Park & Other Things)

ウィキペディアの解説では、この歌の原題が The Flower Girl であり、いまもその名で浸透していること、そしてこのタイトルだと当時大流行していたスコット・マッケンジーの San Francisco (Be Sure to Wear Flowers in Your Hair) を連想させるため改題されたと書かれています。

「反体制」や「カウンターカルチャー」の象徴であったヒッピーやフラワーチャイルドがいた当時のアメリカの社会においては、「健全なアメリカの家庭」を象徴するファミリーバンドが The Flower Girl という楽曲を歌うのは、いかにもまずかった。そんな事情がうかがわれます。

すると、The Rain, the Park & Other Things というタイトルはやっぱりラリった雰囲気、

——雨と公園、あとはおぼろ、あとはおぼろ……

という感じでしょうか。

そんなことを考えながら、この曲をあらためて聞くと、煙がゆっくりと立ちのぼるさまが浮かんでくるから不思議です。そして、曲はこんなフレーズで終わります。

“Was she reality, or just a dream to me?”

——彼女はうつつの存在だったのか、それとも僕が夢を見ていただけなのか？

公園で 雨の向こうに けぶる人

#夢 # 記憶 # 思い出 # 子ども # アメリカ # 雨 # 洋楽 # レコード# カウシルズ

12/19 バニシング【三人称エッセイ】

＊

パニシング【三人称エッセイ】

星野廉

2022年12月19日 11:06

「女性の恋人ができるたびに、交際を邪魔をされている気がしてならないんです。幻聴が聞こえることはありませんが、命令されているとか行動を指示されている感じはします。

付き合っている相手が男性だと、邪魔されている気はしないですね。ただ、自分の中にある片割れが僕の体を借りて楽しんでいる感覚はあります。嫌ではありませんよ。そんなときには僕も楽しんでいるんです」

会社員Sさん（男性・24）は語る。

＊

大学を卒業して就職し、両親と離れて住むようになったことで、Sさんが母親から片割れの話が聞かされることはなくなった。それがうれしい。なぜ、母親があれだけ片割れに執着するのか。理解できないことはないが、一人で生活するようになってからは、やはり母親の態度は行きすぎていると思う。

「あなたの中には、Kちゃんが溶けている。Kちゃんはあなたの中で生きているのよ」

繰り返えし聞かされた言葉だ。母親の話では、妊娠時の検査ではふたごを出産する予定だったが、そのうちの一人が胎内でしだいに小さくなり、しまいには「溶けてしまった」らしい。

「ちゃんとしないと、Kちゃんが悲しむでしょ？」

『そんなことをすると、Kちゃんが笑っているよ』というバージョンもある。母親の言葉を父親はにこにこしながら、そばで聞いているだけだ。父親は片割れの話はいっさいしない。

片割れの命を吸って自分は母親の胎内で生きのびたという思いが、Sさんにはまだある。

「うちの宗教というか信仰のようなものですね。仏壇ですか？ それはないです。位牌もありません。お腹の中で溶けたというんですから、遺骨や遺影があるわけじゃないし。ただ毎日何かの形で話には出てきます。話すのは母だけですけど」

片割れの話は母親の創作ではないか、作り話なのではないか。そう思ったことは何度もある。母親と離れて住むようになり、それがいまでは確信に変わってきている。

「それでも思わないと、僕は自由に恋愛もできないし、結婚もできない気がするんです。——ええ、するつもりです、相手が女性でも男性でも。結婚して子どもが何人もほしいと思っています。ひとりっ子は寂しいですもん」

明日、久しぶりにSさんは帰郷する。母親とはこれまでどおりに接するつもりだと言う。

「明後日が誕生日なんです。ケーキは二つ出てくるんですよ。子どものころには友だちが不思議がりました。もちろん、友だちは事情を知りません。わが家の秘密ですから。僕もプレゼントをするんです。これだけはやめません」

Sさんはうれしそうな表情で言い、片割れへのプレゼントが入っているという、足元に置いたデパートの袋を指さした。

#小説# 三人称エッセイ# 連作# 誕生日# 片割れ# バニシングツイン# 家族# 掌編

12/20 世界を相手にするとき、いつもいてくれる
友達

＊

世界を相手にするとき、いつもいてくれる友達

星野廉

2022年12月20日 13:04

初めてこの歌を聞いたときには、なんてお気楽な歌詞だと思った。そんな都合のいい人間関係などあるわけがない。あほらしい、と。

いまは違う。そういう friend がいるからだ。正確に言えば、いると気づいたからだ。

言葉である。この曲でキャロル・キングが歌っている friend とは、私にとって言葉にほかならない。どうか、歌詞を読んでみてほしい。

(動画省略)

You've Got a Friend 1971 Carole King

私は言葉を二つに分けて考えている。

一つは、自分の外にある言葉で、これは目にも見えるし耳で聞くこともできる。外にある物だから、他人と共有したり交換することも可能だし、じっさい誰もが日々そうしている。

もう一つは、自分の中にある言葉だが、これは見えないし聞こえない。だから、他人と共有も交換もできないし、そもそも物とも言えないだろう。

12/20 世界とつながりをもたせたい、つながりたてたい、友達

*

自分の中にある言葉は、辞書に載っている語義でも、社会で漠然と共有されている意味でもない、自分だけの私的なイメージだと私は理解している。

中の言葉は外に出してはじめて他人と共有し交換できるが、中の言葉がそのまま外に出るわけではぜんぜんない。

他人には話せないようなものだったり、断片的でとりとめがなく荒唐無稽ですらある。夢で見るものや夢で出てくるものに近い気がする。

それをなんとか取りつくろって外に出すのだから、妥協の産物でしかないし、通じるという保証もない。

その意味では、言葉といっしょに世界を相手にしているのかもしれない。「おお、通じたね、良かった」とか「駄目だったけど、気にしないでいこう」なんて具合に。

言葉がいつも自分の味方であることは確か。外に出して、うまく行かないときがあっても、責任は言葉にはないから私は決して責めない。

*

人の中に入ったり出たりできる物なんて、言葉しかない気がする。

呼べば外からやって来る。そして自分の中で、自分だけにしか通じないイメージになる。それをなんとか外に出してやると、他人が受けとってくれる。通じるかは別にして。

自分と他人、自分と世界とをつないでくれる友達。それが言葉。同志と言っていい。

毎晩、意識が薄れていく寝際にいっしょにいてくれるし、きっと死に際にもいてくれるだろうと信じている。

縁起でもないなんて言わないでほしい。誰もがひとりじゃないのだから。You've got a friend.

世界を相手にするとき、いつもいてくれる友達。

*

これまで言葉の不思議についてあれこれ書いてきた私だが、言葉について言葉にしようとしてはいけないことが、きっとあるのだろうといまは理解している。

言葉は言葉について考えるためにあるのではなく、人が世界を相手にするためにいる。これを戒めの言葉にしよう。

#洋楽 # キャロル・キング # 歌詞 # 英語 # 友達 # 同志 # 言葉

うつせみのあなたに 2022年11-12月

著 星野廉

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
